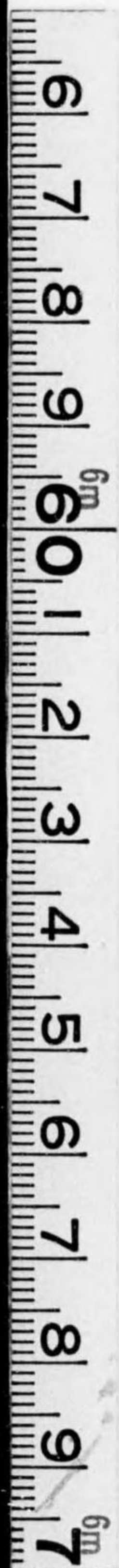


0817

081.7-B6627



1200500724824



始



199



石の記



Handwritten seal or signature in a rectangular box.

081.7
B662



紀念
紀元二千六百年
房總叢書第五卷 史傳(三)





第五卷(史傳其二)について

第五卷は豫定紙数の都合で組版の形式を變へ、「明治戊辰房總戰亂記」を以て主體としたが、原稿の整理に、印刷の校正に、小原編輯委員を煩したことが少くない。この戰亂記は同氏の解説にもある通り「復古記」の拔萃であるから、まづ「復古記」について一言しなければならぬ。

明治五年十月、太政官正院に歴史地誌の二課を置いて國史を編輯せしめたところ、翌年五月太政官廳類焼のため、全國から蒐集した記録圖書類残らず烏有に歸したので、更に諸省府縣舊藩主等に命じて史料を録上させ、力を王政復古の事蹟に效した。その後、明治十四年十二月修史館の職制を改め、同十九年一月修史館を廢して内閣に臨時修史局を置き、二十一年十月同局を廢するに及んで其の著手事業を帝國大學に屬せしめ、臨時編年史編纂掛を設けた。この間「復古記」編纂の事業は絶ゆることなく、翌二十二年十二月に至つて、「復古外記」を合せた二百九十八卷が完成され、浩瀚な原稿は東京帝國大學史料編纂所の書庫に秘藏されたのであるが、これを全十卷非賣品として内外書籍株式會社から刊行させたのは、昭和五年十月である。試に其の凡例を見ると、「復古ノ際、典章未タ備ラス、繼ニ兵革ヲ以テス、朝廷ノ記載、微スルニ足ルモノナシ、間マ三職ノ手録アリト雖モ、大率斷簡零紙ニ係ル、其餘ハ僅ニ言渡之記、非藏人日記アルノミ、戊辰二月、始テ太政官日誌、職務進退録アリ、三月ニ至リ、官中日記アリ、故ヲ以テ二月以前ハ、諸藩記、華族家記ヲ掇拾シ、僅ニ其梗概ヲ知ルヲ得タリ

三職手録、癸酉ノ災、爾後百官履歴表、鎮將府日誌、鎮臺日誌、諸道總督記、北征日誌、外務省記、各人ノ私記等ヲニ羅リ、今存セス、爾後百官履歴表、鎮將府日誌、鎮臺日誌、諸道總督記、北征日誌、外務省記、各人ノ私記等ヲ參用ス、云々」の一節があり、又、例言の中に、「復古記は百五十卷（二百八冊）復古外記は百四十八卷（百四十九冊）通計二百九十八卷（三百五十七冊）あり。今總稱して復古記といひ、別に編纂せる附録と共に十五冊と爲したり」及び「引用書中、字句の疑はしきものも猥りに改竄を加へず、原本其他に據つて訂正し、なほ決し難きものは（……）又はマ、と傍注し、或は校訂者の按文を附したり。云々」とある。今、同書中から房總關係の記事のみ抄出し、史料編纂所の認許を得て本叢書へ抄録したについては、勿論原文尊重の方針で、小原氏の解説に斷つてある以外には手をつけない。（なほ「復古記」については三八八頁を参照せられたい）

次に「總房鎮撫日誌」は前記「復古記」引用書の一で、布達や届書類を主とした公文書でもあり、史料として貴重視さるべきはいふ迄もなからう。本叢書への収録で初めて公開されるのだから、たとへ「明治戊辰戦亂記」と若干重複の點があるにせよ、それを省略する如き事はしなかつた。

森勝藏氏の「雨城兵要小録」「雨城の夢」は、久留里藩の記録として出色のもの。森氏の手澤本は多く内閣文庫に藏められて「森勝藏本」と稱せられるさうだが、右兩書には氏の面目躍如たるあり、後者の白晝夢に託して忌憚なく事實を正寫した點など、蓋し得易からざるの感がある。

所謂「眞忠組事件」の真相については、今後の研究に待つべきであらうか。本叢書へは「眞忠組浪人討伐始末」と名づけ、史料として價値ある記録のみを収載し、文飾を弄した物語や獨斷的調査などは悉く割愛した。

（稻葉隣作）

「紀元二千六百年
念房總叢書」第五卷（史傳）
其三 目次

明治戊辰房總戰亂記……………一

總房鎮撫日誌……………三六九

雨城兵要小録……………四九九

雨城の夢……………四七五

眞忠組浪人討伐始末……………五二

元治元^甲子^子年常總見聞志 松山戰爭……………五七

今度高地在陣諸藩之兵隊

市在強暴之威有一百餘倍

付並在對面自然成何事不為

一番動成者多之故一臨不足

子、其脚之取方、是也

市所置二者之故事

秦海自填撫副統督府

慶應四年庚午凌月

監軍



四一六頁上段參照

(大多喜町西尾發造氏所藏)

藩 小倉

藩 勝房
印 山州

藩 佐貫

藩 久留里

藩 佐倉

藩 高岡

藩 多古

藩 鶴牧

藩 大倉

藩 古河

藩 生實

藩 館山

藩 一宮

藩 飯野

藩 關宿

明治 房總戰亂記

【解説】 回顧すれば、維新當時に於ける房總は、この時代に於ける政變の中心地たりし江戸に直面した結果、一時徳川脱走兵の根據地となり、我々の父兄は勤王と佐幕の敵味方に分れ、互に鎗を削つて戈を交へ、北は市川・八幡・船橋から關宿・古河・結城に互り、南は姉ヶ崎・木更津・富津・佐貫・勝山・館山に勝り、東は佐原・銚子方面に及んで、候ち修羅の巷を現出したが、今や一場の夢と過ぎ去つて、當時の史實すら傳はるものなく、我が房總の維新史を撰述せんとするも、正確な資料を得るに困難を感ずるのは、吾人の最も遺憾とする所であつたが、幸ひに「復古記」の在るありて、既に湮滅に歸したと思はれてゐた幾多貴重材料を與へられたのは、實に天幸ともいふべきである。本書は右「復古記」各篇の中から房總三國に關係ある記事を抄録したもので、書中に引用した文献の如き、今や既に散佚し、本書に據りて僅に傳へられたものも尠くない。即ち本書は房總三國に於ける唯一の維新史料といつても溢美でないと思ふ。今これを抄録するに當り、本篇中本記と各戦記との記事の重複せる所は、其の記事の比較的詳細なるものを採つて他を省略した。但し、省略した文中一二採るべき

房總戰亂記

事實あれば之を採録の記事へ加筆して、以て完全を期し、又、記事中他藩と關連せるものは之に取捨を加へた。従つて、本篇の記事で原文と多少相違を免れざるものあるは、抄録の性質上記事の統一を圖るため萬止むを得ない次第のである。なほ、原文は句讀點だけであるが、閱讀上の便を考へて必要と思はれる個所へ反點を施した。(小原)

本記

- 慶應三年十一月二日 稻葉正己兵部大輔○館山時ニ幕府老中格、藩主正善ノ養父海軍總裁タリ 京ニ至ル。(二條攝政記)
- 同 十一月三日 幕府、諸藩ニ令シテ、江戸郭内諸門ヲ警守ス。
- 田安御門外 阿部駿河守
- 清水御門外 森川内膳正
- 數寄屋橋御門内 土井大炊頭
- 神田橋御門内 水野肥前守
- 常盤橋御門内 加納嘉元次郎
- 馬場先御門外 保科彈正忠

虎ノ御門内 内田主殿頭
外櫻田通上杉邸 堀田相模守
正大御屋敷脇

○同 十一月五日、幕府、再ビ諸藩ニ令シテ、
江戸外郭及ビ各處ヲ警守ス。

筋違橋御門内 酒井銚次郎
下谷新シ橋 黒田筑後守
水道橋内 井上宮内
小石川御門内 松平大藏少輔
溜池邊 水野日向守

○同 十一月十一日、稻葉正己、江戸ニ返ル。

(二條攝政記)

○同 十一月十五日、加納久宜嘉元次郎一宮藩主、食封一萬三千石、酒井忠美銚次郎勝山藩主、食封一萬石、後加知山ト改ム、稻葉正善備前守、館山藩主、食封一萬石、森川俊方内膳正、生實藩主、食封一萬石、内田正學主殿頭、小見川藩主、食封一萬石、井上正順宮内、高岡藩主、食封一萬石等二十四人以上並ニ菊ノ間様頼詰、連疏シテ、朝廷ノ召命ヲ辭シ、君臣ノ義ヲ失セズシテ、僭越ノ罪ヲ犯スコト勿ラ

下ニ被_レ仰立_レ被_レ下候様仕度、此段幾重ニモ伏而奉_レ願候、以上。

十一月十五日

菊之間様頼組

一 統(安部信順家記)
瀧脇信敏家記

○同 十一月十六日、堀田正倫相模守、佐倉藩主、食封十一萬石、保科正益彈正忠、飯野藩主、食封二萬石、水野勝知日向守、結城藩主、日向守、食封一萬八千石等三十八人連署シテ、書ヲ幕府ニ呈シ、朝召ヲ辭セシコトヲ請ヒ、若シ採納ヲ得ザレバ、直ニ奏狀ヲ議傳兩局ニ上ラントス。遼ニ果サズ、

此度、從ニ朝廷ニ被_レ爲_レ召候旨、傳奏衆ヨリ御直達御座候得共、私共儀ハ、朝廷へ奉_レ對候而者陪臣之身分ニ而、公儀ヲ被_レ差置、御直ニ御用可_レ有_レ之筋者有_レ之間敷處、此度之御大改革ニ付、定而意外之御用向モ可_レ有_レ之哉、萬一御沙汰之品ニ寄、御當家へ奉_レ對、臣節ヲ失ヒ候場合ニ立至リ候而者、上者神君様以來御歷代様御神靈へ奉_レ對、下者私共祖宗先靈へ對シ申譯無_レ之、且被_レ召寄_レ候上者、朝廷ヨリ

房總戰亂記

シト請フ。

今般、從ニ天朝被_レ爲_レ召、早々上京仕候様、兩奏衆ヨリ御達御坐候段、不肖之微臣、身ニ取候テハ實以意表之次第、冥加至極難_レ有仕合ニ奉_レ存候得共、抑此程御復政被_レ爲_レ仰立_レ候儀ハ、高明正大之御實情ヨリ被_レ爲_レ出候御英斷ニテ、不堪ニ感泣_レ御儀ニ奉_レ存候、乍去、右ハ不_レ容易大事件ニ付、一同悲痛慨歎仕罷在候、元來當席之儀ハ、御代々様ヨリ格別之蒙_レ御愛遇、祖先ヨリ土地人民ヲ御宛行、數百年子々孫々安穩ニ相續仕候段、其恩澤之廣大、實ニ骨髓ニ通徹罷在、寸刻モ忘却不_レ仕、斯ル御場合ニ相成候上ハ、猶更以報恩盡忠、進退存亡、隨_レ台命ニ之外他念無_レ御坐候、然ル所、今日ニ至リ禁闕ニ罷出候儀ハ、第一非分僭上之儀ニ相成、對_レ御當家君臣之大義相立不_レ申候間、不_レ奉_レ朝命_ニ次第ニ相聞、不敬之罪科難_レ遁奉_ニ恐入_レ候得共、君臣之大義ヲ不_レ失、上下名分正敷相立、大倫綱常明白相成候様懇願罷在候、何卒微々ノ赤心奮發之程、御汲分被_レ成

御政務向御下問被_レ爲_レ在候様承知仕候間、右一々御答申上候様成行候而者、陪臣之身分相立不_レ申、何分ニモ御請之儀當惑仕候、右次第柄ニ付、應召_レ上京仕候モ其詮無_レ之、依而、乍_レ恐家老一人ヲ以、此段哀訴仕候、幾重ニモ傳奏衆マデ被_レ仰達_レ可_レ被_レ下候、伏而奉_レ懇願_レ候、以上。

十一月

連名

〔姓名〕

堀田正養家記

○佐倉藩老臣平野知秋手記ニ云、十一月五日、紀州邸へ同意ノ趣決答、本日同邸ニテ、在府御同席中方、御上京可否ノ議論囂然紛起遂ニ決セズ、既ニシテ重臣名代ノ議ニ一決シ、奏文(即本書)ヲ草シ、帝鑑閣御取締諏訪因幡守殿ノ内閣ニ供シ候處、御同人ヨリ内閣老小笠原侯へ御相談ニ及バレ、苦シカラザル旨ナリ、右ニ付、本書ハ自分持參、原稿ハ若州重臣岡見左膳持登リ、但シ同人ハ自分ヨリ兩三日前ニ上途ス、十八日江戸ヲ發シ、中略晦日著京、岡見左膳へ面會、左膳左ノ大意申述、京著後、同役阪圖書ノ存意承リ、且本地ノ事情ヲ熟察スルニ、江戸ニテノ想像

トハ天壤ノ相違ニテ、只今斯ル御書付等差出候テハ、却テ公邊ノ御不都合ニ相成可レ申、公方様ニハ、日々内藩諸侯ノ上京ヲ御待ノ事云々ノ儀ニ付、藩論幡然改轍相成、就テハ大目付様へモ事情相伺候處、同様ノ事ニ付、御同席詰合丈ニテ集議ノ上、御同席様御上京期限御猶豫ノ事ノミ、昨夜板倉侯へ願書差出候處、宜含置候間、別段傳奏へ申出候ニ不レ及トノ事ナリ、且又御申合ノ御書、其儘打棄候モ不本意至極ニ付、本書ハ差置、寫ヲ以テ板倉侯へ入ニ御内覽ニ候處、御預リ置ニ相成候トノ事、岡見ハ明日早追ニテ、江戸へ君侯ヲ迎ニ下リ候由、

十二月二日、御取締重役ヨリ廻文ニテ、御演達申度儀有レ之趣申來候ニ付、參會ノ處、去ル二十九日夜、入ニ御内覽ニ候御書付、昨朔日板倉様ヨリ御取締重役へ御下ケニ相成、簡條書等種々有レ之、演說ノ大意ニ云、二條へ罷出テ、書面公方様へ奉レ入ニ御内覽ニ候處、譜代ノ面々、斯迄忠悃ノ段、滿悅致ス、然シ大政奉還ノ儀ハ、我等ノ眞情ヨリ出候事ニテ、決シテ

外面ヲ裝飾スルニ非ズ、即今簡様ノ書面差出候テハ、却テ我等ノ本意ニ悖リ、且何如ナル不都合ヲ醸成候モ難レ計候間、何レモ早々上京致候様トノ上意ナリ、就テハ役當リ無レ之面々ハ、早々上京可レ致、病氣幼年ノ者ハ名代可レ願、役當リ有レ之者ハ重臣可ニ差出、且以後傳奏へ直達ニ不レ及、拙者迄差出候へバ、兩卿へ宜ク申上ベキ等ノ事件ナリ、右ノ挨拶ニテ使節ノ役ハ相濟候。

○同 十一月十七日、土井利與大炊頭○古河藩主、食封八萬石、久世廣文出雲守○關宿藩主、食封四萬八千石、黑田直養筑後守○久留里藩主、食封三萬石、阿部正恒駿河守○佐貫藩主、食封一萬六千石、水野忠順肥前守○鶴牧藩主、食封一萬五千等二十四人以上、幕府雁間譜第席ト稱ス、連署シテ、朝召ヲ辭セシコトヲ幕府ニ請フ。

今般、以御英斷ニ御復政被ニ仰立ニ候段、定シ深キ思召モ被レ爲レ在候御儀ト奉レ存候得共、實ニ感慨之至奉レ存候、折柄從ニ傳奏衆ニ上京可レ仕旨、同席共へ御直達有レ之、不肖之微臣共、蒙ニ朝微ニ御用之筋難レ計

御座候得共、元來當席之儀者、格別之以ニ御寵遇、數百年來奉レ蒙ニ御恩澤ニ候段、骨髓ニ通徹罷在、進退存亡隨ニ君命ニ之外、更ニ他念無ニ御座ニ候、就而者、今日ニ相及不レ候ニ君命、直ニ奉ニ朝說ニ候儀者過等之至、誠ニ以奉ニ恐入ニ候、只々君臣之大義ヲ不レ失、報恩盡忠之旨趣相立候様仕度、一同奮發罷在候間、何卒微衷之赤心幾重ニモ御洞察、宜被ニ仰立ニ被レ下候様仕度、此段奉ニ懇願ニ候、以上。

十一月

在府 雁

間(本庄宗武家記板倉勝達家記)

○同 十二月朔日、酒井忠美、疾ヲ以テ、老臣ヲシテ代ツテ京ニ至ラシメンコトヲ請フ。

(二條攝政記)

○同 十二月十六日、舊幕府、大河内正質豐前守○大多喜藩主、食封二萬石、時ニ松平氏ヲ稱スヲ以テ、老中格ト爲ス。(森川俊方家記)

○同 十二月二十六日、初メ青柳高鞆健之助○下總入、三輪田元綱等六人、足利氏ノ木像ヲ梟首セシ

房總戰亂記

罪ヲ以テ、各藩ニ禁錮ス、文久癸亥ノ歲ニ在リ、是日、之ヲ宥ス。

藤堂佐渡守預リ

青柳健之助

(外五名氏名略)

去ル亥年、足利木像梟首事件ニ付、禁錮有レ之候處、今度政令御一新ニ付、被レ免候旨被ニ仰出ニ候間、此段可ニ取計ニ候事。

十一月

(藤堂高邦家記)

○同 十二月廿八日、舊幕府、保科正益ヲシテ、品川關門ヲ守ラシム。(保科正益家記)

○同 十二月晦日、舊幕府、岡田忠養安房守○下總國布佐村陣屋ニ居リ、上總、下總、安房、常陸四國ノ事務ヲ管セシム。

今般、下總國布佐村陣屋へ岡田安房守在陣、安房、上總、下總、常陸支配國ニ被ニ仰付、公事出入、其外小給所取締向等之儀、先達テ木村飛驒守上州岩鼻

へ在陣ニ付、追々相觸候通り、安房守儀モ同様取扱筈ニ候間、得_レ其意、同人へ可_レ被_レ談候。
右之通、安房・上總・下總・常陸國御料、竝領分知行有_レ之面々、寺社領共、不_レ洩様可_レ相觸候。

十二月

今般、下總國布佐村陣屋へ岡田安房守在陣被_レ仰付、安房・上總・下總・常陸國、御仕置筋之儀取扱候ニ付テハ、萬事差圖可_レ被_レ請候、萬一非常之節ハ勿論、平常トモ人數入用之節ハ、最寄居城、竝陣屋有_レ之面へ相達ニテ可_レ有_レ之候間、兼テ其段相心得、達次第人數可_レ被_レ差出候、
右之通、安房・上總・下總・常陸國ニ領分知行有_レ之面々へ、可_レ被_レ相觸候。

十二月

(土井利與家記)

○木村勝教筆記ニ云、關東郡代起源ハ年古ク、文久ハ再興ニ候、尤以前ノ郡代トハ、職掌大同小異、徳川氏入國以來、關内ハケ國、伊奈家代々支配、伊奈家斷絶、久世丹後守、中川飛驒守、關東郡代ト爲リ、

支配ニ代官五人有_レ之、馬喰町郡代屋敷ニテ用向取扱候、乍_レ然、其節勘定奉行支配ノ代官モ有_レ之、郡代ハ地方諸般取締向、惡黨追捕、公事裁判等致シ候へドモ、萬石以上以下領地ノ事ニハ不_レ拘、其後中絶、代官ハ悉ク勘定奉行支配トナル、再興ノ郡代ハ、支配國ヲ定メ、徳川料收納筋ハ勿論、取締筋ニ拘リ候儀ハ、萬石上下領地モ一般處置致シ、公事裁判モ支配、國中ハ郡代ニテ取計候、私儀ハ上野、下野國竝武藏ノ内支配、最初上野群馬郡岩鼻村ニ在陣、其後武藏國埼玉郡羽生町ニ新規陣屋取建引移候得共、落成ニ不_レ至轉役、其節同役岡田忠一手ハ、下總國布佐村原註、葛飾郡カ、陣屋取建、在陣ノ積リ候得共、是モ落成ニ不_レ至候、又丁卯正月十二日ノ記ニ云、關東郡代ノ名目差支有_レ之、役名ヲ改メ、在方掛リト相成候迄ニテ、勤向ハ是迄ノ通ナリ。

○明治元年正月三日、徳川慶喜、討薩ノ意ヲ決シ、會津・桑名二藩兵ヲ以テ先鋒ト爲シ、伏見・鳥羽二道ニ向フ、大河内正質豊前守○大田喜藩主、食封二萬石、時ニ松平

氏ヲ稱ス鳥羽ノ兵ヲ統ブ。

○老中格
○同 正月六日、徳川慶喜ノ兵大敗シ、慶喜汽船ニ駕シテ、大阪城ヲ去ル、老中格大河内正質以下、皆江戸ニ走ル。〔以上二條原文節約〕

○同 正月十日、大河内正質等ノ官位ヲ褫ギ、其邸地ヲ沒ス。

上總大多喜〔徳川慶喜以下連名〕

右、今度、慶喜奉_レ欺_レ 天朝、反狀明白、既ニ兵端ヲ開候ニ付、追討被_レ仰出候、依_レ之、右之輩隨_レ從于賊徒、反逆顯然候間、被_レ止_レ官位候事。

上總大多喜〔奥州會津以下連名〕

右、慶喜同意、反逆顯然候間、悉屋敷被_レ召上、殘兵追放被_レ仰出候事。

但殘兵、敵地迄可_レ相送候事。

○同 二月三日、諸藩ニ令シ、元治甲子以後諸國ノ警守、去年十二月來宿衛徵發ノ兵額、及ビ在藩ノ見兵等ヲ錄上セシム。

○多古藩屆書

去ル四日、用達之者へ被_レ仰渡候子年以來諸國御警衛、其外持場之儀、申上候様奉_レ畏候、在京中、元治元子年十二月ヨリ翌正月中迄、御所御臺所御門御警衛相勤申候、即今在家出兵人數ハ一小隊、

- 指揮役壹人 司令士貳人 嚮導四人
- 押伍壹人 銃士三拾二人 大砲壹門
- 同指揮役壹人 同打手八人

二月十四日

久松大藏少輔〔多古藩記〕

○請西藩屆書

去ル四日、用達之者へ被_レ仰渡候子年以來諸國御警衛向、其外持場之儀申上候様奉_レ畏候、依_レ之、別紙之通御請奉_レ申上候、以上。

二月廿一日

林昌之助

別紙

去子年以來、諸國御警衛向相勤不_レ申、其外持場等無_レ御座候、

一去年十二月九日以來、御警衛向無御座候、
一當時在家兵隊人數左之通御座候、

(内國事務局叢書)

隊長 一人 司令士 二人 嚮導 四人
銃士 一小隊 大砲一門 大砲指揮役打手共
八人
右之通御座候、以上。

二月廿一日 林昌之助(林忠弘家記)

○小見川藩届書

去ル四日、用達之者へ被仰渡候子年以來諸國諸警
衛、其外持場之儀、申上候様奉畏候、然ル處、是迄
御警衛等相勤不申候。

一即今在家兵隊人數、左之通、

一指揮役 壹人 一司令士 貳人 一嚮導
四人 一押伍 壹人 一銃士 三拾貳人
一大砲 壹門 一右指揮役 壹人 一同打手
八人

右之通御座候、以上。

二月廿八日

内田主殿頭

一去子年以來、諸國御警衛向相勤不申、其外持場等
無御座候。

○生實藩届書

一去卯年十二月九日以來、御警衛向相勤候儀無御
座候、

一當家在家兵隊人員、左之通御座候、

一指揮役 壹人 一司令士 貳人 一嚮導
四人 一押伍 壹人 一銃隊 三拾二人
一大砲 壹門 一大砲指揮役 壹人 一同打
手 八人

右之通御座候、以上。

二月廿八日

森川内膳正

(内國事務局叢書)

○一宮藩届書

去ル子年以來、諸國御警衛向相勤不申候、其外持場
等無御座候、

一去卯年十二月九日以來、御警衛向相勤候儀無御

座候、

一當時在家兵隊人數、左之通、

隊長 壹人 司令士 貳人 嚮導 四人
銃卒 一小隊 大砲 壹門 右指揮役 壹人
同打方之者 七人

右之通御座候、尤此外附屬之者、時宜ニ寄、相増候
儀モ可有御座候、此段申上置候、以上。

二月廿九日

加納 嘉元次郎
(内國事務局叢書)
加納久宜家記

○佐倉藩届書

一去ル子年ヨリ已來、諸國御警衛其外持場之事、

此儀、去ル丑年冬中、京師爲御警衛上京仕、
其節高別紙ニ申上候、且其餘ハ徳川氏ヨリ被レ命
候、江戸近海持場等之儀ニ付、不申上候、
去年十二月九日已來、御警衛其外出兵出先兵隊之
人數等之事、

此儀御警衛出兵等之儀無御座候、

當時在家兵隊其外人數之事、

房總戰亂記

此儀別紙ニ申上候、

右御本文之趣御達ニ付御答申上候、以上。

三月二日

堀田相模守家來

井口宗兵衛

○別紙

一去ル丑年冬中、京師御警衛相模守人數高、
番頭壹人 平士廿四人 大筒頭壹人
大筒役四人 大筒方四人 先筒頭五人
同與頭五人 足輕百廿人 同小頭拾五人
總奉行壹人 附屬拾人
右之外主人近習馬廻リ、

在家兵隊 歩兵一大隊 士銃隊二中隊

大砲一砲臺 外ニ遊撃之者

右之通御座候、以上。

堀田相模守家來

三月二日

井口宗兵衛(辦事局記)

○館山藩届書

一去ル子年以來、諸國御警衛向相勤不申、其外持場

等無御座候、

一去卯年十二月九日以來、御警衛向相勤候儀無御座候、

一當時在家兵隊人數、左之通、

隊長一人 司令士二人 嚮導四人 銃卒三

十二人 大砲一門 司令砲手共六人 小荷

駄方一人 足輕二人 中間五人

ハ五十二人

右之通御座候、尤此外附屬之者、時宜ニ寄、相増候儀モ可有御座候、以上。

三月廿八日

稻葉備後守(辨事局記)

○久留里藩届書

一去ル子年以來、諸國御警衛向相勤不申、其外持場等無御座候、

一去年十二月九日以來、御警衛其外出兵等無御座候、

一當時在家兵隊人數、左之通御座候、

隊長壹人 番頭壹人 陣場奉行壹人 者頭

貳人 軍目付壹人 使番貳人 小荷駄奉行

壹人 著到役壹人 大筒奉行三人 同術士

拾五人 戰士四拾人 下目付貳人 步物見

貳人 三器役三人 武器役壹人 醫師壹人

書記役一人 賄方貳人 小役人四人 足輕

小頭四人 鐵砲足輕五拾人 小人六拾人

大砲二挺

右之通御座候、出兵御警衛人數、御差圖次第、在所ヨリ差出可申候、此段御請申上候、以上。

三月廿五日

黒田筑後守家來

鶴見一學(辨事局記)

○關宿藩届書

元治元年九月二日、領内常州信太郡江戸崎村不穩趣ニ付、爲取締ニ出兵、

同年十月五日、右出張先ヨリ直ニ同國峯山攻撃、同所ヲ乘取り、同月廿三日同國那珂湊へ出兵之處、暴徒降伏ニ付、十一月五日關宿表ニ凱陣、

元治元年九十兩月中、下總國葛飾郡布施、取手兩驛

竝右布内村渡船場等警衛トシテ、右布施驛へ出兵、同年十一月二兩月中、同國同郡中田驛關門警衛トシテ出兵、

慶應三丁卯年中、在家兵隊其外人數六百五十七人。

(久世廣業家記)

○飯野藩届書

慶應三丁卯年十二月廿七日、品川宿關門御警衛被ニ仰付、同四年二月廿四日被免、(保科正益家記)

〔以上房總各藩ノ分テ摘録ス〕

○同 二月十日、列藩貢士ノ制ヲ定メ、五十日ヲ限リ、京師ニ貢セシム。

一大藩 三員 一中藩 二員 一小藩 一員

房總各藩貢士氏名

館山藩 松下 直衛 多古藩 梅戸 養元
加知山藩 植野 道生 古河藩 恩田 啓吉

○同 二月十一日、諸藩ヲ分チテ、大中小三等ト爲ス。

房總戰亂記

一大藩 但四十萬石以上ヲ唱、
一中藩 但十萬石以上三十九萬石ニ至ルヲ唱、
一小藩 但一萬石以上九萬石ニ至ルヲ唱、
右之通、諸侯石高ヲ以、三等ニ區別相立候様被ニ仰出候事。

二月

○中藩

佐倉藩 下總〇高 堀田 正倫 相模守

○小藩

古河藩 下總〇高 土井 利與 大炊頭

關宿藩 下總〇高 久世 廣文 隱岐守

久留里藩 上總〇 黒田 直養 筑後守

飯野藩 上總〇 保科 正益 彈正忠

大田喜藩 上總〇 松平 正質 豊前守

結城藩 下總〇一 水野 勝知 日向守

佐貫藩 上總〇一 阿部 正恒 駿河守

鶴牧藩 上總〇高 水野 忠順 肥前守

一宮 藩上總〇高一
 萬三千石 加納 久宜 嘉元次郎
 多古 藩下總〇高一
 萬二千石 松平 勝行 大藏少輔
 勝山 藩安房〇高一
 萬二千石 酒井 忠美 銚次郎
 館山 藩安房〇
 萬石 稻葉 正善 備後守
 生實 藩下總〇
 壹萬石 森川 俊方 内膳正
 小見川 藩下總〇
 壹萬石 内田 正學 主殿頭
 高岡 藩下總〇
 壹萬石 井上 正順 宮内
 請西 藩上總〇
 壹萬石 林 忠崇 昌之助

○諸藩ニ令シ、藩士ノ開成所舊幕府ノ洋學校江戸ニ在リ教官ニ任ズル者ノ姓名ヲ錄上セシム。

諸藩ヨリ、江戸開成所へ拔擢又ハ雇相成候、名元取調差出候様、被ニ仰出候ニ付テハ、相模守家來之内、左之通、

拔擢

彌市作

當時步兵差圖役頭取相勤罷在候

大築保太郎

當時神奈川奉行手附翻譯方出役罷在候

藤井喜太郎叔父 佐波銀次郎

同

忠介作 荒井鐵之助

同

致平次男 兼松延八郎

右之通御座候、此段申上候、以上。

三月七日

堀田相模守家來

依田七郎

(内國事務局叢書)

諸藩ヨリ幕府開成所へ採用人名

佐倉 佐波銀次郎 佐倉 荒井鐵之助

(東京開成校記録)

○同 二月十三日、久松勝行大藏少輔〇多古藩主、食封一萬二千石

疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。

(久松勝慈家記)

○同 二月十七日、久世廣文、内田正學、林忠

崇、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。

○同 二月二十日、稻葉正善、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。(内國事務局叢書)

○同 二月二十二日、徳川氏、老中稻葉正邦ヲ罷ム。(稻葉正邦家記)

○同 二月廿四日、井上正順、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。(辦事局記)

○同 二月廿六日、水野勝知、病ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。(水野勝知家記)

○同 三月二日、堀田正倫、保科正益、土井利與、久世廣文、加納久宜、酒井忠美、内田正學等四十三人、連署上疏シテ、徳川慶喜ノ爲ニ哀ヲ請フ、批シテ之ヲ大總督ニ上ラシム、正倫等遂ニ上ルヲ果サズ。

謹テ奉ニ言上ニ候、私共儀、先祖以來徳川家臣屬ニハ有レ之候得共、普天率土王臣王土之儀ニ有レ之、況ヤ累代過分之官位爵秩頂戴罷在、奉レ蒙ニ莫大之 天恩

候得共、今般御政事御一新之折柄、萬分之裨補モ無レ之恐惶戰慄罷在候、然ルニ、去ル正月三日、不レ料モ徳川氏當主入 朝之折柄、先驅之者共行違ヨリ意外之及ニ戰爭、近畿之地ニ於テ礮煙ヲ動シ候段承知仕、一同驚愕失措罷在候處、終ニ此度奉レ蒙ニ御宸怒ニ御追討被ニ仰出候段、實ニ當主不束ヨリ生候事、今更辨疏可レ仕様モ無レ之候得共、元來當主儀ハ、先年來 先朝非常之寵眷ヲモ奉レ蒙、決テ貳心無レ之段ハ天地神明モ照覽被レ爲レ在、億兆人庶モ承知仕候儀ニ御座候、乍レ然一時號令不レ嚴處ヨリ、右等之不始末ニ及候段ハ重々奉ニ恐入、坂城モ急速退去、江戸歸城後モ恐惶謹慎罷在、先祖墳墓之佛寺ニ閉居候次第、私共徳川氏恩意ヲ受罷在候身ニ取候テハ、實ニ片刻モ坐視傍觀罷在候ニ不レ忍、何卒天地覆載之御仁慈ヲ以、寛宥之御處置被ニ仰出候様仕度奉レ願候、乍レ然、私共徳川氏ニ附屬罷在候身分ニテ、今般之儀如何様ニモ諫争抑止可レ致答之處、隔地罷在共儀ニ不レ及段、多罪之身ヲ以敷訴仕候段、非分ヲ不レ願奉ニ恐

入候得共、何分ニモ前文申上候當主謹愼恐惶之儀モ有レ之、且ハ徳川氏祖先奉レ對ニ朝廷ニ恭順之道ヲ盡シ亂ヲ戡シ治ヲ致シ、奉レ安ニ宸襟ニ候微勳ヲ思食不レ被レ爲レ捨、何卒格外之御恩典ヲ以、寛恕之御沙汰被ニ成下候バ、獨徳川氏再生之御恩澤而已ナラズ、關東諸州百萬之生靈鋒鏑之難ヲモ相免レ盛代御復古之御盛意ニモ可レ被レ爲レ叶哉、乍レ恐螻蟻織芥之微衷御酌取被ニ下置、幾重ニモ御執奏之儀泣血流涕奉ニ哀訴懇願ニ候、恐惶謹言。

二月
（辨事局記）
堀田正倫家記

○批紙

反狀明白ニ付、御親征迄モ被ニ仰出、關東征伐トシテ大總督進軍相成居候付、本文歎願之旨趣其筋ヘ可ニ申出候事。

（辨事局記）
松平忠禮家記

○堀田正倫家記ニ云、二月十六日、徳川氏ノ臣加藤弘藏、正倫ノ重臣等ヲ城中ニ招キ、之ニ謂テ曰、東國諸藩主、若シ徳川氏ノ恩ヲ忘レズンバ、蓋ゾ西上シテ哀訴シ、徳川氏ノ罪ヲ謝シ憐ヲ乞ハザルト、正

倫大ニ之ヲ然リトシ、是ニ於テ東國諸藩ノ重臣ヲ邸ニ會議シ、乃チ書ヲ作り連署シ、先ヅ重臣數人ヲ遣リ西上セシム、正倫ノ重臣書ヲ齎シテ京ニ入ル、三月二日、諸藩ノ重臣數人ト同ク、之ヲ太政官ニ上リ哀訴ス、時ニ大總督既ニ東發アリシヲ以テ、命アリ、之ヲ督府ニ上ラシム、蓋シ正倫等東國ニ在リ、上國ノ形勢ヲ詳ニセザルニ因リテ、遂ニ此舉ニ至リシヲ以テ、直ニ東歸シテ當時ノ事體ヲ告ゲタリ、後遂ニ上ルコトヲ果サズ。

○十七日上申書

今般、主人共、歎願書ヘ御附札ヲ以御差圖被ニ成下候ニ付、大總督御陣前迄可ニ罷出旨申上候處、右ハ當御事體不ニ相辨ニ進達仕候ニ付、御時節柄之御事情、主人共ヘ篤ト申聞度候間、御陣前ヘ罷出候儀ハ一ト先見合候様仕度、此段御届申上候、以上。

三月十七日

大久保加賀守家來 正木權太夫
堀田相模守家來 依田 七郎

松平伊賀守家來 赤座壽兵衛
堀田攝津守家來 木村健次郎

（内國事務局叢書）

○附錄 飯野藩上申書二通

口上覺

今度帝鑑席於江戶表ニ從席上、徳川氏當主謝罪ニ付、歎願可ニ申上段相談有レ之、右同所ニテハ、御當地之御模様柄モ委敷相分リ不レ申事故、任ニ相談諸家一統重臣上京可レ致段申合相成、彈正忠重役之儀ハ從ニ早春上京ニ付、詰合之重役ヲ以諸事申合、不都合無レ之取計可レ申段申付越候處、於當表ニ申談モ無レ之、差急歎願書大久保加賀守様、松平伊賀守様、堀田相模守様、堀田攝津守様重役ヲ以被ニ差出候旨追而承レ之、尤御模様ニ寄追々相勤可レ申段承レ之、依テ彈正忠義ハ除名ニ相成居候事ニ心得罷在候處、去ル十一日又々總督宮様ヘ歎願書可ニ差出段相談有レ之候ニ付、除名之儀席上之方ヘ申述候趣、先般之歎願書ニ連名ニテ、今度之願ニ相洩候儀甚不都合之段申

房總戰亂記

聞、初テ承レ之驚入、殊ニ彈正忠ニモ近々上京之趣申越、當方ヨリモ御當地之御模様柄屢申下シ、追々承知ニ付、江戶表ヨリモ歎願之儀ハ見合、除名ニ取計可レ申段申付越、旁以斷ニ及、今般歎願之儀ハ除名仕候、先般差出候歎願連名ハ、全以申合不行届一向心得不レ申、甚不都合之儀奉ニ恐入候得共、彈正忠義ハ除名相成候様、格別之以ニ御憐愍、御執成被レ爲ニ成下度此段御斷奉ニ申上置候、以上。

三月十五日

保科彈正忠留守居 西池虎之助
同 家來

口上覺

谷籙 縫藏
（辨事局叢書）
辨事局記

別紙口上書ニ申上候儀、甚不都合之段ハ私共ヨリ御斷申上置候趣、席上之方ヘモ斷ニ及置候間、此段御許容被ニ成下度奉ニ懇願ニ候、以上。

保科彈正忠留守居

西池虎之助

同 家來

谷幡 縫藏

○十七日批紙

連名歎願書ハ於當地ニ御請込不ニ相成ニ付、前日被ニ差下ニ候得共、最前連名不都合之次第ハ被ニ聞食置ニ候事。
(辦事局記)

○同 三月三日、水野勝知結城藩主ノ老臣、勝知ノ召命ヲ罷メ、藩ニ赴キ、時ニ勝知江戸ニ在リ王事ニ服セシメント請フ、批シテ其歸藩ヲ許シ、後命ヲ俟シム。

奉ニ歎願ニ

日向守儀、勤 王之志願ニ付、近々江府出立可仕候得共、今度奥羽筋へ御鎮撫使御下向被レ爲ニ在候趣ニ付、小家誠ニ寡人數微力ニ候得共、御先鋒之列ニ被ニ召加ニ候歟、又ハ在所最寄人馬繼立御用、或ハ御下向御警衛方等被ニ仰付ニ被レ下候様仕度奉レ存候、右奉レ願

候通被ニ仰付ニ候バ、日向守儀上京ニ不レ及、在所へ爲ニ取締ニ罷越、夫々御用向用意可仕旨被ニ仰出ニ候バ、猶協力同心仕可奉レ盡ニ忠節ニ候、前書之件々御垂憐被ニ成下、何卒奉ニ歎願ニ候通、被ニ仰付ニ被ニ成下ニ候バ難レ有仕合奉レ存候、此段奉レ願候、以上。

水野日向守重臣

鈴木 半之丞

差 添

佐藤伴右衛門

○批紙

日向守上京ニ不レ及、追テ何分之指揮被ニ仰出ニ候事。
(辦事局記)

(辦事局記)

○本書月日ヲ署セズ、上申ノ日モ亦詳ナラズ、辦事局記、本日ニ收ム、姑ク之ニ從フ。

○同 三月四日、阿部正恒、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ京ニ至ラシム。(阿部正恒家記)

○同 三月五日、黒田直養、徳川氏ニ請ヒ、江戸ヨリ其藩ニ歸ル。(黒田直養家記)

○同 三月七日、森川俊方、疾ヲ謝シ、老臣ヲシテ代リテ京ニ至ラシム。(森川俊方家記)

○同 三月廿四日、諸藩ニ令シテ、在京ノ兵員ヲ録上セシム。

○上申書

一重臣 二人 留守居壹人 足輕四人 小者五人

右之通、當時在京仕居候、此段御請申上候、以上。

三月廿五日

黒田筑後守家來

鶴見 一學

(辦事局記)

○同 三月二十五日、稻葉正善、京ニ至ル。

(稻葉正善家記)

○是ヨリ先、水野勝知江戸ニ在リ、紀伊藩士某等ト竊ニ徳川氏ヲ扶持センコトヲ謀ル、老臣等、之ヲ諫メテ歸藩ヲ勸ム、聽カズ、又彰義隊ト通ズ、是ニ於テ、老臣等相謀リ、將ニ勝知ヲ

廢シテ、義叔父勝寛助ヲ立テントス、是日、勝知彰義隊ヲ率キ、藩城ヲ襲ヒテ之ヲ取ル。

○水野忠愛家記ニ云、慶應三年丁卯十月、諸藩上京仰出サレ候節、在京ノ家來御呼出シニテ、日向守儀早々上京候様 仰出サレ之レ有、然ル處、十一月初旬、紀州家役人栗生兵助、岡田清右衛門ヨリ在關東ノ諸藩へ相談、盟書、協心同心、兵制一致ノ事ヨリシテ、寧志恩ノ 王臣タランヨリ、全義ノ陪臣タラシテ、妄論相起リ候處、在府勤番ノ家老水野甚四郎儀一己ノ了簡ヲ以テ、在所役人共へハ何等ノ一談モ之レ無ク、同盟致ス可旨決答ニ及ビ、朝廷へ奉レ背ノ心底ヨリ出来候儀ニテ、主家ノ傾覆ニ關係候大事件ニ付、在邑ノ家來共恐懼ニ堪エズ、一藩洵々議論沸ガ如ク、是ヨリ人心益居合申サズ、不日 御謹責ヲ蒙リ奉ルハ眼前ニ之レ有可ク、其節ニ至リ右様禍心ノ者在職候テハ、何ヲ以テ申開キ仕ルベク哉ト衆議ヲ決シ、原註、甚四郎義ハ舊幕ノ恩ニノミ泥ミ、徳川家ト浮沈存亡ヲ共ニスルヲ以テ義ト思ヒ、大義名分ニ心付カズ、薩長二

藩ヲ賊ト唱居候胸底ニテ、巧辯ニ候ヘバ、舊臘ヨリ戊辰ノ此上上京ヲ差拒ミ候ハ、眼前ニ相見ヘ候。舊臘ヨリ戊辰ノ春ニ至リ、在所役人共追々出府上京ヲ勸メ、且日向守ヘ沙汰ニ及ビ、正月十一日、甚四郎ハ蟄居、用人茂野喜内隠居申付、甚四郎ハ即日在所ヘ差下シ候、京地ニ於テハ日向守上京ノ義度々、仰出サレ之レ有候處、日向守儀ハ上京可レ致旨申居候得共、發駕日限等ノ取究メモ之無ク、追々遲延ニ相成候ニ付、家來共一同心配、屢申立モ之レ有、尤上京先用トシテ、家老鈴木半之丞、留守居佐藤伴右衛門、二月九日東京記者ノ追稱ニ係發足ニテ上京致シ候、在所ニテハ上京供立用意等夫々取調、發駕日限取極テ日夜相待居、種々諫争手ヲ盡候得共、日限取極得心之無ク、追々延引相成候折柄、三月朔日内願ノ趣モ有レ之、上野山内警衛竝ニ彰義隊附屬指揮役、舊暮ヨリ申付ラレ候處、在府役人共内願ノ義ハ一人モ心得申サズ、東海、東山兩道ヘハ官軍御發向ノ折柄、内願ニテノ役儀ニ付、京詰兩地ノ家來共愕然動搖ヲ相増ス。

三月三日、在所ヨリ尙又小川鈴之・稻葉三鶴・河村

新八・鈴木與八郎・桑田九一・清水吉兵衛・藤郷榮作等出府致シ、當節ニ相成候テハ、諸藩上京、又ハ一旦歸邑相成、滯府ノ諸侯之レ無趣相聞候ニ付、一先歸邑致シ候様種々相勸候處、役儀ヲ蒙居候テハ歸邑相成兼、役儀赦免ノ上ハ歸邑致スベク旨申聞候ニ付、右兩役儀赦免願ノ儀ハ、三好三左衛門・平井莊左衛門ヲ始トシテ、晝夜奔走、舊暮ヘ度々願書差出候得共、採用之レ無ク、扱又結城ニテハ小川鈴之・稻葉三鶴始有志ノ者、歸城ノ儀諫言トシテ出府致候得共、官軍追々接近ノ地ヘ御操詰ニ相成候趣相聞候ニ付、尙歸城ノ程心元ナク、當家危急ノ場合ニ付、病中ニハ候得共、家老水野又兵衛出府ニテ、歸城ノ義舉テ諫争致シ候ハ、日向守得心ニテ歸城ニモ相成ベクト一決シ、役人共始有志ノ者一同、又兵衛宅ヘ罷越、病中ニハ候得共、押シテ出府ニテ、是非トモ日向守歸城候様諫言之レ有度旨申聞候處、又兵衛承知ニテ、有志ノ者附添、三月七日藩地出立、尤餘リ大勢ニ付、又兵衛ヘ付添ノ組ハ關宿通り、其餘ハ小山通ニテ、

兩道ニ相分レ粕壁宿ニテ出逢ノ約ニテ出立致候、又兵衛義ハ病中ニ付、關宿ヨリ乘船ニテ出府、右組ノ内吉川甚内、近藤左司馬義ハ、關宿ヘ一泊、翌八日兼テ約定ニ付、陸路粕壁宿ヘ罷越、小山通ノ組ト出逢候折柄、江戸邸ヨリノ急飛柳田貢原註、一本ニ飲之助トアリ江三郎兩人、阿知波祐仙ヲ途中ニテ捕連來候ニ付、日向守歸城ノ様子相尋候處、二本松邸ヘ滯留相成、迎ノ者度々罷越、何ニ様手ヲ盡候テモ歸邸無レ之次第ニ付、一同出府ニテモ歸城ハ行届マジク、乍レ去又兵衛竝ニ附添ノ者著府ノ上ハ、夫々盡力之有ベク、兩人ハ至急ノ藩用ニテ出立ノ義ニ付、是ヨリ小山通ノ組ニテ祐仙ヲ引連レ歸藩ノ方然ル可旨相談ニテ、是迄出張ノ組ハ右祐仙ヲ引連、八日夜半歸藩致シ、祐仙ハ締リヘ入置候、日向守儀ハ役儀赦免ノ上ハ歸城致スベク旨申聞候得共、頻ニ邸出ノ所存有レ之、度々馬支度、供觸等モ之レ有候ニ付、三度程モ鞍ヲ卸シ差留候處、不機嫌ニテ自分馬屋ヘ參リ、馬支度申付候事モ之レ有候ヘ共、

何レヘ罷越候哉、言行相違ノ程計リ難キ様子モ之レ有候ニ付、重臣共舉テ差止候處、漸ク承知相成、暇乞トシテ三月六日二本松邸ヘ罷越、夜ニ入候テモ歸之無ク候、此砌歸城ノ儀得心之レ無ニ付、家老小場兵馬ヨリ、實家二本松家老丹羽丹波ヘ掛合ニ及ビ候義之レ有候處、丹波申聞候ハ、全ク日州公思召違ニ付、私ヨリ篤ク御諫言申上ベク候ヘドモ、其御邸ニテハ如何ニ付、二本松邸ヘ日州公御出之レ有候様致度、左候ハバ必御得心行届候様取計申スベク、今日中ニハ御歸邸相成候様取計申スベク旨談判之レ有候ニ付、據ナク其意ニ任セ、近日歸邑ニ付、暇乞旁三月六日二本松邸ヘ罷越候處、夜ニ入候テモ歸之レナクニ付、追追迎ノ者差出候ヘドモ歸邸之レナク、全ク丹波ノ偽言ニ欺レシハ實ニ遺憾ト云フベキ也、扱又兩役儀赦免願ノ義、前文ノ通舊暮ヘ屢々願書差出候ヘドモ、採用之レ無クニ付、徳川家徒目付小山大輔ヘ内々承合候處、藩醫阿知波祐仙儀、日向守内

命ニテ登城致シ、赦免之レナキ様申立候趣露顯ニ付、右祐仙相尋候處、在所へ罷越候趣ニ付、外用向モ有レ之、旁早速急飛申付、柳田貢、蟹江三郎、同七日夕東京出立ニテ藩地へ罷越候途中、越ヶ谷・粕壁間ニテ右祐仙ヲ捕へ、粕壁宿へ參候處、小山通出府ノ者へ出遇ヒ、幸ヒノ義ニ付、是迄出張ノ者へ右祐仙ヲ相托シ、邸内ノ形情ヲ相話シ、是ヨリ一同歸藩ノ方然ル可旨相談相成、貢・三郎義ハ差急ギ出立、同八日夜四時頃藩地へ到著ス、右用向ハ奸計露顯原註、奸人共ヨリ内通、京詣往ニ付、水野甚四郎・青山隼太・小谷野圓四郎へ處置筋ノ用向ニ付、掛役共甚四郎・隼太・圓四郎宅へ罷越候處、何レモ脱走、其外兼テ其與黨相尋候處、都合十一名同夜脱藩、姓名左ノ通、

- 家 老 水野 甚四郎
- 又兵衛倅 水野 雅之助
- 甚四郎倅 水野 渡
- 馬 廻 有地 清藏
- 中小姓 有馬 豐之助

- 西山 半三郎
- 青山利喜之丞
- 青山隼太
- 水野深弟 興野 文也
- 徒 士 小谷野圓四郎
- 坊 主 木下 松雄

右之次第ニ付、江戸邸へ注進トシテ急飛申付、柳田貢、九日朝藩地發足出府イタシ候、右脱藩ニ付諸方探索ニ及候處、境河岸ヨリ乗船ニテ出府イタシ候趣判然相分リ候、扱又江都邸ニテハ二本松邸へ度々迎ノ者差出、種々手ヲ盡シ候へドモ、日向守歸城無レ之ニ付、何レモ焦慮刻苦イタシ居候折柄、同八日水野又兵衛著府ニ付、歸邸歸城ノ義諫言トシテ同人二本松邸へ罷越候處、豈計ランヤ、何等之效驗之レナキノミナラズ、一藩ノ重職ニ居ナガラ、邦家ノ傾覆ヲ辨ゼズ、一藩ヲ欺キ、反テ主家ノ否德ヲ助ケ成候始末、言語同斷ト云ベシ、右ノ次第ニ付、隱居攝津守ヨリ直書ヲ以テ早々歸邸イタシ候様申遣候へドモ、

歸邸之レナク、同九日夜、織田和泉守徳川氏ノヨリ陸軍奉行

達ニテ彰義隊附屬指揮役ハ赦免相成候、仍テ沙汰ニ及ビ候へドモ歸邸コレナク、二本松邸へハ時々彰義隊ノ者出入イタシ候趣モ相聞、歸邸スラ右ノ次第、況ヤ歸城ノ義ハ迎モ承引コレ有マ敷、此上ハ攝津守當邸へ參リ、家政向聽斷コレ有様相願候上ニテ、彌歸邸モコレ無ニ於テハ、據ナキ義ニ付、攝津守ヲ守護シ、歸國ノ上、上下擧テ奉ニ歎願、當家ヲ救ノ外致シ方コレナクト一決シ、同十日夜、近藤七右衛門始有志ノ者、千駄ヶ谷邸へ罷越、攝津守へ形勢事情具サニ申入候處、早速承知ニテ、折節強雨ノ處イトワズ、夜八時頃赤阪邸へ著相成、一同モ少シク心安シテ休足致候處、豈料ランヤ、同夜雞鳴頃、日向守儀水野甚四郎ヲ始脱人共一同、其外二本松家來共多人數召連歸邸相成、攝津守ノ正義ヲ差拒ミ、通用門ハ忽チ脱人共ニテ相固メ、出入ヲ許サズ、有志ノ者ハ僅二十人ニ不足ノ人數ニ付、殘念ナガラ攝津守歸城モ相叶ハザル趣、注進トシテ同十一日午後東京出立

ニテ、尙又柳田貢・宮田三男、十二日夕藩地へ到著、一藩驚歎、實ニ暗夜ニ燈ヲ失ガ如ク、舊冬ヨリシテ精誠ヲ致シ、小藩ナガラモ上一藩擧テ力ヲ 王事ニ盡ント肺肝ヲ碎候へドモ、主家衰運ノ致ス處歟、奸邪道ヲ蔽ヒ、誠意一モ達セズ、不幸ニシテ邦家將レ倒ノ秋今日ニ迫ル、一藩ノ心地思知ルベシ、最早主家ヲ保護スルノ道モ絶果タリ、就テ據ナク、兼テ日向守ヨリ隱居攝津守倅襖之助へ家督ノ義、小川鈴之へ申聞モコレ有、且日向守ヨリ直筆ニテ書下原註、以是ナ等モ之レ有、且勤 王ノ義ハ攝津守ヨリ小川鈴之へ日向守ヲ諫諍シ、大體ニ注意シ、藩名ヲ汚サバ、ル様忠節ヲ盡スベク旨兼テ申聞モコレアリ候儀ニ付、此上ハ致シ方コレナク、襖之助ヲ守護シ、一藩擧テ歎願シ奉ルノ外術計コレナクト決議シ、十二日薄暮ヨリ一藩印形持參登城ノ上、小川鈴之ヨリ前段ノ次第ニ立至リ、モハヤ當家ヲ保護致ス可キ道モ今日ニ絶果タリ、此上ハ襖之助ヲ輔翼シ、一藩心ヲ一ニシ、勤 王ノ誠心ヲ以テ奉ニ歎願、當家ヲ今後ニ救ノ

外術策コレナクト存ズル、若同心ノ者之レナキニ於テハ、予一人ニテモ神明ニ誓ヒ、勤王ノ道ヲ守リ、禊之助ヲ輔佐シ、當家ヲ救ノ外他事コレ無、萬一不幸ニシテ難ニ遇フ、俱ニ倒ル、素ヨリノ覺悟ナリ、若心付別策等モ之有歟、又存意ニ叶ハザル向モコレ有候者、遠慮ナク申出ベク、若又不服ノ者之レ有ニ於テハ、聊遠慮ニ不レ及、勝手次第今晩ニモ出府、日向守ヘ奉公致ス可旨、斷然申聞候處、異存申出候者一人モコレナク、一同存意之レ無ニ於テハ後證ノ爲連印致シ候様申達、一同連印前書左ノ通、

今般出府之節、依御直命奉レ守護禊之助殿、勤王之志如鐵石、可レ抽忠節者也、

慶應四年戊辰三月十二日

小川 鈴之

勝廉書判

在府勤番水野直之丞・千種十郎左衛門・鈴木唯之丞・水野条之丞・宮田繁作・若林昇之助・有馬彌平次・濱名雅吾等詰赦免、家老小場兵馬・用人近藤七右衛門・光岡多治見鎮撫トシテ、同十三日歸藩ニ付評議

ヲ決シ、上京爲ニ歎願、一藩總代トシテ吉田豐大夫・三宅武兵衛・吉川甚内・和久井一八郎・清水吉兵衛、翌十四日藩地發足ニテ出府ノ處、最早上京ノ機節コレ無ニ付、尾州家市ヶ谷邸水野彦三郎方へ著、願書差出ス、願書左ノ通、

勤王遵奉ノ義、日向守始家來共、領民共ニ至ル迄、一同別心御座ナク、已ニ重役ノ者上京仕、別紙一印寫之通奉レ候處、御附札ヲ以テ仰渡サレ御趣意家來共一同有難ク感戴仕、勤王之志願彌深重相成、御指揮奉ニ渴望、精誠御用向相勤申ベク存ジ奉リ候處、計ズモ日向守儀奸人共ニ蠱惑致サレ、家來共度々諫諍仕候得共得心仕ラズ、別紙二印ノ通申聞候次第、實以朝廷ニ對シ奉リ不束ノ至、一同當惑至極存ジ奉リ候、就テハ退隱仕ラセ、當隱居攝津守妾腹ノ男子禊之助へ相續被レ仰付候様仕度、左候へバ何國迄モ勤王遵奉仕、疲弊ノ小藩ニハ御座候得共、何レニモ相應ノ御用仰付ラレ下置レ候ハ、有難ク仕合存ジ奉リ候、

此段臣民一同ノ志願ニ付、私共ニ於テ只管歎願奉リ候、以上。

在所表政務委任罷在候

日向守叔父

小川 鈴之印

三月十三日

家老

小場

兵馬印

同

吉田

豐印

○別紙二印

予素ヨリ不肖ニ付、當家相續以來定テ失徳少カラズト痛心イタシ候、然ル處、方今容易ナラザル御時勢ニ相成、不義ニ落入ラザル様遂ニ周旋、御暇相願度、夫々聞當リ候内、義理ニ切迫シ、御役仰付ラレ候處、在所表人心居合兼、且水府ヨリ頼ノ一條、旁ヲ以御役御免御暇相願候處、今以御沙汰之レナク當惑イタシ候、再應相願候テモ御免之レナク候者、餘儀ナク我等一身ニテモ御用相勤候外他事ナク覺悟イタシ候、然ル處未男子之レナク、實ニ心配罷在候、コレニ依テ禊之助殿ヲ嫡子ニ相ナシ置、上京名代相勤候者、家ノ爲ニモ相成可、家

中取締ノ義ハ重役共申合セ、家ノ治ヲ專要ニイタシ吳候様頼入候、何レモ心配致シ居リ候由、予不徳ヨリ出候事、實以氣之毒ノ至ニ候、家中ノ者猶家ノ爲忠勤ヲ勵ミ候様頼入候。

三月

右ハ上野山内警衛並彰義隊附屬指揮役申付ラレ候節、京詰兩地ノ家來共、舉テ一先歸城候様諫諍取詰候節、日向守ヨリ直筆ニテノ書下ナリ。

○別紙一印ハ本月三日批下ノ書ナリ、故ニ之ヲ略ス、案ズルニ、本年十二月、勝知處分ノ際、其族忠順ニ命ジテ繼嗣ヲ奏請セシム、乃チ勝寛ヲ選ミテ之ヲ請フ、然レバ本條ノ申請ハ上達セザリシナルベシ。

又云、三月二日、水戸藩鈴木石見、市川三左衛門等年來奸惡ノ所業コレ有、朝命ニ依テ夫々嚴罰仰付ラレ候處、右黨與ノ奸人共相語合、容易ナラザル企コレ有候ニ付、非常ノ節掛合之レ有次第、神速手配、人數用意ノ儀、東京邸へ頼コレ有リ候、尙又結城ニ

テハ、同十四日水戸藩ヨリ鈴木石見・市川三左衛門ノ徒脱走ニ付、夫々手配頼書狀ヲ以テ申越候ニ付、近藩申合、同十六日ヨリ城下口々へ人數差出置候處、翌十七日ニ至リ、昨十六日脱藩ノ者隊長ニテ、彰義隊引連、日光道中間々田宿へ罷越候趣、最寄領民共ヨリ追々注進コレ有、此日禊之助藩地發足、東京市谷尾州邸へ十九日ニ到着ス、從者鈴木清右衛門・清水吉兵衛・岡本鐵之助・三宅兒太郎・中山昌生・小堀町杉山徳松ナリ、然ル處俄ニ日向守歸城ノ趣、同十七日結城へ申越候、歸城ノ儀ハ素ヨリ企望致居候ニ付、待受用意、道、橋掃除等夫々申付候處、同日夕脫藩水野雅之助ヨリ談判ノ儀コレ有候間、小山本陣へ出張候様書狀ヲ以テ申越候ニ付、小場兵馬・稻葉三鶴・光岡多治見、同宿本陣へ出張致候處、彰義隊小泉高之進外一人竝雅之助始應接中、同隊之者多人數、次ノ間、三ノ間等へ詰寄、種々強談、王臣勤王ヲ申唱候者ハ、此方共ノ討所也扨ト高聲ニ罵リ、其上此度當方へ出張ノ義ハ、其筋ヨリ内命ヲ蒙

リ、且日向守ヨリモ頼ニ付、結城鎮撫トシテ罷越候儀ニ付、若取用キズ候節ハ大砲ヲ以テ一潰ニイタスベク旨暴言相發シ、仍テ日向守直書ニ通相渡シ候、此二通ハ小川鈴之へ謹慎申付、其外三宅武兵衛・鈴木清右衛門・河村新八・鈴木與八郎・桑田九一・吉川甚内・和久井一八郎・柳田貢・清水新十郎・三宅兒太郎・石島壽雄・鈴木恠次郎・岡本十兵衛等十三名ノ者、速ニ召捕差出スベク旨ノ書付ナリ、終ニ兵馬ヲ取押、戻サズ、三鶴・多治見ハ其場ヲ逃レ立戻リ候、此日、日向守儀間々田宿へ著、翌日小山宿へ罷越滞留ニ付、彰義隊ヲ差戻候者、迎トシテ人數差出候間、早々入城イタシ候様數々申遣候へドモ、有無ノ返答コレナク、右掛合中、同廿二日諸方へ兵器借用人數催促等ノ風聞有レ之候ニ付、諸方へ忍ノ者差出候處、大町新田問屋ニテ脱走西山半三郎外一人見受候ニ付、手配中、半三郎ハ逃去リ、一人捕押連來リ候處、打身ニテ難儀ノ様子ニ付、早速醫療申付、様子相尋候處、彰義隊相馬翁輔ニテ、巨細ノ次第相

咄シ、且織田主膳ヨリ坂本平馬へノ書狀ヲ懷中イタシ居候、其文、此度我々共儀御内命ヲ蒙リ、且水野日向守ヨリ頼モコレ有、旁以テ出張候間、人數等ノ義宜英斷ノ程頼入候トノ文面ナリ、且又小山宿ヨリ日向守直書ヲ以、稻葉三鶴・蟹江五左衛門へ兼テ二通書取ノ通取計コレナク候者、西洋破裂玉ヲ以テ一時ニ灰燼ニ致スベク旨申越、彼是心配中、同廿四日晝後、三宅武兵衛東京ヨリ二本松家來儒者山田次郎八同道ニテ結城へ到着ス。

右ハ三宅武兵衛儀、去ル十七日東京出立ニテ、一時歸藩イタシ、尙又出府、廿二日尾州邸水野彦三郎方へ罷越候處、折節山田次郎八儀、彦三郎弟水野仲四郎へ申談トシテ罷越、計ラズ武兵衛面會イタシ候處、次郎八申聞候ハ、此度結城表ノ大事件、高橋剛藏ヨリ承リ驚入、若戰爭ニモ相成候テハ、勝負ニ拘ハラズ容易ナラザル義ニ候間、昨日剛藏トモ申談、彰義隊ヲバ東京引揚候様、當地同隊へ申談、隊長ヨリ引揚ノ飛脚差出シ、君公ニモ一先上

總表ヘナリ、御引上ノ方ト申談、剛藏モ昨夕小山驛へ發足致シ候、次郎八モ同行致ス可ク積ノ處、剛藏儀沙汰ナク出立イタシ候故、篤ト相考候ニ、結城表ヨリ破候テハ心配ノ詮モコレナキコトニ付、仲四郎ニ結城表へ參リ吳候様可ニ申談ト只今罷越候趣申聞候、同人尙又申聞候ハ、結城御家臣ニハ日向守様へ御對シ御異心ニテモコレ有哉ノ様承及候、私儀ハ世上ヲ離レ居候身分、此度ノ一件ハ更ニ辨申サズ、剛藏ヨリ承及驚入候旨申聞候、武兵衛答候ハ、日向守へ對シ異心等コレ有候者ハ、一人モコレナク、併シケ様ノ儀ニテ如何様諫言申上候テモ、更ニ承引之レナク、據ナク禊之助輔佐シ、勤王ノ志願相貫、朝敵ノ汚名ヲ蒙ラザル様致度、一同協力苦心罷在候折柄、此度彰義隊御引連入城ノ趣ニ付、一藩擧テ差止め申候、彰義隊サへ召連レ之レナク候へバ、素ヨリ歸城ハ懇願致居候儀ニ付、擧テ敬禮ヲ盡シ、歸城ヲ祝シ候コトニ候旨申聞候處、次郎八申候ハ、誠ニ御尤至極、

然ラバ直ニ結城表へ罷越申スベク旨、著替モ致サズ、常服ノ儘申聞候故、流石儒生因循ニコレナク、決斷ノ程感ジテ、武兵衛申聞候ハ、先生ノ御實意感ジ入候、然ラバ老體ナガラ直引返シ御同行申ス可ク候、併シ君公ニハ一先入城ノ上、上總へ入ラセラレ候共、小山ヨリ直ニ上總へ御引上ニテハ、臣子ノ道相立難ク候間、其段ハ差含然ルベク取計ラヒ吳候様申合、同日夕水野様彦三郎宅出立、千住宿へ夜四時過著一泊、翌日境河岸泊リニテ、廿四日午後結城へ到着ス、山田次郎八ハ城下江戸屋へ下宿申付、幸役人共出張ニ付、小川鈴之始役人共、江戸屋ニテ次郎八ニ面會致シ、彰義隊差戻シ、早早入城コレ有候様致度旨、一向ニ相頼候、仍テ次郎八ヨリ小山宿高橋剛藏方へ書面差出ス、右返書剛藏ヨリ來ル、往復兩紙共武兵衛一覽致、剛藏返書ハ竹本左門モ一覽致シ候、同夜四時過頃次郎八義城入學校へ一泊、明早天同人小山宿へ出張ノ約定ナリ。

右ノ次第ニ付、山田次郎八明早天小山宿へ出張相成候ハ、何レトカ模様モ相替リ申スベクト一同モ少シク安心致居候處、豈料ランヤ、翌廿五日拂曉、城下へ不意ニ押寄せ、城内へモ脱人共彰義隊ヲ引連レ亂入、一時ニ發砲放火致サレ候ヘドモ、城内ノ方ハ早々討退ケ候、此時藩士酒寄源内ナル者憤激ニ堪ズ、相馬翁輔ヲ獄中ヨリ出シ、遂ニ其首ヲ刎ヌ、城下ノ方ハ午後過迄防戦ニ及ビ候處、日向守出馬モ有レ之哉ノ趣相聞へ候ニ付、人數引揚ゲ、衆議ヲ決シ開城ス、此日死者七人、傷者十三人、翌廿六日勝知始彰義隊等入城ス。

三月八日夜脱藩ノ外、日向守へ隨從、其外脱籍姓名左ノ通、

水野又兵衛 茂野喜内 鳥居甚兵衛 青山彌一右衛門 青山兵橋 有馬平左衛門 根本此面 桑田辰太郎 水野深 高岡盛夫 光岡幾之助 波多野半太夫 阿知波祐仙 阿知波謙作 渡邊坦藏 渡邊慎太郎 小谷野左手八 佐藤雄 中澤廣助 中

澤潤次郎 上條百六 安根傳一郎 安根豐吉 枝繁七郎 溝口半平 水野保次郎 濱名周平 濱名雅吾 上條桑吉郎 上條養次 野口與一郎 鈴木仙助 鈴木小文治 佐藤松吉 西山半左衛門 岩澤三郎平 藤貫力助 藤貫鐵助

成候上ハ、早々上京可レ仕心得ニ御座候間、其節ハ小藩相應之御用向被ニ仰付ニ被ニ成下ニ候様奉ニ願上ニ候、依レ之、暫時出京御猶豫奉ニ願上ニ度、甚以奉ニ恐懼ニ候得共、前顯之次第、何卒御執成偏ニ奉ニ願度旨申付越候、宜御沙汰奉ニ願上ニ候、以上。

内田主殿頭家來

三月廿八日

額田大五郎

○批紙

○同 三月二十八日、内田正學、浮浪徒ノ警アルヲ以テ、江戸ヨリ藩ニ赴キ、入覲遅延スルヲ謝ス、批シテ先鋒總督ニ就キ、歸順ノ實ヲ表シ、後上京シテ命ヲ請ハシム。

今般御變革被ニ仰出ニ候 御旨趣モ被レ爲レ在候ニ付、主殿頭速ニ上京可レ仕筈御座候處、病氣ニ付、長途之旅行難レ仕、不ニ取敢ニ爲ニ名代ニ重臣之者出京申付置、

追々快方ニモ御座候間、押テ上京可レ仕底意御座候處、領分下總小見川陣屋最寄、浮浪之徒、脱藩之會勢等集屯罷在、彼是可レ及ニ動搖ニ哉ニ付、爲ニ取締、乍ニ病中ニ押テ在所表へ罷越候之趣、右ニ付如何ニモ登京延引仕候段、深ク奉ニ恐入ニ候得共、此上鎮靜相

○同 三月二十九日、堀田正倫、京ニ至リ、大總督ノ譴ヲ蒙リシヲ以テ、屏居シテ罪ヲ待ツ。

相模守儀、去ル九日江戸表出立、同十七日駿州江尻驛迄相越、家來之者ヲ以、駿府大總督へ爲レ伺差出候處、御糺問之儀御座候ニ付、夫々御答申上候處、翌

(内田正學家記)

十八日御同所へ家來之者御呼出ニテ、別紙之通被仰出候ニ付、去ル十九日同驛出立、唯今上著仕候、依之、別紙相添此段御届申上候、以上。

堀田相模守家來

三月廿九日

依田 七郎

○別紙

堀田相模守

方向御糺問之處、始終曖昧ト致シ候申分在之候間、上京之上外出相控居可申旨、大總督官被仰出候事。

大總督府

三月

參謀

(辦事局記)
堀田正倫家記

○正倫家記ニ云、是ヨリ先、朝廷再ビ諸侯ヲ召ス、時ニ正倫疾アリ、召ニ應ズルコト能ハズ、是ニ至テ疾愈、將ニ召ニ應ジ、京ニ入り、且徳川氏ノ罪ヲ謝セントス、三月九日江戸ヲ發ス、時ニ大總督官駿河ノ府中ニ陣シ、以テ六軍ヲ號令ス、十七日正倫府中

ニ至ル、大總督官參謀ヲシテ入京ノ意ヲ問ヒ、且詰ラシメテ曰、方今正倫果シテ能ク王事ニ勤勞スル乎、將タ尙徳川氏ヲ奉ズル乎、國論ノ在ル所如何ト、重臣對テ曰、正倫 朝廷ヲ尊崇シ、王事ニ勤勞スル、固ヨリ言ヲ待ズト、參謀曰、口ニ勤 王ヲ稱スルモ、其實ナキ、安クニ其勤 王アルヤ、方今ノ勤 王ハ兵ヲ發シテ慶喜ヲ伐ツニ在ルノミ、亡父正睦、辱クモ侍從ニ任ゼラレ、正倫ハ 朝廷之ヲ待ツニ中藩ヲ以テス、恩寵亦渥シ、今徳川慶喜ノ反逆ヲ聞キ、何ゾ速カニ兵ヲ發シテ王事ニ勤勞セザル、然ラザレバ世ノ舊主ナルヲ以テ、理勢之ヲ擊ツベカラズト、反復丁寧、其情實ヲ辨ズ、苦心言フベカラズ、遂ニ正倫ヲ以テ方向曖昧ト爲シ、令シテ曰、京ニ入ルモ當ニ逆旅ニ閉居シ、門ヲ出ルコトヲ許サズト、正倫京ニ入、妙心寺ノ支院大法院ニ閉居シ、恐懼罪ヲ待ツ。○同 四月三日、是ヨリ先、保科正益、西上シテ草津驛ニ至リ、關吏ノ止ル所ト爲ル、因テ書

ヲ上リ、入京ヲ請フ、其松平容保ノ支族ニシテ、宗家ヲ匡救セズ、且命ヲ大總督ニ請ハザリシヲ以テ、許サズ、既ニシテ、在京ノ老臣、分疏シテ哀ヲ乞フ、是日其入京ヲ許シ、屏居シテ後命ヲ俟タシム。

奉願口上覺

彈正忠儀在所表ヨリ海上上京之趣、去ル十七日御届申上置候處、四日市驛へ著、道中草津表迄罷越、不快ニ付同所へ滞留、依テ京都詰合之家來途中迄出迎、歸京可仕之處、膳所關門御番士ヨリ、彈正忠儀ハ家來ニ至迄通行差控可申旨被申聞、當惑心配仕候、何卒無滞通行相成候様、其御筋へ急速御沙汰被成下候様奉懇願候、以上。

保科彈正忠重役

三月廿三日

大須加貞右衛門

○三月二十四日批紙

其藩儀ハ松平肥後末家ニ候處、宗家追討被仰出候

房總戰亂記

後、未ダ謝罪之目途モ不立候ニ付、深ク 宸襟ヲ被爲惱奉恐入候次第、依テハ本末之間柄ヲ以、奉對 朝廷、別テ速ニ鎮定セシメ候様盡力振モ可レ有之候處、無其儀、殊更大總督官初メ東海道進軍、關東向歸順取糺之儀ハ一切御委任相成候、右征東進軍ハ、既ニ於在所表ニ承知ニモ可レ有之處、其筋ヘ不立相窺、抑テ上著之段、彼是不都合之至ニ付、先ヅ草津驛へ其儘差控居、是迄之形行委細可申出候、其上何分之儀可被仰出候事。但供立姓名、銃砲、彈藥等所持之分、別段本文一同可ニ附出候事。(辦事局記) 保科正益家記

本多主膳正家來

三月二十三日

中神齋之助

○批紙

彈正忠儀御取札之趣有之、先草津驛へ差控居候様御沙汰相成候ニ付、右滯驛中、追テ入京被レ免候迄ハ、於ニ其藩ニ氣ヲ附候様被レ仰出候事。(辦事局記)

○老臣哀請書

去二十三日、以ニ歎願書、彈正忠入京之儀奉ニ願上候處、以ニ御下ケ紙、彈正忠儀ハ松平肥後末家、宗家追討被レ仰付、未ダ謝罪之目途モ不ニ相立候ニ付、深ク宸襟ヲ奉レ爲レ惱候段、奉ニ恐入候、彈正忠儀本末之間柄ニ相違モ無ニ御座候得共、何分小家之儀、主人ヨリ申聞候共、迎モ承伏仕候様之者共ニモ無レ之、殊ニ朝敵之號ヲ受候者へ相携候ハ、却テ奉ニ恐入候儀、平日迎モ表向之音信贈答而已之事ニテ、更ニ心付不レ申、大總督官様奉レ初、東海道御進軍御衆中へ、關東之儀御委任相成居候處、其御筋へモ不レ奉レ伺、押テ上著仕候儀不都合之段、重々奉ニ恐縮候得共、片時モ早行ニ登京仕、勤王勉勵仕度一圖ニ相心得、誠以無ニ何心、在所表ヨリ勢州路へハ海上便利之地ニ付、渡海仕、甚不都合相成、於ニ彈正忠ハ宗

祖之家名一時ニ滅却仕候儀、歎ケ歎奉レ存候ニ付、上京之上、勤王之儀、上下一同奉ニ懇願候、大總督官様奉レ初、御進軍御衆中へ不レ奉レ伺、海上著仕候儀奉ニ恐入候、何卒出格之以ニ御英斷、大總督官様奉レ初、御進軍御衆中へモ乍レ恐可レ奉ニ歎願候間、偏ニ以ニ御憐慈入京御許容被レ成下度、召連候人數兵器等ハ、別紙之通御座候ニ付、此段幾重ニモ奉ニ歎願候、以上。

三月廿七日

保科彈正忠家來

西野虎之助

同重役

大須加貞右衛門

辦事御役所

○本日批紙

申出之趣先被ニ聞食置候、就テハ可レ成丈輕裝入京被レ免、尤著之上謹慎可ニ罷在候、最前附札ヲ以 御沙汰之通、關東向歸順取札之儀ハ、一切大總督官へ御委任相成居候付、重役ヲ以、早速是迄之形行逐一可

レ致ニ歎願、其旨趣ニ寄り追テ何分之儀可レ被レ仰出候事。

(辦事局記)
(保科正益家記)

○案ズルニ、正益家記載スル所、勉勵仕度ノ下、小異同アリ、今辦事局記ニ從フ、又別紙録スル所、從者陪隸計七十四人、小銃三十一口ナリ。

○本日達書

本多主膳正

保科彈正忠ヨリ前紙之通申出候付、附札ヲ以、御沙汰相成候條、彼方へ可ニ相違候、於ニ其藩ニモ其旨相心得、領分内無レ滯通行可レ爲レ致候事。(辦事局記)

○正益家記ニ云、三月十一日、勤王爲ニ上京、上總飯野表ヨリ乗船、十八日勢州四日市驛へ著船上陸、廿日同所出立、廿一日草津驛へ着、四月五日草津驛發足六日京著之上、謹慎罷在候。

○同 四月六日、稻葉正善、起居ヲ候セント請フ、其父正己舊幕府ノ要路ニ在リシヲ以テ、聽サズ、後命ヲ俟タシム。

今般 上京仕候ニ付、奉レ窺ニ天機ニ竝勅書爲ニ御請

參内仕度、且大宮御所へモ參上仕度、宜御沙汰奉レ願上候、以上。

三月廿八日

稻葉備後守

○本日批紙

同姓江隱事、元幕府老中格相勤居、追テ何分之儀被レ仰出候迄、其方先 天機窺等差控可ニ罷在候事。

(稻葉正善家記)

稻葉備後守

同姓兵部大輔事、元幕府ニ於テ去ル卯十二月九日ヨリ當正月三日迄、老中勤居候哉ニ相聞候、且又其方家督相續、年月日竝兵部大輔ハ實父養父之間何レニ候哉、旁御用候條書認メ、早々太政官内國事務局へ可ニ申出候事。

四月二日 (稻葉正善家記)

○ 昨二日、御達御坐候同姓兵部大輔事、元幕府ニテ去ル卯十二月九日ヨリ當正月三日迄老中勤居候哉、且又備後守家督相續年月日、竝兵部大輔ハ實父養父之

譯何レニ候哉、取調可レ奉ニ申上ニ旨御沙汰之趣奉レ長候、則別紙取調奉ニ申上ニ候、以上。

稻葉備後守家來

四月三日

高橋 文平

別紙

備後守養父同姓兵部大輔儀、元於幕府文久二戌年三月十五日ヨリ若年寄相勤、元治元甲子年九月廿七日役儀被ニ差免、同年十二月十九日病氣ニ付隠居罷成、備後守家督相續仕候、其後幾餘翁ト名相改メ、總髮罷成申候、慶應元丑年十一月十九日隠居ヨリ若年寄ヘ再勤罷成、兵部少輔ト名相改メ勤居候得共、持病之痛痛其上耳遠相成候ニ付、役儀被ニ差免ニ候様申立、同二寅年六月十七日ヨリ若年寄格陸軍奉行相勤、同年十二月十一日上京仕、同月十六日老中格海軍總裁罷成、同月廿四日四品被ニ仰付、兵部大輔ト改名、去卯年二月十五日江戸表ヘ罷越相勤罷在候得共、何分病氣其上耳遠等ニテ、用向不レ辨ニ付其段申立、當二月朔日隠居罷成、江隠ト名相改、薙髮相成申候、

同三月五日在所安房國館山陣屋ヘ相越療養仕居候、且備後守儀ハ大岡兵庫頭次男恒之丞ニテ御座候、文久元年辛酉二月廿二日養子罷成、同二戌年十二月十六日叙爵被ニ仰付、備後守ト改名、前顯之通リ家督相續仕、其後同人儀ハ役儀等相勤候儀無ニ御坐候、此段御請奉ニ申上ニ候、以上。

稻葉備後守家來

四月三日

高橋 文平

(稻葉正善家記)

○土井利與、京ニ至ル。(土井利與家記)

○同 四月十一日、是ヨリ先、徳川氏ノ海陸軍士、書ヲ東海道先鋒總督橋本實梁ニ上リ、田安家達龜之助ヲシテ假ニ江戸城ヲ管シ、軍艦銃器ハ充用ノ數ヲ存シテ、其餘ヲ獻ゼント請フ、聽サズ、是日橋本實梁、將ニ徳川氏ノ軍艦ヲ收メントス、榎本武揚和泉守○徳川氏海軍副總裁風濤ニ託シテ、之ヲ辭シ、夜ニ及ビ、船艦ヲ率キテ、館山港安房國安

房ニ走ル、大鳥純彰圭助○歩兵奉行福田道直八郎右衛門等モ亦其部兵ヲ率キテ一總ニ走ル。

○稻葉正善家記上申略ニ云、私在所房州館山陣屋海岸新井浦沖ヘ、四月十一日、徳川家軍艦七艘碇泊、多人數上陸、町家ヘ對談致シ、薪水其外入用之品々買入申候由、尤様子爲レ承候處、江戸近海ニ難レ居、脫走入津ト申候儀ニハ無ニ御坐、其外存意等更ニ相分兼候趣ニ御坐候。

○勝安芳日記云、撤兵頭福田八郎右衛門、江原鑄三郎等、其組下ヲ引キテ、上總・下總ヘ脫走ス、步兵頭輩、先日已來脫スル者不レ少。

○同 四月十六日、森川俊方、京ニ至ル。(森川俊方家記)

○同 四月十七日、是ヨリ先、官軍結城城ヲ復ス、是ニ至リ、賊復々結城ニ迫ル、官軍之ヲ小山驛下野寒ニ邀ヘ撃チテ利アラズ、結城援絶ユ、水野勝進攝津守○結城藩主、勝知ノ祖父其子勝寛皆遁ル。

○水野忠愛家記略ニ云、三月十七日、禊之助儀、賊

難ヲ避ケ、藩地發足、東京ニ到着ノ處、四月八日、官軍結城ヘ御討入、城地御取戻シ相成候ニ付、禊之助儀、早々歸邑鎮撫致シ候様内參謀ヨリ御達ニ付、翌日發足、十一日結城ヘ着ス、隠居攝津守儀ハ南總ニ立退罷在候處、内參謀ヨリ御達ニ付、同月十五日夜、結城ニ歸ル、然ル處賊徒又々屯集致シ、凡ソ千人餘襲來ノ模様報知之レ有リ、此時結城在留ノ官軍竝石橋宿陣ノ官軍ヘ頼遣シ、同十六日、小山宿ニテ戰争ニ及ビ候處、殊ノ外苦戰ニテ、遂ニ結城ヘ引取、十七日、賊兵追々湊迫、三方ヨリ相迫リ、諸隊甚苦戰、死傷モ有レ之、外ニ應援ノ兵モ之レナキニ付、軍議ノ上、一旦開散諸方ヘ立退候處、賊兵遂ニ襲來不レ致候、此時勝寛儀ハ野州大島村村長五郎左衛門ナル者方ヘ潛居、廿五日歸邑、勝進儀ハ上總國舊領成東村陣屋ヘ立退、閏四月十日結城ヘ歸著。

○同 四月十八日、東海道先鋒總督橋本實梁、檄ヲ武・總・房・常ノ諸藩ニ傳ヘテ、大鳥純彰・福

田道直ヲ討ズ。(東海道先鋒記)

○同 四月十九日、是ヨリ先、古河藩書ヲ上リ、大坂城門ノ衛兵ヲ出セシ事由ヲ陳シテ、朝命ヲ得シコトヲ請フ、是日、薩長二藩ノ守衛ヲ罷メ、古河藩ヲ以テ之ニ代フ。

口上覺

朝廷尊奉之儀ハ、主人大炊頭平生之志ニ付、家來共迄相心得罷在候處、先般王政御復古、萬機御一新被ニ仰出候、付テハ大炊頭上京可仕爲ニ御請ニ老臣小杉監物、正月十二日上京、同廿四日歸府仕候、然ル處錦旗南下、將軍官樣浪華へ御駐營、五畿御鎮壓、萬般御鞅掌之折柄ニ付、大炊頭領分攝州平野郷陣屋ニ貯置候砲器玉藥類、御用ニ隨ヒ奉ニ差上、且同所ハ河・泉樞要之土地ニ付、防禦之御備トシテ關門取立、萬一不虞之儀有レ之候節ハ、何方成共人數差出可申、其他相應之御用被ニ仰付ニ度、官樣御麾下へ出願仕候處、御採用不ニ相成ニ趣被ニ仰聞、微志空敷相成、一同

恐懼之餘、主人素意ニ基キ、先鋒之心得ニテ勤王御用何成共被ニ仰付ニ度、參與御役所へ歎願之儀、長藩へ依頼申入候處、微衷洞察被レ致、願書取次差出相成候處、數日相立何等之御沙汰無ニ御座、追テ浪華御城、薩長兩藩ニテ取締居候之處、御用多端ニ付、御城追手御門警衛致シ、薩藩ト隔日交代可レ致、長藩ヨリ頼ニ付、人數差出相勤罷在候處、大炊頭追々病氣快方仕候ニ付、去十五日發途可仕候旨申付越、不日京著可仕、然ル處、今般 御親征、浪華表へ行幸被ニ仰出候、付テハ右追手御門警衛之儀、朝廷ヨリ被ニ仰付ニ被ニ下置候様仕度奉ニ懇願ニ候、此段御採用奉レ仰候、以上。

土井大炊頭家來

來次傳四郎

(內國事務局叢書)

○本日達書

土井大炊頭へ

先般薩長兩藩ニテ城門警衛致居候處被レ免、守衛之儀其藩へ被ニ仰付ニ候旨御沙汰候事。



四月

○同 四月廿五日、酒井忠美(土井利與家記)書ヲ上リ、

蝦夷開拓ノ事ニ服スル、其舊ニ仍ラント請フ、之ヲ聽ス。

奉ニ歎願ニ候口上覺

蝦夷地開拓之儀、銚次郎先代ヨリ年來心掛罷在、去ル元治二丑年ヨリ北蝦夷地之内、タランコタンへ家來竝領民差遣、開拓漁業專務ニ仕罷在候、右土地之儀ハ魯西亞人雜居之地ニ御座候得バ、一步モ相進ミ取開候得バ、御國之土地相殖候儀ト奉レ存候事故、追々見込モ相立候付、昨卯年ハ人數モ相増、漁業手廣ニ取掛申候、且當春追々被ニ仰出ニ趣モ御座候得バ、開拓筋如何可仕哉ト奉レ存候得共、其儘仕置候テハ、是迄開來候詮モ無レ之、残念奉レ存候、當年モ同様家來差下シ、マースイ邊土人撫育等モ相心得候様申付候、且箱館表ニハ家來屋敷モ出來居候付、越年相詰候者モ御座候、此程 王政御一新之折柄ニ御座候得バ、何卒開拓之儀、是迄之通被ニ仰付ニ被ニ成下候ハ

バ、銚次郎年來心懸候微意モ相立、深難レ有仕合奉レ存候、尤銚次郎無レ程上京可仕候得共、此度蝦夷地開拓之儀ニ付、被ニ仰出ニ趣モ御座候得バ、當時在京之家來共、乍レ恐右之段奉ニ歎願ニ候、銚次郎京著之上ハ、尙又志願之程可レ奉レ願候得共、先此段奉ニ願上候、何卒出格之以ニ御憐愍ニ開拓之儀被ニ仰付ニ被ニ成下候様、偏奉ニ歎願ニ候、以上。

四月廿五日

酒井銚次郎家來

岡田文左衛門

辨事御役所 (辨事局記)

酒井銚次郎

北蝦夷地開拓之儀、從前之通精々盡力可レ致様、被ニ仰付ニ候事。

四月 (酒井忠美家記)

○忠美家記ニ云、四月、忠美、江州大津驛到着之處、兼テ京地へ差出置候家來共迄、右之通、清水谷殿ヨリ御達之趣申來候事。

○附申請書

口上覺

今般蝦夷地御開拓之儀被_レ仰出_レ候、就テハ副總督清水谷様近々被_レ成_レ御發途候趣承知仕候、右ニ付箱館御裁判所爲_レ御用、乍_ニ少分_ニ金五百兩獻上仕度奉_レ存候、何分之御用ニモ相成候ハ、難_レ有仕合奉_レ存候、此段宜御執成之程奉_レ願候、以上。

酒井銚次郎家來

閏四月十三日

窪田 音藏

辨事御役所 (辨事局記)

○忠美家記略ニ云、願書差出候儘ニテ、其後何等之御指令モ無_レ御座_レ候。

○同 四月二十七日、水野勝知ノ老臣京ニ在ルモノ、結城ノ變ヲ聞キ、歸藩シテ事實ヲ檢シ、勝知果シテ大義ヲ誤ラバ、其義叔父勝寛ヲシテ入觀王事ニ服シ、因リテ家ヲ承ケシメンコトヲ請フ、聽サズ。

日向守儀

病氣ニ付、爲_レ名代_ニ上京仕居候處、去月中於_レ在所表_ニ不_レ容易_ニ事件モ御座候哉之趣傳承仕、誠以驚愕恐入奉_レ存候、依_レ之事實爲_レ探索_ニ鈴木半之丞儀、一先歸郷仕候上、日向守儀彌心得違之筋御座候ハ、水野禊之助儀、未幼年ニハ御座候得共、急速上京仕、飽迄勤_レ王御奉公爲_レ仕度奉_レ存候、禊之助儀、上京仕候ハ、近頃恐入奉_レ存候得共、以_レ格別之御憐愍_ニ家名相續被_レ仰付、相應御用向被_レ仰付_ニ被_レ成_レ下_レ候者バ、莫大之御仁惠難_レ有仕合奉_レ存候、此段幾重ニモ奉_レ懇願_ニ候、以上。

水野日向守家老

四月廿四日

鈴木 半之丞

差添

佐藤伴右衛門

辨事御役所

○本日批紙

日向守儀、於_レ在所表_ニ如何之儀相聞候ニ付テハ、追

辰四月廿九日

久世隱岐守

(辨事局記)

々御取調之上被_レ仰付_ニ品モ可_レ有_レ之候ニ付、名代禊之助上京ニ不_レ及、勿論家名相續之儀ハ不_レ被_レ及_ニ御沙汰_ニ候事。(辨事局記)

(水野忠愛家記)

○同 四月廿九日、久世廣文、西觀セントシテ江戸ニ抵ル、適藩境騷擾ノ報アリ、乃チ上書シテ其狀ヲ陳シ、入觀遲延スルヲ謝ス。

○久松勝行_{多古}井上正順_{高岡}、京ニ至ル。

(久松勝慈、井上正順家記)

○同 閏四月二日、酒井忠美京ニ至ル。(酒井忠美家記)

○同 閏四月三日、請西藩主林忠崇、下總ノ賊ニ應ジ、其治所ヲ去リテ、四隣ヲ脅略ス。

私儀去冬以來舊病及_ニ重發_ニ、困頓罷在候處、即今快方相趣候ニ付、急速上京仕度、及_ニ發途_ニ、既_ニ江府表著仕候處、敝邑城下浮浪之徒屯集、難題等申入候段申參候、尤從來小城微勢、殊_ニ留守中ニモ有_レ之、此上何様之事件申募、暴動モ難_レ計、甚痛心仕候間、此段當表鎮撫府へ奉_ニ言上_ニ候處、上京當分見合、急速歸國鎮撫可_レ致、且關門等嚴備可_ニ申付_ニ様、御尊諭之御書御下相成、難_レ有御請奉_ニ申上_ニ候、乍_ニ然_ニ上京追々及_ニ遲延_ニ候段、幾重ニモ奉_ニ恐惶_ニ候得共、前件之願末ニ御座候間、此段陳列仕、御届書謹奉_ニ進獻_ニ候、恐惶敬白。

○林忠弘家記ニ云、忠崇、慶應四戊辰年閏四月三日卯ノ刻過、上總國望陀郡請西陣屋出發、軍令狀申渡、大砲一發シ、藩兵凡七十人、遊撃隊三十六人合併、櫻井村海岸畑澤ヨリ、曲リ坂通り山手ヲ、富津陣屋へ、_{原註、前橋}藩固所_ニ撤兵隊並佐貫藩一小隊ハ櫻井村ヨリ、人見山下通り富津へ、山海兩道ノ兵、陣屋ノ表裏へ回リ、兵威ヲ張り、遊撃隊伊庭八郎、人見勝太郎ノ

兩士、單身獨歩、富津ノ陣屋ニ到リ、與力ヲ乞フ、前橋藩士之ヲ諾ス、サレドモ藩主命ナキコトナレバトテ、歩卒二十人ヲ脱走ノ體ニシテ、我兵ニ合併セシメ、陣屋ヲ明ケ渡シ、外ニ大砲六門、小銃拾挺、金五百圓、糧米若干ヲ贈ラル。

一同五日辰ノ刻、富津出發、午ノ刻過佐貫城下ニ着、一泊。

一同六日未ノ刻佐貫出發、天神山着、一泊。

一同七日卯ノ刻天神山出發、保田驛着、一泊。

一遊撃隊ヨリ勝山藩へ與力ヲ乞フ。

一同八日辰刻保田出發、巳ノ刻比、勝山ニ着、昨日遊撃隊ニ約セシ兵卒半小隊ヲ差出セリ。

一未ノ刻比ヨリ、館山藩營下ニ近ヅキケレバ、各隊貝鼓ヲ鳴シ、館山營下ニ押寄せ、伊庭、人見ノ兩士、陣屋ニ到リ、老藩主原註、元關老稻葉兵部大輔。ニ直接シ、兵卒半小隊ヲ假リ、並ニ滯陣中ノ兵食ヲ給センコトヲ約ス、是ニ於テ長須賀村ニ宿陣ス、此日伊庭、人見兩士ノ策ニテ、兵威ヲ張テ館山藩ヲ要シ、我

乞テ聽シメンガ爲、豫メ榎本和泉守原註、海ニ約シ、軍艦一艘當港ニ乗込、大砲數發、海陸進襲ノ勢ヲ顯ス。

一同九日強雨ニヨリテ長須賀ニ滯陣、伊庭八郎雨ヲ侵シテ小船ニ乗込、當港ニ碇泊セル軍艦ニ到リ、相州航海ノコトヲ依頼ス。原註、是先ニ虛聲ヲ張リタル軍艦大江丸ナリ。

水野日向守

○同 閏四月五日、水野勝知ノ官位ヲ褫ギ、家臣ノ入京ヲ禁ズ。

德川慶喜御處分之儀ハ、追々 御沙汰之趣モ有之候通、叛逆顯然、其罪天下萬民俱ニ所レ知ニテ、終ニ恐多モ 御親征 行幸被レ爲遊、深ク被レ爲惱ニ宸襟ニ候處、今日ニ至リ、慶喜始メ江戸表ニ於テハ、全ク恭順謹慎之道相盡シ候折柄、其方事既ニ當正月三日以來、大變動ニ立到候事蹟承知致シナガラ、賊魁松平肥後其他兇徒共ニ與シ、益暴威ヲ募リ、官軍へ抗シ、萬民塗炭之苦ヲ不レ辨、言語同斷之次第、天人俱

ニ所レ惡、不屈之至ニ候、依レ之、被レ止ニ官位ニ候條、日向守附家來之者ハ入京被レ差止候事。

但シ、同姓親之助始メ在邑家來之者共、速ニ官軍へ歸順之方向ヲ定メ、日向守へ諫爭致シ、終ニ不レ得レ止及ニ相鬪ニ候哉ニ相聞へ、全ク大義辨別致シ候條、神妙之至ニ候、猶御取糺、其事跡於レ無ニ相違ハ、更ニ 御沙汰之品モ可レ被レ爲レ在旨、被レ仰出候事。

堀田相模守重臣

閏四月四日

倉次 甚太夫 佐治三左衛門

辦事御役所

○本日批紙

○同 閏四月六日、堀田正倫謹ヲ大總督ニ獲テ、京師ニ在リ、封境騷擾スルヲ聞キ、赦ヲ獲テ藩ニ歸リ、之ヲ鎮輯セント請フ、批シテ督府ノ處分ヲ俟タシム。

當節相模守領分近邑ニ、賊軍屯集致候哉之風聞有レ之、心痛仕候ニ付、早速歸國、賊軍鎮定仕度存意ニ候得共、何分謹慎罷在候テハ、兎角指揮等モ不行届ニテ、深痛心罷在候、依レ之、何卒謹慎被レ成コ下御

(官中日記) 水野忠愛家記

相模守儀、大總督府ヨリ謹慎被ニ仰付ニ候儀ニ付、御免之儀ハ大總督府申立ニ無レ之テハ難レ被レ爲レ及ニ御沙汰ニ候處、右領分近地賊徒屯集之由ニ付、鎮定指揮方深ク痛心致候趣、尤之儀ニ候、依テハ相模守進退之儀、大總督府へ掛合之上、早々 御沙汰可レ被レ仰出候ニ付、領地鎮定指揮之儀ハ、精々重役共へ申付、勉勵可レ致旨被ニ仰出候事。(辦事局記) 堀田正倫家記

○内國事務局大總督府ニ贈ル書

愈御清榮令ニ恐賀ニ候、抑別紙上條ヲ 之通願出候ニ付、附紙之通返答致候間、爲ニ御心得ニ申入候、右ニ付御免ニ相成候ハ、早々御報知可レ給候、吳々モ此

方ニテ被レ免候テハ不都合ニ候間、得ト御取糺之上被レ免候ハ、早々御報知可レ給候、仍早々如レ此候也。

後四月五日

(東征總督記)

○復書ハ之ヲ佚ス、按ズルニ十九日ニ至リ、大總督府正倫ノ罪ヲ釋ス。

○同 閏四月七日、東山道ノ官軍、下總流山ニ於テ、近藤昌宜勇、時ニ大久保大和ト稱スヲ捕ヘテ之ヲ斬リ、首ヲ京師ニ傳フ、是日、三條積ニ梟ス。

○太政官日誌ニ云、賊長近藤勇ノ首級、關東ヨリ至ル、三條河原ニ於テ之ヲ梟スルコト三日、其罪惡ヲ掲ゲ示スコト左ノ如シ。

元新選組近藤勇事

大和

武州流山
は總州流
山の誤か

此モノ兇惡之罪迹アマタ有レ之上、甲州勝沼、武州流山兩所ニオイテ官軍ニ敵對セシ段、大逆タルニ依テ如レ此令ニ梟首ニ者也。

閏四月七日

○同 閏四月九日、内田正學、藩事ヲ以テ上京遲延スルヲ申ス。

今般於ニ江戸表ニ總督府御宿陣ヘ主殿頭重臣之者御呼出ニテ、兇黨等處々屯會暴行候趣ニ付、御達之儀御座候間、御請書差上申候、右ニ付上京御猶豫之儀奉ニ歎願候處、御附札ヲ以願之通被レ仰出、難レ有仕合奉レ存候、尤其段於ニ江戸表ニ大總督有柄川宮様ヘモ御届奉ニ申上候段、在所表ヨリ申越候、依レ之、別紙寫三通相添、此段御届奉ニ申上候、以上。

閏四月九日

内田主殿頭家來

平野 林三

辨事御役所 (辨事局叢書)

○別紙ハ之ヲ略ス

○同 閏四月十一日、東海道先鋒副總督柳原前光、大多喜城ヲ收メ、城主大河内正質ヲ佐倉藩ニ幽シ、吉田藩ニ命ジテ、其城地臣隸ヲ監守

セシム。

○總房鎮撫日誌ニ云、閏四月十日藻原驛御本陣ヘ、一ノ宮藩重臣小泉重兵衛參陣、

右ハ大多喜松平豐前儀、本城立退、於ニ菩提所ニ深謹慎罷在、於ニ家來之者モ同様寺院ヘ引籠相慎居候ニ付、何時ニテモ御入城被レ爲レ在候テ差支無レ之、且近傍ニ賊徒潜伏等不レ仕、尤先達テ賊徒共ヨリ彼是申來候得共、謹慎中ニ付決テ取合不レ申ニ付、何卒寛大之御處置奉レ願度段、同藩ヲ以奉ニ歎願候旨申出ル、佐倉藩ヘ御達書左ノ如シ。

佐倉藩ヘ

松平豐前、不ニ容易ニ罪狀ニ付、追々御處分可レ有候得共、一先其藩ヘ御預且不軌之儀ニ付、從事ノ者ニ於ハ於ニ寺院ニ謹慎被レ仰付候間、嚴衛可レ致事。

後四月

東海道

副總督

前光

十一日、藻原驛御發途辰刻、長南驛ヘ御着已刻、於ニ當驛ニ御帶陣、先レ是、監軍安場一平ヲ以松平豐前ヘ御沙汰書如レ左。

房總戰亂記

松平 豐前

先達慶喜叛逆之候從テ其密謀ヲ贊成候段、不レ可レ許罪狀ニ付、追々御處分可レ有レ之候得共、一先佐倉藩ヘ御預、且左兩件等被レ仰付候、速ニ拜請可レ仕事。

一條 本城掃除且領地、圖籍、武器等悉皆被レ召上候事。

二條 豐前同意不軌之儀ニ付、從事候族ハ、各於ニ當地寺院ニ謹慎之事、但、其餘雖ニ子弟ニ無罪之輩ハ、更ニ不レ及ニ關係候也。

右兩條被レ仰出候、仍テ明十二日辰ノ刻ヲ限り可レ及ニ遵奉候、若於ニ違背ハ膺懲之典刑可レ相正事。

辰後四月十一日

東海道

副總督

前光

前條御達ニ付、左之通請書差出ス。先般慶喜叛逆之候從テ其密謀ヲ贊成候段、御許容難レ被レ爲レ在罪狀ニ付、追テ御處分被レ仰出候迄、一先佐倉藩ヘ御預、且被レ仰付候御兩件之趣、明辰之刻

ヲ限り可レ奉ニ遵奉ニ旨、豊前始臣下一同恐入奉レ畏候、
右御請奉ニ申上候、以上。

大河内豊前家來

閏四月十一日

可兒 治太夫

十六日、吉田藩へ達書、如レ左。

松平豊前本城、領地竝家中從事之者、圓照寺ニ謹慎
罷在候人數、一應被ニ預置ニ候、就テハ嚴重守衛、萬
事行届候様可レ被ニ取計ニ候事、但、市在取締且公事等
承届、可レ然様處置可レ有レ之候、重大之事件ニ於テハ
伺出候テ、差圖之上處置可レ有レ之事。

後四月十六日

副將 前 光

大河内刑部大輔殿

十七日、佐倉藩ヨリ差出書、如レ左。

松平豊前當藩へ御預被ニ仰付、去ル十二日御請取相
濟、直ニ兵隊ニテ警固、道中二泊、同十四日夕佐倉
表へ到着、城内侍屋敷へ差置、嚴衛仕候、此段御届
申上候、以上。

堀田相模守家來

閏四月

熊谷 左膳

○同 閏四月十九日、稻葉正善ノ父正己、舊幕
府ノ要路ニ居リ、匡救ノ道ヲ失スルヲ譴メ、其
狀ヲ具申セシム、正善上疏シテ罪ヲ謝ス。

稻葉備後守

徳川慶喜御處分之儀、追々 御沙汰之旨モ有レ之候
通り、正月三日以來之舉動、反逆顯然、其罪天下萬民
俱ニ所レ知ニテ、終ニ恐多モ 御親征行幸被レ爲レ遊、
深ク被レ爲レ惱ニ宸襟ニ候處、其砌其方養父隱居兵部大
輔、當時江隱事、於ニ舊幕府ニ老中相勤居候、就テハ
去冬大政返上以來大變動ニ及ビ候形行、樞要之職務
ヲ以テ屹度取計振モ可レ有レ之筋ニ相當リ、竝ニ慶喜
東歸後ニテモ迅速恭順謝罪之實效相立、不レ被レ爲
レ惱ニ宸襟ニ候様盡力可レ致苦之處、無ニ其儀ニ彼是不都
合之次第、如何相心得候哉、且又隱居之身柄ニテモ、
勤役中不行届之儀ニモ有レ之候得バ、早速上京御詫
可ニ申上之處、更ニ無ニ其儀、剩於ニ在所相慎居不

レ申、近來松平肥後等賊徒益反逆相募リ候ニ與シ候哉
ニモ相聞へ、旁御不審之件々御糺問被ニ仰付ニ候條、
取調、事實巨細之儀早々可ニ申出ニ候事。

閏四月(官中日記)
(稻葉正善家記)

○ 私養父隱居江隱儀、於ニ舊幕府ニ老中格相勤居候内、
去冬大政返上以來、大變動ニ及ビ候形行、樞要之職
務ヲ以取計振モ可レ有レ之筋ニ相當リ、殊ニ慶喜東歸
後ニテモ迅速恭順、謝罪之實效相立、不レ被レ爲レ惱ニ
宸襟ニ候様盡力可レ仕苦之處、無ニ其儀ニ彼是御不都合
之御次第、如何相心得候哉、且又隱居之身柄ニテモ、
勤役中不行届之儀ニモ有レ之候得バ、早速上京、御詫
可ニ奉ニ申上之處、更ニ無ニ其儀、剩於ニ在所相慎居不
レ申、近來松平肥後等賊徒益反逆相募候ニ與シ候哉ニ
モ相聞へ、旁御不審之件々 御糺問被ニ仰付、事實取
調、巨細之儀可ニ奉ニ申上ニ旨、昨十九日以ニ御書付
被ニ仰渡、於レ私深奉ニ恐入ニ候、尤江隱儀、去ル正月
下旬役儀辭退被ニ差免、同三月上旬在所へ差遣シ、

房總戰亂記

爲ニ相慎ニ置候儀ニテ、賊徒等へ與シ候儀ハ更ニ無ニ御
座ニ候儀ト奉レ存候得共、私儀在所發足後、關東筋賊
徒トモ屯集之趣ニモ有レ之、且遠隔之儀ニテ事實駁ト
取調兼候間、前顯御不審之件々爲ニ取調ニ急速家來在
所表へ差下シ相糺候上、巨細之儀早々可ニ奉ニ申上
候間、暫時御猶豫之程奉ニ願上ニ候、以上。

閏四月二十日

稻葉 備後守

辨事 御 中

○五月六日批紙

在所表嚴重ニ取糺、賊徒へ不ニ相與ニ義等ハ、確證ヲ
以可ニ申上、總テ御不審ノ事件明細取調可ニ申出ニ旨、
被ニ仰付ニ候事。(辨事局記)
(稻葉正善家記)
○正善家記ニ云、閏四月廿一日、江隱事實爲ニ取調、
京詰家來東下發足、在所館山へ著、御糺問之件々
江隱へ申問候處、不堪ニ驚愕、上京之上直ニ奉答可
レ仕事ト覺悟仕候處、其頃所勞ニテ延引罷在候内、備
後守へ五月十五日御不審被レ爲ニ理解、御糺問御免ニ
相成候旨御沙汰有レ之候趣申越ニ付、上京且奉答書等

四三

不ニ差出相濟候。

○同 閏四月二十日、加納久宜、封邑傍近兇徒
横暴ノ狀ヲ申ス、因リテ海内ニ申令シテ、順逆
ヲ錯ルコト勿ラシム。

德川家元撤兵指圖役兼使番 藤井 久三

飯田 藏之助

同 下役 飯田 松之丞

永峯 矯四郎

右四人之者共、四月十六日、嘉元次郎在所上總國一
宮表へ罷越、何カ用向有レ之候段申込候ニ付、郡奉行
差出候處、一大事之儀故、重役面會致度段申込候間、
即チ番頭一人差出候處、彼等申出候ニハ、方今慶喜
誠意恭順ニテ、朝敵之汚名ハ相除候得共、前後皆薩
長之所爲ニシテ、何共恐入候次第、最早身分之處置
落着仕候ノ上ハ、我等見込之通、右之兩藩討平ゲ、
事成就之時ハ首ヲ延べ朝裁ニ相任可申ト、赤心之者
共申合、一戰可仕所存ニ候、只今ハ陸軍隊長福田八

郎右衛門總奉行ニテ、同國木更津集屯罷在候、其近
領諸侯方へ及ニ示談ニ候處、何レモ承知仕候、當家之
儀ハ本譜代之家筋ニ候得バ、及ニ示談ニ候迄モ無之、
德川家へ助力有レ之事勿論ニ候、乍併時勢ニ隨ヒ、
義ヲ忘レ、首鼠兩端之輩モ多分有レ之候ニ付、先一應
及ニ示談ニ候、存寄承度旨申出候、答候ニハ、主人儀
上京ニテ留守中故、一己ノ存意ヲ以挨拶難ニ相成ト
相斷候處、彼申候ニハ、留守預リ之事ニ候トモ、何
トカ挨拶無レ之候テハ不ニ相成ニ趣強談ニ被レ及、猶又
申出候ニハ、上總諸侯之分ハ不レ殘相廻候ノ處、何レ
モ留守中、然レ共皆前件同意之趣、猶是ヨリ房州諸
侯方へモ申談候積リトノ事、併德川家ノ恩澤ヲ蒙リ
候者ハ無ニ異儀ニ事ニ候間、加州ヲ始メ奥羽ノ諸侯何
レモ盡力同心、可レ報三百年來之德澤ハ勿論之事、
且西藩諸侯ト雖ドモ、薩長之外ハ忽味方ニ可ニ相成
ハ相違モ無之、不レ遠内再興可仕候、只當今木更津
ニ相集候黨凡三四千人、江戸表へ殘居候者モ多人數、
其外處々分散ノ者ドモモ又多分有レ之、右ニ付テハ是

非共一味可致旨申出候、答候ニハ、各方被對德川
家ニ可レ被盡忠勤ニ候ハ、拙者主人ヲ大切ニ存候ト同
様之儀ニテ、只今之形勢ニテ中々即答難ニ致候、雖
然又各方へ背候儀ニテハ決テ無レ之、留守中人少、
武備手薄ニシテ、用ニ相立不申ト相斷候處、彼等申
ニハ、假令留守中ニテモ武器兵糧等無レ之ナド申事
有レ之間敷ト被談候、此段尤之事ニ候得バ、答候ニ、
鉢砲ノ儀ハ江戸表ニ有レ之、未ダ運送不レ致、米之儀
ハ少々有レ之趣ニ申候處、右米是非共借用申度ト申
出候、然ル處小身微力且主人上京中、甚人少、何分
彼等ニ可レ敵之力無之、一時相通候策之心得方ニテ
答候ニハ、家中扶持米、農民手當等引去、殘米二百
俵モ有レ之、夫ニテ宜候ハ、差出可申段相述候處、右
ニテ宜向承知仕候、其上木更津屯所迄家來一人差出
候様、彼是被レ及ニ示談ニ候、右等相拒候節ハ、忽チ多
勢引來、在所押領可致哉モ難ニ計候間、無レ據家來一
人差出候、此段在所表罷在候家來ヨリ申越候、其後
ノ始末、未ダ不ニ申越候、此儀定テ江戸表ニ罷在候

房總戰亂記

家來ヨリ御届ニ相成候事トハ奉レ存候得共、此地へ相
達候ニ付、不ニ取敢御届申上候、以上。

閏四月廿日

加納嘉元次郎家來

若泉 藤八

辦事御役所

(辦事局叢書
加納久宜家記)

○ 當春正月三日後大變動ニ立到、乍レ恐一旦御親征迄被
レ爲遊、慶喜東歸之後、恭順謹慎ヲ盡シ、謝罪實效
相立、其根元收拾モ相見ヘ候ニ付、既ニ 還幸被レ爲
レ在、德川家御處分ニモ可レ被レ及之處、加納嘉元次郎
ヨリ別紙届文ノ如ク、舊旗下等益猖獗、大義順逆ヲ
失ヒ、官軍へ抗シ、今日迄關東全ク御鎮定ニ不ニ立
到ニ儀、彼等ガ罪ニアリ、隨テ萬民塗炭ノ苦ニ陥リ、
上ハ 大政御一新之 聖慮ヲ妨害シ、下ハ慶喜恭順
之素志ニ背キ、大逆無道、不レ謂之甚敷ナリ、就テハ
是ガ爲ニ天下方向ヲ失フ者モ或ハ可レ有レ之歟ト、深
ク御憂慮被レ爲在候間、天下萬民猶又方向ヲ定メ、
順逆ヲ辨ジ、夫々相應之御奉公可仕旨被ニ仰出候

事。

閏四月

(太政官日誌)

○同 閏四月二十三日、是ヨリ先、土井利與、軍資ヲ東海道總督府ニ給貸ス、是日、書ヲ朝ニ上リ、之ヲ獻ゼント請フ。

先般於ニ在所表ニ從ニ御總督府ニ依ニ御達ニ金壹萬五百兩差上置申候、然ル處兼テ弊藩相應之盡力仕度心懸罷在候折柄、幸之儀ニ付、乍ニ少分ニ其儘獻金仕度奉レ存候、願之通被ニ仰付ニ被ニ下置ニ候者難レ有仕合奉レ存候、此段奉レ願候、以上。

閏四月廿二日

土井 大炊頭

辨事 御中

(辨事局記)

○利與家記ニ云、翌巳年五月、願之通獻金被ニ仰付。

○同 閏四月二十五日、是ヨリ先、備前藩、土井利與ノ別邑美作ニ在ルモノヲ假管ス、是ニ至リ、利與書ヲ上リ、勤王ノ實蹟ヲ陳シテ、其地ヲ還付センコトヲ請フ、之ヲ聽ス。

王政御一新之折柄、當正月中慶喜反逆ニ付 御追討被ニ仰出候處、大炊頭儀兼テ勤 王之素志御座候得共、病惱罷在上京難レ仕、不レ得レ止爲ニ名代ニ重臣爲ニ差登ニ奉命仕候儀御座候、其折柄作州之内領分地之儀、備藩池田采女助ト申者ヨリ、同所詰家來ヘ引合有レ之、別紙之通書付差出置申候、然ル處大炊頭儀漸快方ニ相趣、抑テ先月中上京、首尾能奉レ窺ニ天機、大坂御城門御守衛被ニ仰付、今般 御誓約迄モ無滞相濟、其外官軍御東下ニ付、江府竝在所古河表ニ於テモ相應之御用向被ニ仰付、重疊難レ有奉ニ感戴ニ候、就テハ小藩之儀行届兼候得共、最早大炊頭去就モ相分

リ、勤 王之素志モ相立候上ハ、何卒作州之内領分地備藩ヘ關係仕罷在候儀ハ、御赦免被ニ成下、以前之通相復シ候之儀 御沙汰被ニ成下ニ候者難レ有仕合奉レ存候、此段幾重ニモ御歎願申上候様、大炊頭申付候、依レ之、別紙相添此段奉ニ申上候、以上。

閏四月廿二日

土井大炊頭家來

鈴木 登門

辨事御傳達所

○本日批紙

願之趣被レ爲ニ聞召届ニ候事。

但、池田備前守へ、別段御沙汰向可レ被ニ仰付ニ候事。

○別紙

今般徳川慶喜反狀明白ニ付、追討被ニ仰出候上ハ、勤 王之爲ニ實効ニ從ニ朝廷ニ何分之御沙汰相待、且主人之去就相分候迄、別紙領地御預奉ニ申上候、依テ證書如レ件。

土井大炊頭内

慶應四戊辰年二月八日

岡 村

林印

池田采女助殿

(土井利與家記)

(辨事局記)

○本日達書

池田備前守

土井大炊頭方向明正、追々勤 王奉仕之段被レ爲ニ聞食届ニ候ニ付、同人領地當春其藩ヘ預置候義ニ候得共、早々差返、大炊頭家來ヘ引渡可レ致旨、其方家來右

房總戰亂記

掛リ之者ヘ可ニ申付ニ候事。

閏四月

(池田章政家記)

大炊頭領分作州久米、南條郡村々、昨卯年收納米大坂表ヘ積下シ候付、備前金岡、福島兩湊藏元共方迄、舊例ノ通積下シ、夫ヨリ追々大坂表ヘ積廻シ、昨冬廻シ殘ノ分八百石餘積廻シ候積ニテ、爲ニ請取ニ廻船仕候處、當春以來御混雜ノ折柄、地方ノ米一切差出候儀難ニ相成ニ趣、池田備前守様ヨリ御沙汰有レ之候趣、藏方共申出、無レ據其儘仕置候得共、當節追々家中扶助ニモ差支當惑仕候ニ付、何卒受取ノ者差出候者、先々ノ通藏方共ヨリ相渡候様、備前守様ヘ急速御沙汰被ニ成下ニ度候様仕度段奉レ願候様、大炊頭申付、此段申上候、以上。

土井大炊頭家來

閏四月二十三日

白濱久太夫

辨事御傳達所

○二十八日批紙

願之通被_レ仰付_レ候事。

(行政官記)

○二十八日達書

池田備前守

土井大炊頭作州領地ヨリ大阪へ之廻米八百石餘、備前金岡、福島兩港へ春來之形勢ニ付差留置候趣ニ候處、大炊頭家來受取之者罷出候得バ、相渡可_レ遣候事。

閏四月

(行政官記)
池田章政家記

○同 閏四月二十六日、是ヨリ先、加納久宜西上シテ大津驛ニ抵リ、入京ヲ乞フ、令シテ、命ヲ大總督ニ請ハシム、久宜乃チ老臣ヲ督府ニ遣シ、其情ヲ陳疏シテ允ヲ得、是日、京ニ入ル。

主人嘉元次郎儀上京可_レ任旨蒙_レ勅命、冥加至極、難_レ有仕合奉_レ存候、然ル處、脚氣ニテ難儀仕候ニ付、暫時御猶豫奉_レ願置、在所表ニテ手當罷在、上京追々延引、何共恐入心配仕候間、種々療養之上押テ出立

閏四月二日
丸山卯右衛門
辨事御役所

大總督宮御進軍之上ハ、征東ハ勿論、關東向歸順方

○四日批紙

向等一切 御委任相成候趣モ有_レ之、右督府窺濟ニ無

レ之テハ難_レ被_レ免_レ入京ニ付、暫大津表へ滞在、重臣ヲ以督府へ奉_レ伺候上、何分之儀猶又申出候ハ、其筋ニ寄り、追テ上京之儀可_レ被_レ仰付_レ候事。

(辨事局記)
加納久宜家記

○ 當月二日嘉元次郎入京之儀奉_レ歎願_レ候處、大總督宮様御進軍之上ハ、征東ハ勿論、關東向歸順方向等一切御委任相成候趣モ有_レ之、大總督宮様窺濟ニ無_レ之テハ難_レ被_レ免_レ入京、暫大津表へ滞在、重臣ヲ以_レ大總督宮様へ可_レ奉_レ窺候様御附紙ヲ以被_レ仰渡、難_レ有仕合奉_レ存候、右ニ付早速重臣差立、當十四日於_レ江戶表別紙之通奉_レ歎願_レ候處、翌十五日御附紙ヲ以被_レ仰渡、重疊難_レ有仕合奉_レ存候、猶此上勤 王之微志被_レ爲_レ聽召譯、出格之以_レ御仁惠、入京被_レ爲_レ免被_レ下置候様奉_レ歎願_レ候旨申付越候、此段奉_レ申上候、以上。

加納嘉元次郎重臣

閏四月廿三日

丸山卯右衛門

辨事御役所

○本日批紙
早々上京可_レ致旨 御沙汰候事。

○別紙

私儀上京之蒙_レ勅命_レ候ニ付、速ニ上京可_レ仕候處、持病之脚氣ニテ難儀仕候間、重臣差出奉_レ伺_レ天機、冥加至極奉_レ存、御元服御祝儀貢獻物仕、猶國力相應之御用被_レ仰付_レ度奉_レ願候處、御受取置相成、難_レ有奉_レ存候、其後 大總督宮様御進軍ニ付、御途中へ使者差出、奉_レ伺_レ天機、乍_レ微力、些少之米金獻納、御入途御差加之程奉_レ願候處、御聞届被_レ下置、御入用之節迄御預被_レ仰付、冥加至極、難_レ有仕合奉_レ存候、病氣無_レ餘儀、トハ乍_レ申、於_レ在所表_レ療養仕居、空敷光陰ヲ過行、難_レ堪_レ心痛_レ候ニ付、在所上總國一宮表之儀ハ東海岸御座候間、病氣押候テ當三月廿七日乗船仕、手當年ニ相加_レ勢州大湊へ著船、上京之心得ニテ大津驛迄當月朔日著仕候、尤 大總督宮様御東下ニ付テ

ハ、御陣前へ參上、奉_レ伺_三天機_一上京之儀可_ニ申上_一方歟ト心附候間、途中ヨリ上陸、御陣前へ參上、猶乘船海路罷登候心得之處、於_ニ下田港_一承知仕候ニハ、駿府表 御發輿、關東御進軍被_レ爲_レ在候趣御座候付、深御委任柄等之儀一向ニ不_ニ相心得_一候故、只願上京遅引、勤 王之素心不行届成行可_レ申哉ト、心痛之餘リ御陣前參上不_レ仕、何共不調法至極奉_ニ恐入_一候、辨事御役所御下知之趣ニ付、大津驛滞在仕、重臣差下、右恐入候不調法之御詫奉_ニ嘆願_一候、何卒東隅之邊土ニ罷在、殊_ニ斯ル_一 御厚配之世形故、萬事傳承モ不_ニ相届_一、只上京他_ニ不_レ後様、一途_ニ見込候次第、御憐恕被_ニ下置_一、前顯不調法御仁免被_ニ成下_一、入京奉_レ伺_三天機_一候様御許容之程、偏_ニ奉_レ願候_一、以上。

閏四月五日

加納嘉元次郎

○批紙
上京之儀一途ニ差急候トハ乍_レ申、不都合之次第候間、可_レ被_レ及_ニ御沙汰_一之筈ニ候得共、段々情實申述、御理申上候付、願之通被_ニ差免_一候、猶上京之上

宜御奉公可_レ致事。

(加納久宜家記)

兼テ家來之者奉_レ願候通、入京 御聽届被_ニ成下_一、難_レ有仕合奉_レ存候、依_レ之、即刻大津驛出立、昨夕京著仕候、此段御届申上候、以上。

閏四月廿七日

加納嘉元次郎

辨事御中

(行政官記)

○同 閏四月二十九日、森川俊方、封境騷擾スルヲ以テ歸藩ヲ請フ、之ヲ聽ス。

去月廿二日、於_ニ江戸表_一從_ニ東海道總督府_一家來之者御呼出ニテ、別紙之通御達御座候、私領分下總國生實近邊、不_レ穩形勢之趣深心配仕候、就テハ家來而已ニテハ萬一不行届之儀有_レ之候テハ奉_ニ恐入_一候ニ付、歸邑仕、取締向且分配指揮等仕度奉_レ願候、且亦兵隊之儀ハ何分小家手薄之儀ニモ有_レ之、行届兼當惑仕候、可_ニ相成_一ハ追テ爲_ニ差登_一申度奉_レ存候、此段宜御執成奉_レ願候、以上。

閏四月廿八日

森川 内膳正

辨事御中

副 將印

(行政官記)

○本日批紙
願之通被_レ爲_ニ聞食届_一候、在所表鎮靜之上、早々兵隊可_ニ差登_一旨、被_ニ仰付_一候事。

○別紙一通

兇黨暴行爲_ニ鎮靜_一、不日官兵被_ニ差向_一之間、於_ニ其藩_一モ應援之心得_レヲ以、臨機出兵可_レ有_レ之候、監軍安場一平差遣候條、指廳可_レ受候事。

辰四月

御 判

生 實 藩

頃日一種之兇黨等處々屯會シ、良民ヲ欺、恣意暴行候趣、不_レ畏_ニ天威_一言語同斷之所業ニ候條、右之徒等其領内ニ入込候者、悉召捕置、可_ニ訴出_一候、萬一多人數手ニ餘候節ハ、近隣之各藩申合、急速擊取、領民安堵可_レ爲_レ致候事。

辰四月

東海道鎮撫府

總

督印

房總戰亂記

五一

加納嘉元次郎重臣

○同 五月朔日、一宮藩、書ヲ先鋒總督ニ上リ、兇徒管内ニ出沒スルヲ以テ、兵ヲ四境ニ出シテ、之ヲ緝捕セント請フ、因テ命ジテ之ヲ鎮輯セシム。

嘉元次郎領分上總國一宮表近郷、兎角此程中ヨリ強盜横行、百姓共甚及_ニ難澀_一候儀ニ御座候、依_レ之、何卒五六里四方之間取締爲_ニ巡邏_一人數差出候様奉_レ願度、右被_ニ仰出_一候上ハ強盜共見掛次第召捕、若手餘リ候節ハ討取候テモ不_レ苦御座候哉、一、召捕之上、罪之輕重ニ寄、相當之所置於_ニ在所表_一取計候テモ是又不_レ苦御座候哉、右之通嘉元次郎上京留守中之儀ニ付、此段私共ヨリ奉_レ伺候、以上。

五月朔日

小泉 重兵衛

(東海道先鋒記)

○本日達書

加納嘉元次郎

良民逆害
は良民慮
害か

其方領地近傍無賴之惡徒等蜂起、良民逆害候ニ付、爲ニ鎮靜ニ巨魁生殺之權其方へ可ニ委任ニ候間、精々鎮撫至當之處置可レ有レ之候事。

辰五月

東海道 總 督

(東海道先鋒記)

(加納久宜家記)

○同 五月三日、土井利與、在京期滿チ、且封境騷擾スルヲ以テ、將ニ藩ニ歸ラントス、因リテ途次大阪城門ノ守衛、及ビ河内ノ別邑ヲ檢セント請フ、之ヲ聽ス、是日、暇ヲ賜フ。

今般還幸被レ爲レ在、御誓約相濟候面々、五十日餘滯京之向ハ、追テ御暇可レ被ニ下置ニ候條、歸國之上ハ御誓約之御趣意奉ニ體認ニ候條、條々御達之趣奉レ畏候、兼テ申上置候通、在所古河表近傍兇徒屯集、官

軍へ相抗シ、不容易ニ形勢ニ立至リ、同所切迫之模様申越次第、家來共へ爲ニ指揮ニ御暇奉レ願罷越度奉レ存候處、前條之通被ニ仰出、近々御暇モ可レ被ニ下置ト難レ有仕合奉レ存候、就テハ今般大坂御城門御守衛被ニ仰付置候、右場所見分仕置度、且添地攝州平野郷陣屋詰トシテ、是迄家來之者爲ニ差登ニ置、收納且取締等萬端申付置候得共、遠隔ノ地難ニ行届、苦心罷在候折柄、王政御一新ニ付、更ニ御趣意貫徹爲レ仕度、追テ御暇被ニ下置ニ歸邑仕懸ク、大坂表並同所へモ立寄、御趣意柄ハ勿論、取締向等精々申付置、相濟候上ハ直ニ歸邑仕度奉レ存候、此段奉レ願候、以上。

閏四月廿二日

土井 大炊頭

辦事 御 中

○閏四月二十五日批紙

願之趣被レ爲ニ聞食届ニ候事。

(辦事局記)

(土井利與家記)

今般 還幸後 御誓約濟之面々、永ク滯在致シ、徒ニ疲弊、往々藩屏之任難堪立至リ候テハ不ニ相濟ニ段

ハ勿論之事ニ付、五十日餘滯京之向ハ、追々御暇被レ下候旨、御沙汰之趣難レ有仕合奉レ存候、然ル處、兼テ申上候通、在所古河表近傍へ、當四月中兇徒屯集、不ニ容易ニ形勢ニ立至リ候處、官軍御盡力、一旦逃避仕候趣ニハ候得共、此後如何之變事出來可レ仕哉難レ計、甚苦心罷在候、就テハ前條御仁恤之被ニ仰出ニモ御座候上ハ、私儀滯京最早五十日餘ニモ相成候ニ付、一旦歸邑取締向等嚴重指揮仕度、依レ之、御暇之儀如何可レ仕哉、此段御内慮奉レ候、以上。

閏四月廿九日

土井 大炊頭

辦事 御 中

○本日批紙

伺之趣ハ不レ苦候事。

(行政官記)

(土井利與家記)

○二十四日途ニ上ル。

○同 五月六日、堀田正倫、大總督ノ救命ヲ上申ス、是日、其罪ヲ釋ス。

去ル十九日、江戸西丸城へ從ニ 大總督府家來之者

房總戰亂記

五三

軍へ相抗シ、不容易ニ形勢ニ立至リ、同所切迫之模様申越次第、家來共へ爲ニ指揮ニ御暇奉レ願罷越度奉レ存候處、前條之通被ニ仰出、近々御暇モ可レ被ニ下置ト難レ有仕合奉レ存候、就テハ今般大坂御城門御守衛被ニ仰付置候、右場所見分仕置度、且添地攝州平野郷陣屋詰トシテ、是迄家來之者爲ニ差登ニ置、收納且取締等萬端申付置候得共、遠隔ノ地難ニ行届、苦心罷在候折柄、王政御一新ニ付、更ニ御趣意貫徹爲レ仕度、追テ御暇被ニ下置ニ歸邑仕懸ク、大坂表並同所へモ立寄、御趣意柄ハ勿論、取締向等精々申付置、相濟候上ハ直ニ歸邑仕度奉レ存候、此段奉レ願候、以上。

閏四月十九日

大總督府 參謀

辦事 御 中

○本日達書

上京之上、他出被ニ止置候處、今度被レ免候事。

五月

(官中日記)

○正倫家記ニ云、五月六日、太政官代ヨリ重役ノ者御呼出ニ付、佐治三左衛門罷出候處、他出被レ成ニ御免ニ候旨被ニ仰渡ニ候。

堀田相模守

(行政官記)

(堀田正倫家記)

○同 五月七日、是ヨリ先、關宿藩主久世廣文、將ニ西觀セントシテ江戸ニ至ル、適封境騷擾スルヲ聞キ、書ヲ東海道鎮撫總督府ニ上リ、歸藩シテ之ヲ鎮輯セント請フ、之ヲ聽ス、時ニ藩士正奸二黨アリ、廣文年猶幼弱ニシテ、制馭スルコト能ハズ、奸黨遂ニ廣文ヲ要シテ、彰義隊ニ投ズ、是日、鎮撫府書ヲ下シテ、廣文ノ其職ヲ失スルヲ譴メ、藩士ニ令シ、屏居シテ後命ヲ俟タシム。〔此事件ノ顛末ハ東海道戰記〕
〔閏四月二十三日ニ詳記セリ〕

○同 五月十四日、稻葉正己及ビ正己ノ子正善ノ罪ヲ釋シ、士心ヲ一ニシテ王事ニ服セシム。

稻葉 江隱

其方儀於舊幕府老中勤役中、徳川慶喜去冬大政返上以來、當正月三日後大變動ニ及ビ候形行、叛逆顯然、其罪天下萬民俱ニ所知、終ニ恐多モ一旦御親征行幸被レ爲遊、被レ惱ニ宸襟候、就テハ其方樞要之職

務ヲ以テ、屹度取計振モ可レ有レ之處、兼テ在江戸、多病勞盡力難レ屆情實モ有レ之哉ニ候へ共、其段奉ニ恐入、何分奉レ待ニ朝裁ニ之外無ニ他事ト、斷然在所表へ退去之上、蟄居謹慎罷居候由、然共如レ斯ニ容易ニ時態ニ立到リ候テハ、全ク勤役中之落度難レ免、殊更近年段々御聞込之趣有レ之、此條御沙汰之品モ可レ有レ之處、同姓備後守歸順之道相立、速ニ上京セシメ候ニ付、右ヘ對シ出格御寬典ヲ以被レ免候條、向後屹度心得違無レ之様可レ致旨 御沙汰候事。
〔官中日記〕
〔稻葉正善家記〕

稻葉備後守

其方養父隱居江隱儀、於舊幕府老中勤役中、當正月後不ニ容易ニ時態ニ立至リ、就テハ御取紀之趣有レ之、先差扣居候之様被ニ仰付ニ置候處、上京後數十日謹慎罷在候ニ付、格別御寬典ヲ以被レ免候條、彌以國論一定シ、精々可レ勵ニ忠勤ニ旨 御沙汰候事。
〔官中日記〕
〔稻葉正善家記〕

五月

○同 五月二十日、是ヨリ先、北陸道總督高倉永祐、小濱藩ニ命ジテ、其支封勝山藩ノ別邑越前ニ在ル者ヲ假管セシム、是ニ至リ之ヲ復ス。

私領分越前國敦賀郡十ヶ村之儀、去ル二月中北陸道鎮撫使高倉殿ヨリ、本家同姓右京大夫へ御預被ニ仰付、不行届之段甚奉ニ恐入候、依レ之、加州金澤高倉殿御陣營迄重臣之者差出候處、蒙ニ寬大之御沙汰、其後私儀上京仕、奉レ伺ニ天機ハ御誓約モ被ニ仰付ハ、無レ滯相濟、冥加至極難レ有仕合奉レ存候、付テハ右領分ノ儀、何卒此上之以ニ御仁惠ハ、前々之通御渡被ニ成下候ハ、領分ノ者共モ安堵可レ仕ト難レ有仕合奉レ存候、此段偏奉ニ懇願候、以上。

五月十七日

酒井銈次郎花押

辨事 御中

○本日批紙
願之通被レ爲聞召届候、猶本家右京大夫へ此旨御達可レ有レ之間、此段可ニ相心得事。〔酒井忠美家記〕
〔行政官記〕

房總戰亂記

○同 五月二十三日、井上正順、在京ノ期滿チテ、歸藩ヲ請フ、江戸ノ警報アルヲ以テ、之ヲ聽サズ。

私儀先般上京、奉レ窺ニ天機ハ御誓約被ニ仰付、諸事無レ滯相濟、冥加至極難レ有仕合奉レ存候、右御誓約被ニ仰出ニ之御趣意、彌堅ク相守、毛頭他念無ニ御座候、就テハ京著後兼テ御沙汰御座候日限ニモ相成、且在所領分末々ニ迄安堵爲レ仕、勤王之赤心彌厚申付度奉レ存候、依レ之、可ニ相成ニ儀ニ御座候ハ、一先御暇被ニ下置候様仕度、此段奉ニ願上候、以上。
五月廿二日 井上宮内少輔

辨事 御中

○本日批紙

去ル十五日江戸府兵端相開候趣、急報有レ之、仍テハ兼テ被ニ仰出候通、品ニヨリ御出輩モ可レ被レ爲レ在候ニ付、江戸府一定ニ及候迄ハ、諸侯歸邑之儀都テ御差留被ニ仰出候間、此旨相心得、今暫在京可レ有

五五

之候事。

○再請書

私儀先達テ御暇相願候處、御差留被ニ仰出、奉レ畏候、然ル處、私父筑後守儀、持病之痛症相慕候由、在所表ヨリ之飛脚使當月二日著仕、猶又此程大病之旨、同斷飛脚使一昨五日著仕候、就テハ可ニ相成ニ儀御座候ハ、爲ニ看病ニ一ト先御暇被ニ下置候様仕度、何レ快方次第早々上京可レ仕候、此段奉ニ懇願ニ候、宜御執成奉レ願候、以上。

六月七日

井上宮内少輔

辨事御中

○六月八日批紙

願之趣無ニ餘儀ニ被レ爲ニ聞召ニ候處、關東形勢彌平定之報知有レ之迄ハ、今暫諸侯歸國難レ被ニ仰付ニ候間、此段可ニ相心得ニ候事。

(行政官記)
(井上正順家記)

○同 五月二十七日、林忠崇ノ封土ヲ没シ、其臣隸ノ入京ヲ禁ズ、是ヨリ先、忠崇ノ家臣京ニ

在ルモノ、忠崇ノ賊ニ應ズルヲ聞キ、其弟忠弘助ヲシテ入京セシメ、王事ニ服セント請フ、是ニ至リ、其書ヲ卻ケ、忠弘以下ヲシテ屏居シテ後命ヲ俟タシム。

主人昌之助儀被レ爲レ召候ニ付、急捷上京可レ仕之處、病氣ニ付爲ニ名代ニ私共爲ニ差登ニ申候、然ル處、方今風說傳聞仕候ヘバ、昌之助儀在所上總國請西陣屋自燒之上脱走仕候趣、尤何方ヨリモ報知無ニ御座ニ候間、虛實難レ計御座候ヘ共、彌右様之次第ニ立至リ候テハ、當節柄ニ容易ニ次第、深奉ニ恐入ニ候、然ルニ江戸表ニ罷在候先代肥後守實子總領藤助儀ハ、母里方久貝相模守方ヘ罷越、謹慎罷在候趣、是亦風聞ニテ承知仕候、右藤助儀ハ筋目之儀ニ付、追テ順養子ニ可レ奉レ願者ニ御座候、就テハ鶉殿傳右衛門儀ハ其儘御當地ニ罷在、田中兵左衛門儀、林藤助家來ト相名乘、東下仕、虛實承札候上、右藤助召連罷登、勉勵盡忠爲レ仕度、仍テハ出格之御仁恤ヲ以、東下無レ滯通行

相成候様之御印鑑、且前文之儀御許容被ニ成下置候様、偏ニ奉ニ歎願ニ候、以上。

五月十七日

林昌之助家來

鶉殿傳右衛門

田中兵左衛門

(林忠弘家記)

辨事御役所

○本日達書二通

林昌之助

兼テ勤 王無ニ一念ニ證書差出置候處、近來徳川龜之助家來共心得違之者ヘ與シ、領民ヲ棄テ、共ニ致ニ脱走ニ候所業、全ク奉レ欺ニ朝廷ニ勿レ謂事ニ候、依レ之、先領地被ニ召上ニ、家來之者一切入京不ニ相成ニ旨被ニ仰出ニ候事。

但、京都屋敷被ニ召上ニ候事。

五月

林昌之助家來

房總戰亂記

今般昌之助ヘ被ニ仰出之趣ヲ以テ、別紙歎願不レ被レ及ニ御沙汰ニ候、尤申立之通先代肥後守實子總領藤助始家來中恐肅謹慎相盡シ、追テ謝罪之道相立候上ハ、其節御沙汰之品モ可レ被レ爲レ在旨被ニ仰出ニ候事。

(官中日記)
(林忠弘家記)

○忠弘家記ニ、右御渡之節、前段歎願書御差戻相成ルトアリ。

○再請書

主人昌之助儀在所上總國請西陣屋自燒之上脱走仕候趣、風聞ニテ承知仕候ニ付、虛實爲ニ探索ニ東下之儀等、委細奉ニ歎願ニ候處、今般御書付ヲ以昌之助儀脱走仕候趣、右ニ付テハ先領地被ニ召上ニ、家來之者一切入京不ニ相成ニ旨、且御別紙ヲ以私共歎願之趣不レ被レ及ニ御沙汰、尤申立之通先代肥後守實子總領藤助始家中恐肅謹慎相盡、追テ謝罪之道相立候上ハ、其節御沙汰之品モ可レ被レ爲レ在旨、被ニ仰出ニ候段被ニ仰渡、

恐入奉畏候、尤御書付之趣、藤助儀奉謹承候ハ
バ、定テ追々奉歎願儀モ可有御座ト奉存候間、
私共伏見表へ罷越、謹慎罷在度、不苦儀御座候哉、
右ハ入京御差止之從私共奉伺候儀モ奉恐入候
間、主家親類遠類之内ヨリ奉伺候都合ニ仕度、夫是
承り合候へ共、當時上京之向無御坐、邂逅御座候テ
モ家來共而已詰合ニテ難取計趣、猶索搜仕候ハ、
可有御座歎難計御座候得共、追々日數相立、御
沙汰之趣不奉拜戴姿ニ相成、彌以奉恐入候間、
無餘儀從私共奉伺候、進退切迫之段御憐察被
成下、御差圖之程奉歎願候、以上。

六月三日

林昌之助家來

鷲殿傳右衛門

田中兵左衛門

辦事御役所

(林忠弘家記)

○六月四日再達書

林昌之助家來へ

昌之助儀領民ヲ棄置、脱走ニ及ビ、反復奉欺天朝
候ニ付、領地被召揚、家來之者一切入京不相成
旨、過日被仰出候處、追々昌之助暴行相聞へ、大
久保加賀等賊徒ニ引入、剩大總督官軍監ヲ斬殺致
候大逆無道不可謂、依之、早々誅伐之師被差向
候、然ルニ其方共過日入京被差留候處、今以猶豫
有之哉ニモ相聞候間、只今ヨリ京地立退候様被仰
出候事。

六月

(官中日記)
(林忠弘家記)

○大總督府書翰

林昌之助儀木更津戰爭之節、官軍へ及戰爭候敗軍
不得得回、船ニテ熱海へ上陸、大久保加賀守城下へ
行向、今度德川之爲ニ官軍ト戰候テ、只今極困窮ニ
付、人數等差出、應援致シ吳候様相頼候趣、其節大
久保返答ニハ、當節之儀德川氏ノ爲ニモ不宣、何分
ニモ朝廷御沙汰相待候様謹慎可然旨、段々申諭、
眞鶴ト申所へ引取候由、尙又水野出羽守方へモ同斷
ニテ參リ掛り候内抔、兵力ヲ借受度旨申候ニ付、何

故之儀ニテ頼候哉相尋候處、全官軍へ敵對候譯ニ
ハ無之、紀・尾・彦等討伐致シ候旨申答候ニ付、甚
心外之儀、最早木更津ニ於テ官軍へ敵對致シ候儀ニ
付、蒙御沙汰候間、持筒差出謹慎候様、左無クバ
以兵馬是非進伐可致旨申答候由、一々難書盡
候間、尙別紙御覽並使之者ヨリ御直聽可申入候、
右之次第ニ付早々何分之御沙汰有之候様奉願候、
則別紙四藩書付差出候、餘ハ追々申上候、甚以御用
繁、實ニ亂書御推覽希入候也。

閏四月廿五日

(東征總督記)

○別紙ハ之ヲ佚ス。

○同 六月三日、是ヨリ先、林忠崇箱根ヲ侵
ス、小田原藩ノ守兵叛テ之ニ應ズ、事聞ス、是
日、藩主大久保忠禮ノ官位ヲ褫ギ、封土ヲ沒
シ、其臣隸ノ入京ヲ禁ズ。

○本日達書

大久保加賀

房總戰亂記

○同 六月四日、大總督ノ彰義隊ヲ討ズルヤ、
久世廣文佐倉ニ奔ル、其老臣等之ヲ本藩ニ迎
へ、書ヲ總野鎮撫鍋島直大ニ上リテ、其罪ヲ陳
謝ス、是日直大其狀ヲ大總督府ニ稟ス。

[本條ニ關スル文書ハ東海道戰記
六月四日ニ載ス、參照スベシ。]

○堀田正倫、歸藩ヲ請フ、聽サズ。

去ル十五日於江戶表、上野其外處々屯集之者共、誅
戮相成候旨、從大總督官様御達之趣承知仕候、

右ニ付相模守在所佐倉城ハ江戸間近之儀ニ有レ之、右賊徒流出何様之暴發ニ及候哉モ難レ計、遠路隔絶聲息不通心痛至極罷在候、何卒急速歸邑仕、右鎮定方指揮仕度、右等之事情御洞察願之通急速御暇被下候様、偏ニ奉ニ懇願候、以上。

堀田相模守家來

五月晦日

田村 右門

辨事御役所

○本日批紙

江戸府賊徒誅伐大捷之旨、頃日報知有レ之候得共、未關東全平定ニモ不レ及、此上品ニ寄 御出輩可レ被レ爲レ在哉モ難レ計ニ付、在京之諸侯都テ歸國之儀難レ被レ免候間、此旨相心得、今暫時見合可レ申事。(堀田正倫家記)

○同 六月十七日、是ヨリ先、先鋒副總督、古河藩ニ命ジテ、近傍驛遞ノ事務ヲ總管セシム。是ニ至リ、古河藩、書ヲ大總督府ニ上リテ、其任ヲ解カンコトヲ請フ、乃チ之ヲ罷ム。

○古河藩記ニ云、辰六月十六日、西城へ朝倉銳士郎罷出、大御總督府下參謀井口勘七殿へ申達、栗橋宿御委任之儀、此節ニ至リ候テハ、増助郷竝人馬繼立之規則モ相立、聊御差支無レ之様相成候ニ付、御免願仕候處、柳原様ヨリ御委任之事ニテ御取扱相成兼候付、甲州御出陣先へ相願候様、尤差向候民間ニ關係之事件ニテハ、民政所ニテハ取扱ニモ可レ相成カニ被ニ申聞候ニ付、翌十七日御同所へ申達相願候處、是又御取扱相成兼候趣被ニ申聞候、且此度御改革ニテ、五街道人馬繼立宿則等御一定之御處置御取調中、御掛リ役々被ニ仰付モ有レ之、只今御達相成候筋モ有レ之候事ニ付、御委任御免相成候ハ、書類等差出候様被ニ申聞候ニ付、同日猶又西城へ罷出、井口勘七殿へ見込之趣申達相願候處、然ル上ハ書取ヲ以相願候様被ニ申聞、右之通相願候、但御委任中取計候大意取調帳壹冊、當分増助郷村々請印帳壹冊御請取ニ相成候。
二十二日、栗橋宿出役所引拂候ニ付、助郷村々惣代

呼出、左之通申渡置候。(申渡書略ス)

○同 六月十九日、保科正益、罪ヲ京師ニ待チ、老臣ヲ遣シテ、勤王ノ志ヲ大總督ニ陳ス、是ニ至リ、其赦命アリシヲ上申ス、乃チ其謹慎ヲ釋ス。

○十八日上申書ニ通

彈正忠儀、在所表ヨリ海上上京仕、草津驛迄罷越候處、入京差扣候様被ニ仰出候ニ付、猶又奉ニ歎願候處、入京御許容被ニ成下、著之上謹慎可レ罷在旨、尤關東向歸順御取糺之儀ハ、一切 大總督宮様へ御委任相成居候ニ付、重臣ヲ以是迄之形行歎願可レ仕、其旨趣ニ寄り、追テ何分之儀可レ被ニ仰出旨、去ル四月四日御附札ヲ以被ニ仰渡候ニ付、同六日入京仕、同九日重臣之者御當地出立、江戸表へ罷下リ、大總督宮様奉レ初、御先鋒様へモ別紙之通奉ニ歎願候處、以ニ御附札ニ被ニ仰渡難レ有仕合奉レ存候、右重臣者、一昨五日歸京仕候ニ付、此段御届申上候、右ニ付於ニ

當御地ニモ、彈正忠儀何卒速ニ 御免被ニ 仰付ニ被ニ成下候様、偏奉ニ歎願候、以上。

保科彈正忠家來 差添

六月七日

大出十郎右衛門

重臣

大須加貞右衛門

辨事御役所

(行政官記)
保科正益家記

○ 保科彈正忠儀、在所表ヨリ海上上京仕、草津驛迄罷越候處、通行方不都合相成候趣ニテ、奉レ蒙ニ御沙汰入京差扣候様被ニ 仰出候ニ付、猶又歎願仕候處、入京 御許容被ニ成下、著之上、謹慎可レ罷在旨被ニ 仰出、尤關東向歸順御取糺之儀ハ、一切 大總督宮へ御委任相成居候ニ付、重臣ヲ以是迄之形行歎願可レ仕旨、被ニ 仰出候ニ付、重臣之者江戸表へ罷下リ、大總督宮奉レ初、御先鋒へモ別紙之通奉ニ歎願候處、以ニ御附札ニ被ニ 仰渡、且又林昌之助領分、別紙之通御預ケ被ニ仰付候處、本紙之儀ハ在所表へ

殘置候得共、聊相違無御座候旨申聞候、右重臣之者當月五日歸京仕候、就テハ何卒御附札之廉ヲ以、於當御地彈正忠儀、速ニ謹慎御免被仰付被成下候様、於私モ偏奉歎願候、以上。

六月十八日

京極 備中守

辨事 御中

(行政官記)
(京極高陳家記)

○ 林昌之助儀、既ニ勤王無ニ念旨證書差出置、且今般相違候旨趣年敬承、徳川脱徒ニ戮カシ、居所領民ヲ捨テ共ニ脱走候所業、上奉欺天朝候段言語同斷、不レ可許罪狀、就テハ御沙汰被仰出候迄、一應其方へ御預被成候間、領民鎮靜精々盡力、萬事行届候様可致候事。

但請西市在取締、且公事等可然處置取計可有之、重大之事件ニオイテハ伺出、差圖之上處置可致事。

後四月

東海道 副

總 督 御朱印

保科彈正忠殿

(行政官記)
(保科正益家記)

○本日達書

保科彈正忠

其方儀、朝敵松平肥後末家ニ有之、就テハ當春上京之節、不都合之廉ヲ以テ、上京之上謹慎可罷在旨被仰付候所、其後關東向歸順取札之儀、一切大總督官へ御委任之儀ニ付、追々右方へ御處置御掛合申、先般大總督官へ歎願致候ニ付テハ、付札ヲ以謹慎御免被仰付候上、賊徒林昌之助領地等御預被仰付候趣ニ有之候所、右等之件々、未ダ大總督官ヨリ報知無之候へ共、右謹慎御免之付札其儘差出シ、且昌之助領地御預之節ニ御沙汰書有之、其本紙之儀ハ在所表ニ有之候共、右寫書全ク相違無之趣、親戚京極備中守ヨリ申出、且謹慎被免候様、備中守竝其方重臣共奉歎願趣、尤之儀ニ被思食、謹慎御免被仰付候間、勤王實效精々勉勵可致旨 御沙汰候事。

六月

(官中日記)
(保科正益家記)

○鎮臺府、山田政則一太夫ヲ以テ知縣事ト爲シ、武藏・下總ノ數郡ヲ管セシム。

○山田政則履歷書ニ云、明治元戊辰年六月十九日、武藏國知縣事被仰付候。

一 同年六月廿九日武藏國豐島郡・足立郡・埼玉郡高合拾壹萬四千四百五拾石餘支配所被仰付候。

一 同日武藏國・下總國高合拾三萬石餘、松村忠四郎ト兩人立會、當分御預ケ支配所ニ被仰付候。同年八月四日兩人立會、御預ケ所桑山圭助へ相渡候様御沙汰ニ付相渡シ候。

○時ニ縣名ナシ、後ニ大宮縣ト稱ス。

○同 六月二十二日、井上正順、歸藩ヲ請フ、之ヲ聽ス。

私儀先達テ御暇奉願候處、御差留被仰出奉畏候、然ル處、私父筑後守儀、持病之痼症相慕候由、在所表ヨリ飛脚到着仕、其後猶又去ル五日、飛脚ヲ以、追々相慕甚心配之趣申越候ニ付心痛罷在候、

房總戰亂記

六三

依之、可相成儀御座候ハ、爲看病一ト先御暇被下置度段奉願候處、關東彌平定之報知御座候迄、諸候歸邑難被仰付段被仰渡奉畏候、然ル處、去ル十五日又候飛脚到着仕候處、當月初旬ヨリ、別テ時候相障、痼症胸痛甚敷、次第ニ食氣相減、不ニ容易容體罷在候段、在所家來共ヨリ申越、心痛當惑仕候、兼テ被仰渡御座候處、再應強テ奉願候ハ奉恐入候得共、親子之場合不レ得止事奉歎願候、前件之次第何卒御垂憐被成下、爲看病暫時御暇被下置候様仕度、此段奉懇願候、宜御執成奉願候、以上。

六月十九日

井上宮内少輔

辨事 御中

○本日批紙

此節御人少之折柄、凡テ御暇難被仰付候得共、再願之趣無餘義被爲聞食届候、仍暫時御暇可被下候間、在呂日數之儀可申出事。

(井上正順家記)
(官中日記)

○按ズルニ、後命ハ見ル所ナシ、蓋例ヲ照シテ、經日ノ後之ヲ赦セシナリ。

○同 七月二日、鎮臺府、柴山典文平、筑ヲ以テ後藩士、

柴山 文平

上總房州監察兼知事被ニ 仰付ニ候事。

七月

鎮臺府
(鎮臺日誌 柴山典履歷)

○十三日ニ至リ監察ヲ罷ム、又此時縣名ナシ、後宮谷縣ト稱ス。

宮谷縣管轄高

一五萬六千九百四拾五石	安房
一八萬七千八百八拾石	上總
一拾二萬二千二百四拾三石	下總
一拾萬四千七百拾二石	常陸
一拾七萬七千七百八拾石	河内 香取 鹿島
	行方 信太
	(柴山典筆記)

○按ズルニ、宣文上總、房州ニ作り、管地ハ下總常陸ニ跨ル、之ヲ本人ニ質スニ、當初ヨリ舊代官小川達太郎ノ所管ヲ交收セシモノニシテ、後ニ増加セシニ非ズト云。

○同 七月三日、堀田正倫、歸藩ヲ請フ、之ヲ聽ス。

相模守儀、兼テ在所表へ賊徒共派出モ難測ニ付、右鎮定等之儀ニ付歸國御暇奉願候處、在京諸侯都テ御暇不レ被下段御附札ヲ以被ニ 仰出ニ奉畏候、然ル處、先達テ御預所上總國佐貫陣屋へ賊徒來襲、其後房總邊不レ穩様相聞、別テ心痛罷在、加之在京最早百餘日ニ罷成、國民無恤、家政更張之折柄、家來共ニ任置候テモ、兼テ被ニ 仰出ニ候勵ニ武備ニ育ニ人材ニ落屏之職掌相盡候儀行届申間敷哉ト甚心配仕候、且又近來追々諸藩願之上歸國モ被ニ 仰付ニ候、就テハ相模守儀モ何卒願之通り御暇被ニ 仰付ニ候ハ、歸國之上、益奮勵效力、奉レ體認朝臣、家臣國民共精

々説諭仕、彌至誠勤 王之實效相立、差向潜匿之賊徒早々勦滅致シ、治安國內ニ候様可レ仕、此段御洞察被ニ成下、歸邑被ニ 仰付ニ候様伏テ奉ニ懇願ニ候、以上。

六月廿七日

堀田相模守家來

田村 右門

辦事御役所

○本日批紙

當節御人少之折柄ニ付、容易ニ御暇難被レ遣候得共、在所表先達テ以來不レ穩候處、追々關東平常ニ相成候上、猶殘賊再襲無レ之様、別テ領分民政等都テ取締嚴重可レ被ニ取計ニ候ニ付、願之通歸邑被ニ 仰付ニ候間、前件之儀相心得可レ申旨 御沙汰候事。(堀田正倫家記)

○八日途ニ上ル。

○同 七月六日、加納久宜、歸藩ヲ請フ、之ヲ聽ス。

私在所上總國一宮近傍、無賴之惡徒等所々出沒仕、

百姓共殆困苦之趣ニ付、爲ニ取鎮ニ乍小人數ニ巡邏爲レ仕、惡徒等捕獲候砌之處置、留守家來共ヨリ 大總督府へ相伺候處、不レ料微臣久宜へ巨魁生殺之大權御委任、精々鎮撫至當之處置可ニ取行ニ奉ニ蒙レ仰、武門之面目不レ過レ之難レ有仕合奉レ存候、就テハ御暇奉レ願、急速東下盡力可レ仕存意ニ御座候處、一時靜謐之旨ニ付、是迄默止罷在、尙四方巡邏爲レ仕置候、然處當今之形勢人氣折合不レ申哉、動モ仕候得バ、結黨、爭訟、人家ヲ毀、中ニハ鬪争ケ間敷儀相讓、既ニ人數差出取鎮、於ニ一宮表ニ吟味取調居候次第、右等領中之事ニ無ニ御座、他領關係之儀ニ付、往々心配殆當惑之趣彼地家來共ヨリ申越、千緒萬端之中、不當之處置等御座候テハ大任ヲ奉レ汚而已ナラス、詰極恐多モ萬一 朝廷ヲ奉ニ宿怨ニ候様ニモ至リ可レ申敷ト實以恐々戰慄之至奉レ存候、抑上總國ハ東隅之邊鄙ニ有レ之、事情世態ニ疎ク、井蛙偏固之場合、難レ遁風土御座候得者、議論一定之處モ如何可レ有レ之哉、方今 大政御一新之御秋、一家一邑戮力ハ勿論之儀、

況大權奉戴仕候上ハ、損敗尤一己之儀ニ無御座ト
深心配仕候、昨秋養父大和守没後、私襲封、漸半年
餘、在邑纔四五十日ニ不_レ過、家政向家來共ヘ打任上
京仕候事故、藩邑之諸事モ不行届勝ト心痛仕候處、
前顯蒙_二大任、別テ生殺至當之處置如何可_レ有_レ之哉ト
困惑恐慄仕候、右ニ付テハ乍_三不肖_一自身指揮仕、奉
戴之大任更ニ勉勵、生殺之處置不當無_レ之様微力ヲ
盡、將_レ御一新之御旨趣一家體認、一致戮力仕候様
篤ト説諭仕度奉_レ存候間、何卒御暇被_二下置_一候様偏
ニ奉_二懇願_一候、以上。

七月三日

加納 遠江守

辨事 御中

○本日批紙

當節御人少折柄、容易御暇難_レ被_二仰付_一候得共、
願向無_二餘儀_一趣、且近日關東御平定ニ付テハ、都テ
民政大切之儀ニ付、領民撫育且取締旁、願之通被
レ爲_二聞食届_一候間、歸邑之上ハ別テ民政取立、皇化
行届候様可_二取計_一旨被_二仰付_一候事。(行政官記)
(加納久宜家記)

○同 七月八日、酒井忠美、歸藩ヲ請フ、允サ
ズ。

私儀先般上京、奉_レ伺_二天機_一、御誓約被_二仰付_一、官位
結構被_二仰付_一、冥加至極重疊難_レ有仕合奉_レ存候、右
御誓約並追々被_二仰出_一之御趣意彌堅相守毛頭他念
無_二御坐_一候、京著後兼テ 御沙汰御座候日限モ相過
ギ且先達テ關東邊爲_二兇徒鎮定_一取締向嚴整仕候様、
御總督府ヨリ在所表へ屢御達有_レ之、追々手當爲_レ仕
候得共、彼表春來種々混雜之折柄不_二取敢_一上京仕候
ニ付、一ト先御暇歸邑仕、此上御趣意精々指示シ、
領分末々ニ迄迄安堵爲_レ仕、勤 王之赤心彌厚申付度
奉_レ存候、依_レ之、可_二相成_一儀御座候ハ、一ト先御暇
被_二下置_一候様仕度、此段偏奉_二願上_一候、以上。

慶應四年戊辰七月六日

酒井大和守花押

辨事 御中

○本日批紙

東北未ダ平定ニ不_レ及、且御用筋ニテ無_二餘儀_一向々
追々御暇被_二仰付_一、當節御人少ニ付、今暫御暇難

レ被_二仰付_一候事。(行政官記)

○同 七月十日、鎮臺府、桑山效_{主助}○舊ヲ以テ
知縣事ト爲シ、武藏四郡下總一郡ヲ管セシム。

桑山 主助

今般被_二召出_一、當分知縣事被_二仰付_一候事。(鎮臺
日誌)

○桑山圭相筆記ニ云、拙者儀、明治元年中、甲斐國市
川縣履勤中、同年七月江戸鎮臺府御用召ニ付出府、
其段及御届候處、同月十日、同府於テ當分知縣事被_二
仰付_一、辰ノ口會計官於テ左之通管轄高御達有_レ之候。
一高拾壹萬三千四百石餘 舊幕代官佐々井半十郎
元支配所
一高壹萬四千石餘 東叡山領上知
一高九千八百石餘 舊旗下上知
合高拾三萬七千貳百石餘 管轄高

内 譯

武藏國 [略レ之]

下總國

高壹萬四千五百六拾石餘

葛飾郡

房總戰亂記

○時ニ縣名ナシ、後小菅縣ト稱ス。

○同 七月十三日、沼津藩主水野忠敬、小島藩
主瀧脇信敏ヲ上總ニ、田中藩主本多正訥ヲ安
房ニ移封ス、尋テ三年間金穀ヲ給スル各差ア
リ。

○五月二十四日達書

水野 出羽守
本多 紀伊守
瀧脇 丹後守
今般德川龜之助駿府城主ニ被_二仰付_一、同國一圓下賜
候ニ付、追テ所替可_レ被_二仰付_一候間、兼テ用意可
レ有_レ之旨 御沙汰候事。

五月 (東征紀略、水野忠敬、瀧
脇信敏家記、長尾藩記)

○本日達書三通

水野出羽守
領分駿河國駿東郡、富士郡、益津郡、志太郡之内、
高貳萬三千七百石餘上知被_二仰付_一、爲_二代知_一上總國

市原郡之内、高貳萬三千七百石餘下賜候、尤收納免合之儀ハ取調之上追テ可相達旨被仰出候。

七月

(水野忠敬家記)

○忠敬家譜ニ云、明治元年八月廿三日郷村引渡、同晦日沼津城引渡相濟。

○按ズルニ、忠敬上總菊間ニ治シ、菊間藩ト稱ス。

○領分駿河國志太郡、益津郡、駿東郡之内、高三萬七百石餘上地被仰付、爲代知安房國平群郡、安房郡、朝夷郡、長狹郡之内、三萬百石餘下賜候、最收納免合之儀ハ追テ可相達旨被仰出候事。

右ハ鎮臺府 御沙汰ニ候事。
(本多正憲家記)

○長尾藩記略ニ云、八月廿日、田中城、徳川龜之助家來ヘ引渡相濟。

○按ズルニ、正訥安房長尾ニ治シ、長尾藩ト稱ス。

○別紙 瀧脇丹後守

一金壹萬三千兩

○別紙 八月

水野出羽守

○八月廿二日鎮將府達書三通

水野 出羽守
各通 本多 紀伊守
瀧脇 丹後守

今般其方封土所替被仰出候ニ付テハ、諸入費可レ有レ之候間、格別御仁惠之思召テ以テ、別紙之通下賜候事。

○忠敬家記ニ云、今般轉國ニ付、拜借金之義奉願候處、八月廿二日於御鎮臺府、別紙之通被仰渡候。

○別紙

本多紀伊守

一金壹萬壹千兩

○別紙

瀧脇丹後守

一金壹萬兩

○十月十日鎮將府再達書三通

水野出羽守

高壹萬三千六百八十石餘 上總國市原郡

其方領分上總國高壹萬三千五百九十石餘、今般上地被仰付、爲代地頭書之通下賜候間申達候事。

明治元戊辰年十月 (水野忠敬家記)

高貳萬九千七百九十石餘

安房國安房郡、朝夷郡、平群郡

本多紀伊守

其方領分安房、下總之國高貳萬九千八百四十石餘、

今般上地被仰付、代地トシテ頭書之通下賜候間申達候事。

明治元戊辰年十月 (本多正訥家記)

○別紙 瀧脇丹後守

高四千四百石餘

上總國 周准郡、望陀郡

其方領分上總國高四千四百石餘、今般上地被仰付、代地トシテ頭書之通下賜候間申達候事。

明治元戊辰年十月 (瀧脇信敏家記)

○十二月十二日達書三通

水野出羽守

今般領地替被仰付候處、居城モ無レ之場所ニテ、失費相掛リ可レ爲難儀候間、厚御手當モ被成下度候處、當今御用途多之折柄、戰功之者御賞與筋モ未御行届不レ被爲レ在候得共、出格之譚ヲ以現米千石金壹萬五千兩三箇年之間下賜候事。

但、先般下賜ノ分ハ御差引相成、殘於會計官被相渡候事。

十二月

行政官(東京官中日記)
水野忠敬家譜

本多紀伊守

今般領地替被ニ 仰付云々。
以下上文ニ同シ、但現米八百石、金壹萬貳千兩ニ作ル

(官中日記)
長尾藩記

瀧脇丹波守

今般領地替被ニ 仰付云々。
以下上文ニ同シ、但現米貳百石、金三千兩ニ作ル

(官中日記)
瀧脇信敏家記

○同 七月十八日、本多正訥書ヲ大總督府ニ上リ、軍糧ヲ獻シ、督府ノ衛兵ヲ留メ、身安房ニ赴キ、遁逃ヲ鎮定セント請フ、之ヲ聽シ、其糧ヲ受ケズ、以テ移封ノ用ニ充テシム。

今般私儀駿府城代役被レ免候以來、依ニ御沙汰轉國之用意中ニハ御座候得共、當今之御時會傍觀罷在候テハ恐入候次第ニ付、家中一同示合候處、奥羽御征討之儀追々御成功被レ爲レ在、不日御平均ニモ相成

可レ申哉トハ奉レ存候得共、當節之模様傳承仕候處、接戰最中之趣ニ御坐候、就テハ眇々之微力ナガラ、堂々大軍之御端ニモ御差加ヘ之儀相願、一ト廉勤王仕度心組ニハ御座候得共、兼テ夫々轉國用意申渡置候ニ付、家來一同何レモ墳墓之地ヲ離レ候事故、自然氣合モ不レ穩候折柄、假令人數差出候共、銘々家事ニ懸念罷在、兵氣モ一致不レ仕候ヨリ、萬一御總軍之御不都合ヲ相生候様ニテハ恐入候次第ニ付、事情ニ於テ遮テ奉レ願儀モ難レ仕、依レ之、不レ任ニ心底ニ候得共、乍ニ少分ニ兵食御用トシテ玄米二千五百俵獻納仕度志願御座候、將又今度房州四郡之内ニテ代地被ニ成下ニ難レ有仕合奉レ存候、就テハ同國之内山野海隅ニテ、上野、函嶺、飯能等之敗賊潛居罷在候而已ナラズ、惡謀之者暴行仕、或ハ強談ヲ以テ掠レ人民、貪ニ金穀、指當リ庶民之苦不レ少趣ニ及レ承候間、乍レ不レ及此上房國之儀ハ、一手ヲ以テ鎮撫被ニ 仰付候得、難レ有仕合奉レ存候、粉骨勉勵仕度所存一致ニ御座候、御多端之御中、却テ奉レ懸ニ御手数ニ次第ニ候得共、寸

志之微衷御汲取之上、出格之御沙汰被ニ 仰付候得、私儀人數引連鎮撫可レ仕候、且先頃以來奉レ願儀大總督官御方此許御鎮臺被レ爲レ在候ニ付、爲レ御警衛ニ少人數ニテモ差置申度奉レ存候、是又相應之御用被ニ 仰付候得、重疊難レ有仕合奉レ存候、依テ右之段不レ願ニ恐懼、赤心無レ殘處ニ奉レ願上候、以上。

七月

○本日大總督府批紙

願書之趣被ニ 聞食届候、轉領彼是迷惑ニモ可レ有レ之候ニ付、獻米之儀ハ其儘被ニ差下候事。
(本多正憲家記)

○同 七月二十日、保科正益攝津ノ別邑ニ赴カント請フ、之ヲ聽ス。

今般私儀初テ奉レ伺ニ 天機、御誓約等モ相濟、重々難レ有仕合奉レ存候、依テハ一入盡力御用向モ相勤度志願御座候處、當春來滯京、固微弱之藩力、且殊之外疲弊仕、藩屏之任難レ堪、甚心痛仕候、且出勤後未ダ間モ無レ御座ニ儀ニ付、奉レ願候モ奉レ恐入候得共、

房總戰亂記

此上疲弊仕候ハ彌以不ニ相濟儀、勿論之事ト殆難レ堪苦心、依レ之、甚自由カ間敷御座候得共、可ニ相成儀御坐候ハ、私領分之内、攝州丹州ニテ凡七分通モ御坐候處、幸近畿之儀、殊ニ攝津國豐島郡濱村之地ハ、小分ノ陣屋モ有レ之候ニ付、一ト先右之方ヘ罷越、年來之舊習因循ヲ看破シ、方今至當之取締相立、疲弊養候様仕度、何卒格別之以ニ御憐愍、暫時右領分へ 御暇被ニ下置候様、偏奉ニ懇願候、尤程近之儀ニモ御坐候間、御用之節ハ速ニ上京可レ仕心底御坐候、此段御執成可レ被レ下奉レ願候、以上。

七月十八日

保科 彈正忠

辨事 御中(保科正益家記)

○本日批紙

當節御人少之折柄ニ付、容易ニ 御暇難レ被ニ 仰付候得共、願之通被ニ 聞召届候間、御用之節ハ早々致ニ上京候心得ヲ以テ、可レ致ニ歸邑候事。
(行政官記)
保科正益

○正益ハ二十六日途ニ上ル。

○同 七月二十五日、是ヨリ先、久世廣文ノ父廣周守大和罪ヲ幕府ニ獲テ、陸奥信夫郡八千石及ビ和泉郡四千石ノ別邑ヲ削ラル、部民哀訴シ、交地ノ事ヲ果サズ、是ニ至リ、廣文ノ家臣書ヲ上リ、和泉ノ地ヲ假營シ、兵ヲ置キテ、京師ノ緩急ニ備ヘント請フ、廣文謹中ニ在ルヲ以テ、之ヲ却ク。

先年文久王成隱居故大和守勤役中、不束之儀有レ之趣ヲ以、隱岐守高之内、奥州信夫郡ニテ八千石、泉州泉郡之内ニテ四千石餘、都合物成詰ニテ一萬石上知被ニ申付、早速引渡可レ申之處、右村々數代舊領之事故、愚直之農民共多年之領主ヲ離レ候テ數ケ鋪存、數度歎願申出候得共、固ヨリ上知ニ相成候得バ、速ニ可ニ引渡ハ天下ノ常典、無餘儀ニ次第之趣旨、種々教諭差加候得共、兎角折合兼、遲々仕候中、既ニ舊幕府ヘモ右村々總代ヲ以度々及ニ歎訴候始末、當役場之不行届ニハ御座候得共、頑固ノ小民共一圖ニ舊主ヲ慕ヒ、數年ノ恩儀ヲ辨ヘ候テノ事情故、猥ニ

嚴威ヲ以制壓仕候譯ニモ難ニ相成ニ當惑仕、其上去ル子年中、常・野兩州浮浪之徒混雜之砌、多人數出張仕、鄉村書類等之取調モ果敢取不レ申候故、自然引渡及ニ遲延、今以支配仕居候儀ニ付、早速 天朝ヘ御引渡可ニ申上ハ勿論之事ニハ御座候得共、今般 御一新之廉ニテハ、何成共一際勤 王之御奉公仕度奉ニ存居候得共、何分在所表ヘハ道程百里餘之懸隔、實ニ至急之御用相勤リ兼、殆當惑罷在候處、右土地泉州之儀ハ、御畿内王城近國之事故、同處ヘ人數差登置、緩急之節御用相勤候様ニ御座候ハ、冥加至極之儀ニ奉レ存候、就テハ泉州上知之分御預ケ被ニ成下置、是迄之通支配仕、右人數扶助手當等ニ充レ之、其上舊來撫育仕候下民共之儀御座候ヘバ、萬一ノ節夫卒ニ召遣ヒ候砌、自然指揮モ行届可レ申ト奉レ存候、右之次第御汲察被ニ成下ニ被ニ御預ケ置候ハ、擧藩天恩大澤之程難レ有奉レ存、且ハ前條愚民共之心根モ一定仕、如何計カ難レ有可レ奉レ存、旁以此段何卒御許容被ニ成下候様、偏ニ奉ニ歎願候、以上。

久世隱岐守家來

七月十七日

大久保 冬藏

辦事御役所

○本日批紙

謹慎中之儀ニ付、不レ被レ及ニ御沙汰候事。(行政官記)

○同 七月廿八日、酒井忠美、再ビ書ヲ上リ、歸藩シテ、封疆警守及ビ蝦夷開拓ノ事ヲ處理セント請フ、之ヲ聽シ、開拓ハ箱館府知事ト協議セシム。

乍レ恐奉ニ願上候口上覺

私儀未ダ幼年ニ御座候處、段々厚奉レ蒙ニ 天恩、冥加至極、重疊難レ有仕合奉レ存候、先般關東邊事件ニ付、御趣意柄奉ニ拜承、御暇不レ奉レ願、在京罷在候處、先達テ爲ニ兎徒鎮定、在所表取締嚴整仕候様 御總督様ヨリ度々御沙汰御座候ニ付、猶又精々申付、出兵手當等モ、爲レ仕候ヘドモ、春來俄ニ在所表ヘ引移、一同住所モ無レ之、上下混雜罷在、内外多端之折

房總戰亂記

七五

柄、諸事其儘ニ開キ、先不ニ取敢ニ發足仕、最早百餘日モ相過ギ候ニ付、諸事甚心配仕候、何卒此上 御趣意精々指示シ、領民共安堵爲レ仕、勤 王赤心彌貫徹仕度奉レ存、一ト先御暇之儀奉ニ願上候處、東北未ダ平定ニ不レ及、且御用筋ニテ無餘儀向々ハ、追々御暇被ニ仰付、當節御人少ニ付、今暫御暇難レ被ニ下趣御附札ヲ以テ被ニ仰付候ニ付、此上 御沙汰之程偏ニ奉レ待仕候儀ニ御座候得共、只々此儘在京仕居候テモ、内外諸事勉勵仕度微衷相貫キ兼候儀ニ立至リ候様ニテハ、甚歎鋪奉ニ恐入候、取分ケ兼テ被ニ仰付候北蝦夷地開拓筋之儀ハ、既ニ年々初秋之頃ヨリ明年之手配仕度時期ニ御座候處、前條之次第ニテ、且元來人少之上、内外懸隔リ居、自然手後レニモ相成候ハ、如何可レ仕哉ト深痛心罷在候、何卒領民共安堵爲レ仕、取締向嚴重兵備相整、北蝦夷地開拓勉勵爲レ仕候手配、順次夫々申付候上ハ、早々上京仕度、只管志願ニ御座候、此段幾重ニモ 御憐察被ニ成下、格別之以ニ御仁恕一ト先御暇被ニ下置候ハ、誠以



重疊難レ有仕合奉レ存候、不束之條御寛容被ニ成下宜御取成被レ下候様、偏奉ニ願上ニ候、以上。

慶應四戊辰年七月十八日 酒井大和守印判
辨事 御 中 (行政官記)

○本日達書

酒井大和守

今般依願御暇下賜候、且蝦夷地開拓之儀ハ箱館知府事へ承り合セ、手配盡力可レ有レ之事。(官中日記 酒井忠美家記)

○同 八月三日、大總督府、肥後藩ニ命ジテ、下總・常陸ヲ鎮撫セシム。

長岡左京亮

下總・常陸國鎮撫之儀、其藩へ被ニ仰出ニ候事。

(鎮將府日誌 細川護久家記)

○護久家記ニ、八月四日、總督府ヨリ被仰付トアリ。

○長岡護美履歷書ニ云、十二月十八日、今度東北平定ニ及ビ、總常地方靜謐ニ相成候ニ付、先達テ其藩へ被ニ仰付置ニ候鎮撫ノ儀被レ免候事。

○同 八月四日、鎮將府、肥後藩ニ命ジテ、下總・武藏ノ數郡ヲ管セシム、尋テ佐々布直武(貞丞○肥)ヲ以テ知縣事ト爲ス。

○細川護久家記ニ云、八月四日、民政裁判所會計局ヨリ、留守居御呼出ニテ、武藏・下總高拾三萬六千石餘、越中守持ニ被ニ仰付ニ段、與頭吉川榮左衛門ヨリ申渡、高帳一冊被ニ相渡、如レ左。

○高帳

- 下總猿島郡 一高貳萬貳千七百三拾六石五斗三合一勺四才
- 同 埴生郡 一高六百五拾八石六斗一升貳合
- 同 香取郡 一高壹萬四千四百拾九石六斗一合一勺五才
- 同 千葉郡 一高八千五百八十二石六斗二合一勺四才
- 同 印旛郡 一高七千八百拾六石三斗二升一合一勺
- 同 相馬郡 一高四千五百八十六石九斗貳升一合一勺四才
- 同 葛飾郡 一高四萬四千六百九拾三石三斗九升六合一才
- 武藏葛飾郡 一高二萬六千六百八斗五升四合五勺七才
- 下總葛飾郡 一高六千五百石一斗七升三合六勺七才

高合拾三萬六千百石九斗九升六合四勺七才 是ハ桑山圭助支配所ヨリ可ニ受取ニ分。

右ハ此度書面之通細川中將持ニ被ニ仰付ニ候間、得ニ其意桑山圭助へ相達、當辰年ヨリ物成鄉村等受取之御仕置可レ被ニ申付ニ候、存寄ノ儀有レ之ニ於テハ、重テ可レ被ニ相伺ニ候、以上。

御用ニ付無印

前 八十郎 吉 榮左衛門印 横 源藏印

島 團右衛門 印

御用ニ付無印

北 千太郎

無出座

江 新平 長 二右衛門印

細川中將殿家來中

○八日達書

佐々布貞之丞

御雇ヲ以テ下總知縣事被ニ仰付ニ候事。

八月

(鎮將府日誌 佐々布直武事蹟)

房總戰亂記

○護久家記又云、佐々布貞之丞、八月八日、民政局御呼出ニテ、下總持場知縣事被ニ仰付、同年十二月廿日被レ免、
○按ズルニ、明年正月ニ至リ、葛飾縣ト稱ス。
○同 八月十九日、大河内正質ノ罪ヲ釋シ、其城邑ヲ復ス。

○上申書二通

大河内豊前儀、段々被ニ仰出ニ之上、格別之 思召ヲ以謹慎 御免被ニ成下、且所領如レ舊被ニ下置、歸城被ニ仰付、誠以不堪ニ感荷、難レ有仕合奉レ存候、即刻刑部大輔へ申遣候、殊ニ天地無涯之奉レ蒙ニ 御仁命ヲ候上ハ、片時モ取急豊前へ可ニ申達ニ候、右ハ追テ刑部大輔ヨリ御請可レ仕候得共、不ニ取敢ニ以ニ名代ニ前段御請奉ニ申上ニ候、以上。

大河内刑部大輔名代重臣

○ 八月廿日

北原 忠兵衛

七七

前般大河内豊前本城領知並同人家來共御預ケ被ニ仰付置候處、今般右御預ケ之廉、總テ御免被ニ成下候間、爾後同人へ副意可レ仕旨、御沙汰之趣奉レ畏、難レ有仕合奉レ存候、即刻刑部大輔へ申遣候得共、不取敢ニ以名代御請奉ニ申上候、以上。

大河内刑部大輔名代重臣

八月廿日

北原忠兵衛

大總督府 下參謀方御中 (大河内信古家記)

○二十九日達書

大河内 豊前

於大總督謹慎被ニ申付置候處、今度被レ免候事。

八月

行政官

(行政官記)
(嵯峨實愛家記)

○同 八月二十日、諸藩ノ公務人ヲ改メテ、公議人ト稱ス、又公用人ヲ置キ、從前留主居ノ事ヲ掌ラシム、尋テ公議人ノ姓名ヲ錄上セシム。

過日被ニ 仰出候公務人之儀、今般御改ニ相成、公議人ト相唱へ、其職ハ即議員ニシテ、朝命ヲ奉承シ、藩情ヲ達スルヲ旨トス、更ニ公用人ヲ相設、從前留主居役之職務ヲ掌リ候様可レ致旨、被ニ 仰出候事。但、公議人員數之儀ハ、從前貢士之通タルベク候事。

八月

行政官

(官中日記)

○議員姓名、官記等ニ散見スルモノ百二十四藩、各家ニ問ヒ得ル所百藩、人員合計二百三十五人、今其上申書ヲ省キ、姓名ヲ左ニ錄ス。(房總各藩分抄載) 公議人姓名

- 佐倉藩 依田右衛門二郎 古河藩 恩田啓吾
- 濱松藩 後鶴 神戶全 掛川藩 後柴 赤岸兵藏
- 菊間藩 五十川中 長尾藩 石神藤十郎 横須賀藩 後花 清水源次郎 久留里藩 田丸文彬
- 飯野藩 仙石左右兵衛 鶴牧藩 青木久兵衛
- 多古藩 野村重信 勝山藩 後加 友松課 長

○同 八月二十五日、本多正訥、東京ニ至ル。
(長尾藩記)

人、土浦藩ニ効順シ、餘黨各處ニ出沒ス、因リテ房・總・常・野諸藩ニ令シテ、嚴ニ之ヲ緝捕セシム、既ニシテ連賊五十許人、駿河藩ニ就キテ自首ス。

○同 八月廿九日、水野忠順ノ謹慎ヲ釋ス。

林 半七

其方儀、先般脱走之徒、總房亂行之砌、不行届之筋有レ之、蒙ニ 御不審ニ謹慎申付置候處、前途之舉動、全ク小藩微力、勢ヒ不レ得レ止之次第被ニ聞食届候、依レ之、謹慎被レ免候事。

八月

大總督府(東征總督記)
(鶴收藩記)

○謹慎ヲ命ゼシハ同四月十九日ナリ。

○同 九月朔日、連賊下總銚子浦ニ漂到ノ報至ル、是日、大總督府、軍監林友幸(半七)長ヲ遣リテ處理セシム、斥候隊及ビ佐倉・志筑二藩兵之ニ屬シ、高崎藩士嚮導タリ、適連賊五十人許

今度徳川家脱艦銚子表へ漂着之趣、右爲ニ取調ニ軍監林半七被ニ差遣候條、神速出兵指揮可ニ相請旨 御沙汰候事。九月(東征總督記)
(佐倉藩記)

○佐倉藩記略ニ云、九月二日御達御座候銚子表へ出兵、左之通。
先筒隊三十八人 大砲隊四十二人 使番二人 附屬九人
右之通五日朝出張仕、同十二日在所表へ引揚申候。

○小見川藩記ニ云、九月二日、下總國海上郡銚子へ脱艦漂着、脱賊上陸ニ付、高崎藩ヨリ援兵申越、依之、一小隊出兵仕候處、脱賊散亂之趣報知ニ付、最寄探索仕、同五日引揚申候。

○林友幸筆記ニ云、美賀保丸於銚子湊ニ及ニ破船、脱走人上陸致シ候段注進有レ之ニ付、直様出張被レ命、本堂家(筑藩志)兵隊三十人程引連出發、小金驛ニテ夜ニ入、翌日取手驛著、船用意爲レ致、利根川ヲ下リ、銚子湊へ著候處、脱走人佐原ト申方へ逃去注進有レ之、直様追掛ケ、牛久邊ヨリ府中邊へ落行、筑波山へ登リ、此處ニテ兼テ御沙汰相成居佐倉兵隊來ル、一同引連所々手配致シ、北條邊ヨリ流山、松戸ヨリ舟ニ乗、行徳迄追懸ケ、東京方へ落行脱走人散亂ニテ、拾餘人程永代橋際阿州出張之兵隊へ被レ捕候ニ付、其夜直様歸京御届仕候事、一於銚子湊ニ破船、道具、武器其外取上ケ之品ハ、軍務官へ爲レ相納、木材其他ハ銚子地下役人へ相渡置申候、但美賀保號ハ沈没ニハ相違無レ之、尤船底而已ニテ、残り船材ハ帆柱、其

外トモ破損物ニテ、コワレ物漂着之品ニ有レ之候。
○同 九月十日、大總督府、水野勝知ヲ鶴牧藩ニ保管シ、津藩ノ保管ヲ罷ム。

鶴 牧 藩

水野日向御不審之筋有レ之、是迄伊州藩へ被ニ預置候處、今度其藩へ預替相成候旨 御沙汰候事。

九月(東征總督記)
(鶴牧藩記)

○鶴牧藩記ニ云、九月十一日、水野日向御預被ニ仰付候ニ付、爲ニ警衛一人數一小隊、東京府へ相詰罷在候。

○附十一月十四日大總督府へ申請書

水野日向儀御不審之筋有レ之、私家來へ御預被ニ仰付、於レ私モ奉ニ恐入候、同人儀元來勤 王之素志ニ御座候處、一時家政之不行届ヨリ、遂ニ一家騷擾ヲ醸シ、王政御一新御鴻業之御時節、奉レ惱ニ 歎慮候段、深恐懼改心、先非後悔、只管一室ニ恭順謹愼罷在、朝暮前日之過誤而已ヲ憂慮仕、唯々寛大之御

處置ヲ祈願仕居候處、當節疝瘵之症相發候ニ付、手醫師共診察、專服藥療養爲レ仕候處、全日夜憂苦痛心ヨリ相發候容體ニ有レ之、一體日向是迄之進退情實、私儀深不ニ相辨、彼是願ケ間敷儀奉ニ恐入候得共、且夕悲歎ニ暮罷在候事情、何共不堪ニ傍觀、從レ私此段奉ニ歎願候、既ニ今般御東巡被レ爲レ遊、普ク御寬典ヲ被レ爲レ敷候難レ有御聖代之御儀ニ付、何卒御制外之御仁慈ヲ以、御不審之筋御水解散ニ成下、幾重ニモ御宥免之御沙汰被レ爲レ垂被ニ下置候様、偏ニ奉ニ歎願候、恐惶謹言。

十一月

水野 肥前守

(鶴牧藩記)

○按ズルニ、十二月ニ至リ勝知ノ封土千石ヲ削リ、退老謹愼ヲ命ジ、二年五月、首謀臣水野又兵衛、茂野喜内ヲ斬ニ處ス。

○同 九月廿一日、濱松藩主井上正直、掛川藩主太田資美、横須賀藩主西尾忠篤、相良藩主田沼意尊ヲ上總・安房ニ移封シ、三年間、金穀ヲ

給スルコト各差アリ。
四日鎮將府達書四通

井上河内守

今般、所替被ニ仰出候ニ付、領分遠江國高五萬七千六百餘上知被ニ仰付、代知之儀ハ追テ 御沙汰可有レ之候事。

辰九月

(鎮將府日誌)
(井上正直家記)

太田備中守

今般、所替被ニ仰出候ニ付、領分遠江國高四萬千七百五十三石餘上知被ニ仰付。以下、上文

辰九月

(鎮將府日誌)
(太田資美家記)

西尾隱岐守

今般、所替被ニ仰出候ニ付、領分遠江國高三萬二千六百八十六石餘上知被ニ仰付。以下、上文

辰九月

(鎮將府日誌)
(西尾忠篤家記)

田沼玄蕃頭

今般、居所替被ニ 仰出候ニ付、遠江國高一萬千二百四十三石餘上知被ニ 仰付以下、上文。

(鎮守府日誌 田沼意齊家記)

辰九月

○十六日達

各通 遠州濱松井上河内守 遠州掛川太田備中守

遠州相良田沼玄蕃頭

今般、其藩儀土地替被ニ 仰付ニ早々可引越ニ様鎮將府ヨリ相達候處、來ル廿日 御東幸御出陣ニモ相成候ニ付、右引越之儀當分差延、御道筋差支無レ之様精々御用可ニ相務ニ旨、改テ被ニ 仰出候事。

九月

行政官

○按ズルニ、本條忠篤ヲ除キシハ、其封邑東幸ノ驛路ニ係ラザルヲ以テナリ。

○本日鎮將府達書四通

井上河内守

高六萬二千百石餘

上總國 市原郡 埴生郡

長柄郡

高四萬三千五百六十石餘

西尾隱岐守

右其方領知下總國・下野國領知高、今般上知被ニ 仰付、右代地竝先般上知被ニ 仰付置候遠江國領分、爲ニ代知ニ頭書之通下賜候旨 御沙汰候事。

九月

(鎮守府日誌 井上正直家記)

○按ズルニ、正直上總鶴舞ニ治シ、鶴舞藩ト稱ス。

太田備中守

高五萬三千三百石餘 上總國 夷隅郡

其方伊豆國領知高、今般上知被ニ 仰付、右代知並先般上知被ニ 仰付置候遠江國領知爲ニ代知(以下、上文)。

九月

(鎮守府日誌 太田資美家記)

○資美家記ニ云、伊豆國原註、加茂、那賀貳郡廿九ヶ村、高七千五百三拾八石六斗餘。

○按ズルニ、資美上總柴山ニ治シ、柴山藩ト稱ス、後再ビ下總松尾ニ移治シ、以テ藩名ト爲ス。

安房國 平郡 朝夷郡 長狹郡

上總國 望陀郡 周准郡

右ハ先般上知被ニ 仰付置候代知トシテ、(以下、上文)

九月

(鎮守府日誌 西尾忠篤家記)

○按ズルニ、忠篤安房花房ニ治シ、花房藩ト稱ス。

田沼玄蕃頭

高一萬千二百七十石餘 上總國 天羽郡 周准郡

右ハ先般上知被ニ 仰付置候代知トシテ、(以下、上文)

九月

(鎮守府日誌 田沼意齊家記)

○按ズルニ、意尊上總小久保ニ治シ、小久保藩ト稱ス。

太田備中守

○十一月十日再達書 高五萬三千四百石餘 上總國 武射郡 山邊郡

其方儀、先般上知被ニ 仰付、爲ニ代知ニ上總國夷隅郡

高五萬三千三百石餘被ニ下置候處、右ハ今般上知被ニ

仰付、爲ニ代地ニ前書之通改テ下賜候事。

十一月

行政官(東京城日誌)

○十二月十四日達書四通

井上河内守

今般領知替被ニ 仰付候處、居城モ無レ之場所ニテ、

失費相掛リ可レ爲ニ難儀ニ候間、厚御手當モ被ニ成下ニ度

候處、當今御用途多之折柄、戰功之者御賞譽筋モ未

ダ御行届不レ被レ爲レ在候得共、出格之譯ヲ以、現米千

二百石、金一萬八千兩宛、三ヶ年之間下賜候事。

十二月

行政官(東京城日誌 井上正直家記)

太田備中守

今般領知替被ニ 仰付候處、以下、上文ニ同シ、但シ

ルニ作現米千石、金壹萬五千兩

十二月

行政官(東京城日誌)

今般領知替被ニ 仰付候處、以下、上文ニ同シ、但シ

ルニ作現米七百石、金九千五百

兩ニ作

十二月

行政官(東京城日誌)
(西尾忠篤家記)

○ 田沼玄蕃頭
今般領地替被^ル 仰付^ル候處、以下、上文ニ同シ、但シ現米二百石、金三千兩ニ

十二月

行政官(東京城日誌)
(田沼意齊家記)

○ 太田資美申請書一通
別紙之通轉領代知之儀、當御時節御多端之折柄、千萬奉^ル恐入^ル候得共、無^レ餘儀事情御座候^ニ付、即今御沙汰被^レ成下^ル候様仕度段奉^レ願、加^レ之代知國柄等彼是勝手ケ間敷申上候儀、猶更不堪^レ恐懼^ニ仕合御座候得共、是迄遠江・駿河兩國之外、伊豆國加茂・那賀兩郡之内、高七千五百三拾八石六斗餘之領知舊來有^レ之候^ニ付、先般駿州志太郡領地上知被^レ 仰付^ル候^ニ付、替地之儀遠江・伊豆兩國之内ニテ被^レ下置^ル候様仕度旨、其御奉^レ願置^ル候儀モ御座候處、今度上知被^レ仰付^ル、遠江國掛川城附高四萬千七百五十三石餘之代知、並駿州志太郡之内高四千六十二石七斗餘、合

テ高四萬五千九百七石一斗餘共、於^ニ伊豆國^ニ被^レ下置^ル候様仕度、右ハ舊來之領地、且田方郡之内ニハ先祖以來之墳墓モ御座候間、兼々上下之情實モ五融イタシ居、領内治リ方モ自然速ニ行届候得バ、何時何等之御用向被^レ 仰付^ル候共、上一和仕、同心戮力之御奉公出來可^レ申^ル奉^レ存候^ニ付、勝手儘願立^ニハ候得共、願之通被^レ 仰出^ル、同國鎮撫方ハ勿論三面海岸之國柄^ニ付、如何様時變出來仕候共、御國辱^ニ相成^ル様勉勵可^レ仕候間、何卒願之通被^レ 仰付^ル候様偏^ニ奉^レ願候、以上。

九月十三日

太田 備中守

○別紙

私在所遠州佐野郡掛川城地、今度 御用^ニ付轉國被^レ 仰付^ル、代知之儀ハ追テ可^レ被^レ下^ル之旨被^レ 仰出^ル難^レ有仕合奉^レ存候、即今代知之儀奉^レ願候ハ千萬恐懼戰慄之至御座候得共、當三月以來甲府へ出兵、其後武州八王子へ轉陣被^レ 仰付^ル、只今以八王子出兵罷在候、同所之儀ハ四通八達之場所ニテ、突然賊襲擊之節

ハ、死力奮戰ヲ爲^レ遂候者之儀^ニ付、何^レモ心身精一ニ無^レ之テハ、緩急之用途難^ニ相立^ト、日夜心配罷在候折柄、舊來之墳墓ヲ離^レ候儀^ニ付、向後如何可^レ相成^ル候哉ト、一藩愁情罷在候間、何卒代知之儀被^レ 仰出^ル人心一致仕、何等之御用向被^レ 仰付^ル候共、一藩之戮力ヲ以爲^ニ相勤^ニ度奉^レ存候^ニ付、何共御多端之御時節柄奉^レ恐入^ル候得共、當節代知之 御沙汰被^レ成下^ル候様偏^ニ奉^レ願上^ル候、右ハ一己之勝手ヲ以奉^レ願候儀ニハ毛頭無^レ御座^ニ奉^レ對^ニ 朝廷^ニ何等之御用向^レモ差支無^レ之様相勤候様仕度志願^ニ付、此段不^レ憚^ニ御時節^ニ奉^レ懇願^ニ候、以上。

九月十三日

太田 備中守

(太田資美家記)

○ 資美家記ニ云、九月十三日、鎮將府辦事御役所へ右之兩通進達。

○ 本條及ビ下一條、並ニ批紙ヲ佚ス。

○ 當今御一新ニ付テハ、相應之御用被^レ 仰付^ル罷在難

房總戰亂記

レ有感戴仕候、然處、今般轉國被^レ 仰付^ル候處、猶改テ 御東幸被^レ爲^レ成、御出輩^ニモ候付、當分差延候様被^レ 仰出^ル難^レ有奉^ニ敬承^ニ候得共、是迄舊幕府之奔命ニ疲^レ殆進退極^リ居候故、誠實方向^ニモ相立不^レ申、唯々悲歎仕候儀ニ御坐候、何卒出格蒙^ニ御垂憐^ニ、暫時轉國被^レ成^ニ下 御猶豫^ニ候様只管奉^ニ歎願^ニ候、尤是迄之弊風、方今專變革罷在候折柄、半途ニテ動搖仕候テハ實功^ニ相立不^レ申、恐縮頓首之至^ニ御座候、何卒國政歸^ニ順典規^ニ仕候迄、今暫被^レ成^ニ下 御猶豫、實功相立候上ハ如何様^ニモ被^レ仰付^ル被^レ下置^ル候様奉^レ懇願^ニ候、此段偏^ニ奉^レ仰^ニ御憐察^ニ候、恐惶頓首謹言。

九月廿八日

太田 備中守

辨事 御中(行政官記)

○ 西尾忠篤申請書三通

今般隱岐守遠州領分所替被^レ 仰出^ル奉^レ畏候、然處、右代知未被^レ 仰出^ル無^レ之候得バ、當年收納米之儀ハ

隱岐守へ取納候テ宜儀ト相心得申候、當夏以來水損之箇所有レ之、此節村々ヨリ檢見申出候ニ付、此段爲レ念奉レ伺候様、從ニ在所表ニ申越候、以上。

西尾隱岐守家來

九月十五日

加納 岩馬

○十八日鎮將府批紙

書面遠江國收納米之儀、當辰年分ハ德川龜之助へ引渡、代知の方ニテ收納可レ致、尤檢見村々ハ是迄之任來テ以取計、追テ引渡之節其段可ニ申送ニ候、且別紙殘高七千八百三十四石餘之儀ハ取調之上、尙可ニ相達ニ候事。

○別紙

覺

高四萬四千二百七拾壹石四斗六升四合四勺

内 三千七百五拾石八斗五升九合三勺 駿州志上 太郡

知分

殘高四萬五百二拾石六斗五合壹勺

内 三萬二千八拾六石餘遠州上知分

殘高七千八百三拾四石六斗五合壹勺

以上

○ 今般、隱岐守所替被ニ 仰付、安房國・上總國內へ代知下賜候段被ニ 仰出ニ難レ有仕合奉レ存候、然處、元來勝手向不如意、其上累年領知違作打續、殊ニ舊政府以來引續數々御用相勤、莫大之入費、從來窮迫之勝手向費弊彌増、取續方如何可レ仕哉ト當惑苦心罷在候處、當夏以來大雨打續、洪水ニテ領内荒地流失破損所夥敷、修補等モ多分之失費御坐候得バ、此上御用筋勤續之見込モ無レ之、甚苦慮心痛仕居候折柄、今般之所替被ニ 仰出、右領知へ城郭並家中小家等取建、總體引移リ迄之入費莫大之儀、更ニ聊之手段勘辨モ無ニ御座、誠ニ以テ當惑ニ陥候而已、殆困却之仕合御坐候、當節御用途御多端之折柄奉ニ恐入ニ候得共、何卒前件之事情被レ成ニ下 御憐察、可ニ相成ニ儀ニ御坐候ハ、五萬兩拜借被ニ仰付ニ被ニ下置ニ候之様、出格之以ニ 御仁惠 御聞濟被ニ成下ニ候様、幾重ニモ奉ニ

歎願ニ旨隱岐守在所表ヨリ申越候間、只管奉ニ懇願ニ候、以上。

西尾隱岐守家來

九月廿九日

加納 岩馬

○忠篤家記ニ云、九月廿九日、會計局へ右之願書差出ス。

○本條批紙ナシ。

今般、隱岐守領分遠江國・駿河國兩國之内四萬三千五百九十石餘上知被ニ 仰付、爲ニ代知ニ安房國・上總國五郡之内ニテ高四萬三千五百六十石餘下賜候ニ付テハ、城地並家來共住居地之儀モ、此度下賜候村々之内へ取建候儀ニ御座候哉、又ハ城地等ハ別段被ニ下置ニ候哉、此段奉レ伺ニ御内慮ニ候、以上。

西尾隱岐守家來

九月廿九日

加納 岩馬

(西尾忠篤家記)

○忠篤家記ニ云、會計局へ、右之通 御内慮伺差出

房總戰亂記

ス。
十月二日、會計局へ留守居御呼出ニテ御達、左之通。
一昨日差出被レ置候城地並家中屋敷地之儀ニ付、横須賀表城地並土屋敷坪數巨細ニ相認、繪圖面ニ仕立差出可レ申候。
又云、十月十七日會計局へ留守居御呼出ニテ、左之通御達有レ之、鄉村帳壹冊御渡。

申達

今般、領分遠江國之内所替並居所替、村替被ニ 仰出ニ候、爲ニ代知ニ高附目錄之通下賜候間、江川太郎左衛門、芝山文平へ相達、鄉村等請取可レ被レ申候、且收納免合之儀ハ取調之上、追テ可ニ相達ニ候。

口達

今般所替代知被レ下、村々之儀急速取調之儀ニ付、萬一村々等之儀ニ付、不都合等之儀モ候ハ、何事ニ不レ寄當役所へ可レ被ニ相届ニ候事。

一鄉村高帳左之通 高四萬三千六百八十七石一斗八升九合五勺七才

安房國 長狹郡
上總國 望陀郡 周准郡 天羽郡 夷隅郡 長柄郡

○是ヨリ先、關宿藩士ノ賊ニ黨シ逃走セシ者、本藩ニ就キテ自首ス、是日、大總督府、本藩ニ令シテ、罪一等ヲ減ジ、其家ニ謹慎セシム。

覺

元家來 脫走之者

竹中岩三郎 清水耕藏 伊藤平次郎 山岸兵三
津久井要之助 藤井新藏 吉澤三五郎 堀尾柵
太郎 船越且助 田野井慎之助 坂田喜之七
大賀熊藏 香取鑑三 高橋將三 小島靜三郎
井上銚次郎 木村介之助 水島喜太郎 徳田源
右衛門

右之者共脱走仕候ニ付、去ル五月中御届申上候處、當節在所表へ銘々歎願書ヲ以テ自訴仕候付、取上入牢申付置候段、在所役人共ヨリ申越候間、如何可

仕哉、此段奉レ候候、以上。

關宿藩

八月晦日

植竹 衛市(關宿藩記)

○關宿藩記ニ云、右之通奉レ候處、入牢申付置候様 御沙汰御座候事。

○鎮將府へ上申書

覺

元家來 脫走之者、

堀政次郎 神坂健輔 森竹次郎 平野正之助
筑井幸三郎 内山三五郎 永尾菊次郎 早川信太郎

右之者脱走仕候ニ付、去ル五月中御届申上置候處、當節在所表へ銘々歎願書ヲ以テ自訴仕候付、取上入牢申付置候段、在所表役人共ヨリ申越候間、大總督府へ伺濟ニ付、此段御届申上候、以上。

關宿藩

九月

植竹 衛市(三條家叢書)

○本條、上申ノ日ヲ俟ス。

○大總督府達書

關宿藩

其藩脱走之家來共追々自訴候ニ付、入牢申付置候趣、然ル處、今般悔悟自訴之輩ハ罪科一等ヲ被レ減候條、右之者共於ニ居宅ニ謹慎可レ爲レ致旨 御沙汰候事。

九月廿一日

(東征總督記 久世廣業家記)

覺

脱走之家來共追々自訴仕候付、入牢申付置候處、罪科一等被レ減候條、於ニ居宅ニ謹慎可レ罷在ニ旨 御沙汰之趣奉レ畏候、然ル處、右之内ニモ重罪之者共モ御坐候付、手切ニテ申渡不レ苦儀ニ御座候哉、此段無ニ急度ニ奉レ候候、以上。

關宿藩

九月

狩野 稻藏(關宿藩記)

○關宿藩記ニ云、大總督府へ右之伺書差出候處、堀江貞一郎殿ヲ以、伺之通御差圖相添。

○同 十月二日、保科正益時ニ攝津ノ別邑ニアリ書ヲ上リ、東京入觀ヲ請フ、之ヲ聽ス。

領分攝州濱村爲ニ巡見ニ罷越度奉レ願、暫時之間御暇被ニ仰出ニ難レ有仕合奉レ存候、然處、今般 皇上東京へ 行幸被レ爲レ遊候ニ付、駿河以東十三州管内ノ諸侯伯、各參觀可レ致旨被ニ仰出ニ候、御發聲御定日被ニ仰出ニ候得バ、速ニ出府可レ致様兼テ用意可レ有レ之旨、東京へ御觸達御座候趣、同所詰家來之者ヨリ申越候、就テハ彈正忠在所之儀ハ上總國飯野ニ御座候間、此儘攝州領分ニ罷在候モ奉ニ恐入ニ候ニ付、東京へ罷下參觀仕度可レ奉レ願旨申付越候、此段宜御執成被ニ下置ニ候様奉レ願候、以上。

保科彈正忠家來

十月二日

西池 虎之助

辦事御役所(保科正益家記)

○同 十月三日、林忠崇、仙臺老臣ニ就キテ、平瀨口總督ノ軍門ニ降ル、督府乃チ忠崇ニ謹

慎ヲ命ジ、仙臺老臣ヲシテ監守セシム。

當四月、徳川家存亡之際、一時頹陋之心衷ヨリ過激之舉動ニ及、甲州黒駒迄罷越候處、田安中納言ヨリ種々説諭之趣モ有レ之、一ト先江戸表へ引戻候節、不レ圖於箱根ニ戰爭ト相成、同所敗走後、房州館山港迄引去候途中、仙臺藩之者ニ出會候處、懇情之次第モ有レ之候ニ付、當國小名濱へ著船仕、其後仙臺家へ依託罷在候處、熟慮慮仕候ニ、素ヨリ恐多モ奉レ對ニ天朝ニ毛頭異心無ニ御座ニ候得共、徳川家へ忠節相盡申度一時之志願ヨリ、是迄之舉動ニ及候儀ニ御座候處、既徳川家モ相續被ニ仰付候上ハ、此上何ヲ希望仕候ト申儀無ニ御座、偏ニ悔悟謝罪恐惶之他事無ニ御座候間、何卒覆載之御仁慈ヲ以、寛大之御處置被ニ成下候様泣血奉ニ歎願候、誠惶誠恐頓首謹言。

十月

忠 崇花押

(平湯口總督日誌) 林忠弘家記

○督府達書一通

林昌之助

降伏歎願書御落手相成候條、追テ御達モ可レ有レ之、城下最寄寺院ニ謹慎可ニ罷在候事。

十月 (平湯口總督日誌) 林忠弘家記

仙臺 重役共へ

林昌之助義、其方共へ御預ケニ相成候事。

但シ降伏歎願書御落手ニ相成リ、仙臺城下最寄ニ謹慎罷在候様申付候條、此段可ニ相心得事。

十月 (平湯口總督日誌)

○林忠崇手記ニ云、九月十九日、仙府國分町眞壁屋ヲ出發シテ鹽竈ニ移陣ス。

同廿一日、徳川氏ノ脱臣悉ク蝦地ニ航海シテ再舉テ謀ルニ一決ス、素ヨリ同盟ノコナレバ、一トタビ鹽竈ニ赴クトイヘ、元來徳川氏ノ永ク亡滅ニイタラシトテ傷ミ事ヲ舉シニ、朝廷寛大ノ御處置ヲ以テ其祀ヲ存セラレ、今又奥羽ノ同盟悉ク降伏シ、輪王寺ノ宮モ亦謝罪シタマフニ、猶モ官軍ニ抗シテ罪ヲ重ヌルハ本意ナラネバ降伏シ、甘ンジテ 天刑ニ就カ

ント決心セリ、右ニ付家來一統謹慎スベキ旨ヲ令ス、依テ大野友彌初四人再ビ仙府ニ立戻シ、降伏ノ議ヲ周旋セシム。

同廿二日、鹽竈ヲ避テ岩切村迄引揚タリ。

同廿四日、仙藩熊谷齋ヨリ申越タルニヨリ、八ッ塚

林香院ニ引取謹慎ス。

同廿五日、總人數姓名ヲ記シテ仙藩監察熊谷齋方迄

差出ス。

同廿七日、降伏謝罪ノ實效トシテ兵器不レ殘、仙城へ

持參、仙ノ監察塚元磨、松坂右膳へ相渡シ、仙藩ヨ

リ總督府へ差出ス。

十月三日、降伏謝罪ノ歎願書、案ヲ以問合セシニ、

追々修飾シ文詞初テ一定ス、大野友彌麻上下着用、

仙ノ監察伊藤十郎兵衛案内、參謀衆宿陣片倉邸ニ到

リ、於ニ應接所ニ仙ノ重臣大町因幡差副ニテ歎願書進

達ス、御使番永見和十郎、磯部鹿之進之ヲ受取、直

ニ參謀衆へ持參セラレ、磯部氏再出座、參謀方慥ニ

落手、追テ總督御入城之上差出スベク、其上御沙汰

有レ之ベシ、猶是迄之通謹慎スベシ、且謝罪ノ實效トシテ兵器可ニ差出ニ旨ヲ命ゼラレ、大町氏、兵器ハ既ニ仙臺藩ニ預リ有レ之旨ヲ答フ、サラバ仙臺ヨリ差出スベキ旨ヲ命ズ。

四日、仙ノ監察伊藤十郎兵衛ヨリ文通、左ノ書面差越ス、參謀衆ヨリ 仙ノ重臣迄相渡サ、ル由。

林昌之助

歎願書御落手相成候ニ付、爲ニ御禮ニ明五日十字、無ニ相違ニ參謀宿陣へ可ニ罷出ニ旨可レ被ニ相達ニ候事。

同五日、辰ノ刻出院、參謀衆宿陣片倉邸ニ至リ、大

町氏、伊藤氏諸事取扱ヒ、應接所ニ於テ參謀寺嶋秀

之助出座、御使番鈴木董太郎侍座、左之書附ニ指ス

相渡サル。

○

今日林昌之助降伏之歎願書、仙藩重臣迄差出候趣、

如何可ニ取計候哉伺出候ニ付、謝罪之義候ハ、早々

此方へ可ニ申出ニ旨申付候、已上。

九月二十七日

寺嶋 秀之助

河田左久馬様(平潟口總督日誌)

兵器覺

- 一鐵砲 七挺 内短筒 五挺
- 一胴亂 八ツ 内短筒付 五ツ 彈藥入 壹ツ
- 一彈藥 貳袋

右之通御座候、以上。

十月 林 昌之助(平潟口總督日誌 四條隆調諸道記概畧)

林昌之助家來拾九人 内士分拾人

- 大野友彌 伊能矢柄 木村嘉七郎 長谷川源右衛門 中村三十郎 北爪善橘 岩瀬詮之助 小幡直次郎 加藤雄之助 安藤信三郎

右之通御座候、以上。 十月 林 昌之助(平潟口總督日誌)

旅宿 八ッ塚 林 香 院

右之通御座候、以上。 上申ノ日 ナ快ス

林 昌之助(平潟口總督日誌)

○批紙

東京ヨリ御達之如ク可ニ相心得事。(行政官記 保科正益家記)

○二十三日、東京ニ至ル。

○同 十月五日、太田資美朝旨ヲ遵奉シ、養老ノ典ヲ管内ニ行ヒ、且東幸供設ノ周到ナルヲ褒ス。

○本日達書

太田備中守

其方儀 朝廷之御趣意ヲ奉體シ、領分中養老之典ヲ舉ゲ、尙又今般 御通輩ニ付、至尊之萬歳ヲ奉祝候タメ、領民へ祝酒遣シ候段達ニ 天聽、右ハ平生示方宜敷、且其方留守中、家來共萬端指揮行届候儀奇特ニ被ニ思食ニ候、此旨申達候事。

十月 辨 事(東巡日誌五日 太田資美家記)

○久松勝行、東京ニ至ル。(久松勝行家記)

○同 十月六日、黒田直養、東京ニ至ル。(黒田直養家記)

○同 十月七日、森川俊方、東京ニ至ル。(森川俊方家記)

○同 十月十日、松平直克、黒田直養、大岡忠貫、保科正益、阿部正恒、水野忠順、遠藤胤城、酒井忠美、稻葉正善、井上正順ノ安房、上總、下總、上野ノ別邑ヲ收メ、他邑ヲ以テ之ニ易フ。

○鎮將府達書十通

高四萬四千五百三拾石餘 松平大和守 上野國 勢多郡 碓氷郡 群馬郡

其方領分安房、上總國高四萬四千六百八拾石餘、今般上知被ニ 仰付、代知トシテ頭書之通下賜候間申達候事。

明治元戊辰年十月

房總戰亂記

御印

(別本官中日記十日 松平直方家記)

高壹萬六千六百七拾石餘 黒田筑後守

上總國 望陀郡

其方領分上總國高壹萬六千五百九拾石餘、今般上知被ニ 仰付、以下、上 文ニ同シ

明治元戊辰年十月

御印

(別本官中日記十日 黒田直養家記)

高六千三百七拾石餘 大岡主膳正

武藏國 埼玉郡

其方領分安房、上總國高六千三百八拾石餘、今般上知被ニ 仰付、以下、上 文ニ同シ

明治元戊辰年十月

御印

(別本官中日記十日 大岡忠貫家記)

高貳千八百八拾石餘 保科彈正忠

上總國 周准郡

其方領分上總國高貳千四百拾石餘、今般 上知被_二
仰付、_{以下、上}
文_ニ同_シ

○ 明治元戊辰年十月
御印 (別本官中日記十日
保科正益家記)

高三千五百四拾石餘 阿部駿河守

上總國 天羽郡

其方領分上總國高三千五百八拾石餘、今般上知被_二
仰付、_{以下、上}
文_ニ同_シ

○ 明治元戊辰年十月
御印 (別本官中日記十日
阿部正恒家記)

高六千六百九拾石餘 水野肥前守

上總國 望陀郡

其方領分上總國高六千六百六拾石餘 今般上知被_二
仰付、_{以下、上}
文_ニ同_シ

○ 明治元戊辰年十月
御印 (別本官中日記十日
水野忠順家記)

○ 高五千二百四拾石餘 遠藤但馬守

上總國 望陀郡

其方領分安房國高五千百貳拾石餘、今般上知被_二
仰付、_{以下、上}
文_ニ同_シ

○ 明治元戊辰年十月
御印 (遠藤胤城
家記十日)

高五千九百八拾石餘 酒井大和守

安房國 平群郡

其方領分安房、上野國高五千九百七拾石餘、上知
被_二 仰付、_{以下、上}
文_ニ同_シ

○ 明治元戊辰年十月
御印 (別本官中日記十日
酒井忠美家記)

高九千七拾石餘 稻葉備後守

安房國 安房郡

其方領分安房、上總、下總國高九千六拾石餘、今般

上知被_二 仰付、_{以下、上}
文_ニ同_シ
○ 明治元戊辰年十月
御印

(別本官中日記十日
稻葉正善家記)

高貳千貳百貳拾石餘 井上宮内少輔

下總國 香取郡

其方領分上總國高貳千四百拾石餘、今般上知被_二
仰付、_{以下、上}
文_ニ同_シ

○ 明治元戊辰年十月
御印 (別本官中日記十日
井上正順家記)

○ 同 十月十一日、太田資美家臣ノ東京ニ在
ル者、書ヲ鎮將府ニ上リ、資美京師ニ在ルヲ以
テ、入觀ノ進止ヲ取ル、批シテ東京ニ入觀セシ
ム。

今般備中守儀、轉封被_二 仰付、代知於_二上總國夷隅
郡ニ下賜、同國之儀ハ 鎮將府御支配之御場所、殊ニ
東京ヘ 行幸被_レ爲_レ在、兼テ被_二 仰出_一モ御坐候間、

備中守窺_二 天機、且 鎮將府ヘ轉封爲_二御禮、東京
出府可_レ任哉、當時備中守在京中、於_二彼地ニ進退相伺
候儀トハ、奉_レ存候得共、遠隔之儀ニテ事情相分兼候
ニ付、於_二御當所ニ御差圖相伺、彼地ヘ申遣度奉_レ存候
間、此段御内慮奉_レ伺候、以上。

太田備中守家來

十月十一日 三浦彦左衛門

○ 批紙
出府可_レ致候事。
○ 批紙ノ日ヲ佚ス。
(太田資美家記
柴山藩記)

○ 同 十月十四日、平瀨口總督府、命ヲ傳ヘ
テ、林忠崇主從ノ死一等ヲ減シ、東京ニ押送
ス、尋テ至ル、忠崇ヲ唐津藩ニ幽ス。

○ 本日達書

林 昌之助

右、降伏謝罪被_二 聞召届、死一等被_レ免、東京ヘ護
送候條 御達有_レ之候事。

十月

林昌之助家來

大野友彌 伊能矢柄 木村嘉七郎 長谷川
源右衛門 中村三十郎 北爪善橋 岩瀬詮
之助 小幡武次郎 加藤雄之助 安藤信三
郎 小倉鏐三太 中野秀太郎 橋本松藏
加納佐太郎 水田萬吉 篠原愛之助 篠原
竹次郎 小林清太郎 滑川彦七

右、降伏謝罪被_レ聞召屈、死一等被_レ免、東京へ護送
候條 御達有_レ之候事。

十月

○十二日達書

伊州藩

右、此度林昌之助、東京へ被_レ差出候付、道中護衛
候條 御達有_レ之候事。

十月

○仙臺家臣上申書

林昌之助主從等、伊州藩へ引渡相濟候ハ、其段御

届可_レ仕旨、御達之趣承知仕、今日右昌之助等別紙
名元調之通、所持之大小召上、器械方へ相納候上、
伊州藩藤堂監物へ引渡候間、此段御届申上候、以上。

十月十五日

○別紙ハ之ヲ佚ス。

○林忠崇私記ニ云、十月十四日亥ノ刻比、仙ノ監察
田村彝松來ル、左ノ書付_{死一等被_レ免ノ}ヲ相達シ、即
片倉邸へ同行スベキヲ云、其儀何ノ故ナルヲシラズ、
即時正服シテ片倉邸ニ到ル、夜深クシテ事辨ズベキ
ナラネバ、暫ク寢ニツクベキ由、田村氏云へリ、即
チ之ニ從フ。

同十五日辰刻比、伊州藩青木準平ナルモノ、片倉邸
ニ來ル、田村氏面接スルニ、我輩ノ護送ハ伊州藩へ
命ゼラレ、今日發途ノ筈ナル旨申セシ由、田村氏申
聞ラル、即チ林香院へ申遣シ、未ノ刻比、一統旅裝
シテ片倉邸ニ來ル、仙ノ監察久世平八郎左ノ書付相
達セラル。

參 謀

參 謀

參 謀

林昌之助等、明十五日伊州藩百人程付添、駒ヶ嶺
通被_レ相越候間、一同片倉小十郎屋敷へ引揃置可
レ申、尤於_レ同所帶刀被_レ召上候筈ニ候間、心得迄
申聞候旨、軍監林半七殿ヨリ被_レ仰聞候間、別紙
差添此段相達申候。

十月十四日

右之命アルニヨリ一同帶刀ヲ久世氏ニ渡ス、此日同
ジク護送セラレシハ、輪王寺宮執當龍王院、覺王院、
其外新遊擊隊ト稱セル舊幕府脱臣ナリ、未ノ下刻、
一同旅裝相調ヒ、片倉邸出立護送セララル、予竝龍王、
覺王ノ兩院へハ朝廷ヨリ駕ヲ賜フ。

○東京城日記ニ云、林昌之助、十一月七日東京著、
唐津藩へ御預。

○小笠原長國家記ニ云、林昌之助儀、十一月六日中
務大輔へ御預被_レ仰付候付、同七日、千住驛ニテ伊
州藩護送之人數ヨリ請取申候。

○達書ハ、家記之ヲ佚ス。

○林忠崇私記ニ云、十一月七日、予早且ヨリ正服シ

房總戰亂記

テ艸加出立、千住宿中食、伊州藩ヨリ唐津藩隊長何
某へ引渡ス、家來ハ猶伊州兵護送シテ、松平圖書頭
邸ニ各藩ノ脱走人降伏シ、尾州藩ノ警衛セル所ニ誘
ヒ、尾藩隊長へ引渡サル、由。

○林忠弘手記ニ云、忠崇、十一月七日東京著之節、
於_レ千住唐津藩重役御呼出、忠崇儀、其藩へ御預被_レ
仰付候旨御達御座候而已ニテ、忠崇へハ別段何等之
達モ無_レ御座候。

○同 十月十九日、久松勝行、疾病ヲ以テ歸藩
療養センコトヲ請フ、之ヲ聽ス。

○同 十月二十三日、大河内正質ノ官位ヲ復
ス。

大河内豊前守

今般官位、如_レ舊被_レ復候事。

十月

行政官

(東京職務進退錄二十三日)
別本官中日記

○正質ノ罪ヲ釋シ、其城邑ヲ復セシハ、八月十九

九七

日ニアリ。

○久世廣文ノ老臣、再ビ書ヲ上リテ、廣文ヲ寬免センコトヲ請ヒ、又廣文ノ弟二人ヲシテ朝覲セシメンコトヲ請フ、之ヲ却ク。

主人隱岐守儀、當五月中奉_レ蒙_二御沙汰_一候前後、御總督府へ屢敷願仕候通、幼弱、殊ニ元來病身御座候處、次第ニ疝氣相募リ、放心同様之姿ニテ、忠邪之辨モ無_レ御座_一候、全ク奸臣共壅蔽之所業トハ乍_レ申、藩主ニ罷在、大法ヲ犯シ候上ハ、如何様之嚴科ニ被_レ處候トモ、可_レ申上_二様毛頭無_レ御座_一、重々奉_レ恐入_一、隱岐守始藩中一同深ク謹慎罷在候、前件之事情、御憐察被_レ成下、寛大之以_二思召_一、出格、御仁恕之御沙汰、被_レ成下置_一候様、是迄再三敷願仕、未ダ御沙汰無_レ御座_一候内、猶又推テ奉_レ敷願_一候段、深重奉_レ恐入_一候儀ニ御座候得共、日夜苦心罷在候折柄、東國爲_二御綏撫_一不_レ遠、御出筆可_レ被_レ爲_レ在_一之旨、御布告御座候處、當今之姿ニテ、天機伺ハ勿論、相當之御奉

ニ被_レ處候共、可_レ申上_二様毛頭無_レ御座_一、重々、奉_レ恐入_一、隱岐守始藩中一同深ク謹慎罷在候、前件之事情、御憐察被_レ成下、寛大之以_二思召_一、出格、御仁恕之御沙汰被_レ成下置_一候様、是迄再三、鎮將府大總督府へ奉_レ敷願_一候處、御受取被_レ成下、難_レ有仕合奉_レ存候、然ル處、其後、御沙汰モ無_レ御座_一候内、此度東國爲_二御綏撫_一、御著輦被_レ爲_レ在、難_レ有仕合奉_レ存候、折柄、藩屏之列ニ加リ乍_レ居、隱岐守始一同謹慎中ニ付、天機伺モ不_レ被_レ仕、相當之御用向等モ不_レ被_レ、仰付_一、臣子之情ハ勿論、領民ニ至迄、日夜苦心、不_レ安_一、食_一罷在候之次第、御賢察被_レ成下、何卒出格寛大之以_二思召_一、隱岐守弟順吉、謹喜知兩人之内へ成、天機伺被_レ、仰付_一、安_二社稷_一候様、天裁奉_レ仰候、此段藩中一同舉テ奉_レ伏願_一候、誠恐誠惶頓首謹言。

關宿藩東京詰

辰十月廿三日

龜井清左衛門印

○二十九日批紙

願之趣、難_レ被_レ及_二御沙汰_一候事。(久世廣業家記)

房總戰亂記

公モ被_レ、仰付_一間敷儀ト、藩中一同別テ愁歎無_レ涯、涕泣仕候苦情、何卒御憐察之上、右等之邊ヲ以、御寛大之御所置御座候様、御執成被_レ成下_一度、藩中舉テ奉_レ伏願_一候、誠恐誠惶頓首謹言。

關宿藩

辰九月十九日

龜井清左衛門印

木下 源助印

山路 慎十郎印

淺井 多内印

田邊 與三郎印

蒔田 彦之進印

(久世廣業家記
三條家叢書)

○前請書ハ六月四日ニアリ。

主人隱岐守儀、當五月中奉_レ蒙_二御沙汰_一候前後、屢奉_レ敷願_一候通、幼年、殊ニ元來病身御座候付、忠邪之辨モ無_レ御座_一候、全ク奸臣共壅蔽之所業トハ乍_レ申、藩主ニ罷在、大法ヲ犯シ候上ハ、如何様之嚴科

○保科正益、東京ニ至ル。(飯野藩記)

復古記 附錄

奥羽越諸藩罰典 抄録

明治元年十二月七日、詔シテ奥羽越諸藩主ノ罪ヲ斷ジ、——林忠崇ノ死一等ヲ減ジ永預ニ處シ、——久世廣文ノ封土五千石、水野勝知ノ封土千石ヲ削リ、——廣文ノ弟廣業_{順吉}勝知ノ養子勝寛ヲシテ其家ヲ繼ガシム、又諸藩首謀臣ノ罪ヲ斷ジ、——關宿老臣小島某_{彌兵衛}結城老臣水野某_{又兵衛}茂野某_{喜内}ヲ斬ニ處シ、其既ニ死スル者ハ斬ニ擬シテ其後ヲ絶ツ。_{結城水野 甚四郎}

林 忠 崇

當春、王師東下以來、徳川慶喜退去謹慎候處、其方尙暴論ヲ主張シ、脱走無賴之徒ヲ煽動シ、其詐謀ヲ逞シ、竟ニ函嶺暴舉、王師ニ抗衡、後海路仙臺ニ遁レ、

賊徒ヲ召集シ再舉ヲ謀リ候ヘドモ、奥羽諸賊追々敗
屢ニ及ビ、終ニ伏罪候條、天下之大典ニ於テ其罪難
レ被ニ差置、屹度可レ被レ處ニ嚴刑ニ候處、出格至仁之
思召ヲ以、小笠原中務大輔ヘ永預被ニ 仰付ニ候事。

(東京城日誌七日)
久世廣業家記

水野 勝知

十二月

行政官 (東京城日誌七日)

○小笠原國家記略ニ云、十二月七日、林昌之助、改
テ永御預被ニ仰付ニ候。

久世 廣文

上野山内賊徒屯集之節、私ニ自邸ヲ脱シ、其徒ニ黨
シ、終ニ 王師ニ抗衡候條、幼弱トハ乍申、大義順
逆ヲ不ニ相辨ニ次第、其罪不レ輕、屹度御咎可レ被ニ仰
付ニ候處、以ニ出格之 思召ニ領知之内五千石被ニ 召
上ニ、隱居被ニ 仰付ニ、家名相續之儀ハ血脈之者ヘ可
レ被ニ 仰付ニ候事。

○ 但、相續之者、早々可ニ願出、且叛逆首謀之家來、
取調可ニ申出ニ事。

十二月

行政官

(東京城日誌七日)
水野忠愛家記

久世 順吉

但、相續之者、早々可ニ願出、且叛逆首謀之家來、
取調可ニ申出ニ事。

十二月

行政官

職ヲ重ジ、勤 王盡忠可レ有レ之旨 御沙汰候事。

二月

行政官

十二月

行政官

(東京官中日記十四日)
久世廣業家記

口上覺

隱居廣文弟

久世 順吉

當辰拾貳歲

相續奉願候覺

攝津守末男

水野 禊之助

當巳十四歲

今般久世廣文儀、隱居被ニ 仰付ニ、出格寛大之以ニ
御沙汰、家名立被ニ下置ニ候ニ付、血脈之者相續奉願
候様被ニ 仰出ニ候付、右順吉ヘ家名相續被ニ 仰付ニ
被ニ下置ニ候様仕度段、廣文家臣共一同奉ニ懇願ニ度旨
申出候間、此段私ヨリ奉願候、以上。

明治元戊辰年十二月十二日

土井大炊頭

辨事御中

(久世廣業家記)

○二年二月二十四日達書

水野禊之助

同姓勝知儀、先般御處置被ニ 仰付ニ候ニ付、其方ヘ
壹萬七千石下賜、家名相續被ニ 仰付ニ候、以後藩屏

房總戰亂記

今般、水野勝知隱居謹慎被ニ 仰付、家名相續被ニ 仰
付ニ候段難レ有仕合奉レ存候、依レ之、右禊之助ヘ相續
被ニ 仰付ニ被ニ下置ニ候様、家來一同奉ニ懇願ニ候ニ付、可
レ然様御執成被ニ 仰上ニ候様奉願候、以上。

二月十日

水野 肥前守

辨事御中

(水野忠愛家記)

保科彈正忠

昨臘依ニ 御沙汰ニ取調差出候松平容保家來叛逆首謀
萱野權兵衛、今般刎首被ニ 仰付ニ候條、於其方ニ致ニ

處置可_レ及_二言上_一候事。

但叛逆首謀之内、田中土佐、神保内藏助、既ニ落命ニ付、不_レ及其儀候得共、存命候ハ、刎首可_レ被_二仰付_一候事。

五月

軍務官(太政官日誌飯野藩記)

久世 順吉

昨臘依_二御沙汰_一取調差出候叛逆首謀小島彌兵衛、今般刎首被_二仰付_一候條、於_二其方_一處置致シ可_レ及_二言上_一候事。

但、叛逆首謀之内、木村正右衛門、丹羽十郎右衛門行方不分明之旨申出候ニ付、其方へ永尋申付候事。

五月

軍務官

(太政官日誌十四日久世廣業家記)

水野 禊之助

昨臘依_二御沙汰_一取調差出候叛逆首謀水野又兵衛、

茂野喜内、今般刎首被_二仰付_一候條、於_二其方_一處置致シ可_レ及_二言上_一候事。

但、叛逆首謀之内、水野甚四郎既ニ落命ニ付、不_レ能_二其儀_一候得共、存命ニ候ハ、刎首可_レ被_二仰付_一候事

五月

軍務官

(太政官日誌十四日水野忠愛家記)

〇二年正月上申書

水野勝知家來

家老

水野又兵衛

内參謀祖式金八郎殿へ被_二召捕_一割腹被_二仰付_一候

水野甚四郎

茂野 喜内

右、叛逆首謀之者取調可_二申上_一旨被_二仰出_一候ニ付、三名ノ者差出候段申聞候ニ付、從_レ私此段御届申上候、以上。

正月十二日

水野 肥前守

辨事 御中

(水野忠愛家記)

〇

家老再勤
木村 正右衛門

脱走後行衛相
元中老
丹羽十郎右衛門

脱走後御預
元中老當時隱居
小島 彌兵衛

脱走後召捕
旗奉行
石川十郎左衛門

脱走後御預
取次
加藤 左次郎

脱走後行衛相
用人留守居兼帶
丹羽 慎藏

脱走後御預
近習
戸川 牧太

脱走後召捕
代官
尾花 彌助

脱走後自訴
無役
清水 耕藏

同
豐藏倅
近藤 勝三

右叛逆首謀之家來取調可_二申上_一旨、蒙_二御沙汰_一候ニ

付、重立 王帥へ抗衡仕候者、書面之通御座候、此段申上候、以上。

久世順吉家來

執政 富田 久太夫

龜井清左衛門

木下 源助

山路 慎十郎

(久世廣業家記)

水野又兵衛

茂野 喜内

右ハ叛逆首謀ニ付、今般刎首被_二仰付_一候間、處置可_レ仕旨被_二仰出_一候ニ付、一昨十五日於_二弊邑_一處置仕候、此段奉_二申上_一候、以上。

五月十七日

水野 禊之助

軍務官御役所

(水野忠愛家記)

松平容保家來叛逆首謀野權兵衛刎首被_二仰付_一候

ニ付、則於弊藩唯今處置仕候、此段御届申上候、以上。

五月十八日

保科 彈正忠

軍務官御中 (飯野藩記)

小島 彌兵衛

右ハ叛逆首謀ニ付、今般刎首被ニ 仰付、處置可仕旨被ニ 仰出候ニ付、昨十九日、於弊邑ニ處置仕候、此段奉申上候、以上。

五月廿日

久世 順吉

(久世廣業家記)

外記 東海道戰記

○明治元年二月十六日、是ヨリ先、諸侯召集ノ命アリ、且ツ勤王ノ證書ヲ徵ス、森川俊方内膳正○生實藩主疾ヲ以テ老臣ヲシテ代リテ上京セシム、使臣等、先鋒總督ニ名古屋ニ謁シテ、勤王ノ意ヲ

一高壹萬石

森川内膳正

木梨精一郎殿
海江田武次殿

森川内膳正家來差添 内海 伴 吾印
同家來重臣 青木七郎右衛門印

慶應四戊辰年二月十六日

在所下總國千葉郡生實陣屋附七千石、竝同國匝差郡、其餘上總國相模國之内ニテ御座候、以上。

辰二月十六日

森川内膳正重役 青木七郎右衛門

同家來差添人 内海 伴 吾

(以上東海道先鋒記、東征總督記、森川俊方家記)

○同 三月十五日、堀田正倫相模守○佐倉藩主水野忠寬忠敬祖父○結城藩等、先鋒總督ヲ沼津ニ候シ、正倫、勤王證書ヲ上ル。

軼誌ニ云、十五日、堀田相模守正倫、水野左京大夫忠寬等來面會。

○今般、大政御一新ニ付、私儀依レ召上京仕候處、彌以勤 王仕、此上何様之儀被ニ 仰付候共、身分ニ應儀ハ幾重ニモ可ニ相勤候、右之趣、天地神祇誓而相違無ニ御座候、仍如件。

房總戰亂記

陳ス、總督乃チ本藩ニ命ジ、管内沿道軍須ノ備ヲ爲サシム、是日、使臣、奉命書ヲ上ル。

御一新御改革ニ付被レ爲レ召候處、内膳正儀病氣ニ付、不ニ取敢ニ爲ニ名代ニ私共上京被ニ申付、官驛迄罷越候處、御兩卿様御在陣之段奉ニ拜承候ニ付、主人竝家來共一同、勤 王爲ニ 皇國ニ盡力仕候心底之旨申上候處、相模國鎌倉郡大住郡之内領地之儀、御下向之節高相應手宛仕置、御用筋可ニ奉レ伺之旨被ニ仰渡ニ奉レ畏候、内膳正儀在江戸ニ付、御趣旨柄之趣早々可ニ申達候、此段御請申上候、以上。

慶應四辰年三月

堀田相模守印

(東海道先鋒記)

○同 三月十八日、是ヨリ先、堀田正倫江尻驛ニ詣ル、其心事疑フベキモノアルヲ以テ、之ヲ詰問ス、是日更命シテ正倫ノ入京ヲ許シ、屏居セシム。

堀田 相模守

方向御糺問之處、始終曖昧トイタシ候申分有レ候間、上京之上外出相控居可ニ申旨 大總督官被ニ仰出候事。

三月

大總督府 參

(堀田正倫家記)

○附錄 正倫辦事局へ上申書

相模守儀、去ル九日江戸表出立、同十七日、駿州江尻驛迄相越、家來之者ヲ以、駿府 大總督府へ爲レ伺差出候處、御糺問之儀御座候ニ付、夫々御答申上候處、翌十八日、御同所へ家來之者御呼出ニテ、別紙

之通被_レ 仰出候ニ付、去ル十九日同驛出立、唯今上著仕候、依_レ之、別紙相添此段御届申上候、以上。

堀田相模守家來

三月廿九日

依田 七郎

(堀田正倫家記)

○同 四月七日、井上正順宮内○高岡藩主書ヲ先鋒總督ニ上リ、王事服從竝ニ召命ニ應ジ、上京センコトヲ請フ、之ヲ聽ス。

今般、爲_レ東征、勅使御進軍之處、私儀先頃ヨリ被_レ爲_レ召候ニ付、迅速上京仕度候得共、就_レ病氣無_レ據先達テ爲_レ名代、重臣之上京爲_レ仕候處、尾陽迄御進發之折柄、於_レ同所蒙_レ 御尋、勤 王無_レ一心之次第、右之者ヨリ御請書差上候通、於_レ私實以相違無_レ御座候、然ル上ハ無_レ程領分下總國御巡回之節ニ至、身分相應之御用途被_レ 仰付候様、更ニ奉_レ懇願候、就_レハ其旨在所表重臣之者へ厚相心得爲_レ置候間、聊御差支之儀不爲_レ仕候、依_レ之、前件兼

々被_レ爲_レ召候儀故、早速登京仕度、此段奉_レ願候、宜御執成可_レ被_レ下候、以上。

辰四月七日

高壹萬石 在所下總國香取郡高岡 井上 宮内印

東海道鎮撫總督 參謀御中(東海道先鋒記)
(井上正順家記)

○正順家記ニ、右之通奉_レ願候處、即御開濟之上、御印鑑御渡相成申候トアリ、按ズルニ、正順四月十三日途ニ上ル。

○附錄二條

總州井上宮内竝家來共、上下八拾壹人 上京候條、無_レ滯可_レ差通_レ者也。

但、此印鑑、箱根改之印紙共、大總督府御本營へ可_レ差出事。

四月

先鋒總督府 參 謀印

江戸ヨリ大總督府御本營迄處々固所 改役各中(高岡藩記)

○本條、署日ヲ佚ス。

覺

宮内、此度上京仕候ニ付、召連候人數左之通、

士分貳拾人

足輕

中間

右之通御座候、以上。

井上宮内家來

辰四月九日

安西 源之進

(高岡藩記)

○同 四月八日、久松勝行大藏少輔○多古藩主書ヲ先鋒總督ニ上リ、王事ニ服センコトヲ請フ。

先般、王政御復古被_レ 仰出候ニ付テハ、累代奉_レ蒙_レ 天恩候、固ヨリ勤 王之外他念無_レ御座、愈朝命遵奉仕度赤心ニ御座候、久々病氣罷在候ニ付、先爲_レ名代、重臣之者上京爲_レ仕、身分相應之 御用被_レ 仰付_レ被_レ下置候様仕度、願書 太政官辦事御役所へ既ニ奉_レ願置候儀ニテ、御先鋒 御總督府へ右同様毛頭ニ念無_レ御座候間、何卒身分相應之 御用被_レ 仰付_レ被_レ下置候ハ、冥加至極難_レ有仕合奉_レ存候、恐惶謹言。

房總戰亂記

一〇七

慶應四戊辰年四月八日

久松大藏少輔勝行印

(多古藩記)

○同 四月九日、内田正學主殿頭○小見川藩主書ヲ大總督府ニ上リ、勤王ノ意ヲ陳シ、又土井利與大炊頭○古河藩主家臣勤王證書ヲ上ル。

謹テ奉_レ申上候、臣正學天下之形勢ニ闇、一向誠實一片ヲ以、徳川氏へ勤勞仕候儀ハ、是則朝廷へ之勤務ト奉_レ存罷在候處、先般徳川慶喜政權奉_レ返上候テヨリ以來、彼是御不審之次第モ被_レ爲_レ在候處、既當初春於_レ 闕下ニ及_レ暴動候ニ付、不_レ被_レ爲_レ得_レ止、今般慶喜爲_レ御問罪、官軍御差向之趣奉_レ謹承_レ驚入候、然ル處、全以僻遠疎漏之處ヨリ、不勤 王之場合ニ立至候テハ、萬死難_レ奉_レ償仕合奉_レ恐懼候、付テハ向後一際憤發勉勵仕、不肖之微臣乏勞小藩之儀御座候得共、家來共ニ至迄一同勤 王、彌以爲_レ皇國_レ粉骨碎身盡_レ忠節、多年之奉_レ報_レ御國恩_レ度赤心

志願ニ御座候、乍不_レ及誠心盡力仕度奉_レ存候、此段厚御憐察被_レ成下、何卒御仁慈之程奉_レ數願_レ度、宜御執奏被_レ成下候様、伏_テ奉_レ願上_レ候、誠恐謹言。
慶應四戊辰四月九日

内田主殿頭 正 學判

(内田正學家記)

○正學家記ニ、慶應四戊辰年四月九日、東海道蒲原宿蓋沼津ニテ、大總督府御旅營へ重臣ヲ以差出候、トアリ。

○古河藩記ニ云、四月九日、重役之者御呼出ニ付罷出候處、御參謀吉村長兵衛方面會、今般王政御復古ニ付、御規則被_レ爲_レ立候付テハ、勤王ニ候哉御尋ニ付、左之證書差出。

今般御一新ニ付、主人大炊頭勤王一途ニ相心得、爲_レ報國ニ勉勵仕度志願ニ付、國力相應之御用相勤度心得罷在候處、去冬王命ニ付、當春右爲_レ御請_レ重役小杉監物ト申者上京爲_レ仕、其後早速上京可_レ仕處、病氣ニ付、重役來次傳四郎ト申者爲_レ名

代_レ上京爲_レ仕置、其後精々加養仕候處、此節少々快方ニ趣王命不_レ輕儀ニ付、抑_テ上京仕候間、勤王仕候儀ニ相違無_レ御座候、此段奉_レ申上_レ候、以上。

土井大炊頭家老

四月九日

奧 文平

○同 四月十日、久世廣文關岐守勤王證書ヲ先鋒總督ニ上ル、又内田正學ノ家臣、勤王ニナキヲ申シ、或ハ王事ニ服センコトヲ請フ。

一勤王證書

慶應四戊辰年四月十日

久世隱岐守印
(東海道先鋒記)

○本條、原文ヲ佚ス。
○内田正學家記ニ云、四月九日、池上本門寺御陣營、東海道總督府參謀方ヨリ急達御用之儀有_レ之候間、重臣一人急速可_レ罷出_レ候事。
四月九日

東海道總督府 參謀 木梨精一郎

海江田武次

下總 小見川藩 重臣中

右ニ付、即刻池上御陣營へ重臣罷出候處、參謀吉村長兵衛達、今般被_レ仰出候、御旨趣モ被_レ爲_レ在候ニ付、主殿頭心底御尋之趣ニ付、翌十日、左ノ書面ヲ以赤心申上候。

今般、被_レ仰出候、御旨趣モ被_レ爲_レ在候ニ付、心底御尋之趣謹_テ奉_レ承伏_レ候、不肖之主殿頭儀、小藩ニ御座候得共、家來共ニ至迄、一同誠實勤王爲_レ皇國ニ粉骨碎身仕、多年之御國恩奉_レ報度赤心ニ御座候、就_テハ速ニ上京可_レ仕筈ニ御座候處、病氣ニ付長途之旅行難_レ仕、不_レ取敢、爲_レ名代_レ重臣出京申付、奉_レ窺_レ天機、御元服ニ付獻上物仕難_レ有仕合奉_レ存候、然ル處、此程追々快方ニモ御座候間、抑_テ上京仕、小藩相應之御用向被_レ仰付_レ被_レ下置_レ候様、奉_レ願候心得ニ御座候、尤

出京暫時御猶豫之儀、於_レ京地ニ重臣ヨリ奉_レ願上_レ

候儀ニ御座候、乍恐此段奉_レ申上_レ候、以上。

内田主殿頭重臣

慶應四辰年四月十日

杉井藤右衛門

東海道 總督府 參謀中

○同 四月十一日、海軍先鋒軍艦ヲ收メントス、榎本武揚和泉守、舊幕府海軍副總裁風濤ニ託シテ之ヲ辭シ、書ヲ上リ、士心ヲ鎮壓スルト稱シ、是夜船艦ヲ率キテ館山房安ニ走ル、歩兵等亦昨夜ヨリ相率キテ營ヲ逸ス、其市川下ニ走ルモノ、大鳥純彰圭介、舊幕府歩兵奉行ヲ推シテ魁首ト爲シ、其木更津上ニ走ルモノ、福田道直八郎右衛門、撤兵頭ヲ魁ト爲ス。

○太政官日誌ニ云、軍艦七艘 凡乗組二千入許。

艦名 觀光 六門 蟠 龍 四門 咸臨十二門

朝陽十二門 富士山十二門 回天十一門

開陽廿六門

、十 右一日、海軍總督へ請取之筈候處、激濤ニテ士

官上陸難仕候ニ付、明朝迄延引願出被ニ差免候處、至翌朝一艘モ不見ニ付、糺問候處、左之通一紙〔略之〕差出。

○本條、所謂乘組二千人許蓋誤、軍艦目錄載スル所、水夫小頭以下ヲ算スルニ二千人ニ滿タズ、又目錄ニ千代田形艦アリテ成臨艦ナシ、且觀光ノ砲數ヲ闕キ、朝陽ノ砲ヲ八門ニ作ル、本條ト異ナリ。

○慶應兵謀秘錄田中惠親筆記ニ云、四月十二日朝四時、大島圭介、第二傳習步兵頭竝本多幸七郎、瀧川充太郎、外役々生徒共八拾名、市川表へ出勢、於此七聯隊頭竝米田桂次郎參着セズ、依テ衆議之上頭取勤方タル山瀬主馬、天野電四郎ヲ以テ同隊之長トス、下役タル松下祐次郎、差圖役竝勤方ニ命ジテ護衛へ入、其外役々闕員ヲ補フ、此時大島圭介ヲ推テ總軍之長トス、從之諸命令皆大島氏ヨリ出ヅ、於是第一傳習隊ヲ別軍ト爲シ、是ニ附スルニ大砲二門、護衛二小队、桑名士官隊ヲ以テシ、同日市川ノ驛ヲ發ス、終ニ小金驛ヨリ水戸海道へ分ル、傳習第二大隊ヲ中軍

ト定メ、第七聯隊ヲ後軍ト定ム、十三日朝六ツ時、御料兵隊天王寺出勢ノ事ハ、大島圭介ト兼テ打合セ有レ之、且彰義隊之長不勝任ヲ鑑ミテナリ、同日東橋ヨリ小梅、堅川通り新宿ニテ、糧食相用フ、於此清水小普請組頭朝比奈虎之助ナル者、同志數名ヲ率キ東行スルニ逢ヒ、正ニ合テ八ツ時、市川ノ渡船ニ至ル、終ニ鴻臺總寧寺ヲ陣營ト定ム、は大島氏ナル者ニ合兵セン爲ナリ、然ル處、今朝、大島氏諸兵隊ヲヒキキ、日光表へ發ス、不レ得ニ止事總寧寺へ宿ス、中略此日山口勝太郎、岡征之進、上野鉄五郎、長谷川幸十郎、歩兵二人ヲ連レ總寧寺へ來ル、依テ御料兵隊ノ士官ト成ル、此ニ四人赤心、已ニ官兵江府へ來ルニツキ、死與ニシテ死與以下、誤説アラシ髮ヲ切、正ニ敵中ノ事ヲ探ル、官兵此所ヲ圍シ時、器械ヲ携脱シテ來ル處也、同日朝、大島氏率總軍、市川ノ驛ヲ發ス、中軍ハ山崎ノ驛へ泊ル、後軍ハ小金ノ驛ニ宿ス、從之先回天隊ナル者已ニ在此地、二黨ニ分レテ、其一黨ナル者、相馬左金吾ヲ隊長トシテ、人名四十

員、同驛ヨリ秋月登之介ノ隊跡ヲ追ヒ、水戸海道へ入ル、終ニ秋月氏隊ニ合ス、又一黨ナル者ハ、藤沼幸之丞ヲ隊長トシテ戰士百餘人、純義隊、誠忠隊、此兩隊ト共ニ同驛ノ寺院ニ滯陣ス。

○附中村武雄桑名藩士手記ニ云、是時前將軍慶應益御謹慎被レ爲在、旗下八萬ノ士大抵屏息退去シテ、更ニ慷慨殉國ノ念ナク、在職ノ士ト云ドモ、登城ヲモ廢スル勢ナルニ、榎本和泉守ハ益奮發シ、安危ヲ以テ自ラ任ジ、陸軍奉行松平太郎ト深ク相結ビ、興復ヲ謀リケレバ、關東忠義ノ士盡ク砥柱ノ思ヒヲ爲シケリ、四月五日、官軍遂ニ徳川氏ノ處置ヲ定メ、收封開城ノ事、海陸軍器械ヲ收ムル事、前將軍水戸ニ御預ケノ事、旗下ノ士郭外ニ退ク事ヲ達セララル、泉州ハ太郎ト已ニ守城ノ議ヲ決シ、手分モ已ニ定リ、我同志ハ常磐橋ヲ守ルベシトナリ、是ニ於テ嘆願書ヲ出シ數事ヲ哀訴ス、其趣意、今日ニ至リ默々トシテ御達シニ從フトキハ、海陸軍中一人ノ男兒ナキ義ニテ、徳川氏ノ深恥不レ過レ之事故、御了察被レ爲在度

トテ、盡ク其命ニ抗スル事ナレバ、手切トナランコト必然ナリ、左アラバ一花咲セントテ、皆踊躍鼓舞シテ相待シニ、陸軍中ニ白戸石助ト云者アリ、巧佞奸黠ノ徒ニテ、窃ニ上野ニ走り、盡ク泉州・太郎ノ密策ヲ報ジケリ、前將軍大ニ怒ラセ玉ヒ、是又テ我頸ニ加フルト何ゾ異ナラントテ、立所ニ松平等ヲ上野ニ召シテ、陸軍ノ職ヲ解キ、江戸城ヲ開テ官軍ニ渡ス迄ハ水戸ニ赴カジト怒ラレケル、兼テハ前將軍ノ發セラレシ後、事ヲ擧グベキノ定算ナリシカドモ、此ニ至テハ如何トモスベキ様ナク、大計一時ニ瓦解シテ、開城ニ決シケル、前將軍ハ其患ヘナキヲ見テ、水戸ニ發セラル、十一日、官軍遂ニ江戸城ニ入ニケリ、江戸ハ天下ノ堅城ニテ、兵糧山ノ如ク、器械彈藥一トシテ不足ナク、官軍モ甚ダ之ヲ憚リシニ、一奸人ノ爲ニ一彈丸ヲ用ヒズ、敵ノ手ニ渡セシハ、吳々モ遺恨ノ至リニテ、切齒セメ者ナカリケリ、最早江戸ノ事モ終リシ故、四月十一日、此日昧爽、小川町ノ屯所ヲ出デ、奥州指テ下ラントテ、小梅

ニテ會藩ト會合シ、市川ニ至リシニ、關東忠義ノ士、
江戸ヲ脱シテ來ル者引モ切ラズ、市川ニ集レリ、其
人々ニハ秋月登之介ノ傳習第一大隊、大鳥圭介・本
多幸七郎ノ傳習第二大隊、米田桂次郎ノ七聯隊、加
藤平内ノ御領兵、相馬左金吾ノ回天隊、工藤衛守ノ
別傳習、松平兵庫頭ノ貫義隊、天野加賀守・村上求
馬ノ艸風隊、渡邊綱之介ノ純義隊、山中幸治ノ誠忠
隊等ニテ、總勢凡ソ二千五六百ナルベシ、此ノ大勢
ニテハ惣括スル者ナクテハ叶フマジトテ、其人ヲ檢
スルニ、大鳥圭介ハ陸軍ノ事ニ達シ、著名ナル人故、
之ヲ以テ總督トシ、土方歳三ハ從來新選組ノ副長ニ
テ、機智勇略兼ネ備リタル故參謀ト定メ、各隊大旗
ヲ作り、東照大權現ノ神號ヲ記シ、書ヲ發シテ衆ニ
示シ、日光神廟ニテ、宿寃ヲ訴ヘ再舉ヲ謀ルノ旨ヲ
達ス、手分已ニ畢リケレバ、傳習第二大隊、七聯半
隊、誠忠隊、純義隊ハ街道ヨリ進ミ、大鳥之ガ總督
タリ、傳習第一、別傳習、七聯半隊、回天隊及我兵
ハ小金ヨリ宇都宮指テ進發ス、秋月之ガ總督トナリ、

土方參謀ナリ、艸風、貫義ノ兩隊ハ故有テ諸軍ニ先
テ街道ヨリ進ミケル、時ニ四月十三日ナリ。
○野輿戰爭日記筆者不詳ニ云、慶應四年辰四月十一日、小
川町屯所脱走致シ、扱其夜ハ小梅小倉庵ニテ勢竝致
シ、夫ヨリ本所堅川道ヲ指テ行、其勢凡九百人程、總
督大鳥圭介竝頭本多幸七郎、格ノ誤隊役ハ不レ及レ申、
隊々ハ附屬致シ、十二日九ツ時下總國市川宿ニテ小
休致シ、此處高野臺蓋鴻臺ト申山有レ之、是ニ大手前
第一大隊脱走致シ此山ニ屯セシ頭ハ、秋月登之介ト
申人、元會藩也、役々不レ殘、其勢凡千人餘モ有レ之、
其外草風隊、貫義隊、傳習第一、第二、不レ殘是ニ
テ脱走兵聚、總勢合三千八百餘、右三手二分、一手
ハ「小金ヨリ」三ツ「水」街道、一手ハ日光海道、
一手ハ奥州海道、前軍、中軍、後軍ト分レ、扱テ其
日ハ松戸宿ニ泊、十四日中軍隊ハ船方ト申村ニ一泊
シ、十五日諸川ト申所ニテ一宿、扱江戸脱走兵今日
迄無レ別條。
○松平直方家記、四月十五日上申書ニ云、去十二日

夜ヨリ徳川家人脱走之者、義軍隊ト唱、兵器ヲ携、
軍裝ニテ大和守領分之内、上總國木更津村ヘ入込、
最寄村々四方ニ人數凡貳千人餘リ追々ニ繰込、木更
津ニ本陣ヲ構、四方ニ番所ヲ立、總督府ヨリ御下ゲ
相成候高札ヲ取捨、剩望陀郡村々之役人ヲ御用ト唱
呼出シ、以來支配可レ致旨申渡、人馬等勝手ニ役シ、
近邊諸家陣屋ヘ使者ヲ遣シ、彼是相迫、總テ軍隊之
振合ニテ、追々手ヲ廣ゲ候事ニ御座候。下略

○按ズルニ、十六日ニ至リ、純彰山道ノ兵ト下總
諸川及下野小山ニ戰ヒ、尋テ宇都宮ニ迫ル事ハ、
東山道戰記ニ詳ナリ、道直木更津ニ據リ、號シテ
義軍府ト曰ヒ、其黨、房總二國ノ間ニ横行ス、閏
四月四日副總督柳原前光、房總鎮撫使ト爲リ、出
テ之ヲ鎮ス、事ハ房總戰記ニ讓ル、竝ニ參着スベ
シ。〔以上引用ノ文書ハ多少之ヲ取捨節約セリ〕

○同 四月十二日、酒井忠美銚次郎○勝山藩主、竝
後加知山藩ト稱ス、竝
ニ忠美ノ家臣、勤王證書ヲ先鋒總督ニ上ル、又

米津政敏伊勢守○長瀨藩主、
後大綱ニ移封ス、六師應援ノ命ヲ奉ズル
ヲ以テ、入京ノ可否ヲ稟請ス。

私儀、兼テ 朝命尊奉勤 王罷在候處、今般 王政
御一新ニ付テハ、猶又厚相心得、私ハ不レ及レ申、家
來小者ニ至迄、勤 王之外他念無ニ御座候、此段申
上候、以上。

慶應四年戊辰四月(日ヲ
伏ス)

酒井 銚次郎
(東海道先鋒記
酒井忠美家記)

○一勤王證書

酒井銚次郎家來

慶應四戊辰年四月十二日 福井小左衛門印
都築 圖書介印
(東海道先鋒記)

○本條、原文ヲ佚ス。

御一新御變革ニ付上京可レ仕旨蒙ニ 御沙汰、難レ有仕

合奉存候、素ヨリ赤心勤 王之儀ニ付、早速上京可
仕處、病氣ニ付長途之旅行難仕、暫見合罷在、且
私領分之儀、羽州長瀨、前々ヨリ在所トハ相定御座
候へ共、高之内過半ハ武藏國、安房、兩總、常陸國等
之内ニ散在仕、小藩之儀常々取締深心配仕候處、當
今脱走之徒、江戸近國暴行仕、及亂妨ニ候而已ナラ
ズ、愚民ヲ語ラヒ、惡行ヲ勸メ候哉之趣相聞、人氣
動搖仕、若領民共心得違之儀於有之ハ、王政御一
新之折柄、以之外之儀、奉對ニ朝廷ニ無此上ニ恐入
候儀ニ付、領内ハ勿論、相給ヘモ申談、鎮靜方仕度
心得ニ付、旁領分上總國山邊郡大畑村ヘ一先引取、
病氣療養差加候之處、追々順快ニ赴キ申候、然ル處、
徳川叛逆ニ付、爲御追討官軍御差向ニ付、奥羽之
諸藩六師勢援可仕旨、兼テ蒙ニ御沙汰罷在候、右
勢援之向ハ不_レ及_ニ登京候段、佐竹右京大夫ヘ御内
救之趣モ御座候旨承知仕候、依_レ之、如何_{此間蓋脱}字アラシ
京之儀此段奉_レ伺候、以上。

米津伊勢守使者

金申付、隠居攝津守妾腹之男子禊之助ヲ携、兩三輩
之者尾州家ヘ駈込、同人ヲ以當家相續ニ相立度旨申
出、猶日向守ハ主人ニ無之杯領民ヲ欺、徒黨ヲ結ビ、
同人儀恐多モ 朝廷ヘ奉_レ反杯、無實之作言申觸候
段、不届至極ニ付急度罪科可申付_ニ處 王政御一新
之折柄、且ハ徳川家恭順之障ニモ相成候ニ付、寛宥
之取計ヲ以、重立候者呼出シ、説諭之上、城内之者共
ヘモ篤ト申諭候様申付候得共、其後更ニ左右之答モ
無_レ之故、日向守ヨリ書付ヲ以再三申諭候得共、承伏
不_レ仕、剩宇都宮戸田家ヘ偽言ヲ以援兵ヲ相頼候由相
聞候ニ付、小山宿ヲ引拂、領分神鳥谷村ヘ止宿致シ、
當方ヨリモ戸田家ヘ使者兩人差出、實否申述候處、
同家ニ於テモ臣トシテ君ニ反スルノ逆徒ニハ荷擔不
_レ致旨ニ付引返候處、途中逆臣共芋柄新田ヘ伏兵致
シ、使者之内一人ヘ深手ヲ爲_レ負生捕、引返、斬首致
候始末、何分ニモ難_ニ捨置、且日向守入城ヲ家來之分
トシテ差拒候儀不届至極ニ付、同二十五日押テ入城、
夫々所置可_レ致心得ヲ以、城下最寄迄罷越候處、逆徒

四月十二日

村山彌右衛門
佐々木左一郎

御參謀御役人中様(東海道先鋒記)

○本條、批紙見ル所ナシ、蓋入京ヲ弭メシナラン、
閏四月十五日、總督其歸邑ヲ聽ス、參看スベシ。

○水野勝知日向守ノ臣、書ヲ先鋒總督ニ上リ、
在封ノ臣、廢立ヲ謀ルモノアリ、勝知之ヲ掃蕩
ス、既ニシテ勝知、東山道官軍ノ討ズル所ト爲
リ、上總ノ分邑ニ走ル、事奸臣ノ誣懇ニ出ルヲ
申シ、爲メニ審判ヲ請フ。

日向守在所家來之内ニ心得違之者共有_レ之候ヨリ、自
然人心居合兼候ニ付、重役共差下シ、鎮撫方申付候
得共、難_ニ行届、依_レ之、日向守自身鎮撫トシテ罷下
候ニ付テハ、家來人少故、彰義隊ヲ相頼、歸城之心
得ニテ、三月十六日、江戸表出立、同十八日小山宿
迄罷越候處、城外橋々ヲ切落シ、入城ヲ相拒ミ、不_ニ
容易_ニ企モ有_レ之、其前勤王ニ事寄セ、無_レ謂過分之用

ヨリ兼テ相備置候大小砲ヲ以、日向守ヘ打懸ケ候ニ
付、不_レ得_レ止及_ニ戰爭、夕刻ニ至一ト先小山宿迄引取
候處、同夜逆徒城内ヲ燒拂、一同逃去候ニ付、翌二十
六日入城之上、同日ヨリ城内外并城付領分鎮撫致シ、
猶逆徒脱走之行衛探索罷在候處、當月四日 官軍間
々田宿御通行之由承リ、兼テ於_ニ京都_一日向守家來ヘ
御差圖モ有_レ之、旁 天機爲_レ伺、日向守可_レ罷出_レ候處、
不快ニ付用人水野雅之助差出候處、日向守御糾問之
筋モ有_レ之候旨 御沙汰ニ付、直様日向守爲_ニ名代_一重
役水野甚四郎、小金井宿ヘ罷出、御糾問之筋奉_レ伺
候處、夜ニ入候得共御用之筋モ相譯リ兼候内、追々
官軍御押寄之御様子承リ候ニ付、何等之次第歎不_レ
_レ存候得共、深恐入、城内之兵器類ハ一總ニ致シ、奉
_レ對ニ 官軍ニ無禮無_レ之様、主従共厚相心得差扣罷在
候處、官軍ヨリ一應之御沙汰モ無_レ之、城内向ヘ大砲
御打込ニ相成候ニ付、驚入、一切譚ハ不_レ存、唯官軍
ヘ御敵對ヲ恐、重役小場兵馬ヲ指置、直様退城、乗船
ニテ領分之内上總國武射郡成東村ヘ引取、尤同所ニ

八日向守養祖父攝津守退隱仕居候ニ付、右方へ罷越、養祖父俱ニ謹慎罷在候處、結城へ御差向之東山道官軍、總督府内參謀ヨリ御達有之候ハ、日向守藩士之者共、同人ト父子之戰爭ニ及ビ候趣ニ候得共、前ニ申上候通、養父ハ先年死去、養祖父攝津守儀ハ疾ヨリ上總國領分へ退隱罷在、既ニ日向守結城ヲ相開、攝津守退隱之茅屋へ引取、俱ニ相慎罷在候次第ニテ、父子確執等之儀一切無之ハ勿論、官軍ニ對御疎意申上候儀毛頭無之ハ顯然ト奉存候、此儀愚察仕候ニハ、逆臣脱走之徒官軍へ駆込、事實引違獻言仕候ヨリ、右様兵隊御差向之儀ト奉存候間、何卒御賢明之、御英斷ヲ以、理非曲直明白之、御糺明伏テ奉仰願候、尤日向守儀無實之件々自訴仕度、出府謹慎可罷在候ニ付、依御沙汰差出可申候、以上。

水野日向守内

四月

三好三右衛門

高橋剛藏

(東海道先鋒記 橋本實榮家記)

○本條ハ前後ノ事實ヲ彌縫シテ上申セシモノナリ、按ズルニ、三月朔日、勝知、徳川氏ニ請ヒ、東叡山警衛並ニ彰義隊指揮役ノ命ヲ受ケ、密ニ徳川氏ヲ扶持セントス、本藩ノ義徒胥議シ、將ニ勝知ヲ廢シ、義叔父勝寬諱之ヲ立ントス、三月二十五日、勝知、彰義隊士ヲ率キ、還リテ藩城ヲ取ル、四月五日、山道ノ兵之ヲ復ス、東山道戰記參看スベシ、又五月二十日、大總督府、勝知ノ疑フ可キヲ以テ津藩ニ保管ヲ命ジ、七月十二日之ヲ責問ス、亦參看スベシ。

○同 四月十四日、東山道先鋒總督、書ヲ大總督府ニ致シ、流山下結城上二驛ノ戰狀、竝ニ賊魁近藤昌宜勇、舊幕府新選組長、ヲ捕獲セシヲ報ズ。

上略過日、日光山邊賊徒屯集致シ、何時宇都宮城へ襲來可致哉モ難計、彼藩ヨリ危急ヲ報ジ、援兵歎願申出候ニ付、要地之事ニモ有之、旁以難捨置、斥

候隊トシテ人數少々差出候處、流山ト申驛ニ賊兵屯致居候由、右之人數推寄、應接ニ及候處、賊徒モ不意之事ニテ防戰之術モ無之、盡ク降伏、兵器等多分差出シ申候、就中賊之渠魁大久保大和、實ハ近藤勇ト申者ヲ捕へ、板橋陣營へ護送仕候、其後小山驛ニ右斥候隊止宿致シ居候處、近傍之諸村一揆蜂起之趣、百姓共罷出嘆願イタシ候ニ付、鎮靜ノタメ一手之人數出張致シ候處、途中ニ於テ不圖結城之賊徒兵ト出會、彼ヨリ戰ヲ請候ヨリ、不得止及ニ接戰、遂ニ城内へ攻入候處、賊徒共城ニ火ヲ放チ退去仕候、右結城之賊ハ彰義隊及ビ會藩之由ニ相聞へ候、尙委曲之儀ハ追而可及ニ言上候、早々以上。

但、今度近藤儀ハ京都迄護送爲仕候間、此段申上置候也。

四月十四日 (東征總督記)

○按ズルニ、四月廿五日、山道總督、昌宜ヲ斬リ、其首ヲ京師ニ傳へ、閏四月七日三條磔ニ梟ス。

○酒井忠美、將ニ入京セントシ、通關ノ券ヲ先

房總戰亂記

鋒總督ニ乞フ。是日之ヲ與フ。

○酒井忠美家記ニ云、慶應四戊辰年四月、私儀先般從御所被爲召、冥加至極難有仕合奉存候、然ル處、幼年、其上病身罷在候ニ付、不取敢、名代之者上京爲仕候處、漸快ニ付、同年四月十三日、房州勝山出發仕、同十四日旅中關々通行御印鑑御下渡被成下度段、川崎驛先鋒御總督御改所へ出頭、御印鑑御下渡被成下候、則願面左之通。

乍恐奉願候覺

主人銚次郎儀、兼テ勤王申付置、家來小者ニ至迄勤王之外他念無御座候、將又先般銚次郎儀從御所被爲召冥加至極難有仕合奉存候、然處、幼年、其上病身罷在候ニ付、爲名代重臣之者差出、猶又分知酒井鉄三郎上京爲仕候處、此節漸快方ニ趣上京仕候ニ付、昨十三日在所安房國平郡勝山出發、武州金澤著船、夫ヨリ相州鎌倉通リ東海道旅行仕候間、供人上下荷物共御固場所往來差支無之様、御印鑑頂戴仕度、此段奉願候、以上。

酒井銈次郎家來

四月

新免 十八郎

○忠美、同四月二日、京ニ至ル、又通關ノ券ハ之ヲ佚ス。

○久世廣文、書ヲ先鋒總督ニ上リ、封邑逋賊ノ虞アルヲ以テ、上京ノ期ヲ緩ウシ、歸藩シテ之ニ備ヘンコトヲ請フ、是日、總督之ヲ聽シ、命ジテ土民ヲ鎮輯シ、守備ヲ嚴ニセシム、因リテ古河藩ニ令シ、緩急互ニ應援ヲ爲サシム。

私儀病氣快方ニ相赴候ニ付、急速上京仕度及發途、即今當地著仕候、昨今在所役人共罷越申出候ハ、會藩脱走人ト唱、兩三輩城下へ罷越、出會之家來共へ申聞候ハ、私在所并土井大炊頭在所古河城之藩士ト及合兵、官軍相支度趣内談御座候間、私へ申聞候迄モ無レ之、殘暴之者共ニ付、無ニ二念ニ及斷申候、追々在所近邊潜伏仕候模様ニ付、片時モ安堵難ニ相成一段申出候間、一先立戻、弊邑守備仕度奉レ存候、乍併

上京及遲延候段、誠以恐入奉レ存候得共、此段御許容被ニ成下候様仕度奉レ存候、尤小城微勢、守備甚以無覺東、心痛之至奉レ存候、可ニ相成儀ニ御座候ハ、朝廷以ニ御威光鎮撫仕度、且舊來被ニ立置候川

陸往來相改候關所モ有レ之、咽喉之地ト奉レ存候間、御旗號并御少人數成共御差向被レ成候得バ、冥加至極難レ有仕合奉レ存候、且又弊邑近郷徳川家并旗下領分之儀、此節鎮撫不行届ヨリ、追々徒黨及亂暴、難澁之趣難ニ見捨、殊ニ城下近邊之儀ニテハ、弊邑深憂御座候間、當分之内鎮撫之奉レ蒙ニ 朝命ニ度、巖繪圖相添、此段幾重ニモ奉ニ伏願候、委細之儀ハ重臣共差出候間、御糺被ニ成下候様仕度奉レ存候、恐惶謹言。

四月十四日

久世 隱岐守

(東海道先鋒記)

○本條、所謂繪圖ハ之ヲ佚ス。

○本日達書

久世隱岐守へ

其方上京之儀當分相見合、急速歸國致シ、土民ヲ鎮撫シ、皇化ニ歸順候様教諭可レ爲ニ肝要、且其封内要阨之地ニハ關門兵衛等嚴重ニ備設シ、萬一強梁之暴徒共徘徊候節ハ、臨機之作略可レ有レ之事。

辰四月

東海道鎮撫府 總

督

副督

(東海道先鋒記)

(久世廣業家記)

○本條、廣業家記、十五日トス、今先鋒記ニ從フ。
今般久世隱岐守へ別紙前條之通被ニ 仰付候ニ付テハ、當節大炊頭殿登京中ニハ候得共、萬一強暴之徒横行候節ハ、關宿藩申合、相互ニ應援、臨機之處置可レ有レ之旨、鎮撫總督府 御沙汰候事。

四月十五日

東海道鎮撫總督府 參謀

土井大炊頭殿 重臣中 (東海道先鋒記)

(古河藩記)

○附錄

私儀爲鎮撫、早速在所表へ罷越可レ申處、未腫物痛

房總戰亂記

強難儀仕候ニ付、出立之儀少々延引仕候、此段御届奉ニ申上候、以上。

辰四月十九日

久世 隱岐守

(久世廣業家記)

○按ズルニ、廣文六月朔日落ニ歸ル。

○同 四月十五日、大總督江戸ニ入り、増上寺ニ次ス、井上正順、重臣ヲ遣シ起居ヲ候ス。

今般、私上京旅行仕候處 大總督御宮、當地 御滞陣被レ遊候段承知仕、則自勤可レ奉レ伺ニ 天機之處、兼テ病氣罷在、押テ旅行仕候間、乍恐重臣之者ヲ以奉レ伺ニ 天機候、此段宜御執成奉レ願候。

井上宮内重臣

四月十五日

小林善左衛門

(井上正順家記)

○正順家記ニ、戊辰四月十五日、江戸地旅行仕候ニ付、名代ヲ以、大總督府へ奉レ窺ニ 天機トアリ。
○按ズルニ、七日、正順入京ヲ先鋒總督ニ請ヒ、聽サル。

○土井利與ノ家臣、勤王證書ヲ先鋒總督ニ上ル。

一勤王證書

土井大炊頭家來

朝倉藤左衛門

四月十五日

○本條、原文ヲ佚ス。

○同 四月十七日、賊徒、江戸以東ノ諸州郡ニ嘯聚スルヲ以テ、先鋒總督參謀加勢安場保和ヲ以テ、監軍ト爲シ、津・大村二藩ノ兵ヲ率キ、往キテ之ヲ鎮撫セシム、因テ房總諸藩ニ令シ、兵ヲ發シテ之ニ應援セシム、又檄ヲ武・房・總・常諸藩、及ビ舊代官ニ傳ヘテ、兇徒ヲ緝捕セシム。

○柳原前光軹誌ニ云、四月十九日、江戸以東諸州郡、近日兇暴之賊徒等奸民ヲ嘯集シ、處々湊會奉レ礙ニ皇化一段、言語道斷之所業、加之總州結城邊、東山道

先鋒既ニ交戦ニ及居候趣、依レ之安民且赴援之タメ、藤堂兵、大村兵等爲ニ監軍安場一平差添ニ出張。

伊州藩へ

江城以東之諸州郡、近日兇暴之賊等、姦民ヲ嘯集シ、處々屯會 皇化ヲ奉レ礙之勢、不レ畏ニ 天威、言語同斷之所業ニ候條、其藩之兵彼地へ分隊、隨所巡撫シ、速ニ鎮靜可レ有レ之候、殊ニ東山道先鋒、總州結城邊ニ於テ既ニ交戦ニモ及居候折柄、迅速進軍可レ致、猶大村藩申合、必勝之配運可レ有レ之候、監軍安場一平差遣候間、進退指揮可レ受候事。

辰四月

總督 將

大村藩へ

江城以東之諸州郡、近日兇暴之賊黨等、姦民ヲ嘯集シ、處々湊會 皇化ヲ奉レ礙之勢、不レ畏ニ 天威、言語同斷之所業ニ候條、其藩之兵隊速ニ東進隨處巡撫

シ、良民安堵可レ爲レ致候、殊ニ東山道先鋒、總州結城邊ニ於テ既ニ交戦ニモ及居候折柄、神速進軍赴援可レ致候、諸事伊州藩申合、臨機之作略可レ有レ之候、監軍安場一平差遣候間、進退指揮可レ受候事。

辰四月

總督 將 副

(以上東海道先鋒記)

○ 各通 久留里藩へ 飯野藩へ 佐貫藩へ 鶴牧藩へ 一ノ宮藩へ 勝山藩へ 館山藩へ 請西藩へ

近日脫散之兇徒等、房、總地方ニ湊會致シ、處々暴行、良民ヲ欺キ、不レ畏ニ 天威之次第、依レ之爲ニ鎮撫、官兵被ニ差向ニ之間、於ニ其藩ニモ應援之心得ヲ以、臨機出兵、忠精相勵、勤王之實効可ニ相顯ニ候、監軍安場一平差遣候間、諸般指麾可ニ相受ニ候事。

辰四月

總督 實 梁 副將 前 光

○各通

(東海道先鋒、黒田直養、水野忠順家記)

武州岡部	安部	攝津守	武州忍	松平	下總守
武州川越	松井	周防守	武州岩槻	大岡	主膳正
下總古河	土井	大炊頭	下總高岡	井上	筑後守
下總關宿	久世	隱岐守	同 多古	松平大藏少輔	
同小見川	内田	主殿頭	同 結城	水野	日向守
同 生實	森川	内膳正	同 佐倉	堀田	相模守
常州志筑	本堂	式部丞	上總久留里黒田	筑後守	
同 飯野	保科	彈正忠	同 請西	林 昌	之助
同 一ノ宮	加納嘉元次郎	同 佐貫	阿部	駿河守	
同 鶴牧	水野	肥前守	房州館山	稻葉	備後守
同 勝山	酒井	銚次郎	常州松岡	中山	備前守
同 下館	石川	若狹守	同 下妻	井上	辰若丸
同 宍戸	松平	主税頭	同 笠間	牧野	越中守
同 麻生	新莊	下野守	同 府中	松平	播磨守
同 牛久	山口	辰次郎			

頃日、一種之兇徒等處々屯會シ、良民ヲ欺キ、恣意

暴行候趣、不_レ畏_ニ 天威、言語同斷之所業ニ候條、右之徒等其領内へ入込候ハ、悉ク召捕置可_ニ訴出候、萬一多人數手ニ餘リ候節ハ、近隣之各藩申合、急速擊取、領民安堵可_レ爲_レ致候事。

辰四月

總督

副將

(東海道先鋒記、古河藩記、松平忠敬家記)

○舊代官へ達書

各通

江川太郎左衛門 松村忠四郎 大竹左馬太郎

佐々井半十郎 小川達太郎 小笠原甫三郎 安藤傳藏

頃日、一種之兇徒等處々屯會シ、良民ヲ欺キ恣意暴行候趣、

以下上文ニ同シ、但領内ヲ支配所ニ作り、領民ヲ天民ニ作ル。

辰四月

東海道鎮撫府

總督

副將

(東海道先鋒記、江川英武記)

○同 四月二十日、土屋舉直采女正兵ヲ下總ノ別邑ニ遣リ警守ニ充ルヲ、先鋒總督ニ申ス。

私領分下總國相馬郡谷原領近邊不_レ穩趣相聞候ニ付、領中爲_ニ取締_ニ、一昨十八日、左之人數差出申候。

甲長貳騎 小甲長壹騎 銃手頭貳騎 輜重長壹騎

差使役貳騎 監察貳騎 甲士壹手 小甲士壹手

醫師貳人 徒目付貳人 輜重方之者 下目付三人

銃手二組

右之段、不_ニ取敢_ニ御届申上候、以上。

四月廿日

土屋 采女正

(東海道先鋒記)

○同 四月二十五日、上總人板倉某清左衛門宇佐美某久左衛門連署シテ、書ヲ先鋒總督ニ上リ、米百苞ヲ獻ジテ、軍資ニ充ント請フ。

乍_レ恐以_ニ書附_ニ奉_ニ願上_ニ候

上總國長柄郡茂原村清左衛門、同國同郡高砂村久左衛門、兩人奉_ニ申上_ニ候、今度關東爲_ニ御一新_ニ、御勅使

様 御下向被_レ爲_レ在候ニ付、當今之御時節柄何哉

御皇國報恩之爲_ト差心得罷在候中、總房共兎角不_レ穩義而已出來仕候ニ付、先達テ申池上御出陣先へ品々奉_ニ出願_ニ候處、早速 御聞濟被_ニ成下置_ニ且 御懇命奉_ニ拜承_ニ難_レ有仕合_ニ奉_レ存候、其後房、總地御改正向之儀ニ付、何ク度相應之 御用向モ候ハ、ト奉_レ存罷在候得共、江戸御所置 御取究御最中ト奉_レ伺候ニ付、片時モ早々御掃清之期ヲ奉_ニ渴望_ニ候、右ニ付些少之段甚奉_ニ恐入_ニ候得共、私共兩人之者ニテ爲_ニ御國恩_ニ米百俵奉_ニ上納_ニ度奉_レ存候、微忠 御憐察被_ニ成下置_ニ、御軍用之驥尾ニ御差加被_ニ下置_ニ候ハ、誠ニ難_レ有仕合奉_レ存候、何卒前書無_ニ御見捨_ニ 御採用被_ニ成下置_ニ候様偏_ニ奉_ニ願上_ニ候、以上。

慶應四年四月 日

上總國長柄郡茂原村 願人 板倉 清左衛門印

同國同郡高砂村 宇佐美久左衛門印

武州荏原郡品川宿 差添人親類 名村寬一郎印

(東海道先鋒記)

房總戰亂記

一一三

○批紙ヲ佚ス。

○同 四月二十六日、是ヨリ先、賊兵誠忠流山驛總下ニ嘯聚シ、將ニ進テ千住驛ニ逼ラントス、先鋒總督乃チ備前・佐土原二藩、及ビ稻田邦植ノ兵ヲ遣シテ、之ヲ鎮壓セシム、田安慶頼モ亦使ヲ遣シテ之ヲ招諭ス、既ニシテ賊兵三百七十五人、松戸・千住二驛ニ至リ、兵器ヲ致シテ降ヲ乞フ、是日、慶頼ニ付シテ之ヲ監守セシム。

○岡山藩記ニ云、四月廿二日、參謀木梨精一郎殿、左之通。

浮浪之徒數願有_レ之趣ニテ、五百人計只今千住へ罷越候由、早々出兵可_レ致 御沙汰之條御口達有_レ之、即日出兵イタシ申候。

同廿三日、昨日御達ニ付即日千住驛へ出兵致シ、處々及_ニ探索_ニ候處、浮浪之者六百人計新宿へ晝食申付候旨報知有_レ之、斥候兵致_ニ監督_ニ、淺野忠次郎、新宿

通松戸へ赴キ候途中、新利根川ニテ賊兵舟ニテ東ヨリ西へ渡ラント欲ス、忠次郎令シテ水上ニテ砲撃ス、賊辟易、舟ヲ返ス、爾後佐土原藩樺山舍人、當藩森下立太郎等銃隊ヲ率テ松戸ニ赴キ、賊長渡邊某ト應接、賊徒恭順、兵器相渡、謹慎宜シキニ付、夫々手當致シ置、督府へ及ニ御届候處、翌廿四日賊徒ハ當藩へ、器械ハ須本へ御預ニ相成。

○島津忠寛家記ニ云、四月廿三日、下總國流山邊へ屯集之賊徒入府之企ニテ、千住筋へ押出候間得有レ之候間、備前藩申合、速ニ出兵致シ差止候様大總督府ヨリ被ニ仰渡候付、兩藩申談、即日千住へ出張之處、此地無レ別條、松戸口ヨリ入府之聞得有レ之候間、廿四日未明ヨリ新宿之方へ轉陣、果シテ一群松戸へ留リ居候ニ付、田安鎮撫使、須本備前、弊藩應接方一同談判之處、賊無レ異議、獻ニ兵器降伏シ、事落著仕候、此徒備前藩ニテ檻護仕候、然處又一群榎戸口間道ヨリ千住へ掛リ入府之由相聞得候、依レ之弊藩兵隊千住之方へ繰廻候處、賊既ニ千住宿ニ入、糧食ヲ

遣ヒ居候得共、戰地不便成故、千住川ヲ渡リ、小塚原之方へ引揚、要地ニ手配致シ置、應接方三浦十郎、町田吉之進兩人、田安鎮撫使同伴千住へ差越、賊ノ隊長ヲ呼出シ糾問仕候處、只管恭順之旨趣申立候付、先兵器ヲ獻ジ、恭順之實ヲ可レ證ト申諭候得共、群徒不レ服、時刻遷延ニ付、弊藩應接方緊敷談判致シ、遂ニ兵器ヲ相請取、賊徒姓名人別相改、事相定候、其中薩兵一小隊爲ニ應接ニ馳付、兩藩ニテ賊徒檻護取縮仕置、請取ル處ノ賊ノ小銃百貳十挺、胴亂九十五、鎗三十一本、玉藥函一ツ、乘馬四疋ヲ大總督府へ差出シ、御使番永田良一郎へ引渡シテ請取證書請取ル、同廿五日薩兵隊引揚申候。

○脱走誠忠隊之者共多人數所々横行致シ候ニ付、爲ニ鎮靜ニ勝安房守手附村上俊五郎、石坂周造兩人差遣鎮靜行届、兵器ハ筑前町田吉之進、佐土原三浦十郎、淡路林徹之丞へ相渡申候趣ニ付、此段御届申上候、以上。

四月廿四日

田安家老 水野因幡守印

溝口伊勢守印

○按ズルニ、町田吉之進ハ佐土原藩士ナリ、本條筑前藩士ト爲スハ誤ナリ。

○同 四月廿八日、關宿、栗橋地方士民騷擾スルヲ以テ、海軍先鋒大原俊實、北陸道鎮撫副總督四條隆平ニ移牒シテ、援兵ヲ乞フ、隆平乃チ兵ヲ發シテ、之ニ赴カシム。

○北征紀事ニ云、二十八日、海軍先鋒大原侍從、書ヲ致シテ云ク、關宿、栗橋ノ地、物情騷然タリ、請フ速ニ兵ヲ出シテ我が應援ヲナセト、津田山三郎ヲシテ諸隊ニ命ジ、直ニ之レニ赴カシム。

○同 四月二十九日、内田正學將ニ京師ニ朝セントス、適兇徒管内ヲ劫掠シ、邑民騷擾スルヲ以テ、書ヲ先鋒總督ニ上リテ、其狀ヲ申シ、姑ク入覲ノ期ヲ緩ウセンコトヲ請フ、之ヲ聽

シ、命ジテ其狀ヲ京師ニ奏上セシム。

私儀、上京可レ仕旨蒙ニ勅命ニ難レ有仕合奉レ存候ニ付、速ニ上京可レ仕儀ハ勿論ニ御座候處、持病之疝癘ニテ難儀仕、長途之旅行難レ仕、不ニ取敢ニ重臣出京爲レ仕、奉レ親ニ天機ニ難レ有仕合奉レ存候、然ル處、在所下總國小見川領知最寄、惡徒共徘徊仕、農民騷立候ニ付、病中ニハ御座候得共、先達テ歸國仕、夫々鎮靜方申諭、聊人心居合候内、病氣追々快方罷成候ニ付テハ、兼テ東海道蒲原宿御陣營之節、以ニ數願書ニ委細奉ニ申上候通、家來共ニ至迄一同勤 王盡力仕候赤心ニ御座候間、抑テモ上京仕候心得ニテ、夫々用意仕、近々在所出立可レ仕ト奉レ存候折柄、今般被ニ仰渡候通、在所最寄兇黨等屯會暴行仕候ニ付、右之徒等領内ニ入込候ハ、召捕訴出可レ申、萬一多人數手ニ餘リ候節ハ、近隣各藩申合、急速擊取、領民安堵可レ爲レ仕、且又爲ニ御鎮靜、官兵御差向ニモ相成候間、應援之心得ヲ以、臨機出兵可レ仕旨被ニ仰渡モ御座候ニ付テハ、御指麾次第臨機出兵仕、兼テ奉ニ

申上候通、小藩ニハ御座候得共、此上誠實盡忠仕度志願ニ御座候、然ル處前文奉申上候通、領知近邊兜黨暴行仕候ニ付テハ、領内之者共猶又騒立、私留守中家來之者而已ニテハ、鎮靜方モ如何ト悲歎痛哭仕居、旁以深心配仕候、農民撫育之儀等此上盡力仕度、可相成儀ニ御座候ハ、領中鎮靜方行届候迄、上京之儀御猶豫被成下候様仕度、幾重ニ奉敷願候、誠恐諱言。

稻葉備後守家來 加瀬直記
良 邦印

慶應四戊辰年四月廿九日 内田 主殿頭

○總督批紙

可爲願之通事。

但太政官エ者、其許ヨリ可被相届事。

(辨事局叢書)
内田正學家記

○稻葉正善備後守ノ臣隸、勤王證書ヲ先鋒總督ニ上ル。

一勤王證書

慶應四戊辰年四月廿七日

○同 閏四月三日、是ヨリ先、福田道直ノ徒、木更津・八幡二驛ニ分據シ、勢頗ル猖獗ナリ、大總督府、備前藩兵ノ千住驛ニ在ル者ヲ遣シテ、八幡ノ賊ヲ招諭セシム、從ハズ、既ニシテ

木更津ノ賊、移テ船橋驛ニ屯シ、八幡ノ賊亦去テ之ト合シ、兵ヲ中山村ニ分チ、勢益張ス、督府乃チ筑前・津・佐土原三藩、及ビ稻田邦植ノ兵ヲ八幡ニ遣シテ、賊兵ヲ申諭セシメ、田安慶頼ニ命ジテ、其兵器ヲ收メシム、賊遂ニ命ニ從ハズ、是ニ於テ官軍、兵ヲ分テ、市川・八幡・行徳・鎌ヶ谷等ヲ扼シ、將ニ賊巢ヲ進撃セントス、是日、味爽、賊先八幡ニ來リ襲フ、官軍利アラズ、退テ真間山ヲ保ス、賊又進テ市川ニ逼ル、官軍邀ヘ撃テ之ヲ卻ク、既ニシテ鎌ヶ谷ノ官軍、進テ賊兵ヲ金杉村ニ撃チ、北ヲ追テ船橋ニ至リ、大ニ驛中ニ戰フ、適、薩摩・筑前二藩兵、警ヲ聞テ江戸ヨリ來リ援ケ、合撃シテ之ヲ破ル、賊大和田驛ヲ望テ遁逃ス、報、督府ニ到ル、先鋒副總督柳原前光、往テ之ヲ鎮セント請フ、督府乃チ前光ニ命ジテ、房・總地方ヲ鎮撫セシ

ム、先鋒總督モ亦監軍安場保和、及ビ大村藩兵ヲ下總ヨリ召還シ、渡邊清左衛門、大村藩士ヲ以テ軍監ト爲シ、竝ニ前光ニ屬セシメ、長門藩兵ヲ行徳ニ差遣シ、備前藩兵ノ數寄屋橋・鍛冶橋警守ヲ罷メ、命ジテ八幡ニ赴援セシメ、龜山藩兵ヲシテ數寄屋橋・鍛冶橋ヲ守ラシム、督府又船橋ノ諸軍ニ令シ、賊若シ歸順ノ實ヲ表セバ、其進撃ヲ止メテ、速ニ之ヲ本府ニ報ゼシム。

○岡山藩記ニ云、四月廿四日、八幡邊ヘ賊徒百餘人屯集之趣ニ付、斥候隊差遣、市川宿ニテ及ニ應接、器械可ニ請取、議定ニ相成候處、木更津屯集之賊徒、船橋ヘ轉陣、勢ヒ頗ル熾ニ有之候處ヨリ、市川ニテ應接之賊徒脱走、船橋賊徒ト合併致候。

廿五日、北總八幡ニテ、森下立太郎、賊長江原鑄三郎、加藤千三郎、渡邊儀左衛門ト應接、賊之願、兵器ヲ携ヘ江城ニ入ラン事ヲ請フ、官軍之ヲ許サズ、三日之期限ヲ立、兵器悉ク受取、謹慎之實効アラン

事ヲ督責ス、賊亦此議ヲ肯セズ、頻ニ哀訴シテ歸ル。
 同廿六日、右同人舊幕臣五十嵐清七郎ト應接、清七郎ハ武、總取締之由、同役松濤權之丞ト脫走之者ヲ鎮撫周旋致居申候、然ル處、官軍大兵相加リ候得バ、鎮撫甚難儀ニ付、此旨差含ミ吳候様トノ頼談致シ候得共、其實可レ疑件々不レ少、出先列藩會議、三日ノ期限相立、賊巢ニ迫リ、兵器可レ請取ニ一決。
 同廿七日、昨今之事情、督府へ報知致シ候處、參謀木梨精一郎殿ヨリ之口達ニ、兵器受取渡之義、期限ヲ立ルニ及バズ、輕舉之事ヲナサズ、賊巢へ迫リ、應接ヲ以兵器可レ請取、官軍ヨリ兵端開クヘカラズ、彼ヨリ砲撃ニ及ブヲ期トナシ、討滅ナスベシトノ御事ニ候。

同廿八日、當藩出張所北總八幡宿ニテ小軍議、會者、筑前藩今村瀨兵衛、伊州藩高取春朔、佐土原藩谷山藤之丞、會議之大意、明廿九日、筑藩行徳へ、當藩市川へ、佐土原藩松戸へ、伊州藩新宿進軍、閏月朔日、列藩ヨリ賊巢へ迫リ談判、兵器受取謹慎之實効

可レ見ト云。

同日、須本藩へ左之歎願書差出ス、須本藩ヨリ相廻シ候間寫、自レ是前、須本藩、大總督府之命ヲ以、市川へ出張、脫走之兵ヲ鎮撫ス、故ニ賊徒此歎願書ヲ出ス。

木更津始船橋ニ旅宿罷在候支配向持手銃御引渡可レ申旨奉レ畏候、然ル處、去ル十一日、戎器御引渡之砌、自分銃之分ハ御引渡不レ申段御掛合濟ニ相成居候趣、陸軍奉行松平太郎申聞候付、一同モ殊之外難レ有儀奉レ存候、彌謹慎罷在候、可レ相成ハ是迄濟來リ候通、格別寬典之思召ヲ以、其儘私共へ御預ケ被レ仰付ニ候様、參謀局へ御掛合御盡力被レ下候ハ、難レ有仕合奉レ存候、右申上度如レ此御座候、恐惶謹言。

四月廿八日 撤兵頭竝 江原 鑄三郎
 林 轍之丞當

同廿九日、須本藩林轍之丞、昨日之歎願書竝脫走兵糧拂底之義ヲ以、大總督府へ言上、歸報左之通。
 大總督官様仰ニ、人トシテ食ニ乏敷ハ可レ憐、脫走之

者敵ト見レバ如何ナレドモ、同ジ 皇國人ナレバ兵糧廻シ遣スベシ、又兵器直ニ 官軍へ相渡スハ人情忍ビ難カルベシ、一旦田安へ爲レ請取ニ候方可レ然、此旨申傳ヨトノ 御趣意被レ爲レ在候由、拜聽之者一同感佩仕候、其旨須本藩工藤孝太郎ヲ以、賊徒へ申談候處、賊徒愚弄之處置有レ之、孝太郎罷歸大ニ憤怒ヲ發ス、同晚突然賊長江原鑄三郎、當藩八幡之出張所へ來ル、尤今朝船橋屯集之賊徒、俄ニ中山法華經寺へ五六百人計轉陣、嚴衛之形迹有レ之、森下立太郎、林轍之丞同座ニテ、俄ニ轉陣嚴衛之處置、鑄三郎へ及レ詰問ニ候處、彼云、全ク 官軍船橋へ御討入之風說高ク、隊中動搖不レ能レ鎮撫、不レ得レ止事一所ニ相纏度考之處、幸ニ同寺有レ之、俄ニ致ニ轉陣、及ニ御案内不レ申義、全ク不念之旨斷出候付、御趣意之趣申傳へ、且申聞候ニハ、於ニ官軍ハ決テ輕舉暴動無レ之、殊ニ厚キ 御趣意モ被レ爲レ在候間、配心嚴衛致間敷旨申諭候處、彼云、大ニ抱ニ疑惑、戒心致シ候得共、只今之御詞ニテ初テ蘇生之心地致候付、最早番

兵等直ニ相撤シ候間、爲ニ御見證ニ御來臨、屯所御點檢可レ被レ下候ト申候付、器械相渡シ實効可レ相立ニ證書認候様申聞候處、左之通。

私支配向持手銃、一時田安殿へ相預候様御達之趣承知仕候、早々支配向說得致シ、右取計可レ申候、爲ニ後日ニ如レ斯御座候、以上。

四月廿九日 撤兵頭竝 江原鑄三郎 周市 花押
 森下立太郎當
 林 轍之丞當

同夕爲ニ點檢、伊州藩鷹取春朔、小池祐藏、筑前藩今村瀨兵衛、當藩森下立太郎、霜山健次郎罷越及ニ見分ニ候處、寺内蕭然、番兵爲ニ引取ニ居申候得共、隱然禍心包藏之色相見候付、同夜佐土原藩三浦十郎竝森下立太郎ヨリ、林轍之丞ヲ相促シ、賊徒之器械田安へ引渡方之義、日限御定ニ相定候様、大總督府へ伺ヒ曬ヒ度及ニ示談ニ候處、轍之丞、即夜江城へ出立ニ相成申候。

後四月朔日、早天、賊情不審之儀有レ之、鷹取春朔、

三浦十郎、森下立太郎、同行ニテ、中山竝舟橋之賊巢及ニ點檢候處、昨日示置候處置ニ齟齬之義モ有之、其儘ニモ難ニ差置、右三名同行ニテ、大總督府へ器械引渡日限之義相伺候處、今日中ニ田安へ引渡候様、御沙汰被爲在候趣、參謀海江田武次殿ヨリ、今朝林轍之丞ニ御達有之趣承知致シ候付、左様ニ候得バ、明後三日ヨリ出先各藩申談、自然賊徒及異儀候ハ、直々致應接、兵威ヲ以、談判仕候段相伺候處、參謀御聞届ニ相成申候、同晚佐土原藩鎌ヶ谷へ轉陣。

但出先各藩之軍議、今日中ニ賊徒兵器相渡不申、違約ニ及ビ候ハ、三日朝、八幡出張之當藩中山之賊巢へ進撃、爲應接、伊州藩市川ヨリ八幡へ、當藩松戸ニ屯集之兵隊八幡へ進軍、筑前藩行徳ヨリ、佐土原藩鎌ヶ谷ヨリ、直ニ船橋之賊巢挾撃、伊州藩爲應接、市川ヨリ貝塚へ進軍ニ一決。同日、兵器請取渡之義、賊巢へ督促ニ及ビ候處、田安家ヨリ一向請取方之者不罷越ト申偽リ、賊之

林 轍之丞當

○徳川慶頼家記ニ云、四月二十九日、大澤甚之丞へ海江田武次ヨリ申聞候ニハ、船橋邊屯集之撤兵隊長ヨリ、稻田藩林徹之丞へ別紙別紙ハ岡山藩記載スル所、二田隊長林徹之丞ニ贈リシ書ヲ指ス、之通書面差出候間、戎器ハ一時田安へ預ケ候様可掛合旨、徹之丞へ申付候間、其段相心得、田安へ預リ候様同人申聞ニ付、書面寫取罷歸ル。

前書木更津、船橋邊屯集撤兵隊ハ脱走ニハ無之次第柄、イサキ修理竝手銃等之儀ニ付、陸軍副總裁藤澤志摩守モ登城致シ、海江田武次へ引合候得共、手銃之儀ハ何レニモ一旦之處、田安へ相預ケ候様、尤追テハ銘々へ御戻シ相成候様可致旨申聞、且兵士江戸へ這入候ハ、各自宅ニ謹慎爲致候テ宜旨談有之、右ニ付、船橋へ説得トシテ、目付松平權之助差遣之。

閏四月初日、船橋宿屯集撤兵隊持手銃之儀、森下、林、兩人ヨリ、江原鑄三郎へ掛合候處、田安殿へ相預ケ

形勢不ニ容易ニ趣ニ相見へ、當藩市川之兵隊八幡へ繰込、其跡へ伊州藩、行徳へ筑前藩夫々繰込、斥候巡邏指出致嚴衛申候。

舊幕臣松平權之助、田安藩長田兵庫兩人、賊巢へ入込周旋致シ候趣、同夜八ツ時前後、探索之者罷歸致ニ報知候ニハ、只今中山賊巢ヨリ騎馬之者貳人、馬上ニテ私語致シナガラ、行徳之方へ走り候趣申出候ニ付、令官打寄進撃之方略申談候處、無程須本藩林轍之丞ヨリ左之書面相廻申候。

一筆啓上仕候、然バ先刻ハ不レ計拜顔、段々御厚志ヲ以、被仰聞候義難レ有存候、即刻法華經寺へ罷越、江原鑄三郎へ精々申諭候處、如何之行違ニ候哉、更ニ不ニ取用、何分盡力難レ及、依レ之無レ據罷歸リ、早々田安中納言へ申聞候上、取計方モ可レ有之哉ト奉レ存候間、此段罷出可申上ニ答之處、取急罷歸リ候義故、乍略義書中ヲ以申上候、以上。

閏四月二日

松平權之助花押
長田 兵庫花押

候儀ニ候ハ、誠ニ難レ有候旨、鑄三郎申聞書面差出候段、稻田藩ヨリ注進有之候。

右ニ付、急行田安ヨリ御人被差出、今日中ニ手銃田安へ御預リ可被成候、稻田藩へモ其段相違置申候。

御預リ之手銃江戸入ニ付、御固メ場所へハ達置候段申聞候。

先ヅ船橋之方右之通取計、木更津之方ハ、其後同様之取計ニテ宜旨申聞候、一時ニ兩方ト申候テハ隔地之儀、殊ニ多人數、彼是延引ニモ相成、自カラ混雜モ致シ候間、船橋計ト申聞候。

右之段、海江田武次ヨリ申聞、然ル處松平權之助ハ田安御使ニテ最早出張致シ候得共、今日中ト申義心得不レ申事故、尙又腰高禮司へ前書之趣委細相違、船橋へ差遣候事。

閏四月二日、松平權之助、今朝船橋ヨリ歸着、左之通書面持參、

先達テ中ヨリ、隊中鎮撫方精々骨折、日ニ増靜謐ニ

相成、大ニ安心仕候處、昨今器械御引揚之云々相發シ、是ハ素ヨリ五ヶ條中之一ニ付、速ニ遵奉可レ爲レ仕之處、右ハ去月十一日、器械御引揚之砌、持手銃之分而已御引揚ニ不レ及哉ニ奉レ伺、一同大切ニ手入等イタシ居候處、今新ニ御取揚ゲ之御沙汰、一同愕然之至ニ付、稻田藩林轍之丞ヘモ委細談判仕候處、同人ヨリ田安殿ヘ、御預ケ可レ申旨、參謀卿之御達ニ付、右ハ御請有レ之候否尋問ニ付、素ヨリ 朝廷ヘ抗命所存無レ之候間、早々取計方盡力可レ仕旨挨拶致居候、就テハ右上納方ニ付熟考仕候處、不レ殘取纏メ江府ヘ差出候事ハ、却テ隊部之モノ嫌疑相生ジ、如何ト動搖有レ之モ難シ計候間、何卒田安殿御家來中兩三名當地ヘ罷越、器械其外番人致居官軍ヘハ、御預リ相成候由御届被レ下候ハ、私共數日之盡力モ相立、且彼是動搖モ無レ之、又 朝廷ニオイテモ、素ヨリ極寬之御思召ヲ以、御所置有レ之事ニ候得バ、固其表面相立候ハ、敢テ御尋問有レ之間敷ト存候間、右田安殿家來ヘ相預ケ度奉レ存候、尤左様相成候得バ實ニ靜

謚ニ事濟、生靈之塗炭モ無レ之事ト奉レ存候間、何卒出格之御盡力ヲ以御取計奉レ願候、恐惶謹言。
 閏四月一日 撤兵隊頭並 江原鑄三郎周市花押
 右撤兵頭願之趣ニハ迎モ相成間敷、尙説得トシテ、用人長田兵庫並松平權之助同道ニテ、船橋ヘ再應被ニ差遣、二日晝後、兩人共出張、撤兵頭並談判之處、兵士之方憤發候テ談不レ届、翌三朝歸府致シ、其段西城ヘ兩人罷出、海江田武次ヘ委細申シ述之。
 ○稻田邦植從軍事蹟ニ云、四月廿九日、下總新宿、松戸、八幡邊賊徒屯集ニ付、爲ニ監察ニ出張被ニ仰付、篠原傳、林徹之丞、人數拾五人召連、流山表ニテ賊徒隊長飯塚謙助始百餘人之者共談判ニ及候處、恭順仕旨申出候ニ付、器械爲ニ指出、閏四月十一日罷歸、器械方御役方場ヘ引渡申候。
 ○岡山藩記又云、閏四月三日朝、各藩軍事掛一列ニテ賊巢ヘ相迫リ、篤ト應接、草偃之 御仁德相示シ、兵器受取可レ申含ニテ期限相待居申候處、前日ヨリ彼之舉動可レ疑件々不レ少候ニ付、見張番嚴重ニ配置、

動靜相伺居申候處、果テ曉七時半時比、賊兵共當藩陣所ヲ取圍候勢ト相見ヘ候段、巡邏之者共ヨリ追々報知致候ニ付、八幡宿ニ居合候、二小隊宿營之内ニ配置、潮合相待候處、遂ニ彼ヨリ放發致候ニ付、從容手合ニ相及ビ、一時半計激戰仕候、尤各藩兼テ手配之約御座候テ、八幡宿ヘ爲ニ應援、伊州藩市川宿ヨリ、當藩別手松戸宿ヨリ繰込候筈之處、孰モ着到遲延、孤立接戰、銃隊追々相疲レ持怵兼候勢相見候ニ付、荏苒繰揚、市川表ヘ僞引寄、松戸之兵ト合併、眞間山根陣ト相定、伊州藩ト協力接戰、遂ニ賊兵追崩シ、市川表取返シ、追テ江戸ヨリ繰出シ候生兵砲手一分隊ト二番銃隊諸共敗兵追立、同夜ハ中山ヘ屯戍、當日戰爭ニ相預リ候兵隊ハ、松戸渡口竝ニ新宿兩者ニ分屯、翌四日中山ヘ繰込、全隊合併御手配相待申候、死三人銃隊花房喜三太、杉山喜之介、信正卯平、傷四人銃隊令官霜山健次郎、彦右衛門、荻野改次、角南三郎、藤堂高潔家記ニ云、船橋、中山屯集之賊徒、追々須本藩ヨリ談判ニ及ビ、既ニ閏四月朔日、二日、右

兩日之内器械田安殿ヘ相渡候筈ニ相成候處、萬一兩日期限ヲ外シ相渡不レ申候節ハ、備前、佐土原、筑前並繁藩兵隊相進、賊巢ヘ罷越談判之上、器械請取可レ申、若相渡不レ申候ハ、直様進擊仕候様 大總督官ヨリ御沙汰被ニ仰出候ニ付、各藩難レ有奉ニ敬承ニ候、依レ之、兵隊之内ニ小隊、先市川町ヘ爲ニ相進、置候處、二日夕ニ至候テモ器械相渡候様子モ無レ之ニ付、則四藩會議之上、夫々軍配仕、明曉賊巢ヘ相迫リ談判仕候様申合用意仕候處、三日拂曉、賊徒ヨリ八幡、備前藩並繁藩斥候之爲ニ指出置候止宿所取圍ミ、大小砲發ニ及候ニ付、不ニ取敢ニ少々兵士共備前藩ニ相加リ砲發罷在候處、兼テ市川ヘ先達テ繰込置候ニ小隊之内、藤堂萬勝ノ手、兼テ約定モ御座候ニ付、六時頃市川町相發、途中ニテ右砲聲承リ、直接同所近邊ヘ駆付、南之方梨子畑ヘ兵隊相配リ、暫時砲戰仕候、然ルニ賊徒トモ兼テ相謀リ候義ト相見、三方ヨリ砲擊放火仕候ニ付、一先備前藩諸共市川迄繰引ニ引揚ゲ、眞間山ハ要地之儀ニ付、同所ヘ取上ゲ、

備前藩ト併合仕砲戰用意仕候、此節市川町ニ罷在候二小隊之内、若原一郎左衛門手モ同時同所相發シ、兼テ約定之儀ニ付、貝塚ヨリ中山法華經寺後へ相廻候心得ニテ、進軍仕候テ國分山ヲ東へ廻リ候處、賊徒既ニ間近ク進ミ居ニ付、直様砲發仕候處、賊徒ヨリモ嚴敷砲擊仕候ニ付、暫時打合、追々打退ケ進軍仕候テ、乍聊分捕等モ仕候處、敵ハ遠引退、要地へ屯候付、其儘國分山ヲ取守リ滯陣罷在候、其頃新宿ニ罷在候中備之兵二小隊竝大砲隊其餘組士等、市川之川前迄駆付、渡場相越之處へ、最早賊徒烈敷進來之趣ニテ、備前藩太田萬次ヨリ申來候ハ、同藩八幡ヨリ苦戰仕引揚候付、弊藩ニテ此處ヲ持切防戰イタシ吳候様頼ニ付、不取敢大砲一門ハ眞間山道へ相備へ、一門竝大砲護兵組士共市川町へ相進、餘之兵隊ハ、左右へ分配仕候、然ル處、市川町へ相進候兵隊ハ、最早敵間二丁程ニテ嚴敷砲戰、尖榴彈三發、鐵葉彈三發相打候處、賊徒大ニシラミ、餘程死傷モ有之候様見受候へドモ、左右之兵隊土地不案内故、應援

合期不仕、賊兵共市川町人家後廻リ、横合ヨリ烈敷打立候ニ付、俄ニ死傷モ出來頗苦戰仕候へドモ、何分横合之砲擊ニテ無シ據市川町高札場迄引揚ゲ、前左右へ分配仕候兵隊ハ眞間山へ引揚ゲ、中道之大砲隊ハ再市川渡場ニ有合候船へ打乗、中流迄漕出候處、賊ヨリ頻砲擊候付、船中ヨリモ同様砲發仕候内、水棹等モ取流シ、手負等モ出來候へドモ、漸西岸へ漂着仕候付、船ヲ繫ギ土手裏へ打越候處、追々本隊モ相加リ、大小砲打掛ケ嚴敷戰爭仕候、右ニ付當敵ハ不申及、眞間山近邊へ相廻候賊勢モ大ニ相弛引色ニ相成候處、追々進撃、市川及ビ八幡迄モ相進候處、何分孤軍且勞兵ニモ有之候付、一先引揚ゲ申候、然ル處、江戸表ヨリ薩州藩爲ニ應援ニ進來、直様賊巢中山法華經寺へ進撃仕候趣ニ付、則弊藩ヨリモ斥候相添、中山へ爲ニ相進候處、薩州藩ヨリ申聞候ニハ、弊藩兵隊モ同所へ繰込應援イタシ吳候様申聞候旨申來候付、疲勞之兵ニハ候へドモ、二小隊程繰出シ申候、尙本隊之儀ハ市川ニ留屯罷在候、死一人組士菅三郎傷六

大砲隊小頭佐々木宮次郎、組士小林鑊、鑊後終人ニ死ス、國府清吾、龜尾榮吉、雜人寅松、嘉七

○島津忠寬家記ニ云、下總國へ脱走ノ徒屯集之間へ有之ニ付、兵隊ハ千住宿へ滯陣シ、竊ニ賊ノ動靜ヲ探索ス、四月廿九日、須本應接ノ命ヲ受ケ、八幡宿へ出張ス、備前、伊賀、佐土原等ノ兵隊モ同所へ可ニ相會ニ旨、大總督府ヨリノ令ヲ受ケ、翌閏四月朔日松戸へ轉陣、於ニ八幡、須本應接ノ處、賊徒專ラ謝罪入府之儀歎願スト雖ドモ、兵器之儀ハ徳川ノ物ニアラス、銘々ノ私有物ナレバ相渡スコト不レ叶段申募リ、穩便ニ可レ濟勢ニアラス、依之ニ三藩申合セ、今一應三藩ニテ應接可レ致哉之旨、大總督府へ申出ル、然ルニ田安鎮撫使須本へ猶又説得方被レ命、翌二日應接ノ處、賊徒不ニ承服、於レ此、八幡口備前、貝塚村へ伊賀、行徳口筑前、鎌ヶ谷佐土原ト各持口ヲ定メ、今一應備前、伊賀、佐土原三藩ニテ應接ニ及ビ、彼レ若シ不ニ承服ニ時ハ、八幡備前陣ニ於テ號砲ヲ發スルヲ以テ、總軍、賊ノ本陣船橋へ追撃スベキノ軍議一決シ、依レ之、佐土原兵隊鎌ヶ谷へ轉陣、三浦十郎應接方ト

シテ八幡へ出張、同三日鷄明、三藩之應接方備前陣へ集會ノ處、賊徒不意ニ備前陣へ襲來砲發ス、伊賀陣へモ同ジク襲來砲發ス、然ルニ鎌ヶ谷ニテハ此ノ砲聲ヲ號砲ト心得、疾速兵ヲ進テ船橋へ向フ、時ニ賊徒一小村ノハヅレニ備ヲ立、胸壁ヲ築キ、我兵ノ寄スルヲ待ツ、銃隊進テ攻撃ス、賊モ亦發射シ、五ニ砲戰ス、砲隊烈シク發砲、彈丸破裂、賊多死傷ス、依レ之、彼狼狽、村中へ逃ル、銃隊進テ之ヲ追フ、賊盡散亂、是ニ於テ兵ヲ集メ、斥候ヲ以テ賊ノ動靜ヲ偵ルニ、金杉村麥圃中ニ、賊凡八百人餘撤兵ヲ布キ、處々胸壁ヲ設ケ待ツト、則銃隊ヲ左右ノ麥圃中ニ撤隊ニ備へ、大砲ヲ道ヨリ進メテ銃砲齊シク攻撃ス、衆寡不レ敵、敵ノ彈丸雨ノ如シ、味方頗ル苦戰、各必死トナリ、進ムアツテ退クナシ、然ルニ賊兵一手、味方ノ後へ廻リ發砲ス、味方纔一小隊ノ兵ナルヲ以テ後ニ備ル能ハズ、之ニヨツテ兵器彈藥方等死力ヲ盡シテ之ト戰フ、此時戰兵袁毛次右衛門、夫卒已之助、當吉戰死シ、戰兵白阪政兵衛傷ス、時ニ賊頻リ

ニ進ム、白砲隊賊ノ近ヅクヲ見發砲ス、彈丸破裂、賊死傷アリ、餘盡ク遁逃ス、是ニ於テ總軍閣ヲ發シ、齊シク前面ノ敵ヲ撃ツ、賊ノ隊伍遂ニ亂レ、賊大敗、村ヲ指テ走ル、銃隊急ニ之ヲ追フ、賊村中ニ止ルヲ得ズ、船橋ヲ指テ敗走ス、此ノ戰殊ニ苦戰、兵士大ニ疲レ、村ニ入テ賊ノ捨タル糧食及酒菓ヲ得、各氣力ヲ養フ、然ルニ斥候又馳來テ曰フ、賊船橋宿ニ屯ス、然シテ兵ヲ宿ノ左ヘ出シ、我軍ノ來ヲ待ツ、然リト雖ドモ備未ダ全カラズト、時ニ此ノ日風烈シクシテ敵風上ニ在リ、故ニ我レ攻ルニ不利ナリ、因テ宿外ノ賊ヲ捨テ、賊ノ本陣船橋ニ入り、己レ要地ヲ占メ、ンコトヲ謀リ、急ニ馳テ船橋ヲ攻ム、先ヅ砲隊ヲ正面ノ大道ヨリ進メ、銃隊ヲ二ツニ分チ、一手ヲ宿ノ左ヘ備ヘ、一手ハ右濱手廻シ、大砲ヲ發シテ賊ノ本陣ヲ撃ツ、賊周章、砲隊烈シク發射シ、又交ルニ小銃ヲ以テス、賊防戰スト雖ドモ急ニ本陣ヲ襲ハレ、殊ニ左右ノ銃隊一時ニ起リ攻撃スルヲ以テ、賊大ニ敗走ス、然リト雖ドモ尙殘賊町家ニ潜伏、折ヲ以テ

宿中處々ニ出沒シ、戰止ムベキニアラズ、味方寡兵ヲ以テ今曉ヨリノ戰ニテ兵士多クハ勞レ、又賊ノ大勢返シ來ランモ計ル可ラズ、仍テ火ヲ宿ニ放ツ、風烈シキヲ以テ宿中一時ニ燃ヘ上リ、炎煙天ヲ覆フ、始宿外ニ備シ賊等返シ戰フ、味方要地ニ在リ、銃砲交發、賊又大敗、是ニ於テ長驅ヲ禁ジ、兵ヲ濱手ヘ會シ、時ニ筑前勢船橋宿外ニ於テ殘賊ト接戰苦戰ニ及ブヲ以テ、援兵ヲ乞フ、味方寡兵ナリト雖ドモ一分隊之ニ趣ク、戰ニ及バズシテ返ル、此日ノ戰ヒ寡ヲ以テ衆ニ當ルヲ以テ、列ヲ離レ首級ヲ揚ルヲ禁ズ、故ニ敵ノ死亡點檢ニ違アラズト雖ドモ、進擊中斃レタル者ヲ以テ推スニ、凡百人餘ニモ至ルベシ、時ニ薩二小隊爲一援兵馳來ル、此夜濱手ヘ陣シ、尙殘賊ヲ討センガ爲メ、翌四日、薩ノ援軍ト檢見川ヘ進ム。
○柳原前光事蹟ニ云、後四月三日、昨夜來舟橋ニテ備前、藤堂兵屯集、賊ト戰フ、余登城、大總督王ニ謁シ、征進ヲ請フ、王許レ之、馬具一式ヲ賜ヒ餞レ之、竝ニ諭シテ房、總之列藩命ニ叛スルモノ、令ヲ待タ

ズシテ誅伐スルノ權ヲ授ク。

○前光帆誌ニ云、閏四月三日、今朝味爽、船橋邊屯集賊徒與備前藩戰爭相始候趣注進、依レ是諸兵爲ニ後接ニ繰出畢、未ニ半刻ノ斥候來、右藤堂、備前等兵合戰勝利、追討之趣也、兵端相開候ニ付、余明日辰半刻出馬、千住ヘ轉陣、願之通被レ命、尙又從ニ大總督馬具一式賜レ之、常、房ニ總等鎮撫討伐大兵使令可レ期ニ成功ニ被レ命、畏入候也。

安場 一平ヘ

明四日、東南爲ニ鎮靜、副將千住驛ヘ進陣候、就テハ當今參謀木梨精一郎一人ニテハ、彼是多務行届兼候條、其方千住驛ヘ立歸、萬端輔佐可レ有レ之事。

猶、大村藩渡邊清左衛門ニモ今般申付候儀有レ之間、諸事申談、至當之處置可レ有レ之事。

○ 後四月三日

總督 (東海道先鋒記)

大村藩 渡邊清左衛門ヘ

房總戰亂記

明四日、東南爲ニ鎮靜、副將千住驛ヘ進陣候、就テハ、其方同驛迄立歸候上ハ、軍監參謀之心得ヲ以、安場一平申談、萬事輔佐可レ有レ之事。

後四月三日

總督府 (東海道先鋒記大村藩記)

○四日渡邊清ヘ再達書

東征軍監被レ仰付、上總國八幡村邊ヘ出張被レ仰付候事。(東海道先鋒記渡邊清履歷書)

○請西藩主林忠崇昌之助房總ノ賊遊擊ニ應ジ、其治所ヲ去リテ富津ヲ脅略ス、明日、前橋藩、書ヲ先鋒總督府ニ上リテ、富津脅略ノ狀ヲ申ス、忠崇ノ臣隸江戸ニ在ル者モ亦、忠崇賊兵ノ脅迫スル所ト爲リ、遂ニ守ヲ失フノ狀ヲ申ス。

○林忠崇私記ニ云、慶應四戊辰年閏四月三日卯ノ刻過、上總國望陀郡請西陣屋出發、其刻軍令狀申渡。

拵

一徳川御家再興、基本心得違無レ之、五常之道堅相

守、假ニモ暴行致間敷事、
 一令無シテ猥ニ進退スベカラズ、
 一軍議一切他言スベカラズ、
 一滯陣之節雜談無用、總テ何事ニヨラズ誹謗致シ、
 人氣惑亂爲レ致間敷候事、
 一遊撃隊ハ一身ノ如ク相心得、決テ失禮有レ之間敷事、
 一組合隊五ニ危急ヲ救合、私之功ヲ争間敷事、
 一敵隊長以下之首級ハ不可レ揚、全功第一之事、
 一令ヲ待ズシテ分捕無用之事、
 一祕事ヲ承候敷、心付候儀ハ、早速隊長ヘ可ニ申出、
 事、
 一陣中禁酒、喧嘩口論堅ク停止事、
 右、軍令之條々於ニ相背ハ、速ニ令ニ誅戮ニ者也。
 慶應四年閏四月
 一藩兵凡七拾人、遊撃隊三十六人、
 一軍令讀畢リ大砲一發シ、藩兵竝遊撃隊合併、櫻井村海岸畑澤ヨリ、曲リ坂通り山手ヲ富津陣屋ヘ、

原註、前橋藩固所 撤兵隊並佐貫藩一小隊ハ、櫻井村ヨリ人見山下通り富津ヘ、山海兩道ノ兵、陣屋ノ表裏ヘ廻リ、兵威ヲ張り、遊撃隊伊庭八郎、人見勝太郎ノ兩士、單身獨歩、富津ノ陣屋ニ至、與力ヲ乞フ、前橋藩士之ヲ諾ス、サレドモ藩主命ナキコトナレバトテ、步卒廿人ヲ脱走ノ體ニシテ我兵ニ合併セシメ、陣屋ヲ明ケ渡シ、外ニ大砲六門、小銃拾挺、金五百圓、糧米若干ヲ贈ラル、
原註、金ハ遊撃隊ニ配分、穀ハ撤兵隊ニ配分
 應接濟、藩兵並遊撃隊宿内ヘ繰入一泊ス、滯陣中、下總國船橋邊ニテ撤兵隊官兵ト戦争、兵力足ラズ、我兵合併ノ撤兵ヘ援ヲ乞ヒ來リケレバ、此處ヲ佐貫藩ヘ託シ、撤兵隊ハ即時ニ船橋ヘ向出立、一同四日富津滯陣、昨日掛合置タル器械金穀、受取濟ケレバ明朝出發ノ事ニ決ス。
 一同五日辰ノ刻富津出發。

○阿部正恒家記ニ云、閏四月六日三日ノ誤リ我兵、賊輩林昌之助ト合兵シ原註林家隊長我隊長ト應接スルコトナシ前橋藩衛スル富津陣屋ヘ向出立、

津部ノ陣營ヲ襲フ、原註、總兵員不詳事故ナク營ヲ開ク、原註前橋藩ノ應接ニ關係セズ、陣代姓名不詳即夜解兵歸藩ス。
 ○按ズルニ、八日ニ至リ忠崇等勝山・館山ニ藩ヲ劫略ス、其條ヲ參看スベシ。

○ 一昨二日夕、徳川脱走人川端官藏・橋爪徳之進・並川分次郎ト申者、上總國木更津表ヨリ富津陣屋ヘ罷越、申聞ニハ、兼テ尊藩之御主意ハ拙者共相心得居候得共、當節各藩悉ク一定同意ニテ出兵、其外米金等夫々力ヲ盡シ相送り候處、於ニ尊藩ハ聊左様之儀無レ之故、各藩共甚以不平、就テハ明朝ハ人數差向候ニ付、御心得ニ御咄申候旨申聞候由、何分火急之儀、評議仕候内追々人數ニ手ニテ繰込、弊藩ヨリモ人數不ニ差出候ハ、直ニ戦争可レ及勢之處、何分彼地詰人數モ老幼共ニテ四五拾人位之事ニテ、迎モ萬々一モ勝利之道無レ之而已ナラズ、弊藩ヨリ兵端開候テハ實以奉ニ恐入候ニ付、無レ據不レ得レ止任ニ其意、二十人計差出シ候事ニ相成候旨、先刻不ニ取敢ニ申越候、何

分差掛候儀、爰元ヘ往復之間モ無ニ御座、右之次第ニ立至申候、尤彼地之者共、只今之處ニテハ外ニ相替之所行モ無ニ御座、趣ニ御座候、右之趣ハ徳川參政衆ヘモ申談、先日之通鎮靜方申談候事ニ御座候、此段申上候。

松平大和守家來
 岩倉彌右衛門
 (東海道先鋒記)

○前橋藩老臣白井宣左衛門上申書
 富津陣屋付領分木更津村ヘ、去月十二日十三日頃ヨリ、徳川家脱走人之由、凡三千人程ト相聞、同村ハ勿論最寄村々ヘ屯集之上、兵食賄等之談御座候ニ付、其節於ニ江戸表ニ御届申上置候通、徳川家脱走人故同家ヘ申談、鎮靜方精々可レ仕見込之趣申上、參政始ヘモ得ト談判仕候趣之處、速ニ松平太郎爲ニ鎮靜ニ罷越、其以來追々領分外ヘ立退、相殘候者モ穩ニ屯集罷在候處、如何相心得候哉、俄ニ當月三日、右脱走兵器ヲ以相迫、陣屋四面ヲ相圍、強談ニ及、異儀ニオヨビ

候ハ、直ニ可ニ討入ニ形勢ニ相見ヘ、然ル處、右陣屋詰合之儀ハ、地方掛金穀取扱之役々、其外人數ハ纒ナラデハ無ニ御座ニ候處、近頃爲ニ取締ニ家老壹人罷越候儀ニテ、手薄至極ニ御座候間、兵力ヲ以被ニ相迫ニ候得バ、實ニ致方無ニ御座ニ候、兼テ一統心痛罷在候儀ニハ候得共、前條之如ク、餘リ過激之次第ニ付、中ニハ怒ニ堪兼、事敗ニモ可レ及模様ニ付、家老上ニテ相制、自然右邊ヨリ兵端相開キ候テハ、尙御時勢ト申、御總督御近傍之儀、實以奉ニ恐入ニ候ニ付、何卒穩ニ取扱申度ト種々及ニ談判ニ候得共、何分ニモ脱人過激之應答ニテ、彼是手間取候得バ暴發モ可レ仕、萬一兵端相開候テ、此節柄之儀恐入、加之家中妻子共、陣屋最寄ヘ假ニ住居仕置候得共、凡八九百人ニモ可レ有レ之、夫ノミナラズ農民共モ如何様ノ災害ヲ請候哉モ難レ計、是又如何ニモ難レ忍儀ニ御座候得バ、一時銳氣ヲ避候迄之策略ニテ、脱人之望ニ爲レ任候上、鎮靜方モ可レ有レ之ト家老之指揮ニ隨、一ト先陣屋引拂申候、然ル處、脱人之儀モ追々引退、凡百人

程モ相殘罷在候處、當八日一同俄ニ退散仕候、扱右一條奉レ對ニ天朝ニ候テハ勿論之義、隨テ大和守ヘ對候テモ、寸分之申譯モ無ニ御座ニ候ニ付、指揮候家老小河原左宮ト申者割腹仕、赤心ヲ表シ候次第ニ御座候、御憐察被ニ成下ニ度奉レ存候、此段御尋ニ付申上候、以上。

閏四月(東征總督記)

○本條、上申ノ日ヲ俟ス。

先達テ御届申上候昌之助在所上總國請西最寄ヘ屯集仕候脱走人等、追々立去候様子ニ御座候旨申上置候處、又々立入、終ニ家來共之内何ヘ欺誘引被レ致候哉ニ風聞御座候、依レ之、此段不ニ取敢ニ御届申上候、委細之儀ハ彼地ヘ家來共之内罷越取調、猶又御届可ニ申上候、以上。

林昌之助家來

閏四月四日

野口 錄藏

○再申書

昌之助在所上總國請西最寄ニ立入候脱走人等ニ、家來共ノ内誘引被レ致候哉之風聞御座候ニ付、爲ニ取調ニ差遣候家來共罷歸申聞候ハ、當家之儀ハ兼々官軍尊奉御合體之儀ニ付、脱走人不意ニ襲候ハ、何様ニモ苦心相防、御合勢可ニ相待ニ誓之處、豈計哉、去ル七日、姉ヶ崎邊ニ戰爭有レ之、右敗兵共俄ニ襲來仕候處、前件之通家來共被レ誘引、跡纒之人數、殊ニ孤立同様之地ニテ、御軍勢御合體之機相待候力相絶、無ニ餘儀ニ陣屋一先立拂申候、然處、右雜沓之餘リ、陣内何レ之方ヨリカ火ヲ失ヒ出火ト相成、終燒失仕候趣ニ御座候、依レ之、此段御届申上候、以上。

林昌之助家來

閏四月十一日

野口 錄藏

(以上東海道先鋒記)

○同 閏四月四日、先鋒副總督柳原前光、出テ千住驛ニ次ス、濱松藩兵之ニ屬ス、是日、先鋒總督府、薩摩藩兵ニ命ジテ、行徳驛ニ赴援セシム。

○先鋒諸軍ヘ達書
東南爲ニ鎮撫ニ副總督御進軍候、就テハ明日辰ノ刻 御出馬、千住驛ヘ御泊軍候條、爲ニ心得ニ申達候事。

後四月三日

總督府 參

(岡山藩記)

○東海道先鋒記ニ云、閏四月四日、副將柳原侍從殿、東國爲ニ鎮撫ニ御出陣、今夕千住驛御泊之事。

○總房鎮撫日誌ニ云、後四月四日、頃日來下總舟橋邊、徳川脱走之輩暴論興起屯集候ニ付、段々寛典之趣、出張官軍ヨリ談判有レ之候處、昨三日曉來、彼ヨリ砲擊及ニ戰爭、依レ之、征伐且爲ニ鎮定、柳原前光進軍之事、大總督宮之奉レ命、直ニ江戸表雷發、午半刻着ニ陣于千住驛。

○井上正直家記ニ云、弊藩、柳原殿御中軍、前々之通相勤之、同卿總房ヘ御進發被レ命レ之、閏四月四日東京御發。

薩州 藩へ

下總國行徳邊ニ於テ、筑前勢交戦之處、大敗候ニ付、今日長藩爲ニ赴援、彼地へ分隊致候條、其藩當地留屯之兵不レ殘彼地へ進陣、長藩合兵必勝之配運可レ有レ之事。

後四月四日

總督

(東海道先鋒記)

○慶應出軍戦狀ニ云、上總國姉ヶ崎邊へ江戸脱走等ノ賊徒蜂起イタシ候付、閏四月四日同所へ出發、海道ヨリ相廻リ、檢見川へ上陸、追々進軍イタシ、八幡迄押行候。

○同 閏四月五日、是ヨリ先、堀田正倫謹ヲ大總督府ニ獲テ、京師ニ在リ、是ニ至リ、封境騷擾スルヲ聞キ、書ヲ朝ニ上リ、赦ヲ獲テ藩ニ歸リ、之ヲ鎮輯セント請フ、批シテ督府ノ處分ヲ保タシム、是日、内國事務局、書ヲ督府ニ致シテ其事ヲ告グ。

○内國事務局、大總督府ニ遺ル書。

愈御清榮令ニ恐賀候、抑別紙之通願出候ニ付、附紙之通返答致候間、爲ニ御心得ニ申入候、右ニ付御免ニ相成候ハ、早々御報知可レ給候、吳々モ此方ニテ被レ免候テハ不都合ニ候間、得ト御取糺之上被レ免候ハ、早々御報知可レ給候、仍早々如此候也。

後四月五日

○別紙

當節相模守領分近邑ニ、賊軍屯集致候哉之風聞有レ之、心痛仕候ニ付、早速歸國、賊軍鎮定仕度存意ニ候得共、何分謹慎罷在候テハ、兎角指揮等モ不行届ニテ深痛心罷在候、依レ之、何卒謹慎被レ成下御免、賊軍追討被ニ仰付候ハ、深畏可レ奉存候、此段偏ニ奉ニ哀願候、以上。

堀田相模守重臣

閏四月四日

倉次 甚太夫
佐治三左衛門

○批紙

相模守儀、大總督府ヨリ謹慎被ニ仰付候儀ニ付、

御免之儀ハ大總督府申立ニ無之候テハ難レ被レ及ニ御沙汰候處、右領分近地賊徒屯集之由ニ付、鎮定指揮方深痛心致シ候趣、尤之儀ニ候、依テハ相模守進退之儀、大總督府へ掛合之上、早々御沙汰可レ被レ仰出ニ付、領地鎮定指揮之儀ハ精々重役共へ申付、勉勵可レ致旨被ニ仰出候事。(東征總督記)

○房總地方騷擾スルヲ以テ、海軍先鋒大原俊實、書ヲ大總督府ニ致シ、軍艦ヲ發シテ、大多喜城ニ據リ、以テ傍近ヲ鎮撫セント請フ、督府令シテ後命ヲ待タシム。

○大原俊實大總督府ニ遺ル書

側ニ承候得バ、田安中納言、大久保一翁、勝安房ヲ昨二日城中へ被レ爲レ召、過日來忠誠之段御褒詞賜リ、以後三人へ江戸取締都テ御委任被レ爲レ在候趣、非常御寛大之御所置、於ニ徳川諸臣ニ別テ畏候ト存候、就テハ、當地鎮撫之儀モ即時ニ行届可レ申候得バ、最早御配慮ニハ不レ被レ爲レ及ト奉存候、于茲過日來徳

川家脱走者、房總之間所々ニ屯集仕、未ダ鎮靜ニ不レ屬、既ニ今日利根川ニ相迫及ニ戦争候ハ、彼之巢穴房總之間ニ有レ之候故之儀、且大田喜ハ先達テ歎願モ仕候通開城、于今於ニ菩提寺ニ謹慎罷在候ニ付、賊兵數其虚ヲ伺、甚以心痛仕候趣ニ候得バ、仰願ハ總房爲ニ鎮撫進兵被レ命候得バ、深以畏存候、左候得バ以ニ肥前軍艦ニ速ニ進軍仕候、大田喜城ニ入、右ヲ根居トシ、其ヨリ出兵、屯集之賊徒ニ教諭相加、朝廷寛大之 叡慮ヲ説得仕、且不日ニ徳川家名相續被ニ仰出候旨等申諭候得バ、必疑惑モ相解、慶喜恭順之意ニ基歸順仕候ハ、不レ出ニ旬日ト奉存候、猶亦不レ用ニ 朝命ニ疾有レ之候ハ、急度征討仕、所謂恩威並行、房總之間鎮撫ニ相屬候ハ、於ニ武州ハ猶以御安意之儀ト愚察仕候間、此段御許容之程伏奉ニ希入候也。

閏四月三日(東征總督記)

○大總督府答翰

今日御評議、房總邊へ軍艦御差廻之義、暫御見合、

今一應 御沙汰可有之候、夫迄御猶豫可被成、大總督官被命候、仍早々申入候也。

閏四月五日(東征總督記)

○七日に至リ、督府、俊實ニ令シテ、軍艦ヲ房總近海ニ發遣セシム、參看スベシ。

○船橋ノ敗賊、木更津地方ニ逃走ス、薩摩、佐土原二藩兵直ニ進テ之ニ向フ、先鋒總督府、乃チ薩摩、長門、津、備前四藩兵ノ船橋、市川、行徳等ニ在ル者ニ令シテ、速ニ木更津ヲ進撃セシメ、津藩兵ノ關宿ニ在ル者ヲシテ、其地ヲ鎮撫セシム、又大多喜處分ノ令ヲ副總督ニ傳ヘ、藩主大河内正質ヲ忍藩ニ幽シ、副總督ヲシテ假ニ其城邑ヲ管セシム。是日薩摩藩兵ヲ宇都宮ヨリ召還ス。

慶應出軍戰狀ニ云、本府三番隊閏四月三日、船橋宿ニ宿ス、同四日進軍、賊跡搜索、其據地ヲ得ズ、同

五日、下總國佐倉ノ領主堀田相模守城下ニ進ム、國論ノ方向ヲ察シ、又賊ノ巢窟ヲ探リ、更ニ勦鋤ノ策ヲ決シ、且金穀ノ用ヲ辨ゼシメン爲也、同六日同國千葉へ轉陣。

○島津忠寬家記ニ云、一番砲隊、同銃隊、閏四月三日船橋へ宿陣、猶殘賊可追討旨、薩藩援軍申合せ、同四日檢見川へ進軍、同五日佐倉へ進軍、此處ニテ探索之處、木更津ヨリ眞里谷ノ方へ賊軍本陣ヲ構へ候由、就テハ、殘徒此所ニ潛居候哉ト相量リ、同六日千葉宿へ進軍、然處、三日之戰爭、大總督府へ相聞得、速ニ御追討可有之トノ事ニテ、副總督御出軍之趣注進有之、薩、長先鋒トシテ出軍、大村藩、野州ヨリ會軍、薩遊撃隊爲ニ應援會軍。

伊州藩へ船橋之賊黨、木更津地方へ引退候趣ニ付、佐土原・薩州兩藩之兵隊、昨日既ニ長驅進陣之由、就テハ其藩之兵モ可然分隊致シ、速ニ進軍、賊巢芟夷之配運可有之候事。

後四月五日

總督□

備前藩へ船橋之賊徒木更津地方へ引退候趣、就テハ佐土原・薩州兩藩之兵、尋テ長驅進陣候條、其藩ニ於テモ諸陣申談、可然分隊致シ、急速進軍之上、賊巢悉ク芟夷可有之候事。

後四月五日

總督□

長州藩へ船橋之賊軍木更津地方へ引退候ニ付、佐土原・薩州之兵隊、昨日既ニ長驅進陣候、其藩ニ於テモ行徳邊之形勢略見込相付候上ハ、更ニ不躊躇、昨日出張薩藩ト合兵、速ニ進軍、賊巢一舉ニ顛覆可有之候事。

後四月五日

總督□

薩州藩へ其地行徳ヲ着陣、船橋邊之形勢略見込相付候上ハ、長

藩合兵、速ニ進軍、木更津邊賊軍之本巢一舉ニ刈夷可有之候事。

後四月五日

總督□

(以上東海道先鋒記)

關宿出陣 伊州藩へ其地方近隣之各封、近日猶又不穩之聞有之、殊ニ關宿ハ其地方之要所ニ候條、猶此上精々注意鎮撫可有之候事。

後四月五日

東海道總督御印

(東海道先鋒記)

藤堂高潔家記

愈御清健御在陣珍重ニ存候、然バ下總國大田喜一條ニ付別紙之通京師ヨリ 大總督府へ御處置書到來、今日城中ニ於テ御達相成候間、其御出先ニ於テ、別紙之各件夫々御取計可有之候。

大河内豊前

右、松平下總守へ御預之事。

同人領地

惣家來 帶刀之者

右、遂テハ取締方御處置可レ被レ爲レ在候得共、當分之處柳原侍從出先ニ於テ可レ然取締可レ有レ之事、右之段今日城中遂ニ僉議ニ候間、此旨御承知可レ被レ成候也。

後四月五日

實

梁

柳原侍從 殿(東海道先鋒記 總房鎮撫日誌)

右、銘々於ニ居宅ニ差控之事。(東征總督記)
○柳原前光復書一通
御安泰令レ賀候、陳バ上總大田喜處置之儀御達之趣敬承候、尙早速取計可レ仕候、此旨 大總督官へ言上願入候中略右御受如レ此候也。

閏四月六日

猶以前光、今六日大和田一泊、明七日佐倉へ定陣候也。

○別紙

徳川慶喜反逆ヲ相助ケ候重罪、尤巨魁ナルハ大河内豊前、竹中丹後等ニテ、屹度御所分可レ被レ 仰出ニ付、當人竝家來等ヨリ差出候願書類ハ、一切御取揚無レ之様被レ 仰越ニ度、且左之通大總督府ニ於テ先ヅ御所置相成可レ然乎。

大河内豊前

口述

右、諸侯へ御預之事。

同人領地

右、先被ニ召揚、諸侯へ取締之事。

同人家來 重立候者

右、大多喜於ニ寺院ニ謹慎之事。

○ 愈御剛泰珍喜之至ニ存候、陳バ大河内豊前、忍藩へ

後四月六日(以上東征總督記)

被レ預候上、忍藩ニ於テ取扱向之儀、當今之御時節柄ニ候得バ、可ニ相成ニ丈輕易之仕向ニテ、無益之用費無レ之様御申付有レ之様、大總督府御沙汰候間、此段申入候、猶委曲吉田藩遊佐十郎左衛門へ合置候間、御傾聽可レ被レ成候也。

後四月十二日

實

梁

柳原侍從 殿(東海道先鋒記)

○按ズルニ、十一日ニ至リ、副總督、正質ヲ佐倉藩ニ幽ス、事ハ房總戰記ニ詳カナリ。

野州應援 薩州藩

軍議有レ之間、出張之兵速ニ引揚、一應歸陣可レ有レ之事。

後四月五日

東海道 總督

(東海道先鋒記)

○慶應出軍戰狀ニ云、本府ニ番隊閏四月六日、野州雀ヶ宮へ着ス、翌七日總督府ヨリ 御軍議之旨有レ之、兵隊東京へ引揚候様、御使番ヲ以テ御達相成

房總戰亂記

筑前藩

行徳出張之人数、早々兩國元陣所へ引揚、尙於ニ行徳ハ、爲ニ斥候ニ探索人数指出、時變報知可レ有レ之、大總督官被ニ 仰出ニ候事。

閏四月六日

大總督 參

(黒田長知家記)

○長知家記ニ云、閏四月七日、兩國出兵、矢野安太夫ヨリ、昨六日、參謀卿ヨリ兩國回向院迄人數引揚候様御達ニ付、今朝行徳出立、回向院へ致着陣候、尤爲ニ斥候ニ小隊ハ行徳へ指置候旨、御使番へ相届。

○同 閏四月七日、大總督府、海軍先鋒大原俊實ニ令シテ、軍艦ヲ房總近海ニ發遣シ、且再ビ兵ヲ發シテ、深川ヲ警守セシム、俊實書ヲ致シテ、深川警守ヲ辭シ、親カラ諸艦ヲ率キテ、房總ニ赴カント請フ、是日、俊實移テ高輪ニ陣ス。

○大原俊實、大總督府ニ遺ル書

御沙汰之貳ヶ條令ニ敬承候、然ル處、過刻轉陣之節、途中ニテ無禮之者一人召捕候ニ付、詰問爲致候處、實ニニ容易ニ工ミ有レ之候證書、懷中ヨリ探出披見仕候得バ、實ニ今晚明日之處甚以如何敷被察候、且又木更津之賊之殘徒、密ニ歸入候ニ付、旁以如何ニ心痛仕候上、過日差出候薩州兵隊モ、木更津迄相進居

有レ之、此段一寸申上候、實ニ今晚之處掛念仕候也。

(東征總督記)

○書中、所謂御沙汰ノ原文ハ之ヲ佚ス、按ズルニ、總督記ニ、右本文中御沙汰之ニヶ條ト有ハ、此日大原へ御達相成候房總邊軍艦出帆、並深川取締之義之兩條也トアリ。

○同上書翰

益御安泰珍重令賀候、然バ昨日被命候房總へ廻船之儀、不レ苦候得バ、小子始總勢相回度候間、昨日申上候通リ被命候様希上候、將又昨日召捕候者白狀之一件、昨日申上候筈之處、入夜ニ相成乍延引今日以レ使申上候、委細御聞取、可レ然御沙汰之様希上候、右計之儀ニ候得バ、其迄之儀ニ候得共、ヶ様之類所所ニ可有レ之、五ニ外之發ヲ相見合セ居候ト被察候、實ニニ容易ニ形勢不堪痛心候、可レ然御所置之程所祈候、仍早々如此候也。

閏四月八日

追テ今日ニテハ、房總ヨリ當地之處、實ニ掛念ニ

候趣ニ候得バ、迎モ肥前兵隊相分ヶ差遣候テハ、跡之處大ニ掛念仕候ニ付、是非房總へ可ニ相回儀ニ有レ之候得バ、小子始總隊悉ク相回り候様仕度、肥前計之儀ニ候得バ、今日ニ至リ候上ハ御理申上度存候、且又深川取締之儀、過日田安以下へ江戸取締總テ御委任ニ相成候ニ付、最早御安心ニテ、小子抔取締候儀ハ御不用ト一同相心得候ニ付、固之儀ハ過日引拂、且今日轉陣モ仕候不而已、過日來入々申上候通り、恩威並行ル、ト申處ニテ無レ之バ、迎モ々々何事モ難レ被行ト存候、川舟何程取締候共、人心相懷候様之政事ヲ不レ施候テハ、中々以取締難クト存候、深川市中取締等相兼候得バ、其モ今日之形勢ニテハ迎モ海軍之力ニハ難レ能ト存候間、此段御理申上候、過日田安始へ御委任之上ハ、總テ御安心之儀ト存候處、今日之形勢何共申上様モ無レ之恐入候、此儀可レ然御申上希上候也。

閏四月七日

追テ、過刻召捕候者白狀之儀ニ付、猶伺出候儀可レ

存候段、御賢察奉祈候也。

○

久世隱岐守家來本多又助口上、左之通。

淺草新堀下屋敷 島 舍 人

右、元水戸藩當時龍虎隊脫走之由、大沼祐二、鶴澤辰五郎周旋ニテ潛伏致シ居、

- 久世隱岐守家來 士分百六十人 外ニ足輕三拾人
- 程家老木村庄右衛門 丹羽十郎右衛門 遠山奎之
- 承中老富田廣人 留守居丹羽慎藏 江戸使番安藤
- 金藏 在府本多又助 同鶴澤辰五郎 同鷹野幾五
- 郎 同菅沼祐右衛門 同大久保善之助 同東宗閑
- 在所岩田正清 同清水耕藏 同小柴詮之進 在所
- 尾花彌助 同田中繁 同田中田盛 同早川唯市
- 同今泉眞次郎 在所三宅友五郎 同戸川浪之助
- 同金子藤次郎 同高橋鐵一郎 高橋環 在所賀古
- 權藏 松川三五六 同淺野七郎 在府安井武太郎
- 同神太竹次郎 同本多義兵衛 同三宅甚藏 同佐
- 佐亦七 同石川矢一郎 在府大沼祐二 同石渡岩

之助 同宇津伴七 同入野要右衛門
右之者、不殘島舍人へ附屬罷在、近々房州へ脱走屯
集致シ、官軍ト及ニ一戰候趣、規定取極居候事申レ之
候。

別紙

今日途中ニテ召捕 久世隱岐守家來 給人表祐
筆 大沼祐二家内五人 小姓高野幾五郎 同鶴澤辰
五郎 留守居添役大沼祐二儀ニ付
爲細記罷出候者本多又助 武
具方世話役 加藤桂四郎 同藤井幸平
右之通御座候、以上。

閏月七日

別紙

口上

今般、被ニ仰出候儀ニ付テハ奉ニ恐入候、上様並太
守様、諸家様、本領御安堵之儀ニ御座候ハ、重々
難レ有仕合奉レ存候、若上様始御減高等之御沙汰モ難
レ計、左候テハ殘念之次第、乍併何分小家之事ニテ進

退自由不ニ相成、依レ之太守様へ御幕申上、萬非常等
モ御座候節ハ一同決心ノ者共御供申上、萬分之二ニ
モ御用ニ相立候ハ、徳川家へ數年之御高恩奉レ報
度、主人始心配罷在、前條御承知被ニ成下候ハ、
重役共へ以後萬端御引合被ニ下候様奉レ頼候事。

四月

加藤 桂四郎
藤井 幸平
(以上東征總督記)

○本條、總督記ニ原本宛所ナシ、今考へ難シ、又
右四通、大原使荒木正逸持參セリトアリ、按ズル
ニ、俊實房總進軍ノ事、遂ニ聽サレズシテ寢ミシ
ナリ。

○先鋒總督府、久留里・佐貫二藩ニ令シテ、房
總ノ官軍ニ應援セシメ、前橋藩ヲシテ、富津ノ
兵ヲ發シ、二藩ト相救應セシム。

(各通) 久留里藩へ
佐貫藩へ

總州木更津邊暴行之兇徒爲ニ鎮撫、官軍被ニ差向候
條、藩力相應致ニ出兵隨處應援可レ有レ之事。

後四月七日

東海道 總

督

(東海道先鋒記
久留里佐貫藩記)

前橋藩

頃日暴行之賊徒爲ニ鎮撫、官軍被ニ差向候ニ付、久留
里、佐貫兩藩へモ出兵申付候條、其藩分領富津陣屋
ニ於テモ詰合之人數差出、右藩ト示合盡力應援可
レ有レ之候事。

後四月七日

東海道 總

督

(東海道先鋒記
松平直方家記)

○保科正益ノ家臣、書ヲ先鋒總督府ニ上リ、正
益命ヲ大總督府ニ請ハズシテ、西上セシ情狀
ヲ陳謝シ、其罪ヲ寬宥センコトヲ請ヒ、併セテ
勤王證書ヲ上ル。

彈正忠儀舊臘 御用ニ付被レ爲レ召難レ有、早行上京可

房總戰亂記

レ仕之處、其以前ヨリ病ニ罹リ、長々養生中之處、追
々太政御復古百事御一新 聖運御隆盛之趣敬承、積
年之宿志可ニ相貫ニ御時勢ニ立至リ候ト雀躍無限、
依テハ冒ニ疾患ニ當春二月中斷然江戸屋敷引拂、采地
上總國飯野表へ罷歸リ、三月上旬同所乗船上京可レ仕
覺悟ニテ出帆仕候處、海上難風ニ出逢、東西漂流之
上漸ク志州島羽近海へ碇泊仕、終ニ勢州四日市港へ
着岸仕候處、豈圖 大總督官様已ニ 御下向、尤駿
府城 御在陣ニ被レ爲レ定候趣承レ之候ニ付、即 御陣
營へ參伺 御用可レ奉レ伺歟共愚考仕候得共、舊臘被
レ爲レ召候御旨趣モ有レ之、且京師近國之儀ニ御座候
故旁以一ト先輦轂之下ニ馳登リ、其上御指揮相伺進
退可レ仕ト奉レ存候テ、京師ニ趣キ候途中、草津驛ヨ
リ家來共ヲ以テ通行方爲レ奉レ伺候處、松平肥後本末
之間柄ヲ以入京御差止メ御取糺等御座候ニ付、別紙
之通以書取ニ逐一申上、猶入京御免之儀奉ニ歎願候
處、速ニ被レ爲ニ 聞食、入京 御免之蒙ニ 御沙汰ニ
難レ有仕合奉レ存候、乍併 大總督官様へ通行方不

奉レ伺候段不都合之至リニ付、着京之上謹慎罷在、府中驛 御陣營へ重臣ヲ以御詫願差出候様御差圖被ニ下置、去月十六日府中驛へ參着仕候處、最早 御發行後ニ相成、夫ヨリ直様當地着府之上承知仕候處御先鋒 御總督様ヨリ勤 王證書差上候様、留守居共へ 御沙汰被レ爲レ遊下、重々難レ有仕合奉レ存候、然ル處前書通行方不都合之歎願仕候上ナラデハ、即今主人謹慎中之義ニテ、順序モ如何ト彼是狼狽、不レ計別紙差出方延引今日ニ相成候段、何共奉ニ恐入候得共、前件之衷情 御隣察被ニ成下、出格之 思召ヲ以家來共不行届之段 御有免被ニ成下候様、伏テ奉ニ歎願候、且又先般被ニ 仰出候勤 王證書奉ニ差上候間、御採用被ニ成下、何卒彈正忠素志貫徹出來候様、破ニ 仰付ニ被ニ下度、此段重々奉ニ懇願候、以上。

閏四月七日

飯野藩 差添
進 藤 健 造
八田 助左衛門
重臣 大須加貞右衛門

東海道御先鋒御總督様 御役人中様

○ 彈正忠儀 朝旨遵奉之儀ハ申上候迄モ無レ之候得共、今般大政 御一新ニ付勤 王可レ仕旨蒙ニ 御沙汰ニ奉ニ敬伏候、彈正忠始闔藩無ニ一念、至誠ヲ以純ニ忠勤勉勵可レ仕候、爲レ其運印之證書仍如レ件。

辰閏四月七日

大須加貞右衛門印
差添 八田 助左衛門印
差添 進 藤 健 造印
保科彈正忠重役

○ 林忠崇、遊擊隊ト勝山 酒井忠美 館山 稻葉正善 二藩ヲ劫掠ス、勝山藩其狀ヲ先鋒總督府ニ申シ、軍ヲ進メテ之ヲ討セント請フ、尋テ忠崇等、海ニ航シテ相模ニ走ル。

主人銚次郎陣屋勝山へ向、昨七日遊擊隊ト相唱、脱走之徒押來候趣相聞候ニ付、兼々被ニ仰出ニ之趣モ有

レ之、攻撃之手當可レ仕處、何分多人數之趣相聞、主人銚次郎儀ハ上京中ニモ有レ之、元來小藩手薄之儀、無ニ餘儀ニ及ニ掛合候處、當國爲ニ鎮撫ニ罷越候ニ付致ニ

出兵候様嚴重ニ申談有レ之、相拒ニ候ハ、直様兵ヲ差向ケ候趣、就テハ主人留守中、且隣領應援兵モ無ニ防座、既ニ近隣各藩之人數モ相加リ候趣、迎モ數日御禦之見込モ不ニ相立、甚奉ニ恐入候得共、無據雜兵共貳拾五人、今八日差出申候、此段御届申上候間、何卒御出勢被ニ成下候ハ、如何様ニモ出兵之上盡力仕度、此段奉ニ歎願候、以上。

閏四月八日

酒井銚次郎家來
富塚 謙助
都筑 圖書介

○ 遊擊隊先觸ノ寫
覺

一馬 四匹 一人足 百二十拾人
右ハ此度房州地爲ニ鎮撫、遊擊隊並各藩之人數、勝山

表へ出張、書面之人馬用意、無レ滯可レ被レ給レ繼立候事。

閏四月

遊 擊 隊 印

○ 稻葉正善家記ニ云、閏四月八日、徳川家脱走遊擊隊之由、凡兵隊三百人程引率、館山陣屋へ押テ罷越、徳川家附屬候哉、官軍方へ附屬候哉、答次第攻撃可レ致旨申聞候ニ付、於徳川家ニハ恭順ヲ被レ盡候處、私ニ結黨對ニ 官軍ニ暴舉、以之外心得違之旨、再三及ニ説諭候内、暴談申募、主人上京中、家來至テ人少ニテ防戦手配行届兼狼狽仕候内、陣屋内外立廻リ居リ候輕卒之家來拾人餘、小銃、米等暴奪、其儘兵隊退引、館山下海岸ヨリ船方之者へ強談、船貳艘相雇、一同乗込、何方へ歟出帆仕候。

○ 林忠崇私記ニ云、閏四月五日辰ノ刻、富津出發、午ノ刻過佐貫城下ニ着、一泊。

當城下へ使者ヲ遣シ、城下宿陣ノコトヲ告、城主ヨリモ亦使者ヲ以テ陣中ノ安否ヲ尋問ス。

一 同六日未ノ刻、佐貫出發、天神山着、一泊、
 一 同七日卯ノ下刻、天神山出發、保田驛着、一泊、
 一 勝山藩主ヨリ、使者ヲ以テ陣中ノ安否ヲ尋問ス、
 一 遊撃隊ヨリ勝山藩へ與力ヲ乞フ、
 一 同八日辰刻、保田出發、巳ノ刻比勝山ニ着、昨日
 遊撃隊ニ約セシ兵卒三小隊ヲ差出セリ、
 一 未ノ刻比ヨリ館山藩營下ニ近ヅキケレバ、少シク
 用意スベキコトアレバトテ、長須賀村ニ到リ、悉ク
 戰爭ノ覺悟ニテ、小銃ニ玉込セリ、是ハ遊撃隊先
 ノ日脱走ノ初、當所ノ港ニ碇泊シ、薪水ヲ乞ケレ
 ドモ、藩士之ヲ許サズ、是佐幕ノ志ニアラザレバ
 トテフコト也、
 一 各隊貝鼓ヲ鳴シ、館山營下ニ押寄せ、伊庭、人見
 ノ兩士陣屋ニ到リ、老藩主原註、元閣老ヲ直接
 シ、兵卒半小隊ヲ假リ、并ニ滯陣中ノ兵食ヲ給セ
 ンコトヲ約ス、是ニ於テ長須賀村ニ宿陣ス、兩士
 老藩主ニ直對スルヲ以テ、宿怨氷解セリト云、此
 日、伊庭、人見兩士ノ策ニテ兵威ヲ張テ館山藩ヲ

要シ、我乞ヲ聽シメンガ爲、豫メ榎本和泉守原註、海軍總
 督ニ約シ、軍艦壹艘當港ニ乗込、大砲數發、海陸
 進襲ノ勢ヲ顯ス、
 一 同九日、強雨ニヨリテ長須賀ニ滯陣、伊庭八郎雨
 ヲ侵シテ小船ニ乗込、當港ニ碇泊セル軍艦ニ到リ、
 相州航海ノコトヲ依頼ス、原註、是先ニ虛勢ヲ張リ
 タル軍艦、大江丸ナリ、
 一 同十日、巳ノ刻過、館山港ヨリ倭船ニ乗組原註、三百
 石貳艘申ノ刻比ヨリ豆州ヲ指シテ出帆ス、此時數
 里之間大江丸ニテ牽タリシガ、海軍ハ同志ノ體ヲ
 露ハサバル爲ナレバ、翌十一日拂曉、洋中ニ纜ヲ
 解テ退船セリ、
 一 同十一日、巳ノ刻比、洋中ニテ官ノ軍艦ニ漕逢タ
 リ、潛行ノコトナレバ如何アラント上下思ヒ煩シ
 ニ、難ナク行過ケリ、
 一 夜ニ入り強雨、水底深クシテ、碇ヲ降スコト能ハ
 ズ、終夜洋中ニ飄飄、
 一 同十二日、巳ノ刻比、相州眞鶴港へ着、上陸ス。

○ 同 閏四月九日、房總ノ殘賊、豆相地方ニ逃
 走シ、箱根鎌倉等ヲ侵略セントスルノ聞アル
 ヲ以テ、大總督府、小田原・沼津・田中・金澤四
 藩及ビ江川英武、肥前藩兵ノ橫濱ニ屯スル者
 等ニ令シテ、速ニ之ヲ剿除セシム。

江川太郎左衛門

諸方屯集之賊徒討漏候殘兵相分レ、諸所ニ潛伏之聞
 へ有レ之候間、隣國之者申談、殘賊見當リ次第、持筒
 并彈藥等取揚可ニ取押候、敵對致候ハ、速ニ討果、
 猶盡力可ニ抽ニ忠誠旨 大總督官御沙汰候事。

戊辰閏四月

大總督府 參

(江川英武記錄)

總房屯集之賊徒打洩シ候殘兵、相州浦賀又ハ伊豆邊
 へ渡海、鎌倉・箱根諸所へ襲來之聞有レ之候ニ付、米
 倉・沼津・駿府城代又ハ橫濱詰肥前藩等へ申合探索
 斥候無ニ油斷ニ差出、殘賊相見へ次第早々打取、猶此
 上可ニ抽ニ忠勤旨 大總督官御沙汰候事。

閏四月九日

大總督府 參

謀

大久保加賀守殿 (各通)

水野 出羽守殿

本多 紀伊守殿

米倉 丹後守殿

肥前 侍從殿

(小田原、長尾、六浦藩記)

○

房總戰亂記

○ 先鋒總督府、久世廣文ヲ召ス、時ニ廣文江廣文
 疾ヲ謝シテ至ラズ、尋テ其支族久世某斧三郎、舊
 フシテ、廣文ニ代リ召ニ應ゼシム。

隱岐守殿當節病氣之由ニ候得共、無レ據御用被レ爲レ在
 候間、明十日、推テ參陣可レ有レ之御沙汰候事。

後四月九日

東海道總督府 參

謀

關宿藩

重臣中(東海道

先鋒記)

○ 再達書

隱岐守殿依ニ病氣ニ參陣難レ被レ致趣ニ付、末家斧三郎
 名代急速可ニ差出旨 御沙汰候事。

後四月十一日 東海道總督府 參 謀

約證如件。

○久世某應召ノ顛末ハ見ル所ナシ。

慶應四戊辰年閏四月十日

○先鋒總督府、吉田藩兵ヲ大多喜ニ發遣ス。

吉田藩へ

米津 伊勢守
(米津政敏家記)

總州大多喜藩之儀ニ付、今般副將柳原侍從へ申入置候事件有レ之間、其藩總隊副將出陣所へ罷越、命令可ニ相受候事。

後四月

東海道

總

督

○政敏家記ニ云、閏四月六日上總國知行所大網村發途 大總督宮へ爲レ伺ニ 天機參府、將右之約證進達、同十二日被ニ聞食届候。

○二十四日先鋒總督府へ上申

一勤王證書

米津伊勢守家來

人見 要印

(東海道先鋒記)
(大河内信古家記)

○按ズルニ、十六日ニ至リ、副總督、藩兵ニ命シテ大多喜ノ城邑及ビ臣隸ヲ保管セシム、事ハ房總戰記ニ詳ナリ。

慶應四戊辰年閏四月(原文ヲ佚ス)

(東海道先鋒記)

○同 閏四月十日、米津政敏^{伊勢守}○江戸ニ至リ、勤王證書ヲ大總督府及ビ先鋒總督府ニ上ル。

○同 閏四月十二日、房總地方略鎮定ニ就クヲ以テ、薩摩・長門以下六藩兵前後江戸ニ凱旋ス。

今般、御國政 御一新之折柄、別テ勤王事可レ仕ハ勿論ニ候得共、猶此上丹心砥礪忠勤可ニ相勵候、

○慶應出軍戰狀ニ云、閏四月十一日、大多喜開城致

シ降伏、其餘ハ何レモ平定ニ及ビ候ニ付、同十二日東京ニ着ス。

○藤堂高潔家譜ニ云、閏四月十二日、賊平ヲ以テ、右隊長藤堂長堅、左隊長藤堂信資併ニ兵ヲ收テ江戸ニ歸ル。

入觀スルコト能ハザルヲ陳謝シ、府下ニ在リテ王事ニ服センコトヲ請フ、聽サズ、政敏更ニ歸藩ヲ乞フ、之ヲ聽ス。

○鳥津忠寬家記ニ云、總房鎮靜ニ至ルヲ以テ、閏四月十日ヨリ諸隊陣ヲ拂テ、江戸へ凱旋ス、佐土原兵隊モ十一日午時船ニ駕シ、木更津港ヲ發シ、夕陽品川へ着シ、十二日馬場先門内へ凱旋ス。

今般 大政御一新之折柄、伊勢守義早速上京仕奉レ伺ニ 天機、且自分相應之御用可ニ相勤ハ勿論ニ御座候處、兼々申上候通多病ニテ難レ成ニ其儀候間、於當地ニ相應之御用被ニ仰付ニ被ニ下置候様仕度、然ル上ハ弊藩丹心勉勵、勤 王之實功萬分之一ヲモ相立申度志願ニ御座候、此段奉レ伺候、以上。

米津伊勢守家來

閏四月十三日

人見

要

東海道御先鋒御總督府 御參謀衆中様

(内國事務局叢書)
米津政敏家記

○戊巳征戰紀略ニ云、我兵、閏四月十四日、江戸ニ返ル。

○本條、批紙ヲ佚ス、下ノ申請書ニ據レバ、聽サレザリシナリ。

○米津政敏、書ヲ先鋒總督府ニ上リ、疾アリテ

於當地ニ御用モ不レ被レ爲レ在候旨被ニ 仰出、難レ有仕

合ニ奉レ存候、私領分之義ハ兼テ申上候通飛地多ニテ、當今之形勢領内取締向等之義深心配仕候、依レ之武州、兩總、常陸國等領分村々爲ニ鎮靜、巡村仕、其上在所出羽國村山郡長瀨へ罷下り申度奉レ存候、依レ之、御暇被ニ下置候様仕度此段奉ニ願上候、以上。

閏四月十三日

米津 伊勢守

東海道御先鋒御總督府

御參謀衆中様

(内國事務局叢書
米津政敏家記)

○政敏家記ニ云、右閏四月十三日差出、同日願濟、十五日、領知西武州村々巡村、五月六日、上總國知行所大網村へ着、兼テ出羽國村山郡長瀨へ罷下り候願相濟居處、奥羽道中筋通行難ニ相成ニ依テ、大網村へ滞在仕候。

○三上藩遠藤胤城ノ治所(近江)書ヲ先鋒總督府ニ上リテ、兎徒安房ノ管地安房郡北條村ヲ劫掠スルノ狀ヲ申ス。

一昨九日、遊撃隊之由、多人數館山領長須賀村致ニ止宿、面會之儀申越候ニ付罷越候處、頻ニ人數差出候

様申聞、若シ遲疑致候ハ、手詰之談ニモ可レ及趣ニ有レ之候、然ル處、當表之儀ハ、元來領地役所ニテ、人數等モ無レ之、當時但馬守儀板橋驛取締役被ニ仰付ニ付テハ、家來共悉彼地へ出張致、爰許ニハ隱居中務大輔竝家族家中妻子立退罷在候而已ニテ、士分之者迎ハ僅拾餘人ナラデハ無レ之、老人子供多ニ有レ之、且領民一體之存亡ニモ相拘リ可レ申哉ニテ、不ニ容易ニ場合ニ至リ、如何共致方無レ之、依米三拾俵、金三拾兩相贈、人數出之儀ハ漸相斷申候、尤此段於三板橋宿ニ御届ハ可レ仕御座候得共、御聞置可レ被レ下候、以上。

閏四月十四日

遠藤中務大輔内

古河 隼太

(東海道先鋒記)

○安房國安房郡館山領長須賀村へ、去ル九日、遊撃隊之由、多人數致ニ止宿、同國但馬守領分北條村陣屋へ面會之儀申越候間、家來罷出候處、頻ニ人數出之儀

談有レ之、若遲疑致候ハ、以ニ兵威ノ手詰之談ニモ可レ及趣ニ候處、家來悉當地へ出張罷在、彼地之儀ハ隱居中務大輔竝家族家中妻子爲ニ立退置候儀ニ付、士分僅ニ老兒而已差置候間、人數出シ之儀ハ素ヨリ、米金共不ニ差出ニ答ニ兼テ申付置候處、前顯無ニ餘儀ニ場合ニ差迫、領民一體之存亡ニモ相成可レ申哉ニテ、如何共致方無レ之、不レ得レ止米三拾俵、金三拾兩差遣申候、翌十日ニ至リ館山浦ヨリ出帆致候趣ニ御座候、然ル處入替肥州人數軍艦ニテ同所へ致ニ上陸ニ付、右次第申達置候、同藩儀モ、同十二日、同國勝山方へ出張相成、同十四日夕、伊州人數凡四百人程北條村へ着、在陣相成候ニ付、焚出シ方夫々取賄罷在候段、彼地家來共ヨリ申越候、此段御届申上候、以上。

閏四月廿一日

遠藤但馬守家來

畑佐 秋之介

(遠藤胤城家記)

○同 閏四月十五日、是ヨリ先、加納久宜嘉元次郎

房總戰亂記

一五九

一宮西上シテ、大津驛ニ至リ、書ヲ朝ニ上リテ、入京ヲ請フ、令シテ、命ヲ大總督府ニ請ハシム、是ニ至リ、久宜、老臣ヲ總督ニ遣シテ、其情ヲ陳疏シ、入京ヲ請フ、之ヲ聽ス。

私儀、上京之蒙ニ勅命ニ候ニ付、速ニ上京可レ仕候處、持病之脚氣ニテ難儀仕候間、重臣差出、奉レ伺ニ天機ニ冥加至極奉レ存、御元服御祝儀貢獻物仕、猶國力相應之御用被ニ仰付ニ度奉レ願候處、御受取置相成難レ有奉レ存候、其後、大總督宮様御進軍ニ付、御途中へ使者差出奉レ伺ニ天機、乍ニ微力ニ些少之米金獻納御入途御差加之程奉レ願候處、御聞届被ニ下置、御入用之節迄御預被ニ仰付ニ冥加至極難レ有仕合奉レ存候、病氣無ニ餘儀トハ乍レ申、於ニ在所表ニ療養仕居、空敷光陰ヲ過行難レ堪ニ心痛ニ候ニ付、在所上總國一宮表之儀ハ、東海岸御座候間、病氣押候テ、當三月廿七日乗船仕、手當年ニ相加ニ勢州大湊へ着船、上京之心得ニテ大津驛迄、當月朔日着仕候、尤、大總督

宮様御東下ニ付テハ、御陣前へ參上、奉レ伺ニ天機、上京之儀可申上ニ方歟ト心附候間、途中ヨリ上陸、御陣前へ參上、猶乘船海路罷登候心得之處、於ニ下田港ニ承知仕候ニハ、駿府表御發興、關東御進軍被レ爲レ在候趣御座候付、深御委任柄等之儀一向ニ不ニ相心得候故、只願上京遲引、勤 王之素心不行届成行可申哉ト心痛之餘リ、御陣前參上不レ仕、何共不調法至極奉ニ恐入候、辨事御役所御下知之趣ニ付、大津驛滞在仕、重臣差下、右恐入候不調法之御詫奉ニ歎願候、何卒東隅之邊土ニ罷在、殊ニ斯ル 御厚配之世形故、萬事傳承モ不ニ相届、只上京他ニ不レ後様一途ニ見込次第、御憐恕被ニ下置、前顯不調法御仁免被ニ成下、入京奉レ伺ニ 天機候様御許容之程、偏ニ奉レ願候、以上。

閏四月五日

加納嘉元次郎

○督府批紙

上京之儀一途ニ差急候トハ乍申、不都合之次第候間、可レ被レ及ニ 御沙汰之筈ニ候得共、段々情實申

述御理申上候付、願之通被ニ差免候、猶上京之上、宜御奉公可レ致事。(辦事局記)
○按ズルニ、久宜、二十六日ヲ以テ京師ニ抵ル。

○是ヨリ先、關宿藩士、黨ヲ分チテ、相闘ギ、藩内騷擾ス、是ニ至リ、藩主久世廣文ノ支族久世廣道下野守、先鋒總督府ニ就テ、宗家ノ爲ニ之ヲ鎮輯セント請フ、之ヲ聽ス。

久世隱岐守領内、過月以來上下及ニ紛擾候ニ付、官軍ニ於テ諭解ニ及有レ之候處、今度久世下野守本末之親誼ヲ以取扱、正好之辨屹度相立、上下各其所ヲ爲レ得、領内鎮定爲レ致度旨願出候段、恰合可レ然之事ニ思召、可レ被レ任ニ其意ニ之間、急速其取計可レ有レ之様、其許ヨリ下野守へ可レ被レ達之旨、總督府御沙汰候事。

後四月十五日

東海道總督府 參謀 木梨 精一郎

田安中納言殿 重臣中(東海道先鋒記)
(田安慶頼家記)

○五月七日ニ至リ、先鋒總督府、書ヲ下シテ廣文

ノ職ヲ失スルヲ謹ム、參看スベシ。

○同 閏四月十七日、是ヨリ先、林忠崇等小田原藩ニ游説ス、小田原藩應ゼズ、忠崇等乃チ去テ、伊豆ニ赴キ、轉ジテ駿河ニ入ル、小田原、沼津二藩乃チ兵ヲ封疆ニ出シテ之ニ備フ、是日、小田原藩、書ヲ大總督府ニ上リテ其狀ヲ申ス、明日、沼津藩モ亦其狀ヲ先鋒總督府ニ申ス。

去ル十四日、御届申上候林昌之助始一同、昨十六日、加賀守領分駿州駿東郡御厨御殿場へ罷越候段、同村ヨリ及ニ注進候付、不ニ取敢入數差出申候、此段御届申上候、以上。

閏四月十七日

大久保加賀守

(大久保忠良家記)

○書中所謂十四日ノ上申書ハ、之ヲ佚ス。

○再申書

今般、加賀守領分相州足柄下郡眞鶴村へ、士二百人

房總戰亂記

上陸致シ、右之内林昌之助家來四人召連城下へ罷越、重役共致ニ面會候儀ニ付、先達テ以ニ書面ニ御届申上候處、昌之助家來ヨリ掛合之趣意柄、加賀守重役共ヨリ應答ニ及候次第、委細ニ可申上旨、尙御達之趣奉レ畏候、右昌之助竝同人家來共申聞候ハ、徳川氏恭順謹慎罷在、開城之上砲器軍艦等差出相成候得共、未タ相續領知等之御沙汰無レ之、此儘ニ成行候テハ、臣子之情實坐視ニ不レ忍、銘々身分之寄所モ無レ之事ニ相及可レ申、且尾州ニハ宗家、彦根ニハ主家筋之義ヲ失シ候事ニ付、兵ヲ起シ、大義相立申度、弊藩ヨリモ人數差出シ、俱ニ盡力有レ之候様致度、所々流浪困迫ニモ相及候事ニ付、旁當家へ依頼致度旨申聞候間、徳川氏一途ニ謹慎罷在、朝廷ヨリモ寛大之御沙汰可レ被レ爲レ在旨被ニ 仰出、此上益謹慎罷在候ハ、其内御沙汰之品モ可有レ之、當家之義ハ勿論勤王遵奉致シ、且慶喜恭順謹慎中之義ニ付、出兵等存モ不レ寄儀ニ有レ之、尾州、彦根連モ 王命遵奉之儀ニ候得バ、右兩家へ干戈ヲ動候テハ、第一奉レ對ニ

朝廷恐入候次第、其上慶喜誠意ニ相背候事ニ付、甚心得違之筋ニ候旨精々及ニ理解、領内相州土肥吉濱村へ差戻扣罷在候様申聞、爲ニ取締ニ人數差出シ、沼津藩等へ打合ニ及、此上之義取計候積候處、俄ニ同村引拂、一同豆州邊へ罷越候儀ニ御座候、其後駿州御厨御殿場村へ罷越候間、尙同所へ人數差出候義ハ追々御届申上候通御座候、此段申上候、以上。

大久保加賀守内

閏四月廿四日

小川 左十郎
(大久保忠良家記)
(小田原藩記)

○忠良家記ニ云、閏四月十一日、徳川脱走林昌之助以下二百人餘、相州眞鶴村港へ上陸致、同夜同人家來吉田柳介外三人召連、小田原城下へ罷越、主人へ面會致度申聞候ニ付、重役渡邊了叟其外蜂屋重太夫、横島主令、竹内藤左衛門罷出應接仕候處、義兵ヲ揚、奸人ヲ誅シ、徳川回復致度候ニ付同意可レ致様申聞候處、奉_レ對ニ 朝廷ニ疎暴之舉動決テ致間敷段、兼テ徳川氏ヨリ申聞モ有_レ之、同意ハ勿論、主人面會モ相斷

候處、兩日滯留致、同十四日豆州へ相退候ニ付、警衛之人數差出、其段大御總督府へ御届申上候。
○水野忠敬家記ニ云、閏四月十四日、相州眞鶴村へ脱走ニモ可_レ有_レ之百五六十人上陸ノ風聞ノ處、同夕、豆州熱海村ニテ、探索ノ者、脱徒伊庭八郎、人見勝太郎、佐久間兵一郎、房總藩士ノ由十四五人ニ行逢候ニ付、及ニ應接ニ候處、理解ニ伏シ、相州土肥ニ引取相扣居旨談決。

同十五日、右遊撃隊一同、豆州葦山へ相越候趣、夫々ヨリ報告、斥候、探索猶又差出、領分境へ兵隊繰出。
同十六日未明、葦山ニ於テ及ニ應接ニ候處、謹慎ノ義多人數ニテ行届、駿州御殿場村へ相越、同所ニ逗留ノ旨申出、依テ上方筋ノ間道十里木へ兵隊出張致ス。
同十八日、前件初發不ニ取敢ニ江戸詰家來ヨリ先鋒總督府へ御届ニ及ビ、肥前藩某へモ通達。

○林忠崇私記ニ云、閏四月十二日、巳ノ刻比、相州眞鶴港へ着上陸ス、伊庭、人見等ト議シ、單身ニテ小田原城ニ到ル、半途ニシテ小田原藩士之ヲ聞キ、

入城ヲ止ントテ追々出迎ヒ、説諭ストイヘドモ承引セズ、遂ニ入城ス、夜ニ入り杉浦某ノ宅ニ着ス、老臣渡邊了叟、加藤直江ニ對語シ、藩主ニ面接シ義兵ノ盟主タルコトヲ請ハントス、此日總軍江ノ浦ニ立越陣ス。

同十三日、小田原老臣二名面調シ、藩主ノ意ヲ演ブ、藩主佐幕ノ志ハ勿論ノコトナレドモ、方今イマダ其色ヲ露ハストキハ、却テ徳川氏ノ爲ニ宜カラズ、暫ク時機ヲ待ツニ決セリ、之ニ依テ器械金穀望ニ任セテ送ルベシトノコトナリ、是ニ於テ明曉出城ノ事ニ決セリ。

同十四日拂曉、小田原出城、海岸通り某村ヨリ乗船、根府川へ着上陸、關門通行、四ツ時過江ノ浦ニ着、總軍引纏、即時出發、申ノ刻過吉濱ニ着。

同十五日、卯ノ刻過ギ、雨ヲ犯シテ吉濱出發、熱海峠ヲ越ントスルニ、雲霧濛々トシテ咫尺ヲ辨ゼズ、絶頂ノ辻堂ニテ暫ク兵ヲ憩ヒ、伊豆山ノ麓ニ掛リ、熱海ニ着シ、午飯ヲ用ヒ、天氣漸々晴レ、夕申ノ刻

房總戰亂記

比葦山ニ着ス。

同十六日、巳ノ刻過葦山出發、暑氣甚シク、三島へ出、佐野村ニテ夕飯ヲ用ヒ、夜ヲ掛ケ道ヲ急ギテ、子ノ刻比御殿場へ着。原註、野徑風涼シク、螢火紛々タリ。

同十七日、總軍紀律確定。

一諸隊長參軍之者、日々會議所ニ相集、軍議可レ致事。

但、會議所之儀ハ輻重方宿陣ニテ致シ、日々刻限之儀ハ其度々申達候事。

一會議所之決斷致候條、違背致候者ハ誅戮ニ行ベキ事。

慶應四年閏四月十七日 參 軍

一各隊病氣之者一々隊長ヨリ輻重方へ可ニ申出候事

一器械ハ五日目ニ相改候事、

一各隊人名認明日中差出候事、

一護衛隊之儀ハ、素ヨリ玉藥并會計長持ヲ護衛致シ候事ナレバ、外荷物ニ不_レ拘守衛可_レ致事、

一人足差支候節ハ、玉藥不_レ送候ハ、外荷物送候儀不_レ相成_レ候事、

一各隊病人等出來之節ハ、各隊ヨリ輜重方へ可_レ届出_レ事、

一隊ヲ外_レ候儀、事實不_レ得_レ止事儀有_レ之候ハ、其隊長へ相斷可_レ申事、

一途中砲發相禁候事、

但、先鋒ニテ小銃一發相放_レ候節ハ、非常之事ト心得_レベシ、

一 小銃試之節ハ、宿陣中天野豐三郎、澤録三郎へ相斷可_レ申之事、

一 巡邏之儀ハ、壹番四番半ノ日、貳番三番丁ノ日、隔日ニ可_レ致事、

相圖

一行軍壹番隊壹發之砲聲ニテ、全軍目覺、朝飯之事、一貳發目之砲聲ニテ全軍隊ヲ揃、三番目之砲聲ニテ全軍繰出候事、

一 小休之節、螺壹聲ニテ揃ヒ、貳聲ニテ全軍繰出候

事、

但、各隊半丁一丁位懸放_レ行軍可_レ致事、

一番兵出張所迄ハ挑灯相用候共、場所着之上ハ無提灯之事、

一 巡邏ハ其所ノ挑灯借用可_レ申事、

一 合戦ハ總軍助合候得共、大體壹隊限之心得ニテ、宿陣共油斷致間敷事、

一 小銃亂ニテ間ニ合候間、其餘之玉藥ハ護衛ニ相任_レ候事、

一日夜合語觸出之儀ハ、輜重方ヨリ相觸可_レ申事、右之通決斷之上ハ、各隊從者ニ到迄可_レ相心得_レ事。

慶應四辰年閏四月十七日 參 軍

○同 閏四月十九日、大總督府、堀田正倫、勤王ノ實蹟アルヲ以テ、其謹慎ヲ釋ス。

堀田 相模守

去ル三月於_レ駿府 御本陣_{ニテ}方向御糺問之處、始終暖

味_ト致_シ候申分有_レ之候ニ付、上京之上外出相扣可_レ居候旨、御沙汰候處、此度於_レ國許御用モ相勤候儀ニ付、其儀被_レ免候旨 大總督府 御沙汰候事。

閏四月十九日 大總督府 參 謀

(佐倉藩記) 堀田正倫家記

○同 閏四月二十日、先鋒總督府、房總服役ノ諸藩ニ令シテ、其戰死傷者ヲ錄上セシム。

○薩摩、長門以下六藩へ達書

過日以來處々戰場ニ於テ、討死並手負輕重等、姓名委ク相認、早々可_レ被_レ差出_レ旨、總督御沙汰候事。

後四月廿日 東海道總督府 參 謀

(藤堂高潔家記)

○諸藩ノ上申書ハ之ヲ俟ス、二十六日ニ至リ、督府、房總服役ノ將士ヲ慰勞シ、且金ヲ死傷者ニ頒ツ、參看スベシ。

○同 閏四月廿一日、是ヨリ先、大總督府及ビ

房總戰亂記

先鋒總督府、數、先鋒副總督柳原前光ヲ促シテ其師ヲ班サシム、是日、前光江戸ニ凱歸シ、大總督ニ謁シテ、房總鎮撫ノ情狀ヲ上申ス。

○柳原前光輒誌ニ云、閏四月十九日、從_レ大總督府、再三可_レ歸陣_ニ被_レ命、明二十日、當城_ニ發途治足、二十日卯半刻發途、廿二日、未刻著_レ江戸、築地上陸、直探路入_レ西城、大總督王拜謁成功言上、次著_レ彦根邸、橋本少將面談、自今合兵、以_レ是爲_レ本營。

○渡邊清事蹟ニ云、總房一定、閏四月廿二日東京ニ旋ル、清更ニ參謀ノ心得ヲ以テ出仕スベキノ命ヲ、橋本少將ニ承ク。

○是ヨリ先、田安慶賴使ヲ遣シテ林忠崇等ヲ招諭シ、罪ヲ甲斐黑駒驛ニ待タシム、甲府城代水野忠敬、賊情圖リ難キヲ以テ、中津・沼津・掛川三藩兵ヲ石和驛ニ出シテ之ニ備へ、且高遠・高島二藩ニ檄シテ援兵ヲ召ス、因テ書ヲ大

總督府ニ上リテ、其狀ヲ申ス、書未ダ達セズ、是日、督府、慶頼ニ命ジテ忠崇等ヲ招諭セシメ、忠敬ニ令シテ兵備ヲ嚴整シ、賊如シ甲府ニ向ハ、速ニ之ヲ誅夷セシメ、沼津藩ヲシテ更ニ兵ヲ甲府ニ出サシム、慶頼、乃チ使ヲ遣シテ忠崇ヲ申諭ス、尋テ督府、沼津藩ニ命ジテ、忠崇等ヲ保管セシム。

○大總督府へ上申書二通

去十八日、關東脱走ノ者ニモ有レ之哉、駿州口ヨリ當國へ押來候趣風聞有レ之、依テ探索斥候差出候折柄、引續黑駒宿着ノ先觸到來、不_レ容易ニ次第ニ相聞候間、中津、掛川兩藩へモ申達、三藩合兵、其外勤番竝小普請、與力、同心出張爲_レ致、其餘信州高嶋、高遠兩藩へモ援兵申達候ノ處、途中ニ於テ田安家之者爲_レ鎮撫_ニ最前駿州御殿場村へ説諭之上、當宿へ暫時謹慎申付候趣、右家來水澤汝助竝私家來罷越申聞、事實明亮ニ相達候上ハ、一旦人數爲_レ引拂_ニ候テモ可_レ然

儀ニ候得共、謹慎中如何ノ舉動有_レ之候儀モ難_レ計、殊ニ土地柄深心配仕候ニ付、先ヅ最寄石和宿へ夫々屯兵申付置候、且謹慎之者共、食料賄等之儀ハ達ニ任セ、同所御代官柴田桂次郎引受取賄候趣届出候、此段御届申上候、以上。

閏四月廿一日

水野 出羽守

去ル十八日、關東脱走之兵ニモ有_レ之哉、駿州口ヨリ當國へ押來リ可_レ申風聞有_レ之候間、早々探索之者差出、手配用意罷在候處、同十九日、沼津表ヨリ兼テ差出有_レ之候探索之者ヨリ申越候ニハ、遊擊隊二百人程駿州御殿場村參着、夫ヨリ當國へ可_レ參哉之趣、引續遊擊隊當國黑駒宿迄之先觸到來之旨、石和御代官所ヨリ届出候間、直様夫々へ通達、當國三坂峠へ差向、三藩合兵三小隊、大砲一門出張爲_レ致、兼テ勝沼宿へ差出シ置候小隊爲_レ援兵ニ操替申付、川田村、山崎村邊ニ御勤番、小普請、與力、同心等百三十人出張爲_レ致、大砲モ七門程差出シ候、然ル處、途

中ニ於テ江戸市中取締惣括之水澤汝助早打ニテ被_レ行逢、石和宿ニ於テ出張之者呼出シ之上、達之趣ニハ、今般遊擊隊入甲ニ就テハ、御惣督様且田安様ヨリ鎮撫之蒙_レ仰、既ニ御殿場村ニテ説得、彌鎮撫承引ニ付テハ、遊擊隊申立候廉モ有_レ之候間、來ル廿七日迄ニハ間モ無_レ之御下知有_レ之旨ニ付、夫迄ハ甲州黒駒村ニ滞在謹慎可_レ罷在_ニ儀ニ付、此上人數等押出シ候テハ、先方氣合ニモ相拘リ候テハ鎮撫之詮モ無_レ之候間、石和村ヨリ押出シ候儀ハ見合可_レ申旨申聞候、將又沼津表ヨリ差出シ候家來、是又參着申聞候ニハ、鎮撫之爲_レ田安様ヨリ被_レ遣候大目付山岡鐵太郎ヨリ御達之趣、今般遊擊隊所々押行候ニ付、鎮撫ノ儀申達シ候處承伏致シ候、尤彼ヨリ申立候儀モ有_レ之候間、甲州黒駒村ニテ申立之次第御許容之有無謹慎奉_レ待居候間、猶此上共同所滞在中、盡力鎮撫可_レ申旨重役共へ申聞候様、家來丸山貫太郎へ御達有_レ之、且食料賄之儀モ御代官へ相達シ候旨届有_レ之、尤此上萬一暴行有_レ之候ハ、討取候テ不_レ苦候旨申聞候間、石

和宿ニ出張之人數ハ勿論、其外之分、非常之備相立置、此上時變之品モ御座候ハ、速ニ討取可_レ申手配致シ置候、信州高遠、高嶋へモ、援兵之儀ハ不_レ取敢_ニ申遣シ候、此段申上候、以上。

閏四月廿一日

三浦 小平太

杉山 束

(水野忠敬家記)

木更津之賊徒敗走、黒駒村へ屯集之由相聞候ニ付、急々當府ヨリ官軍ヲ以鎮撫爲_レ致、銃砲可_レ請取_ニ候ニ付、人數等モ被_レ差向_ニ候、就テハ、其地ヨリモ人數少々被_レ差向_ニ取締可_レ致候、尤彼是ト申陳、銃砲不_レ差出_ニ竝手向等致候節ハ、不_レ得_ニ止事_ニ可_レ致擊_ニ之間、速ニ其地ヨリモ進撃イタシ、當方ヨリ出張之兵ニ應援可_レ有_レ之、尤林昌之助以下殘賊二百人計之由ニ候、此段可_レ申達_ニ大總督官被_レ仰出_ニ候間、精々御盡力可_レ有_レ之候也。

閏四月廿一日

大總督府 參

謀

甲府城代 水野出羽守殿(水野忠敬家記)

○房總ヨリ相州へ渡海、當分甲斐國黒駒ニ罷在候脱走人頭取之者四五人、當府へ招呼猶説諭、持筒彈藥夫々相請取可被差出候、此上不服ニモ候ハ、官軍人數ヨリ直ニ相諭、臨機之取計可致候間、急々盡力之末、何レ之筋可被申出旨 大總督官御沙汰候事。

閏四月廿二日

大總督 參

謀

田安中納言殿(徳川慶頼家記)

○房總邊屯集脱走人相州へ渡海、當分甲斐之國黒駒ニ罷在屯集之儀ニ付、昨日御達有レ之候得共、尙亦今日田安中納言願ニ依リ、鎮撫トシテ山岡鐵太郎、石坂周藏被差出候處、鎮撫之姿ニハ候得共、未持筒彈藥等不ニ差出候故、亦々願之趣有レ之候ニ付、石坂周藏外ニ兩三人差越、尙説諭、持筒等相渡候様御達相成候、然ル處終ニ不服、無其儀ニ於テハ、不レ得止

官軍差向討取候外無レ之、就テハ、甲府要害之地ニテ兼々御達有レ之候通、嚴重取締、若甲府へ差向候事モ有レ之節ハ、欺レ上候儀顯然ニ候間、迅速討取可抽忠勤旨、大總督官 御沙汰候事。

後四月廿二日

大總督府 參

謀

甲府城代 水野出羽守殿(水野忠敬家記)

○林昌之助始家來共其他遊撃隊人數二百人餘、持筒共ニ何分 沙汰有レ之迄之間、其許へ被預置候旨 大總督府 御沙汰候事。

但、其許領分ニオイテ謹慎致シ、御沙汰奉待候様可取計候。

閏四月廿四日

大總督府 參

謀

水野出羽守殿(江城日誌 水野忠敬家記)

○忠敬家記ニ云、閏四月二十五日、江戸市中取縮頭取水澤汝助、關八州同頭取石坂周藏江戸表ヨリ參リ、右遊撃隊沼津表へ罷越謹慎可仕旨 御沙汰相成候ニ付、道中賄入用中山誠一郎殿へ及ニ通達候様、石

和手代へ申談候趣ニ付、説得行届候上ハ、直様沼津表へ出立ニモ可相成趣、誠一郎殿ニモ被罷越共ニ説諭有レ之候様致度旨ニ付、被罷越度候處、猶又水澤汝助罷越、惣人數共沼津表へ引退候様 御沙汰之旨ニテ、遊撃隊長へ説諭有レ之、彼是談判中、五月朔日、安場一平殿御出張、猶御談ニ付、何レニモ沼津表へ爲レ退候様、尤其節石坂周藏モ罷越、同人竝誠一郎殿モ一同ニテ説諭有レ之候儀御談、直様出張被致説得相届、翌二日遊撃隊一同黒駒村引拂候儀ニテ沼津表へ罷越。

○大總督府へ上申書

今朝御届申上候脱走林昌之助始家來共其他遊撃隊、彌今二日石坂周藏、水澤汝助竝家來共差添、黒駒驛出立、駿州沼津表へ立拂相成申候、此段御届申上候、以上。

五月二日

水野 出羽守

(水野忠敬家記)

○六日上申書二通

房總戰亂記

先達テ御届申上候總房之脱走、甲州黒駒村罷在候處、鎮靜之儀被仰出候ニ付テハ、去ル二日甲府ニ於テ御届申上候通、黒駒村去ル二日引拂、昨五日到着仕候、林昌之助竝同人家來、其外遊撃隊諸藩士、僕臣之者迄、都合貳百貳拾人、田安殿家來石坂周藏、水澤主人兩人ヨリ請取、當城下最寄香貫村靈山寺竝同所農家四五軒程へ鎮靜爲レ致、警衛之人數モ差出置申候、右ニ付、周藏、主人ヨリ書面請取候ニ付、寫相添此段御届申上候、以上。

五月

水野出羽守家來

水野 伊織

一人數貳百貳拾人 林昌之助竝家臣遊撃隊伊庭八郎初其餘諸脱藩士從僕共
右ハ、先般駿州御殿場村へ屯集罷在候ニ付、山岡鐵太郎竝拙者共爲ニ鎮撫ニ出張、甲州黒駒村へ謹慎爲レ致置、從ニ田安殿 朝命被ニ相伺候處、器械其儘出羽守殿へ御預ケ置候趣被ニ仰出候ニ付、猶又拙者共兩人出甲、右之趣申達候處、期限差定、

沼津表着日ヨリ日數九日之間謹慎、御沙汰奉待候事ニ取計吳候様達テ歎願申出候、右懇願之趣情不レ得ニ止事處モ有レ之、右差拒候テハ却テ鎮撫之成功難レ期ニ付、則承届、前書之人員今日御渡申候、尤一旦奉レ命謹慎ニ決議之上ハ、輕舉暴動等無レ之筈ニ申出モ有レ之候間、兼テ御達申置候、猶右之趣ハ拙者共歸府早々、御總督府へ申立、九日以内、御沙汰有レ之候様取計可レ申、此段御達申候、以上。

慶應四年五月五日

水澤 主人印

出張ニ付無印

石坂 周藏

水野出羽守殿

水野伊織殿

角田太作殿

○林忠崇私記ニ云、閏四月十六日、御殿場へ着、同十八日、田安中納言ノ命ヲ以、大監察山岡鐵太郎來リテ、兵ヲ收メ、ンコトヲ説諭ノ上、左ノ上表ヲ記シ、總督府ニ差出サンコトヲ依頼シ、全軍甲府ニ到、十

日ヲ限リテ再命ヲ待ツコトヲ約ス。

上表

臣君ヲ弑シ、子父ヲ弑ス、大逆無道天地容ザル所ナリ、紀、尾、彦ノ徳川氏ニ於ケル臣子也、臣等ガ紀、尾、彦ニ於ケル儀同藩ニ齊シ、故ニ今同志ノ徒ト其罪ヲ攻ントス、是臣等ガ微衷也。

慶應四戊辰年閏四月

林昌之助 伊庭八郎 人見勝太郎

外遊擊隊 諸脫藩

同十九日朝、御殿場出發、川口着泊、廿日近郷ノ獵夫等異志ヲ抱ク者アルト風聞アルニヨリテ、川口ニ着スル後、伊庭八郎一隊ヲ引キ、夜ヲ掛ケ峠ニ陣ス。同二十日朝、川口出發、三坂峠ヲ越テ、藤ノ本宿ニテ中食ヲ用ヒ、黑駒驛着、閏四月晦日迄滯陣、各隊更ニ三坂峠ニ番兵ス。

駿府勤番蔭山頼母、長トシテ、三拾餘人來加ハル。岡崎藩和多田貢長トシテ、脱藩二十餘人來加ハル。石坂周藏、田安中納言ヨリノ召狀ヲ持來レリ、(原註、先キ

ニ御殿場ニテ約セシ期限ナレバナリ) 伊庭、人見等モ同ジク召サル、行否如何スベキト議論紛々タリ。石塚周藏、此時結髮料トシテ金百圓持來レリ、是ヲ辭ス。

五月朔日、今日愈甲府ニ入ントテ總軍繰出シ、上黒駒今宮ニ到ル、甲府ヨリ沼津藩兩三名説得トシテ來ル、水澤汝助、石坂周藏等會議之上、沼津藩へ引取ル、猶十日ヲ期シテ後命ヲ待ツニ決ス、夜ニ入、再下黒駒ニ歸テ一泊ス。同二日、黒駒出發、川口着泊、當所郷士某ノ悴同志ノ趣ヲ以テ來ル。

同三日、川口出發、須走着泊。同四日、須走出發、佐野着泊。同五日、佐野出發、沼津在香貫村靈山寺着シ、是ヨリ滯陣。滯陣中、三飯ハ勿論、其他事々沼津藩ノ懇切到ラザルトコロナシ。

○房總ノ殘賊相模ニ逃走スルヤ、沼津藩兵ヲ各處ニ發シテ之ヲ招諭ス、是日、大總督府、書ヲ下シテ之ヲ褒賞ス。

房總邊屯集脱走之者共先達テ相州へ渡海、所々ニオイテ其許人數應接之始末行届、神妙之段、大總督宮御感悅不レ斜候、猶此上可レ抽ニ忠勤ニ旨參謀卿御沙汰候事。

閏四月廿二日

大總督府 下 參 謀

水野出羽守 重臣中 (水野忠 敬家記)

○同 閏四月廿三日、是ヨリ先、關宿藩士正奸ニ黨アリ、藩主久世廣文年猶幼弱ニシテ制馭スルコト能ハズ、奸黨遂ニ廣文ヲ擁シテ逃匿ス、是ニ至リ老臣杉山某_對等廣文ノ江戸藩邸ニ潜匿スルヲ偵知シ、往テ之ヲ拔ントス、奸黨之ヲ支ヘテ爭鬪シ、互ニ死傷アリ、先鋒總督府乃チ監軍安場保和ヲ遣シテ之ヲ鎮セシメ、某

等ヲシテ彦根藩邸ニ謹慎シ、以テ後命ヲ待タシム、尋テ之ヲ筑前藩邸ニ移置シ、肥後藩ヲシテ之ヲ保管セシム、廣文遂ニ彰義隊ニ投ズ。

○久世廣業家記ニ云、主人隱岐守儀歸城不仕候儀心苦罷在、兩三名宛出府、所々遂ニ探索候處、上野寛永寺其他ヘモ押隠シ置候由、左候テハ大義名分難ニ相立ニ次第ト、杉山對軒儀、三十名召連、閏四月十五日夕、乗船ニテ出府、隱岐守行衛猶又探索仕候處、當時ハ深川邸中ニ罷在候由故、安場一平殿ヘ相願、同月廿三日、御同人ヘ隨從、深川邸内ヘ到着、住居ヘ罷越候處、奸徒共對軒ヘ手向仕候故、無餘儀ニ及ニ爭鬪候由、右之節近習ナル者五名即死仕處、依テ粗暴之所業ト奉レ蒙レ御沙汰、肥後藩ヘ對軒始一同御預相成、深ク謹慎仕居候事。

○關宿藩士遠山正功筆記ニ云、明治元年戊辰三月五日、總野之間賊徒横行、追々不容易形勢ニ相移候ニ付、君公御領分御取締之爲メ御歸城相成度旨、公

邊ヘ御届、翌六日關宿表ヘ御歸城相成ル。

四月六日、君公御上京相成候ニ付、昨五日關宿表御出發、本日江府深川海邊大工町御屋敷ヘ御到着、七日上様大政御返上之後、藩内議論紛々一定不致、尋テ本月五日、結城表之混雜且昨九日會藩脫人ヨリ黨與申込候以來、一層騷然、或ハ脫走人之城下ヲ通行スル者ハ、一々之ヲ迎撃シ、勤王之實效ヲ表スベシ、或ハ脫走人ヘ黨與シ、徳川報恩之事ヲ計ルベシ杯ト、因テ藩廳、杉山對軒、木村正右衛門、丹羽十郎右衛門、同虛舟、山路素兵衛、小島彌兵衛、三村舍人、船橋隨庵、蒔彦之進等之諸老ヲ相會シ協議セシム、杉山專ラ勤王ヲ首唱シ、木村、丹羽等專ラ佐幕ヲ論ズ、是ヨリ勤王佐幕之黨稍分ル。

十二日、杉山對軒、藩廳之依託ヲ受ケ、用人田邊與三郎同行出府、此日夜ニ入、深川邸ヘ著。

十四日、杉山對軒、東海道鎮撫御總督ヘ罷出、總野之形勢等委曲陳述ニ及ビ、左之御願書差出。

私儀病氣快方相趣候ニ付、急速上京仕度及ニ發途、

即今當地著候處、昨今在所役人共罷越申出候ハ、

會藩脫藩人ト唱、兩三輩城下ヘ罷越、出會之家來共ヘ申聞候ハ、私在所立土井大炊頭在所古河城之藩士ト及ニ合兵、官軍相支度趣内談ニ御座候間、私ヘ申聞候迄モ無レ之、殘暴之者ニ付、無ニ念ニ及レ斷申候、追々在所近邊潛伏仕候模様ニ付、片時モ安穩難ニ相成一段申出候間、一先立戻、弊邑守備仕度奉レ存候、乍レ併上京及ニ遲延候段、誠ニ以奉ニ恐入候得共、此段御許容被ニ成下候様仕度、尤小城微勢、守禦甚以無覺束、心痛之義奉レ存候、可ニ相成儀御座候ハ、朝廷以ニ御威光鎮撫仕度、且舊來被ニ立置候川陸往來相改候關所モ有レ之、咽喉之地ト奉レ存候間、御旗號竝御小人數成共御差向被ニ成下候得バ、冥加至極難有仕合奉レ存候、且又弊邑近郷徳川家竝旗下領分之儀、此節鎮撫不行届之由、追々徒黨及ニ亂暴、難澀之趣難見捨、殊ニ城下近邊之儀ニテハ、敝邑之深憂ニ御座候間、當分之内鎮撫之奉レ蒙レ朝命度、麤繪圖面相添、

此段幾重ニモ奉レ伏願候、委細之儀ハ重臣共差出候間、御糺被ニ成下候様仕度奉レ存候、恐惶敬白。

四月十四日

久世隱岐守

十五日、東海道鎮撫御總督ヨリ御呼出ニ付、杉山對軒罷出候處、參謀吉村長兵衛殿ヨリ左之御達有レ之。

久世隱岐守

其方上京之儀當分見合、急速歸國致シ、士民ヲ鎮撫シ、皇化ニ歸順候様教諭可レ爲ニ肝要、且其封内要阨之地ニハ、關門兵衛等嚴重ニ備設シ、萬一強梁之暴徒等徘徊之節ハ、土井大炊頭ニモ申談、臨機之作略可レ有レ之事。

東海道鎮撫府

辰四月

總

督御印

副

將御印

兇黨暴行爲ニ鎮靜、不日官兵被ニ差向候間、其藩ニオイテモ應援之心得ヲ以、臨機出兵可レ有レ之候、監軍安場一平差遣候條、指應可レ受候事。

辰四月

御

朱

印

右御達之趣江府詰諸士へ布達相成候處、此夕諸士相會集シ、藩廳ニ迫リ、方今總野紛亂原註、此時麾下脫走根川以北ノ地ヲ連合シ官軍ニ抗スルノ説アリ。之際、君公御歸城ハ勿論、一同ニオイテモ隨行難シ致、何レニモ佐幕ノコトニ無レ之候テハ承服不致趣申募リ、或ハ當家ハ徳川家譜代之家筋ナレバ、寧封土ヲ奉還シ、麾下士之列ニ入り、徳川報恩之コトニ從事スベシ杯之説ヲ唱、囂々佐幕論ヲ主張シ、對軒以下五六名大義ヲ論ズル者有レ之候得共、終ニ可カズ。

十六日、江府藩廳再ビ諸士ヲ會シ、順逆ヲ説諭ス、然レ共喋々前議ヲ執テ可カズ、或ハ云フ、我々ヲシテ脫走スル事ヲ得セシメバ、報恩徒ニ黨與シ、關宿城危急ニ陥ラザル様周旋可シ致、然ル上ハ君公御歸城相成候モ可ナリト、是ニ於テ藩廳其頑強説キ難キヲ察シ、主唱者之中十三名ヲ撰ビ、脫走セシムベキヲ聽シ、縦ヒ官軍ノ爲メニ捕ヘラル、トモ、久世家脫人タルコトヲ口外不致旨ヲ誓ヒ、脫走爲レ致、而シテ不日君公之歸城ヲ圖ル。

彌五右衛門竝附屬島田某ヲ疑ヒ、縛シテ寸斷スト云。

二十日早朝、伊知地殿岩井驛へ進軍、大勝利、賊徒散亂、此晝午刻頃岸井地方ニ當リ、頻リニ砲聲相聞へ候節、木村正右衛門等ハ定テ官軍打負、徳川報恩兵ノ爲メニ尾撃セラレ、無レ程當城へ攻入ルベクト相見込、江府邸へ相越、君公守護可シ致様觸相廻シ、番兵先之者百三十人程ヲ誘出シ、江戶邸へ向ケ脱走、此夜、佐幕論六七名ヲ捕へ獄ニ下ス。

廿一日、此日午後本村正右衛門始、追々江戶深川邸へ入込、諸士ヲ相集メ、關宿ハ今頃定テ落城セシ杯種々之妄説ヲ唱へ、當邸モ官軍ニ可シ被レ打圍ニ哉モ難レ圖トテ、此夜窃ニ君公ヲ連出シ、御分家久世下野守様へ潜伏セシム、此夜藩儒龜田保次郎始メ六名、江府藩廳ニ抵リ、關宿城ニ殉センコトヲ乞ヒ、拂曉深川邸出立、是ヨリ江府邸ト關宿ト之間、通路全ク絶へ、以後江府勤王論家幽囚同様ニテ、自由ニ邸外ニ出ルコトヲ得ズト云。

十七日、杉山對軒、田邊與三郎關宿へ歸ル。

十九日、麾下會藩脫走之徒千五百人程、岩井驛原註、城下ヲ距ル三里程東ノ方ニ當ル、へ止宿、明二十日關宿城下通行ニ付、人馬繼立等用意有レ之度旨注進申越セシカバ、又々議論沸騰、或ハ之ヲ境川河口ニ要シ、壘撃スベシ、或ハ報恩之義兵ナレバ、垂拱シテ通行ヲ許スベシト、然ル處へ城下江戶町へ薩藩伊知地正治殿、野津七左衛門殿貳百人程引率御操込相成候ニ付、杉山對軒罷出、右脱走徒ヨリ注進之趣陳述候處、明早朝進軍被レ致候趣ニテ、就テハ川筋へ番兵可シ差出様御談ニ付、其夜番兵手配有レ之候節、又佐幕論家喋々不服ヲ唱フル者アリ、對軒等百方順逆ヲ説キ、漸ク出兵相成ル。

此兩三日間、丹羽慎藏關宿表ニ在リ、岩井表ヨリ繼立之注進有レ之、藩論之沸騰セシ故、監察山崎彌五右衛門ト同行、岩井驛ニ抵リ、關宿城下通行スルノ不利ヲ説キ、更ニ他路ヲ取ルベキ旨ヲ申入レ、此夜慎藏ハ江戶へ歸ル、明日官軍進撃ノ際、賊徒

閏四月十六日、是ヨリ先、監軍安場一平殿、關宿城御在陣相成候ニ付、去月來藩内之動搖、及ビ奸徒共君公ヲ籠絡シ、所々へ押隠シ、今ニ歸城無レ之、藩屏之名分モ不ニ相立、一藩之存亡此時ト、イヅレモ痛心致居、是迄六七名出府、探索ヲ遂居、取戻方苦心罷在候趣及陳述、此上ハ、朝威ヲ以君公取戻方之儀相願、其後安場殿、上總大多喜表へ御轉陣相成、過ル十日、俄ニ對軒儀ヲ同所へ被レ招呼、御内談有レ之、對軒一旦歸郷之上、二十名ヲ召連、此夕出府。

十八日、杉山對軒外兩名隨行、總督御本營へ罷出、參謀吉村長兵衛殿へ面會致、君公取戻之事ヲ衷請致候處、吉村殿被レ申ハ、即今上野山内屯集之彰義隊暴行之聞へ有レ之、總督ニオイテ彼是御配心被レ爲レ在候折柄ナレバ、久世家御主人取戻シ之事ヨリ、遂ニ都下ノ擾亂ヲ開候様ニテハ不ニ容易ニ儀故、御家之儀ハ總督ニオイテ御受合被レ成候ニ付、一先歸郷、時機相待候方、可シ然之旨御談有レ之。

廿一日、江府詰由岐七郎原註、近習頭、ヲ召捕へ、君公當時

深川邸へ被_レ爲_レ入候旨相分ル。
 廿二日、對軒、總督御本營へ罷出、安場殿原註、前日頃上總表
 出府へ面會、昨日召捕候由岐七郎申立ニ依リ、主人
 隱岐守、當時深川邸ニ罷在候旨申述候處、慥ニ居場
 所相分り候儀ナレバ、明朝肥後家并大村家人數差出、
 深川邸へ抵り、取戻之御談被_レ下候様被_レ申聞候。
 廿三日、朝六ツ時過、杉山對軒始三十名、總督御宿營
 へ罷出候處、肥後家並大村家人數之儀ハ、差支有_レ之
 差出ガタク由ニ付、安場殿並附屬横山助之進、藤本
 岳之助殿へ隨行、深川邸へ相越候途中、安場殿ヨリ
 對軒儀ハ一步先へ罷越、君公ヲ此方へ引合候様可_レ取
 計_レ旨御談ニ付、三十名ヲ二手ニ分ケ、一手ヲ裏口へ
 相廻シ、一手ハ對軒へ隨從、内玄關へ相廻リ、執次
 ヲ請へ共出會無_レ之、依テ錠口之方迄相趣候節、俄ニ
 六七名拔刀ニテ出會、遂ニ爭鬪ニ相成、江府詰之者
 五名即死、此方負傷者三名アリ、右爭鬪中、安場殿
 被_レ相越、双方ヲ取鎮、對軒始三十人ハ即時彦根邸へ
 引上謹慎可_レ致様被_レ申渡、一先同邸へ引上、尋テ肥

後藩へ御預ケ謹慎被_レ仰付_レ旨、總督ヨリ御達、此夕、
 白金臺町肥後邸へ護送相成ル、此時奸徒共ハ君公ヲ
 隣邸へ押隠シ、此夜池ノ端邊、鷹下士中島某之邸へ
 一泊、翌廿四日、上野山内觀善院へ潜匿セシム。
 ○二十五日、肥後藩へ達書
 關宿藩杉山對軒以下其藩へ御預ニ相成候條、嚴重警
 衛可_レ有_レ之旨、總督府御沙汰候事。

後四月 總督府 參 謀

但、前條御預ニ相成始末ハ、同藩於_レ深川屋舖、杉
 山以下之者不都合之儀有_レ之ニ付、御調中被_レ預置
 候事。(東海道先鋒記)

○正功筆記又云、同四月二十六日、肥後藩邸謹慎之
 者ヨリ、同藩へ托_レ之差出候歎願書。

今般、弊藩家臣共兩般ト相成候次第ハ、近來勤王佐幕
 之議論相起、先代大和守ハ病死仕、隱岐守幼年之者
 故、腕ト方向ヲ相定候下知_レ不行届、始終銘々之見込
 ヲ以荷擔之姿ニ相成、然處、當三月以來御東征ニ相
 成候ニ付、猶以議論紛々一定不_レ仕、當四月九日、會

藩脫人ト稱シ、神部半藏、田口敬作ト申者城下へ罷
 越、面會申込候間、役人共之内出會候之處、徳川報
 恩之義兵相越候間、連入可_レ致之掛合有_レ之、就テハ、
 慶喜公ニモ御謹慎中、暴動ハ報恩之筋ニモ相當申聞
 敷、斷然ト不承知之旨接話仕候、右ニ付何如成粗暴
 之儀申掛候儀モ難_レ計、殊ニ城中甚微勢ニテ心痛仕候
 間、杉山對軒儀出府仕、主人歸城之儀申促、其段東
 海道鎮撫 御總督へ奉_レ願上_レ候處、急速歸城鎮撫可
_レ仕之蒙_レ 御沙汰、就テハ、早々發途可_レ仕様、主人
 へ申含候處、更ニ存寄無_レ御座、夫ヨリ在府家臣共へ
 申談候處、當節之處、歸城ハ勿論一同供不_レ仕趣申
 出、何レモ佐幕ニ無_レ之テハ不_レ相成_レ趣、申察、段々
 大義名分之次第柄及_レ説諭_レ候處、何分ニモ右之譯解
 得不_レ仕、其内近習之者拾三人脱走仕、徳川脱走之徒
 ニ連入仕候由、不_レ得_レ止事、對軒儀空敷江府出立、關
 宿へ罷歸申候、然處、同月十九日、賊徒城下ヨリ三
 里先、岩井驛ト申處へ、千五百人程止宿、明日ハ關
 宿へ繼立之注進有_レ之、城下江戶町へハ薩州御人數

貳百人程止宿ニテ、對軒罷出、伊地知正治殿へ御出
 會申候内、右之注進故其段申述候處、明早朝進軍被
_レ致候趣、就テハ、川筋へ番兵可_レ差出_レ旨之談ニテ、
 其夜番兵人數可_レ差出_レト申談候處、中々不承知之者
 有_レ之、幕府之義兵へ防戰ハ相成難キ旨申出、對軒儀
 種々ニ大義及_レ説諭、漸ク之事ニテ出兵爲_レ仕、翌廿
 日、岩井驛迄薩州御人數進軍戰爭相成、午刻前後、
 砲聲夥敷、烟火モ相見へ、定テ官軍不勝利、無_レ程城
 下へ可_レ攻入_レト驚候様子ニテ、丹羽十郎右衛門、木
 村正右衛門ト申者先立ニテ、關宿ハ無_レ程落城、隱岐
 守守衛トシテ罷越候旨之觸相廻シ、出兵先之者迄連
_レ出シ、百人餘脱走仕候、私共ハ微勢ナガラモ、防
 戰之上打負候ハ、一同割腹ト覺悟仕候次第之處、右
 様之所業言語ニ絶候、小膽ト歎息仕候、夫ヨリ丹羽
 十郎右衛門、木村正右衛門始之者共出府之上、佐幕
 論主張仕就テハ、官軍定テ可_レ被_レ打圍_レト相心得、邸
 中之妻子迄モ夫々爲_レ立退、主人ヲ分家久世下野守へ
 召連、其外所々へ押隠シ候趣ニ御座候、右様 天朝

之大命ヲ不ニ相守、賊徒ニ荷擔仕候テハ、遂ニ蒙ニ御疑惑、當家滅亡仕候ハ眼前之儀故、關宿へ滯陣被レ致候安場一平殿へ、段々右之情實具ニ申上、全右之以ニ御取扱今日迄關宿城無レ恙罷在、就テハ何レニモ主人隱岐守歸城仕候様心苦仕、是迄兩三名宛出府探索モ爲レ致候處、上野其外へモ主人ヲ押隠シ置候折柄、安場一平殿ヨリ、大多喜表ニオイテ、杉山對軒へ御内達之趣ハ、主人隱岐守歸城不ニ相成候テハ、大義名分難ニ相立次第ニ付、早々出府歸國之儀申促候様可レ致、尤尋常之所置ニテハ行届申間敷候間、肥後藩御人數御貸可レ被レ下候間、急速出府取計可レ申旨御談ニ付、難レ有奉レ畏、關宿表へ立戻、一同へモ右之趣申達、去十六日、對軒儀繼ニ三十名召連出府仕、肥後御藩へ罷出、御出兵之儀相願、尙安場殿へ御面會申上、大多喜ニテ御達之通取計可レ申間、御人數拜借之儀尙又申上候處、御承知相成、其段肥後藩島田治兵衛殿へ相願候處、未一平殿ヨリ御談モ無レ之、參謀衆ヨリ御達無レ之テハ、私ニ出兵ハ難ニ相成ト之

談有レ之、如何可レ仕ト心配罷在、其後吉村長兵衛殿へ御面會、弊藩情實委曲申上、分家久世下野守へ取扱御委任ニテハ、乍レ恐御行届相成間敷段、是又逐一申上候、就テハ何レニモ幼主ヲ脅迫仕候奸徒共ヲ打取不レ申候テハ、主人歸城ハ難ニ相成、是非共肥藩御人數拜借、以ニ朝威ニ奸徒掃攘仕候ヨリ他計有レ之間敷、強テ吉村殿へ奉ニ歎訴候處、尤之趣ニ御聞取被レ成下、就テハ御總督御登城ニ付、西城へ御同道可レ被レ下旨ニテ、則罷出、御評議相待居候處、御同人御達之趣、小事ヨリ大事ニ及候場合モ、當今之形勢有レ之候間、先暫見合置候様ニト之御沙汰有レ之、敢テ爭鬪ヲ好ミ候次第ニテハ無レ之、幼若之主、私共預リ居、國家之廢亡ヲ相憂奉ニ哀訴候次第ニ付、其段御舍モ被レ成下候得バ、小事ヨリ大事ニ及候ヲ、強テ奸徒共掃攘仕度儀毛頭無ニ御座一段申上候處、家之儀ハ御總督御始、其方共盡力之儀ハ御承知故、心配有レ之間敷段御達ニ付、深難レ有奉レ存、旅宿へ罷歸、一同へモ申達候處、何レモ奉ニ敬承、其内奸徒小

役之者壹人並近習頭由岐八郎ト申者召捕候間、篤ト相糺候處、隱岐守深川邸中ニ當時罷在候様、就テハ、以ニ御威光ニ奸徒相掃、主人取戻申度儀、安場殿へ申上候處、御總督へ御伺之上御承知被レ成下、去廿三日朝卯半刻、人數召連罷出候様被レ仰付、則翌朝深川邸へ御隨從仕候途中ニオイテ、對軒へ御談之由ハ、其方儀ハ隱岐守居間へ平常之格合ヲモ外シ罷越、安場殿ニハ表座敷へ御待被レ成候間、主人爲レ掛ニ御目候様周旋可レ仕、尤先方ヨリ手向仕候節ハ、如何可レ仕哉ト相伺候處、是ハ勿論之事ト被レ仰聞、人數之儀ハ要所ヲ相固メ可レ申段御達ニ付、其心得ニテ手配申談、對軒壹人居間へ罷越可レ申處、奸徒共君側ニ守衛罷在候ハ眼前之儀ニ付、壹人罷越候ハ一同無ニ覺束ニ相心得、五六輩隨從、錠口ヨリ這入候處、如レ案奸徒共刀又ヲ以相支、無ニ餘儀ニ打捨申、右之動搖故、殘人數追々入込及ニ爭鬪、其内主人ヲバ何レヘカ爲レ潛、何共殘懷至極ニ付、庭内迄篤ト探索、隱所見届度存念ニ罷在候處、安場殿ニハ以ニ御威光ニ御談判

之上、主人御取戻被レ下候思召ト齟齬仕、殊之外御憤激相成、何共奉ニ恐入、一先引上テ謹慎罷在候、乍レ併先方ヨリ手向仕候得バ、何分ニモ難ニ打捨場合ニ罷成、右一事ニテ是迄勤 王實效可ニ相立ト、城中一同決議憤發仕候モ、風塵ト相成候儀ニテハ、誠以殘懷無ニ此上、自然勤 王之爲ニ家中兩般ト相成、五ニ主家ヲ滅却候次第ニ罷成候テハ、吳々愁歎無レ涯儀ト涕泣仕候、可ニ相成儀ニ御座候ハ、此上以ニ朝威ニ隱岐守歸城相成候様偏ニ寛大之 御仁惠奉ニ伏願候、且又私共今般之所業粗暴ニ相當候様可レ被レ爲ニ聞召候得共、只々主人ヲ取戻度所願ヨリ之儀ニテ、決テ主人ニ手向等仕候儀、限テ無ニ御座候、奸徒共相支候ヨリ 御疑惑ヲ奉レ受、肥後家へ御預ケ相成、何共奉ニ恐入候得共、私共之心情篤ト御洞察被レ下置候様奉ニ懇願候、尤奸徒共並久世下野守ヨリ定テ種々讒訴可ニ申上ト恐察仕候間、一々右等之奉レ蒙御尋候得バ、明白ニ御答可レ奉ニ申上候、仰願 王政御一新之折柄ニ付、奉ニ申上候迄ニモ無ニ

御座候得共、正大明白之御裁許、一同伏奉哀訴候、誠恐誠惶頓首謹言。

辰閏四月

廿八日、深川邸行三十名、改テ肥後藩へ御預ケ被仰付旨御達、戎器類悉皆同藩へ御引上ゲ相成。

五月朔日、杉山對軒始三十名、是迄白金臺町肥後藩邸へ御預ケ謹慎被仰付置候處、更ニ霞ヶ關黒田邸へ謹慎替被仰付旨、昨二十九日總督ヨリ御達有之、是日一同同所へ護衛輿送相成、尤御預ケハ是迄之通り。

○是ヨリ先、結城藩主水野勝知、其治所ヲ脱スルヲ以テ、東山道總督府、勝知ノ祖父勝進攝津守ニ命ジテ藩内ヲ鎮撫セシム、是ニ至リ勝進、書ヲ先鋒總督府ニ上リ、本藩兵亂ノ餘ヲ承ケ、銃器給セザルヲ以テ、之ヲ貸與センコトヲ請フ、之ヲ聽ス。

今般、攝津守儀、領分之内諸民安堵致シ候様、精々

辰閏四月廿三日

水野攝津守家來

吉田 豊太夫

鈴木清左衛門

(東海道先鋒記)

○本條、批紙ヲ伏ス、水野忠愛家記ヲ按ズルニ、小銃器械等迄、願之通御下ゲ下シ置ル、トアリ。

○當四月、官軍結城御討入之節御取上ニ相成候兼テ所持仕居候百目玉車臺筒數挺、賊兵ノ爲ニ散失候ニ付、夫々探索等モ仕候へ共、相分不申、此程承リ候得バ、右車臺數挺御取揚ニテ、當時館林表ニ御預ケ相成候趣傳承候、就テハ家來之者差遣、一見ノ上、攝津守所持ノ品ニ相違無御座候ハ、其儘御下渡被成下候様仕度奉敷願候、兼々申上候通、器械類素ヨリ手薄ニテ、既ニ奉敷願小銃拜借モ仕候次第罷在候間、右之段不取敢奉願上候、以上。

六月十四日

水野攝津守家來

根本 忠司

房總戰亂記

鎮撫可仕旨、且方今之時勢、賊徒不意ニ襲來可致哉モ難計候間、防禦之術手落無之様勉勵盡力可仕之旨被仰付、誠ニ以冥加至極難有奉感戴候、然ル處、疲弊之小藩ニテ、兵器等モ素ヨリ手薄ニ御座候處、三月廿五日戰爭以來、兵器不殘散亂仕、其後爲賊徒御追討、祖式金八郎殿御追討御討入ニテ、夫々厚御配慮被下候人數ニハ御座候得共、小銃付屬道具并彈藥拜借、出兵モ仕居候處、此度攝津守前之通被仰付候ニ付、出張之人數勝手次第歸邑仕候様御達ニ御座候ニ付、是迄拜借仕候小銃不殘於館林表上納歸邑仕候處、前段申上候通ニテ得物無之罷歸候、地下之儀ハ口々多端之場所ニテ、非常之手當等更ニ無御座、就テハ恐入奉存候得共、是迄拜借仕居候小銃御借渡被仰付候ハ、誠以難有冥加之至奉存候、然ル上ハ疲弊微力之小藩ニハ御座候得共、銃隊組立、一際勉勵盡微力御奉公申上度、幾重ニモ奉敷願候、何卒此段御憐察被成下願之通拜借被仰付候様、君臣一同舉テ奉願候、以上。

○批紙

願之通被仰付候事。(秋元興朝家記)

○館林藩へ達書

別紙前條ヲ指ス願之通被仰付候間、其藩御預ケ武器ノ内、右之品有之候ハ、引渡可申候事。

但、引渡ノ上、品數可申出候事。

六月十五日

大總督府 下 參謀

(秋元興朝家記)

○是ヨリ先、海軍先鋒大原俊實、肥前藩軍艦ヲ勝山海ニ遣シテ、勝山藩ノ賊ヲ納ル、ヲ詰責ス、是日、本藩、書ヲ先鋒總督府ニ上リテ、賊徒脅迫ノ情實ヲ申シ、併セテ其無狀ノ罪ヲ陳謝ス。

閏四月八日、徳川家脱走遊撃隊之由、凡兵隊三百人程引率、館山陣屋へ押テ罷越、徳川家附屬候哉、官軍方へ附屬候哉、答次第攻撃可致旨申候ニ付、於徳川家ニハ恭順ヲ被盡候處、私ニ結黨對官軍

暴舉以外心得違之旨、再三及説諭候内、暴談申
 募、主人上京中、家來至テ人少ニテ、防戰手配行届
 兼、狼狽仕候内、陣屋内外立廻リ居リ候輕卒之家來
 拾人餘、小銃、米等暴奪、其儘兵隊退引、館山下海
 岸ヨリ船方之者強談、船貳艘相雇、一同乗込、何方
 へカ出帆仕候、然ル處、同十一日、官軍方軍艦、鍋
 島肥前守様御家來乘組ニテ、陣屋下海岸へ着船上陸
 ニ付、前件之次第注進仕候處、參謀方濱野源六殿出
 會、始末等相尋候ニ付委曲演達仕候處、少人數成共
 一戰ニモ不_レ及、家來、武器、米等被_ニ奪掠_一候段、武
 門不_ニ相立_一、且ハ賊ニ同心候様相聞、御疑惑ニモ相當
 リ、如何旨御察當テ請、奉_ニ恐入_一候得共、全人少差押
 方不行届、近領援兵顛倒之際、右始末ニ及ビ、残念
 至極恐入候段申立候處、然ル上ハ、以後右件不行届
 無_レ之様相心得、一廉勉勵御忠節相立可_レ申旨被_ニ申
 聞_一、脱走人等穿鑿之上、同十三日陸路同國勝山へ出
 立、右軍艦モ出帆仕候、右ハ備後守上京中、陣屋守
 護仕居候重役之者、不行届之次第、主人備後守へ何

等之 御沙汰被_ニ仰出_一候テハ、甚當惑之仕合、重々
 奉_ニ恐入_一候間、嚴敷謹慎仕罷在候、此上如何様之
 御處置ニテモ被_ニ仰付_一候様、私ヨリ伏テ可_レ奉_ニ敷
 願_一旨、留守重役島村鎌藏申間候、此段奉_ニ申上_一候、
 以上。

稻葉備後守家來

後四月廿三日

伊藤 内藏介

御先鋒 御總督府様 御參謀中様 (東海道先鋒記)

○稻葉正善家記ニ云、私陣屋房州館山表へ、閏四月
 九日、遊撃隊ト相唱へ、多人數押來ル之趣ニ付、夫
 々手配致シ候中、最早近村へ鎮撫ト相唱へ、人馬繼
 立、賄等之儀可_レ致旨嚴敷申渡候ニ付、家來共罷越、
 彼是及_ニ對談_一候ニ付、此儀御届仕度取調候中、爲_ニ
 御追討_一官軍 御軍艦壹艘、領分柏崎浦へ着岸上陸相
 成、則爲_ニ御届_一家來共差出、右御勢ニ相加、追討可_レ仕
 心得之處、最早右賊徒何_レカ立去リ候ニ付、領分近
 邊致_ニ巡邏_一、殘徒召捕候旨、官軍肥州藩濱野源六殿
 被_ニ申付_一 御用相勤候。

○同 閏四月廿四日、保科正益ノ家臣、重ネテ
 書ヲ大總督府ニ上リ、正益ノ謹慎ヲ釋サンコ
 トヲ請フ、是日、督府其謹慎ヲ釋ス。

奉_レ願口上覺

彈正忠儀先般上京仕候砌、通行方不都合相成候ニ付、
 奉_レ蒙_ニ 御沙汰_一、重々奉_ニ恐縮_一 謹慎罷在候、右ニ付
 先達テ御達御座候御先鋒様へ勤 王證書並上京途中
 不都合之始末巨細ニ相認、猶於_ニ京地_一 御張紙被_ニ成
 下_一候歎願書寫共、御先鋒様へ奉_ニ差上_一候處、速ニ
 御水解 御開濟被_ニ成下_一、則別紙 別紙ハ之 之通 御
 書下被_ニ下置_一難_レ有仕合奉_レ存候、其上此節於_ニ在所
 表_一別錄 別錄ハ之 之通御武器類御預被_ニ 仰付_一、並官
 軍御人數御通行之砌、焚出シ御用被_ニ 仰付_一、猶在所
 表御調之處、少人數之儀ニ付在所飯野近邊最寄探索
 御用被_ニ 仰付_一、重々難_レ有仕合、勉勵奉_レ罷居候、
 何卒格別之以_ニ御憐愍_一、彈正忠於_ニ京地_一 謹慎罷在候
 分 御免被_ニ仰付_一候様、御取計被_ニ成下_一候様、只管

奉_ニ敷願_一候、以上。

閏四月廿三日

保科彈正忠家來

差添 進 藤 健 造

八田 助左衛門

重臣 大須加貞右衛門

御役人衆中

○批紙

數願之旨水解放_レ爲_レ在、謹慎被_レ免候旨、大總督
 官被_ニ 仰出_一候事。 (益家記)

○同 閏四月廿五日、大總督府、書ヲ軍防事務
 局ニ致シテ、請西藩主林忠崇其治所ヲ去リ、官
 軍ニ抗スルノ狀ヲ報ジ、速ニ之ヲ處分センコ
 トヲ請フ。

○督府軍防事務局ニ遺ル書

上略林昌之助儀木更津戰爭之節、官軍へ及_ニ戰爭_一候テ
 敗軍不_レ得_レ回、船ニテ熱海へ上陸、大久保加賀守城
 下へ行向、今度徳川之爲_ニ官軍ト戰候_一テ只今極_ニ困

第ニ付、人數等差出シ應援致シ吳候様相頼候趣、其節大久保返答ニハ、當節之儀徳川氏ノ爲ニモ不レ宜、何分ニモ朝廷御沙汰相待候様謹慎可レ然旨段々申諭、眞鶴ト申所ヘ引取候由、尙又水野出羽守方ヘモ同斷ニテ参リ掛リ候内杯、兵力ヲ借受度旨申候ニ付、何故之儀ニテ頼ミ候哉相尋候處、全官軍ヘ敵對候譯ニハ無レ之、紀・尾・彦等討伐致シ候旨申答候ニ付、甚心外之儀、最早木更津ニ於テ官軍ヘ敵對致シ候儀ニ付、蒙御沙汰候間、持筒差出謹慎候様、左無クバ以ニ兵馬ニ是非進伐可レ致旨申答候由、一々難ニ書盡ニ候間、尙別紙別紙ハ之ヲ略御覽並使之者ヨリ御直聽可レ申入候、右之次第ニ付早々何分御沙汰有レ之候様奉レ願候、則別紙四藩書付差出候、餘ハ追々申上候、甚以御用繁、實ニ亂書御推覽希入候也。

閏四月廿五日(東征總督記)
 ○按ズルニ、五月二十七日ニ至リ忠崇ノ封土ヲ没シ、其臣隸ノ入京ヲ禁ズ。

○先鋒總督府、薩州・長州・岡山・津・佐土原・大村六藩兵、房總服役ノ勞ヲ慰賞シ、且金ヲ其死傷者ニ頒ツ、是日、命ジテ津藩兵ノ勝山ニ戍スル者ヲ召還ス。

目錄

- 一金十兩宛 士分戰死之者一人へ
- 一同七兩貳步宛 士分深手之者一人へ
- 一同五兩宛 同淺手之者一人へ
- 一同七兩貳步宛 輕卒討死之者一人へ
- 一同五兩宛 同深手之者一人へ
- 一同三兩宛 同淺手之者一人へ

右

頃日、兩總地方鎮定ニ相成候ハ、全ク各藩忠戰盡力之所爲、追テハ夫々御褒賞モ可レ有レ之候得共、不ニ取敗ニ各藩輕重手負之者へ、養生中之爲レ尋前顯目錄之通被レ降レ之旨、總督府御沙汰候事。
 但、討死之者ニ被レ降候分ハ、其藩隊長ヨリ其子弟

へ可レ被ニ差贈ニ候事。(東海道先鋒記)

後四月廿五日 先鋒總督府 參 謀

○柳原前光事蹟ニ云、後四月廿五日、大總督王ニ請ヒ、市川・姉崎戰爭之砌、死傷之輩ヘ賜金之儀、今日配達。

伊州 藩へ

總房之地、略鎮定之様ニ候條、其藩勝山邊ニ屯在候兵隊、一應引揚歸府可レ有レ之候事。

後四月

總督 □
 副將 □

(東海道先鋒記 藤堂高潔家記)

○田安慶頼、使ヲ遣シテ徳川氏通竄ノ徒、房總地方ニ屯スル者撤兵隊五百四十三人ヲ招諭シ、江戸ニ歸リ屏居シテ罪ヲ待タシム、因テ書ヲ先鋒總督府ニ上リテ其狀ヲ申ス。

○田安慶頼上申書

房總戰亂記

先般、房總ノ地へ退去之撤兵役々組共鎮撫引纏之儀ニ付、肥藩兩名同道、去ル十三日當地出帆、同十六日總州小見川驛ニ至リ候處、退去之者共鹿島大神宮社家へ屯集罷在候ニ付、兼テ參謀衆へ談判濟之通、器械之儀ハ松平太郎預リ、兵隊之儀ハ引纏罷歸候様、追々説得致候處、一同承服ニ付、同廿三日同所出立、同廿五日當地へ引纏罷歸リ候上、兵隊並器械共、勝安房守、參謀衆へ談判濟之通、同人引請相成、尤兵隊之儀ハ銘々宅居謹慎罷在候儀ニ御座候、以上。

閏四月

撤兵頭並 外ニ役々組共 五百四拾三人
 小銃四百七拾挺 但シ胴亂共
 彈藥千發 三箇

右之通御座候、以上。

閏四月廿五日(東海道先鋒記)

○同 閏四月廿八日、大總督府、書ヲ下シテ監軍渡邊清大村 相良長發薩州 及ビ薩摩・筑前以下

七藩兵、房總服役ノ功ヲ賞ス。

渡邊清左衛門へ

總房州屯集之賊徒爲追討出兵之砌、副總督府軍監相勤、於戰場軍配指揮行届、諸軍烈戰賊徒令平定候事、全不懈職掌候故、速ニ成功相立候段深神妙ニ候、尙忠勤可相勵者也。(大村藩記)
○長發ノ達書ハ之ヲ俟ス、蓋シ清ト同文ナリシナラン。

○當月初旬ヨリ兩總房州屯集之賊徒爲追討出張候處、長官ヨリ士卒ニ至迄、攻守之懸引行届、勵忠戰、速ニ賊徒及平定候條、神妙之事ニ候、戰功之趣ハ遂ニ奏聞候、仍感狀如件。

慶應四戊辰年閏四月 大總 督御華押
(各通) 薩州藩 筑州藩 長門藩 藤堂藩
備前藩 大村藩 佐土原藩
隊長中 (鳥津忠義、黒田長知以下各家家記、岡山、大村藩記)

○是ヨリ先、先鋒副總督、水野忠順(肥前守)ノ罪ヲ數メテ謹慎ヲ命ズ、是日、水野忠敬書ヲ先鋒總督府ニ上リ、忠順ノ爲ニ哀ヲ乞フ、

末家水野肥前守儀、徳川脱走之徒暴行之節、防禦等不行届且御不審之事件モ御座候ニ付、於在所表謹慎可罷在旨 御沙汰之趣、奉恐入、深謹慎罷在候旨、出羽守并隠居左京大夫追々承知仕奉恐入、申越候次第モ御座候折柄、肥前守家來共ヨリ奉歡願度候得共、主人謹慎中之儀申上候手段モ無之、殆當惑仕、書取ヲ以只管頼申聞候、右家來共之心中モ難默止何共奉恐入候次第御座候得共、右歡願書並口上書相添奉歡願候、恐惶頓首。

水野出羽守家來
辰閏四月 土方 織衛

○徳川脱走之徒暴行之節防禦等不行届、且御不審之事件モ有之、旁以嚴重 御沙汰可有御座候處、格別

寛宥之御沙汰ヲ以、於陣屋表謹慎可仕旨、尤領民鎮定之儀ハ精々盡力可仕旨、去ル十九日於總地重臣之者 副總督府へ被召出被仰渡候趣、肥前守奉敬承奉恐入、嚴重謹慎仕候、兼テ申上候通、小藩微力之儀、脱走之者差迫り候邊ヨリ無餘儀苦情不行届之始末ニ相成、御沙汰之趣深奉恐入、肥前守謹慎仕候、殊勤 王ニ念無御座素意ハ證書モ差上置、聊他念無御座候主人之心中、臣下之身ニテ不忍情態 御洞察被成下、此上御不審之廉御氷解相成候様、只管奉歡願度、何分御執成之程奉願候、恐惶謹言。

水野肥前守重臣
慶應四戊辰年閏四月 豊田 謙藏印
本多 新平印
井上 海輔印

○按ズルニ、八月二十九日ニ至リ、大總督府忠順ノ謹慎ヲ釋ス。

房總戰亂記

○同 閏四月廿九日、是ヨリ先、先鋒副總督、徳川氏降兵ノ上總若山村(夷隅郡寄合阿部邦之助ノ采邑)ニ屏居スル者城砲ニ令シテ、江戸ニ歸リ、各其家ニ謹慎セシム、是ニ至リ降兵七十九人江戸ニ至ル、田安慶頼乃チ書ヲ先鋒總督府ニ上リテ其狀ヲ申ス。

兼テ御届申上候通、私儀 副總督柳原卿ヨリ急御用ニ付被召候間、去ル十八日江戸出立 翌十九日歸邑仕候處、柳原卿ニモ急ニ江戸表へ御歸府之趣ニテ、同日家來御召出之上、別紙之通御達相成申候、就テハ砲兵方役々申談、兵隊引繼役々附屬、明廿四日、廿五日、兩日ニ割合歸府爲仕申候、依之、御達書寫別紙相添此段御届申上候、以上。

閏四月廿三日 阿部 邦之助
○別紙

其方ニ謹慎罷在候、天野釣之丞以下七十九人、江戸